

研究資料シリーズ No.7

堀井龍司憲兵中佐手記，
タイ国駐屯憲兵隊勤務(1942-45年)の思い出
付録 18方面軍参謀 原寿雄少佐手記

村嶋英治 編集・解説

早稲田大学

アジア太平洋研究センター

2017年3月

研究資料シリーズ No. 7

堀井龍司憲兵中佐手記,
タイ国駐屯憲兵隊勤務
(1942-45年)の思い出

付録 18方面軍参謀 原寿雄少佐手記

村嶋英治 編集・解説

早稲田大学

アジア太平洋研究センター

2017年3月

目 次

はじめに：堀井龍司手記の歴史資料的意義	1
編集凡例	4
堀井龍司手記	6
まえがき	6
一九四二年（昭和十七年）	7
1 勤務地への赴任	
2 憲兵隊の編成	
3 業務開始	
4 分隊長会議（電波探知特別班も含む）	
5 親日家ソムアン・サラサス氏との出会い	
6 空襲の噂飛ぶ	
7 バンコク初空襲	
8 自由タイ暗躍の兆	
9 親日人民代表議会議員との接触	
10 隊務報告のため昭南総軍司令部に出張	
一九四三年（昭和十八年）	27
11 情報提供者（連絡者）の選定	
12 ソムアン氏タイ事情を語る	
13 タイ国駐屯軍（義七九七〇部隊）の誕生	
14 ピブン政権凋落の兆現れる	
15 親英米派グループの会合	
16 ピブン内閣の総辞職と間もない再登場	
17 ラーシー女史のピブン氏辞任と再登場の事件報告	
18 ソムアン氏，ピブン氏辞任と再登場について語る	
19 ピブン氏に王位篡奪の野心ありや？	
20 タイ国日本へ仏舍利贈呈	
21 ピブン氏の日本側現地当局に対する非友好的ラジオ放送	
22 理解し得ぬ戒厳令	
23 警視總監アドン氏内務大臣代行兼任	
24 ピブン政府，議会において逆転勝利	
25 東條総理，旧タイ領返還	
26 北タイ視察	
27 チャンドラ・ボース，印度国民軍を編成	

28	インドシナ独立運動の首謀者タイに亡命	
29	国境画定作業に着守	
30	自由タイの正体	
31	ピブン氏大東亜会議出席を辞退	
32	ソムアン氏の国内二勢力の態勢形成論	
33	親日国務相逮捕拘禁される	
34	クリスマスイヴの大空襲	
一九四四年(昭和十九年)		69
35	タイ政府遷都の噂が流れる	
36	親日愛国婦人団体の活動	
37	新年早々より敵の空襲始まる	
38	愛国婦人団体代表軍司令官に面会	
39	タイ政府ペチャブンに移転	
40	憲兵隊長の交代	
41	敵機に便乗したスパイ、タイ国内に降下	
42	ソムアン氏自由タイについて語る	
43	タイ青年愛国党深夜の謀議	
44	軍の長老プラヤー・パホン将軍との私的会見	
45	親日の国務相拘禁所で変死	
46	ピブン氏の対日非友好的態度	
47	青年愛国党、政府に下野勧告	
48	政府与野党の議会対策	
49	ピブン政府の正副議長選挙の敗北	
50	青年愛国党ピブン政権への下野勧告書の手交を依頼	
51	与党の対野党切崩し工作成果あがらず	
52	東條内閣退陣とピブン政権の受けた影響	
53	ピブン政府本会議において敗北	
54	ピブン政府第二回本会議でも敗北	
55	ピブン内閣総辞職	
56	アパイウォン親日政府誕生	
57	ソムアン氏の訪日	
58	新任日本大使アパイウォン政権との親交を深める	
59	徳田隊長ソムアン氏の留守家族慰問	
60	ソムアン氏帰国	
61	枢軸軍の戦況悪化	

一九四五年（昭和二十年）	116
62 仏印進駐日本軍の仏印武力接收	
63 憲兵隊無線探査班，電波スパイ検挙	
64 プラ・サラサス氏八年振りに祖国タイに帰国	
65 空襲激化に伴い自由タイの暗躍活発となる	
66 ソムアン氏仏印に亡命	
67 辻政信大佐軍参謀として登場	
68 ジャングル内に敵性飛行場構築	
69 終戦	
70 終戦後ソムアン氏家より送別の晩餐の招待を受く	
付 18 方面軍参謀 原寿雄少佐手記	128
巻末注	142
人名索引	183
編集・解説者紹介	

はじめに：堀井龍司手記の歴史資料的意義

本手記の著者である堀井龍司憲兵中佐（1904年4月27日秋田県生，陸士38期，故人）は，1942年8月に南方総軍の下にタイに第二憲兵隊（泰派遣憲兵隊¹）が置かれると同時に，同憲兵隊のナンバー・ツーである警務部長として漢口から赴任した。堀井氏は，林清泰派遣憲兵隊長の次級者として，「警務部長という役職を与えられ隊長を補佐し警務（特高，警務）に関する一切の業務を統轄」し，1945年の敗戦まで3年余に亘って，バンコクで勤務した。

堀井氏は帰国後昭和32年（1957年）までに，バンコク在勤3年余の経験を時系列的に70項目に分けて，400字詰め原稿用紙390枚に筆記した手記の草稿を作成した。

1990年に村嶋は，東京で堀井氏に数度インタビューをした際，この手記を託された。その後，堀井氏は唯一の肉親であり同居者であった長女に先立たれたのち死亡されたが，死亡前に，手記中に同志として頻繁に登場するソムアン・サラサス氏の長男で，在日，数十年に及ぶウクリッド・サラサス氏に本手記出版の希望を述べられ，それはウクリッド氏より村嶋にも伝えられた。

本書は，堀井手記を村嶋がパソコンに入力しつつ整理編集し，更に同手記の記述内容を，タイ・日双方の同時代もしくは戦後の文献・文書資料，および村嶋がインタビューを実施した在タイ日本軍関係者（例えば，堀井手記中に登場するソムアン・サラサス氏，岩崎禮三泰派遣憲兵隊特高課長，富永亀太郎タイ国駐屯軍参謀など，或は手記には登場しないが泰派遣憲兵隊で勤務した人達）からの証言資料と比較対照して，堀井手記の記憶違いは注記によって修正し，かつ説明を要すると思われる箇所には解説の注記を付したものである。

また，付録として，第18方面軍参謀として終戦を迎えた原寿雄氏（1911年和歌山県生，陸士46期，陸大58期）に，村嶋が1990年12月14日に和歌山市の同氏宅でインタビューした際に寄贈を受けた，1945年の在タイ日本軍に関する同氏の手稿を掲載した。

巻末には，日タイ両文字によって，人名索引を付した。

第二次大戦期の1941年12月21日，日本はタイ国との間に，日本国「タイ」国間同盟条約を締結した。同盟条約を根拠として日本軍は，タイの領土を通過もしくは同地に駐留し，1943年2月1日にはタイ国駐屯軍（44年12月20日に第39軍，更に45年7月16日には第18方面軍へと発展）を置いた。

タイは，42年1月25日に英米等の連合国に宣戦布告したので，タイと外交関係を有し，タイの中に多数の自国民を有する国は日本だけとなった。それ故，この時期における日本のタイにおける存在は，圧倒的なものがあり，軍事，政治，経済，文化等あらゆる面でタイ側と最も深い交流交渉があった。これ等の交流交渉を通じて，日本はこの時期のタイに関して，質，量ともに比類ない膨大な情報を有することとなった。

本堀井手記も，日タイ同盟期における，他には求めることができない貴重な歴史資料が豊富に含まれている。

堀井手記からは，在タイ憲兵隊のナンバー・ツーとして彼が担った主要な任務は，次のよ

うなことであったことが判る。

即ち、タイに配置できる日本兵力が極めて限られている中で、日タイ同盟を遵守する親日派タイ政権を維持するという最高目標のために、①タイ要人（元首相プラヤー・パホン、摂政プリディ、中華総商会主席陳守明など）からの情報収集のための連絡者・協力者網の組織化、タイエリート層及び一般人の対日世論の把握、②ピブン政権の対日非協力化の動向把握、反ピブン派新政権樹立運動のフォロー、③抗日地下自由タイ運動の追跡、中国国民党の諜者の追跡逮捕などであった。

この内、①に関しては、長らく在タイし商業で成功を取め、タイ上層社会に人脈を有する在タイ日本人の代表格である人々を連絡者協力者或は通訳として利用した。これらの人々としては、江畑弥吉とその長男夫妻（江畑朔弥（タイ名スリヤ）と妻ジャムラット）、宮川岩二とその長男宮川源一郎、台湾人博愛病院長王鏡秋などである。日本民間人が、戦前のタイで長時間の苦闘によって培ったタイ社会における蓄積を、日本軍が利用したことは、結果的には敗戦に伴い在タイ日本人社会が崩壊する主因となった。

また、ソムアン・サラサス（1913-1996）は、理念的に「アジア人のアジア」、アジアの自立の信奉者として自発的に在タイ憲兵隊に協力した。彼は、在日中の親日派元経済大臣プラ・サラサスの長男である。プラ・サラサスは在仏公使館員時代からプリディ（1941年12月16日から摂政）等と親交があった。戦時下においては、プラ・サラサスとプリディの対日態度は正反対であり、プラ・サラサスはピブン後の親日派政権の首班候補の一人と目されていた。堀井氏がその手記で同志と呼んで敬意を払っているソムアン氏は富裕なタイ人であり、憲兵隊に雇われたのではなく、自分の政治的理念をもって自発的に、かつ自分のリスクで日本軍に協力してタイ側の政治情報を提供し、ある場合は自らの政治的目的のために日本軍を利用しようとしたのである。その理由を、ソムアン氏は生前に刊行したタイ語回想録『黄色の大地』（ทรงภูมิพิสัย, 本書は1997年に同氏の葬礼記念本としても配布された）で、戦前の13年間の在仏生活中、常にフランス人のアジア人への蔑視を実感し、アジア人の自立のためには白人のアジア支配を覆す必要を痛感したが、そのような力は、日本にしかないと確信したことによる、と述べている。堀井氏の下で在タイ国憲兵隊の特高課長として勤務した岩崎禮三氏（1919年兵庫県生、陸士52期、少佐）も、村嶋のインタビューにソムアン氏と頻繁に接触したこと、ソムアン氏は富裕なタイ人であり、日本軍と何ら金銭的な関係はなかったと述べている。

②のピブン政権の対日非協力化、日本離れは、日本側に不利な戦況の進行とともに、ピブンの反日的ラジオ放送、1943年7月に訪タイした東條首相の手土産である旧領土返還への積極的反響の乏しさ（逆に負担増加として歓迎されず）、軍費用パーツの出し渋り²、1943年11月の大東亜会議へのピブン首相不参加、ペチャブン遷都などとして顕在化した。堀井手記は、1944年6～7月に人民代表議会がピブンの遷都等の緊急勅令を事後承認する法案を否決し、議会の多数派が反ピブン派に転じた中での、タイ政界におけるピブン派・反ピブン

派の動向、現地日本軍、大使館、日本中央部の動きを明瞭に描いている。とりわけ、ピブン政権を最後まで支持してきた日本中央とタイ現地とのズレが活写されている部分は興味深い。また、続いて成立したクアン・アパイウォン新政権を予想外の親日政権として評価している

③の自由タイ地下運動について、日本軍はプリディ摂政、アドゥン警察局長、最終期にはアパイウォン首相さえも国内自由タイ運動の指導者ではないかという、強い疑念を有していたことが判る。国内自由タイ員であるサグアン・トゥラーラックの重慶への脱出、インドからの飛行機でタイの地方に降下した自由タイ員の逮捕訊問、更には重慶と連絡する国民党系の諜者の搜索逮捕も具体的に描かれている。

本堀井手記は読み方によっては、全編を通して抗日組織との闘争史、即ち日本軍側から見た地下抗日自由タイ運動との闘争の記録である。

この外にも、堀井手記は、バンコクへの空襲と被害状況、東條首相の訪タイ後タイが回復した馬來半島の旧領土と馬來側との国境画定作業、ベトナムの独立運動家であるクオンデの二人の息子のバンコクへの逃避と保護、など、タイ近隣諸国に関係する事項も多い。また、日タイ文化交流史の面では、例えば、代表的タイ料理である「タイ・スキ」は、日本の水炊きを起源とし、戦時中の在タイ日本人の食事から戦後タイに広まったという説もあるが、堀井手記には、タイ人を招いた際の食事で、しばしば水炊きが行われたことを記している。

第二次大戦敗北直後、日本軍・日本外務省は、同大戦に関連する一次資料を組織的に破壊したことはよく知られている。この時代の日タイ関係に関する日本側一次資料も大半が、自己破壊により消滅した。バンコク-東京間の外交電報の多くも残存せず（残存したものの一部は本稿解説で引用している）、米国によって解読された外交電報が、戦中の日タイ関係研究の基本資料として珍重されているほどである³。

それ故、戦争中の日タイ関係に関する戦後日本の刊行物は、1942年半ばから終戦までのタイの情勢を記した、防衛庁防衛研修所戦史室著『シットタン・明号作戦—ビルマ戦線の崩壊と泰・仏印の防衛』（戦史叢書32、朝雲新聞社、1969年）中の541-576頁の「第三章、情勢の変化と仏印、タイ」、同書661-709頁「第五章、明号作戦終了から終戦まで」にしても、或は駐タイ日本軍司令官であった中村明人著『ほどけの司令官：駐タイ回想録』（日本週報社、1958年）にしても、当事者の戦後の回想に主として依拠している。

本堀井手記も、戦後12年にして書かれた回想ではあるが、憲兵隊任務の性格上日本側のみしか知り得ない、上述したような貴重な情報、資料が記されている⁴。しかし、事後の回想であるから、記憶違いは免れ難く、とりわけ時期や人名に関しては相当の混乱が生じている。数多い記憶違いにも拘わらず、本手記は在タイ憲兵隊幹部の情勢認識やパーセプションを把握することができる貴重な資料である。

また、堀井手記は対話形式で書かれている部分が多いが、これは実際の会話を再現したとは到底考えられず、見解や意見の相違を明瞭に示すために、このような対話形式で表現した

ものと考えられる。ここでは、一言一句の意味するところではなく、対話者の基本的な考え方や認識を把握すべきであろう。

堀井龍司氏は、1904年4月27日に秋田県で生まれ、陸軍士官学校を38期生として、1926年7月16日に、22歳で卒業した。堀井氏は、満州事変後、工兵第8連隊の小隊長として約1年間熱河省で湯玉麟軍の敗残兵の掃討に従事した。日中戦争が始まって後、1940年には上海駐屯憲兵隊の特高課（課長は林秀澄）外事係に勤務、続いて漢口に異動して勤務した。中国在勤約2年にして、1942年7月に漢口よりバンコクの南方総軍第二憲兵隊に転勤した。タイ国駐屯軍司令部の二人の参謀、岸並喜代二（涉外担当、山口県出身、陸士31期）、富永亀太郎（陸士38期）とは既に面識があった。堀井氏の上海時代に、岸並喜代二は、支那派遣総軍の上海における渉外部員であったし、富永亀太郎は陸士38期で同期生であった。

堀井氏はタイ国駐屯軍司令部の二人の参謀と個人的にも親しくスムーズな情報交換が可能であった。富永は、堀井手記にKというイニシャルでしばしば登場している。

堀井氏の在タイは38歳から41歳の3年間であった。

戦後の堀井氏は、国土館大学に職員として就職した。全国憲友会連合会『新全国憲友名簿（昭和60年12月）』の46頁、「堀井竜司」の項は東京世田谷区下馬の住所、電話番号とともに、職業欄は「国土館大学職員」、陸士38期、拝命隊は基隆、最終隊はタイと記されている⁵。

堀井手記が作成されたのは、敗戦から12年を経ているとは言え、堀井氏の年齢は未だ53歳と比較的若く、記憶は鮮明であったはずである。但し、豊富な同時代資料が残るタイ側の資料、或はインタビュー資料を含む日本側の諸資料と比較対照すると、時期、人名等の記憶違いも少なからず存在する。

本稿は、村嶋英治がタイ・日双方の資料と堀井手記の記述を比較対照することによって、本文中に〔 〕あるいは巻末注によって、手記の間違を指摘・修正し、或は、間違いではなくとも補足説明のために、より詳しい資料を示したものである。

編集凡例

堀井氏は明瞭な文章を書くことに慣れた文筆家ではなく、かつ、本堀井手記は、推敲を加える以前の草稿段階のものであったようで、手記のオリジナルには、文章が複雑で混乱していたり、途中で切れて完結していなかったりと、文意の把握が容易ではない箇所が少なくない。それ故、著者の言わんとする所を分かり易く書き直したり、語句の位置を入れ替えたり、或は補足したりと、かなり大幅な編集作業が必要であった。しかし、編集によって意味が変わることがないように極力努めたつもりである。

堀井手記は新字体の漢字を用いて表記されている。しかし、執筆したのが昭和32年という時代のためか、漢字を用いず平仮名表記したものが多い。本稿では、漢字で表記した方が分かり易く、読み易いと思われるものは、意味に異同がない限り漢字に変更した。

また、堀井手記には、同じ字句に、漢字と平仮名の両方を用いたものが混在しているが、この場合も意味の異同がない限り、漢字で統一した（例えば、「我々」、「続け」、「更に」な

ど)。

堀井手記には、独自の送り仮名が多数あるが、送り仮名は現行の内閣告示「送り仮名の付け方」によって統一した。

意味に変更を与えない漢字の誤字、脱字は正しく修正した。

堀井手記で平仮名書きが連続し、読みづらい場合は、読点を加えたところがある。

堀井手記のタイ人名・地名には、タイ語発音から乖離したのも少なくない。その場合は、初出は手記記載のままとし、その後ろに〔 〕を付してタイ語発音に近い日本語表記を加え、二回目以後は後者によった。なお、タイ人名のタイ語表記は、巻末の人名索引に載せている。但し、本稿で頻出するピブーンとプリーディーに関しては、それぞれピブン、プリディと長母音部分を省略している。

堀井手記では、人名、地名などを表記の簡略化のため、二回目からイニシャルにしているものがある（例えば、ピブンはピ氏、プリディはプ氏、ソムアンはソ氏など）が、本稿では二回目以降も一回目と同様のフル表記に変更した。

名称は意味の異同がない限り、統一した。例えば、プリディを彼の下賜名のプラジットと記している場合も多いが、プリディで統一し、また、タイ国会に関し、人民〔代表〕議会若しくは国民議会と両用しているが同一意味なので、タイ語の意味に従い人民代表議会に統一した。

しかし、戦争名（太平洋戦争と書いたり、大東亜戦と書いたりしている）は、そのままとした。

一方、付録として付した原寿雄氏の手記は、二、三の誤字を修正した以外は、何等編集を加えておらず、オリジナルそのままである。

記載内容について、比較的簡単な事実の訂正、追加、或は文章の補足等は、文中に〔 〕を用いて行い、他方、比較的詳しく補足追加説明、或は事実の間違い等の説明をする場合は、巻末注を用いている。

『堀井龍司憲兵中佐手記，タイ国駐屯憲兵隊勤務 (1942-45年)の思い出』

まえがき

昭和十七年，大東亜戦初期の作戦を，圧倒的勝利をもって終了した後，南方総軍が次期作戦準備のために戦力の充実をはかり編制替を行った際，タイ国バンコクに駐屯する第二憲兵隊（第一憲兵隊は仏印サイゴンに駐屯）を新設した。大戦勃発と同時にアジアにおける唯一の独立国タイは逸早くわが枢軸陣営に参加し日本軍と共に欧米列強国軍（連合軍）に敢然と戦を挑んだ。南方総軍はタイとの協同作戦を遂行することとなったためタイ軍は第一線兵団の予備軍的存在となり，タイの国土は後方における作戦準備，補給基地として作戦上重要な要域となった。従ってこの要域の安定は絶対不可欠の命題であった。軍は次期作戦のため一兵でも多くの兵力を前線に送らなければならないのでタイ国内保安のために充当する兵力の余裕は全くなく最小限に止めざるを得なかった。

そこでこの欠を補うために盟邦タイ国との友好親善工作を徹底的に強化推進するとともに，憲兵隊にタイ側保安当局との緊密な協力提携を担当させ治安の維持をはかるということになった。第二憲兵隊はタイ朝野の人々の信頼を得，尊敬を受けることによって相互の友好親善関係を緊密強化しようと努め，如何に戦局が悪化しようとも国内の不安，動揺，果ては叛乱という最悪の事態を招くことのないように全力をあげて警防に当たった。その結果，幸いにして終戦に至るまで事なきを得た。

タイ国の安寧をはかる第二憲兵隊の任務遂行の責任者の一人である第二憲兵隊警務部長として，私は何としてもこの使命を果たさなければならないと就任の当初に決意した。上司の意図またその点で全く同じだったので，勤務の重点も専ら保安の仕事に置き全力を傾注して事に従った。この使命を果たすには当然親日的タイ人の支援，協力を必要とするので，私は種々適当な人物を物色した結果，タイ国青年愛国党党首，ソムアン・サラサス [สมหวัง สาระสา⁶] 氏と出会いソムアン氏と同志的な親密な関係を結び，氏の党を通じてタイ要路の人々との友好親善の強化をはかり，日タイ攻守同盟関係を維持全うして終戦を迎えた。タイ青年愛国党は，親日愛国青年ソムアン氏によって結成され「アジアより白人の勢力を駆逐し，アジアはアジア人の手に」という理念を基調として日タイ攻守同盟に基づき日本を盟主として最後まで日本と運命を共にすることを誓い合ったグループであり，党首のソムアン・サラサス氏は一九三二年立憲革命を成し遂げたピブン元帥を中心とする三巨頭の一人プラ・サラサス⁷氏の長男，当年三十歳，タイ政府の特待生としてフランスの大学に留学し化学を専攻，母はバンコク屈指の地主，一家揃って親日家であった。大東亜戦争の終末は不幸にして枢軸陣営にとって世紀の一大悲劇に終わったが，同じく枢軸陣営にあったタイが最後まで日本を信頼し協力して信義をつくし得たことは，ソムアン氏を始め青年愛国党員がタイ朝野の人々と不断の接触を保ってその動向を見守り，戦局の悪化に伴い国内の動揺，混乱な

ど最悪の事態に陥ろうとする危機にあってもよく政府要路の人々に協力して未然に防止し得たためであって、言わばタイの愛国ヤングパワーの賜物でありその功績はタイの国際信義上高く評価されるべきであろう。

戦後終戦処理のため政府の要員として来日した、かつての同志ソムアン・サラサス氏のアドバイスと協力によって本思出の記録となった次第である。 昭和三十二年八月（筆者）

一九四二年（昭和一七年）

1 勤務地への赴任

駐タイ第二憲兵隊の要員として前任地、中支漢口より空路上海に飛び船便を待ったが、昭和一七年七月下旬上海港よりハノイ行き輸送貨物船に便乗し海路、仏印ハノイに上陸、次いで陸路サイゴン、プノンペンを経てタイ国に入り八月上旬バンコクに到着した。

第二憲兵隊は、太平洋戦争の初期の作戦も終了し、各戦線の戦火も一応おさまったので戦線整理と占領地行政強化とによって次期作戦を準備するため南方総軍（司令官、寺内寿一元帥）が、昭和一七年より各部隊の編制替えを行った際新設され⁸、当初は総軍の直轄部隊として首都バンコクに駐屯することとなったのである。

バンコクは雨期の最中であつた。もっともタイの雨期は日本内地の梅雨期のように連日ジメジメと降り続くわけではなく雷雨をともなった物すごいドシヤ降の驟雨（スコール）が沛然と地上を襲い豪雨と化すが、数時間も経つとピタリとやんで雲の間からうららかな陽光が下界を照らすという、まことにさっぱりした雨期である。東北〔秋田県〕生まれの私は、常夏の任地は心身の負担に堪えなければと覚悟してタイ入りをしたのだが、日本内地の真夏とあまり変わらないという印象を受けた。

着任の約三週間前に北タイで、国土の南北を縦貫するメナム河が氾濫したため河水のはけ口、タイ湾に臨むバンコクに影響の及ぶ兆候が現れ始めていた。

氾濫した河水が、河川以外の平地も通って北タイより南タイへと移動し遂にバンコク市街に達して徐々に街路にあふれ、始めは靴裏を濡らす程度だったのが次第に水嵩を増し遂に膝を没するようになって街路の歩行も困難となった。タイの国土の地勢は、高い北部と低い南部の勾配の差が緩やかなので氾濫した流水の移動もすこぶる緩慢なために起こった現象であった。

私の宿舎は先発して設営にあつてた新設憲兵隊の編成要員によってシーロム街のタイランドホテルに準備されていた。タイランドホテルは元王室所有の建造物の一部だったが、在タイ二十数年の藤原某〔藤原覚朗⁹〕が譲り受けホテルに改装して、主に日本人を対象に営業を始めたものであった。太平洋戦争が起こってから軍、官、民のタイを訪れる者が急激に増えたこととビルマやマレー方面を往復する者の多くは一応、タイ国、特に首都バンコクに足を留めることなどで、これらの日本人を相手に営業すれば立派に経営が成り立つとのことであった。一見、寺院のような木造三階建ての建物は外観だけではホテルと言う感じは

しないが、内部はタイ・洋折衷の立派なホテルの設備と体裁を整え食事も主に和食を供し、日本式浴場つまり風呂さえも設備されていた。

南支の広東憲兵隊長よりタイ駐屯第二憲兵隊長として転任して来た林清大佐は、部隊編成のためタイランドホテルに止宿しすでに業務を開始していた。私は林隊長の次級者として警務部長という役職を与えられ隊長を補佐し警務（特高、警務）に関する一切の業務を統轄することとなった。

私は庁舎や住居の決まるまで、言わば仮住居としてタイランドホテルに滞在し業務に従事することとなって、南向きの明るい二階六号室に陣取った。隊長と同じ宿舎にあって勤務できることは補佐役としては、すべての点で好都合であった。その上、更に便利だったのは、事務副官の鈴木〔勝一〕大尉や隊長に専属して秘書的な仕事をする武内〔秀男〕中尉¹⁰も同宿していたことである。編成事務その他一切の業務処理は、隊長の指示によってこの両者の手を経て効率的に行われていた。

駐タイ憲兵隊の最も重要な任務は、日タイ攻守同盟条約（昭和十六年十二月二十一日締結）¹¹の、日タイ双方の遵守並びに誠実なる履行を監視、対タイ外交政策つまり日タイ友好親善の強化推進工作に対する協力、敵性スパイ特に宣伝謀略、諜報活動に対しタイ当局に協力して警防に当たることであった。

軍は次期作戦準備のため前線各兵団に一兵でも多くの兵力を送る必要があった。従って、同盟国たるタイ、しかも後方基地の性格をもつ地域に配置する兵力は極力少なくするという方針だったのでタイに駐屯する日本軍の兵員数は甚だ少なくわずかに兵站施設並びにその警備に当たる後方勤務の各種の小部隊が市内や周辺地区に散在するに過ぎなかった。

補給や補充の基地としてのタイの国内治安を維持し、平穩に保つことは南方の作戦遂行上極めて重要な課題であったが、この任務を果たすための十分な兵力の配備を求めることは殆ど望み得ない実情だったので、憲兵隊はタイ朝野の信頼を得、親睦をはかること、つまり友好親善の実をあげることによって国内の安寧を保つことを基調として行動し、このためにはタイの宗教、風俗習慣を尊重するとともに、相互の言語の不自由により意志の疎通を欠き誤解を招いて紛争を惹起するが如きことは極力避け、タイを刺戟するような振舞を厳に戒め、更には誇り高いタイ人の体面を傷つけることのないように細心の注意を払い、互いに固く手を握り合って作戦遂行にタイの協力を求めた。

2 憲兵隊の編成

部隊の編成概要

隊長 林〔清〕大佐（後、徳田大佐）

副官 鈴木〔勝一〕大尉、武内中尉（専属）

書記 数名 通訳（二名）

警務部長 堀井少佐（後に中佐）

警務課長 小林 [茂彦] 中尉 (後に大尉, 北分隊長となる)

警務課付 武山 [典正] 中尉 (後に小林 [茂彦] 大尉の後任となったが警務応援のため仏印憲兵隊に臨時派遣終戦を迎える)

下士官 八名

特高課長 森 [勇記] 大尉 (後にカンジャナブリ [カンチャナブリー] 泰緬鉄道の建設基点分隊長となる。後任は 岩崎 [禮三] 大尉, 後に少佐)

特高課付 根木 [茂] 中尉

下士官 十二名 通訳一

特別班 (電波探知によるスパイ潜入の探知機関) 隊長直轄

班長 清水 [博] 大尉

専門技術を修得した下士官八名

補助憲兵 歩兵中尉を長とする一小隊

其他雇員, 傭人数名, 運転手, 軍属, タイピスト, 雑役夫, 夫々若干名

[バンコク] 南分隊長 木下 [秀清] 少佐¹² (後に小林少佐)

下士官 十一名, 通訳一

補助憲兵 歩兵約半隊

[バンコク] 北分隊長 本多少佐 (後に山本少佐)

下士官 十四名, 通訳一

補助憲兵 歩兵将校の指揮する半小隊

チェンマイ分隊長 坂田大尉

准士官以下十四名, 通訳一

補助憲兵 歩兵将校の指揮する一小隊

編成は以上の通りで完了した。

この頃, 参謀本部に転任することになっていた駐タイ大使館付武官守屋 [精爾] 大佐 [1942年8月1日少将に, 以下少将] はタイランドホテルに逗留し日本内地帰還の航空便を待っていた。メナム河氾濫の影響でドムアン [以下ドンムアン] 飛行場も浸水したため減水まで当分の間使用不可能となったからである¹³。

九月上旬の或る夜, 私は守屋少将を居室に訪ね, 氏のタイ国在勤中の経験とタイの事情について語ってもらった。

守屋少将の話の内容を要約すれば, 第一に, タイ国朝野の対日感情の動向を冷静に正しく見極めよということであった。日本内地や中央部でさえ一般に, 山田長政の故事や日タイ攻守同盟締結という, 言わば絶対的保証を期待できない事実だけでタイは国をあげて親日的だと友好的だなどと一方的に決めこみ, タイ国官民の意中を見抜いたかのようなタイに対する楽観的な見方をする向きもあるようだが, それはいささか甘過ぎるばかりでなく危険さえある。そのような楽観的な先入観を棄て, 朝野の動向を仔細に観察し実相をつかめ, と言

うことであった。しかし、また底抜けの信頼感を戒めると同時に事毎に不信の念を懐いたり、猜疑の眼で見ることも慎むべきだとも付け加えた。

第二は、開戦当初、日タイ間で締結された日タイ攻守同盟は、必ずしもタイ朝野の人々が全面的に賛意を表して生まれたわけではない、要路の人々や有識者さえも反対意見を主張し、しかもこれらの人々は夫々グループを造って表面は対日協力を装いながら、裏面では秘かに反日運動を続けていると言うことである。

第三は、ピブン政権が発足してから満四年にもなるがその政治に対する国民の評価は必ずしも好いとは言えない。特に最近では戦時下であることを口実として、過度に国民生活を圧迫し、無理な耐乏を強いているという非難があり、またタイ在住の第三人の中で、数の上で圧倒的に多い華僑の生業にさえ圧迫、制限を加える法令を準備するなど、国民の反感を買うような政策を強行する傾向があるので民心はすでに離反の兆候があると言う。もっともタイの国民は一般に政治に対する関心が薄く、その意識も極めて低く、タイにおいては政治は極めて少数の知識人や上層の特権階級の手によって専断的に行われ、国民大衆とは遊離した、言わば国民不在の政治が行われているのが実情だが、政府は国民大衆の支持、信頼、人気というようなものがなければ永続しないであろう。しかし、一方、タイ国内には戦時下、非常事態にあってはピブンのような独裁者が必要であるとして支持する声もあるので、一概にピブン政治を非難するわけにはいかないで、日本にとっては何れの世論が大勢を制しているかを適正に判断して対処することが肝要である。とは言え、素々、ピブン政権を支持することはわが国の外交政策上の基本方針であるから、これ以上の見解を述べることは差控える、と守屋氏は夜の更けるまで、タイ事情とりわけ対日動向などを要約して語ってくれたが最後に結びとして次のように付け加えた。

タイに駐屯する部隊の最も重要な任務は、国内の安寧を保つことであるから、わが軍の戦況の推移の如何に拘わらず、日タイ攻守同盟条約を遵守し対日協力の方針を堅持して日本と運命を共にすることのできるような強力な親日体制を日タイ共同で造ることを現地部隊、特に憲兵隊として検討する時期ではあるまいか。しかし、このことはタイの内政に干渉するという外交問題をひき起こすおそれがあるので、この点については、十分慎重に、手際よくやらなければならない、

と言うのであった。

私はタイ国に着任前に予め知り得たタイ事情と守屋氏が語ってくれた話とではかなりの違いがあり、特に朝野の対日感情については全く予想に反し、山田長政の故事や日タイ攻守同盟などは、友好親善の強化に大して役に立っていないらしいと知り大いに驚いた。自分のタイに対する認識の甘かったことを打ち明けるとともに今後、最初に何をなすべきかについて氏に尋ねた。

守屋氏は、現地に勤務する者は最も正確に現地の事情を把握しているはずだから、たとえば中央部の意図に添わない事であっても信念をもってその判断を誤らせないために生（なま）

の情報を提供すること、また強力な親日体制を編み出す方策を立てること、そのために一九三二年の立憲革命に関与した在野の憂国の人物で親日的な信頼するに足る、所謂大物を見出してその中心に据えることであるとアドバイスしてくれた。

私が新参のタイ国勤務者の故か、くどいほど詳しくタイの実情を話してくれたので厚くお礼を述べて辞去した。

3 業務開始

私は守屋氏の語ってくれたタイ事情を林隊長に報告した。隊長は守屋氏のタイ事情は経験に基づく貴重なものであるとして憲兵隊の今後の勤務遂行に大いに参考となると評価した。

編成事務も完了し隷下各分隊及び特別班も夫々配置について業務を開始したのは九月中旬であった。

北タイの河川氾濫の流水が丁度この頃タイ湾の満潮時になると街路を徒歩で歩行することが不可能なほど水嵩を増し、所によっては小舟で市内を往来しなければならないような交通の不便な状態となった。

憲兵隊本部の庁舎は、各分隊や特別班の駐留地決定の際に、臨時にルンピニ公園前の緑の濃い樹木に囲まれたS国の領事館と決められていたので、私は街路にあふれた流水の退くまで小舟などを利用してタイランドホテルより通って業務に従事していた。S国領事館は大戦の勃発と同時に在タイ敵性物件はすべて敵産としてタイ政府において接収した、その中の一つであったものを日本側が借り受けたのである。

私は臨時庁舎で仕事するようになって間もなく、林隊長より在タイ憲兵隊の任務を遂行するための行動基準要綱を起草することを命じられた。この要綱は南方総軍より与えられた第二憲兵隊の任務を具体的に実行する場合の行動の基準を隊長の指示すべき事項としてまとめたものであった。

要綱の要目は

- ① 日タイ攻守同盟条約の相互遵守如何の査察に関する事項
- ② タイ国朝野の対日協力の動向査察に関する事項
- ③ 各種スパイの宣伝謀略の暗躍を事前探査し警防する事項
- ④ 電波探知の特別班との連繋に関する事項
- ⑤ 日タイ友好親善強化に関する事項

等より成り、これを実行するための要領を原則的に指示するものである。

作業は参考資料の収集などを含め着手してから約一週間で原案の作成を終え林隊長に報告、隊長は慎重に検討の後、極秘文書として南方総軍及び隷下各分隊並びに関係部隊、機関に印刷配布した。

北タイより流下してバンコク市街にあふれた浸水も次第に減水をはじめ、十月はじめ（ママ）には殆ど平常の状態にかえった。市街の電柱や並木にも、河岸に接する水中に建てられ

た家を支える丸太の支柱や土塀の外壁にも、浸水の水嵩のあとが減水の際汚線となつてしみつき、バロメーターの目盛が深さの度合を示すようにくっきりと痕跡を残していた。

4 分隊長会議（電波探知特別班も含む）

すでに乾期に入りさわやかな季節となつたので、林隊長は各分隊と特別班の長を隊本部に招致して統率の方針に基づき任務遂行の要領を親しく示して意図の徹底をはかるため、分隊長、班長会議を開催した。十月中旬のことであつた。

会議は第一日に、林隊長の訓示。警務部長の勤務要綱の説明、特高課、警務課、庶務課に対する質疑応答。第二日には、事務上の事に就いて隊本部各課と各分隊及び特別班との連絡、打合せ、という次第で行われた。

林隊長の訓示の要旨は、南方総軍の次期作戦が有利に展開するためには後方作戦基地、兵站補給基地たるタイ国の治安が維持されることが絶対必要条件である。故に、タイ駐屯憲兵隊としては、タイ国朝野の動向、動態に対して不断の査察を行い、いやしくも治安を乱すが如き兆候がある場合には、如何なる瑣末の事項といへども忽せにすることなく事前警防に努めなければならない。そのためには予め配布した行動基準要綱に基づいて服務せよ、要綱に折りこまれた精神については警務部長をして述べさせる、と言うのであつた。隊長の訓示の後、私は警務部長として勤務要綱に基づき概要次のように述べた。

申すまでもなく、タイ国は馬來、ビルマ、インドネシアその他の被占領国と異なり独立国であり、しかも枢軸陣営の加盟国¹⁴として英米連合軍に対し敢然と戦を挑んだアジアにおける唯一の盟邦である。従つて当憲兵隊はタイ国内で憲兵勤務に服するに方つては、日タイ攻守同盟条約に基づく諸種の協定に依拠したもの以外には紊（み）だりに警務行動を起こしてはならない。もし、この制約に違反し、逸脱するようなことがあれば、それは明らかにタイ国の主権を侵害することになり外交問題を惹き起こすおそれがある。タイ国の治安の維持は絶対に必要であり、そのためには総軍の基本方針の通りタイ国の主権の尊重と友好親善の強化をはかること、つまり強化工作を常に念頭において行動することである。例えばタイ国内で暗躍するスパイの活動を探知した場合、タイの捜査機関に連絡しその諒解を得ること。それなしに、勝手に警務行為つまり容疑者を引致して取調べをしたり、逮捕監禁したりするようなことは明らかに職権乱用となる。また、これは或る占領地で起きたことであるが某部隊の通訳が自分の言葉が地域住民に通じないことに腹を立て暴行を加えたため激しい非難を浴び重大問題となつた例もある。言葉の違いによって紛争を起こしタイ朝野の反感を買うような不祥事を起こすことになれば、日タイ友好親善強化工作の著しい妨げとなる。それ故、これらの誤つた行動は当憲兵隊として断じて犯してはならない。

今後軍の次期作戦の進展に伴い前線に向かう皇軍の部隊将兵のタイ国内通過者数は次第に増えることと思われるが、これらの人々が友好親善関係にある盟邦であることを知

らずにタイ人との間で心ない紛争を起こすような事件も予想されるので我々の日常の勤務においても査察を強化し未然に警防することを望む。

最後に勤務上参考と思われることを一言附言したい。それは満州、支那その他の占領地では、戦勝の余勢を駆って、誤った優越感より現地住民を劣等視したり彼らに対し尊大な態度をとり果てはいわれなき、目に余る不当な行為に出るので地域住民の反感を買って著しく皇軍の威信を傷つけるような例が頻発するため、占領（抛）地行政の前途に暗影を投げ責任者は憂慮を深めているという。タイは重ねて述べる通り占領（抛）地ではなく独立国の盟邦であることに鑑み、わが駐タイ憲兵隊は右〔上〕事件と類似の不祥事の発生を、日々の勤務における不断の査察を強化することによって警防しなければならない。しかし、不幸にして事件が発生した場合は機を失せず可及的速やかにタイ当局に通報、連絡してその了解の下に処理に当たる必要がある。

これを要するに、当第二憲兵隊は林隊長の統率の下一致団結して任務に邁進し、総軍の期待に添うように努めなければならない。特に独立国たるタイにおいて勤務する我等は、日常の服務においてタイ朝野の人々に対する言動を慎み、彼らに不快の念を与えその不信を買うが如き行為のないように細心の注意を払い、常に皇軍憲兵としての誇りをもって彼らの尊敬を勝ち得るような心構えをもって行動することの積み重ねこそ、総軍の大方針たる日タイ友好親善強化工作の要素となることを確信するものである。以上縷々述べた、隊長の指導方針たる要綱の意のあるところを警務行動の基準として任務を完うすることを切望するものである云々。

会議の第二日目は前述の次第によって順調に行われ日程は終わった。

5 親日家ソムアン・サラサス氏との出会い

分隊長会議の行事が終わって間もない頃、林隊長は私に次のようなことを話された。

タイの元蔵相〔経済相〕だったプラ・サラサスという政治家がピブン現総理と政治上の意見の相違を来たしたためタイより出国して渡日し、現在夫人（フランス人）、十二歳の女兒（混血）と共に東京荻窪に住んでいる。彼は東京に居住以来、三井財閥の池田成彬と親交を結び池田氏より特別に三井ビル内の一室を提供され、三井タイ室として専ら日タイ経済研究に専念している。池田氏はプラ・サラサス氏の日本における無二の後援者となっているという。プラ・サラサス氏はフランスにおいて財政経済学を専攻し、その後日本大学¹⁵において学位を取得、ドクターの称号を有する国際的財政経済学の権威、彼の財政に関する著書は日本の学界においても高く評価されている。なお、彼は文学的才能を有し、二、三の文学作品を発表したが、これがまた世界的に広く愛読されたというほどの器用な文人政治家でもある。彼は現摂政プリディ・パノムヨン氏とは立憲革命以来の同志で、ピヤ〔以下プレイヤー〕・パホン将軍の内閣時代には蔵相〔経済相〕の地位にあったという経歴を有しタイ国最高級の人物の一人だという。

プラ・サラサス氏はタイ女性の夫人と約八年前に離婚したが、その離婚した前夫人は数人の子供達と共にバンコク市内に住んでいるはずである。タイの要人で親日家の、かつての家族達に接触し日タイ友好親善工作強化の推進をはかったらどうかというのであった。

私は宮川 [源一郎]¹⁶ という二世のタイ語通訳に、プラ・サラサス氏の前夫人一家の調査を頼んだ。宮川の父 [宮川岩二]¹⁷ は、在タイ四十数年、日本人の妻（宮川通訳の実母）の死後はタイの女性と再婚した親タイ家であった。

宮川は間もなく、プラ・サラサス氏の前家族がワンカピー [以下バーンカピ, บ้านคปิ] 路に住んでいることを確認して私に報告した。宮川によれば現在バーンカピの邸宅には前夫と二十七、八歳の長男、長女（既婚だが現在婚家よりバーンカピの実家に戻っている）、次女、三女の計五人が住んでいる。

この前夫人はバンコク屈指の地主階級の出身であるが往昔プラ・サラサス氏がフランス留学中、学資その他一切の経済的援助をしたという。

プラ・サラサス氏と前夫人とは約八年前に離婚した。プラ・サラサス氏はフランス女性と再婚し、二人の間には十二歳の女兒があって目下東京荻窪に住んでおり、三井タイ室で日タイ経済に関する研究に従事している。

概要以上のような報告は簡単なものであったが林隊長の話されたこととほぼ一致したので、私はタイ事情の動態の把握と守屋少将の対タイ観察を確認するため、林隊長の承認を得てプラ・サラサス氏の前夫人一家（以下サワデイ家と称する）と接触をはかることとし、宮川通訳の父君 [宮川岩二] に仲介の労をとってもらった。間もなく私は宮川の案内で洋酒、洋菓子などの手土産をもってバーンカピ路のサワデイ邸を訪れた。十一月上旬のことである。

サワデイ邸は広い芝生の中に建てられた四、五十坪ほどのタイ洋折衷の木造平屋で日本の神社などで拜殿と床面の間に設けているような階段式の段々があり、階段をのぼりつめたところが正面玄関であった。

入口の右側には外壁も屋根も透明な硝子板を張った、外の光が直接入り込む露天の庭のような明るい広間があった。入口の左側には警備員の詰所のような独立家屋があるので宮川に尋ねると運転手の宿泊のできるガレージだとのことであった。

階段上の入口に取付けられた呼鈴の押釦を押すと二十三、四歳と思われる、顔のしまった美貌の婦人が現れた。来意を告げるとためらいもなく私達を玄関脇の応接間に通してくれた。この婦人はサワデイ家の長女 [次女] であった。

応接間にはスタインウェイの壺型ピアノがあり、壁にはミレーの晩鐘の洋画がかかっていた。

やがて二十七、八歳と思われる、顔の輪郭のはっきりした青年が微笑をうかべながら出てきた。タイ人とは思えない色白の、眼光の鋭い、額の秀でた偉丈夫である。

初めてお目にかかるがお会いできて大変嬉しい、ソムアン・サラサスと言うものだが宜しくと私に先んじて初対面の挨拶を述べ握手を求めてきた。私は先を越されていささか面喰らったが宮川を介し挨拶を返し、勧められるままにソファーに腰をおろした。

父上は東京におられるそうだが、と私は話のきっかけをつくるためこう切り出した。

ソムアン氏は、父は東京へ行ってからもう八年以上になる。日本は父の最も好きな国で恐らく若い日に留学していたフランスよりも気に入っているようだ。父は日本人を優れた民族として高く評価し大いに尊敬している。ピブン現首相とは政治上の意見を異にするのでピブンが政権の座にある限り多分タイには帰らないであろうと語った。

父上が日本に対して過分な評価をしてくれることは大変有難い。わが国と同盟関係にあるタイ国で勤務する憲兵隊員として、タイ名門のサワデイ家と近づきになって親交を深めることができればこの上もない幸いなことだ、今後も永く交誼を願いたいと申入れた。

父の好きな日本人々と交際できることは自分達にとっても大変嬉しいことだ。当方こそ宜しく、と。

私達は互いに今後のつき合いを約した。

ソムアン氏は、大東亜戦の緒戦での素晴らしい日本軍の戦果を今でも思い出し、感激を新たにしている、日本は神の国と聞いているがあの輝かしい戦勝はまさに神業の結晶ではなかったか、と緒戦における日本軍の戦勝を賞めたたえた。

私は日本が神の国とすればお国は仏の国ということになるだろうか。とすればお互いに神仏の加護を受けられそうだ。しかし、日本の緒戦の戦果は確かに輝かしいものであったが何しろ世界中の大国を相手とする世紀の大戦争であるので、今後の戦局がどのように展開するか、前途は楽観できないと答えた。

自分は枢軸陣営の勝利を信じて疑わない。日本より容易に帰国しそうにない父も恐らく自分と同じ考えだと思うとソムアン氏は、力強く言った。

ソムアン氏の言うことはいささかお世辞と受けとれたが、それでも少なくとも日本に関心があることは明らかであった。

ソムアン氏はちょっと失礼すると断って中座し間もなく品の良い五十歳前後の白髪の老夫人と私達を玄関で出迎えてくれた婦人、それに二人の若いタイ女性を伴って戻って来た。

ソムアン氏は四人の女性を夫々、母、長女、次女、三女¹⁸の順に紹介してくれた。私もすかさず名前、身分を名乗り丁寧に挨拶を返した。

母親はサワデイと名乗った。ソムアン氏の母は女性らしく「日本と違って暑さがきびしいため大変でしょう、いくらかタイの生活に慣れましたか」と、優しい心遣いをもって私に尋ねた。

こちらに来る時に暑いことを覚悟してきたのですが矢張り赤道に近い常夏の国、何と言っても暑さは厳しいと思います、それでも近頃はいくらか慣れた故（せい）もあってそれほど苦痛を感じません。ところで私がタイいやバンコクに来て最初に印象づけられ

たことは、早朝、黄布をまとった大勢の男性が街上をさまよい歩いていることです。日本では到底見られない風景ですから。

私は率直に感想を述べた。

タイは小乗仏教の国だ。大乘仏教の方は広く人間全般の救済や成仏の教義を説く、言わば利他的な宗教だが、わが国の小乗の方は自分自身の救いを第一としている。成人となった男子は一定期間髪を剃って仏門に入ることになっている。何れにしても、この門を通れば出世コースを歩むことができるが、そうでない者は出世することも難しいということになっているのだ。

ソムアン氏はこう説明した。

東京の父上より近頃何かお便りがありましたか、と私は話題を変えた。

最近の連絡では日本の人々は皆よく一致団結してこの世紀の大戦争を勝ち抜こうと一生懸命に努力し続けているとのことだ。父がいつも話している通り日本の人々は国家の大事の時は天皇を中心によくまとまって難局に当たる国民のようだ、

と、ソムアン氏は答えた。

サワデイ家の人々は私がタイへ来て間もないことを知り、それからしばらくの間、タイの伝統、慣習、山田長政の故事などについて交互に詳しく説明してくれた。私の方からは戦時下の日本における国民一同が最後の勝利を信じて、一丸となって戦争に協力していることなどを紹介し、互いに話題を出し合って花を咲かせ尽きるところがなかった。しかし、訪問してから数時間も過ぎたので初めての訪問先に長居をすることは失礼だと思い、初対面にも拘わらず家族一同の親切な歓迎を受け感謝に堪えない、今後、タイ国で日本軍の憲兵隊の一員として勤務する上で、タイ国の事情を勉強するためにも日タイ協同作戦を有利に進める点でもいろいろとアドバイスを受けなければならないと思うが宜しく頼む、とお願いした。

ソムアン氏は、すかさず自分達が日本の憲兵隊にどんなことで手伝いができるか判らないが、友好国日本のためとあれば自分達もできる限りのことは協力するつもりだと好意を示してくれた。

是非、そうお願いができれば有難いことだ。長い間おもてなしをいただき有難う、と私は茶菓のおもてなしを受けたことなどを感謝しながら夕刻ソムアン氏邸を辞去した。この日のソムアン氏と私の初の出会いが終戦まで、いかに戦況が悪化しても終始サワデイ家との交誼の変わらないきっかけとなったのである。

6 空襲の噂飛ぶ

十二月上旬と言えばバンコクでも日本内地の秋を思わせる肌寒さを感じ、街ゆく人々の中には合オーバーなどを着こみ、派手なマフラーを巻いて風の吹く時などはヒラヒラとなびかせながら街頭を闊歩するしゃれ者もいた。この頃のことである。或る夜、私は南国の暑さでかなり毛孔のひらいた皮膚に寒さを感じながらタイランドホテルのロビーでソファーに深々

と腰をかけ二年半前離れた日本の晩秋の燃えるような紅葉の季節を思い出していた。

お客様だ、とかすかな声で私の背後からホテルの息子さんが連絡してくれた。故国の思い出の夢を破られた私は、バネ仕掛の人形のように立ち上がり後を振り向くとタイ語の臨時通訳として勤務しているタイ生まれの日タイ混血児の江畑 [朔弥]¹⁹ という青年が彫りの深いインド人のような端正な顔を私の方に向けて無表情のまま立っていた。

私は夜の客などを迎えたことがないので一体誰だろうと思った。意外にも江畑通訳がニュースを伝えに来たのであったため私の傍らにかけるように勧めた。これまでになかったことなので、私は江畑の報告を緊張して聞いた。

江畑は在タイ四十数年という日本人の父親 [江畑弥吉²⁰] とタイ人の母親との間に生まれ、高校卒業まではバンコクで過ごしたがその後シンガポールのロヤール (英国系) 大学に学び更に英国のケンブリッジ大学にも籍をおいたことがあるというインテリ青年であった。タイ語はタイ人より上手に話せる上、英語にも堪能なので私の仕事を手伝ってもらうには最適者であった。

江畑は正式の臨時通訳であったが、その外にタイとりわけバンコクにおける出来事を大小に拘わらず、その都度私に連絡してくれることになっていた。連絡は通常昼間憲兵隊に出向いてか、或いは電話で行うことになっているが、日タイの間に重大な関係のあると思われるニュースのある場合には夜間であってもその都度密かに訪れることもあるという決まりにしていたため、江畑が私の最初の夜の客となったのである。江畑は私の傍らに腰をかけて、早速次のようなことを報告した。

華僑街のQナイトクラブで近日中に敵の空襲があるという噂が流れている。このクラブに出入りする人々は、タイ人のほか華僑、その他タイ国周辺の国の、敵性とは見なされていない人々、所謂第三国の富裕階級に属するグループで、親睦をはかるといふふれ込みでしばしば会合し交遊を続けているが、この噂はグループのメンバーから出ていることは間違いない。ナイトクラブは開戦後暫くの間までは終夜営業だったが、最近は戦時中とあって夜十二時以後は営業禁止となっている。しかし、当局の取締はあまり厳重ではない。この噂は市内全般には広がっていないらしいが、もしこれが市中に広がるということになれば、戦場はタイからはるか遠く離れたところにあつて直接タイには戦争の影響は及ばず、一応平穏である、と思いこんでいる市民にはたとえそれがデマであったとしても不安と動揺のムードが広がり、落ち着かない日々を迎えることになる。この噂のものは不明だが、戦時中のことなので、敵のラジオ放送の傍受はタイ当局より禁止されてはいるが、その傍受によるものか、それともタイ内に潜伏する通敵分子であろう。何れにしても時節柄、日タイ両局にとって重要なことと考えたので報告に来た、というのである。

敵の空襲近しとの情報は、日タイ当局でも敵の短波放送の傍受によってキャッチしておりタイ当局では、電波による敵性放送の妨害を試みているが市民全般の傍受を取り締まること

は困難であると言う。つまりこの情報は日タイ当局には入手されていたのだが、江畑の所謂Qナイトクラブなどでこのような噂が流れていることは、私は始めて知った。

確かに市内全般に広まったら市民を恐怖させることは間違いなく、これこそ人心を惑わす謀略放送以外の何ものでもないのであるから無視するわけにはいかない。早速タイ当局とも連絡をとり対応策を講じなければならない。引き続き噂の行方を見守るように、と私は江畑に頼んだ。

夜も次第に更けたので帰ろうとしたバンコクっ子の江畑を引き止め、バンコク在住の華僑のこについて語ってもらった。江畑によれば、バンコク定住の華僑の数は他のどの国の定住者数よりもはるかに多く、その経済的活動振りは物凄く、他の国の人々を圧倒している。彼らはまたいかなる職業も厭わずに従事し、勤勉に働き決してくじけない、まことにその生活力は旺盛である。彼らはまた商売が上手であることには定評がある。例えば華僑の店で品物を買う場合には必ず言い値の半分以下に値切る必要がある。何故ならその商品の値段は半値以下で売ってもなお、いくばくかの儲けがあるようになっているからであって、この商法は、買物をした客の方がかなり安い買物をしたつもりになってこの次もまたということになるように客の心理をそその商法で、言わば薄利多売方式によって上手に商売をしている。また、彼らはそんなに容易に他国の人を信用しないがひと度信用したらたとえ、その信用した人が彼らの金銭を横領したり彼らとの契約（約束）を破る、いわゆる裏切り行為をしても自分で選んで信用した人であるから已むを得ないと諦めて飽くまでも離さない。彼らは金銭を貸したり預けたりする場合ほとんど証文を交わすようなことはしない。つまりいかなる約束書を書いたとしても本人に履行の意思、つまり守る気がなければそんなものは簡単に破棄できるので何の役にも立たない。要は信用さえあれば十分であるという考えであるからだ。大体以上のようなことを江畑は巧みな日本語で夜の深まるまで語ってくれた。

翌日、私は林隊長に江畑情報を報告し、隊長の意図に基づいて隷下各隊に噂の流れについて調査するように指令した。

7 バンコク初空襲

十二月八日は大東亜戦の開戦記念日、タイ側にとっては民主憲法発布記念祝典の始まる日。この祝典は十四日まで続くが、十日には盛大な国民的祝賀が催されることになっている。

この夜、バンコクに突然空襲警報が発せられた²¹。丁度私はタイランドホテルの居室で在タイ日本大使館の収集した最近のタイ事情に関する文書に熱心に取り組んでいたが、大急ぎで軍服に着替え武装を整えて外に飛び出し、林隊長始め鈴木副官その他同宿の各官と共に、ホテル前の並木の根元に身を伏せた。

この時はまだ敵機の空襲に対する準備も不十分で防空壕などの簡単な設備さえもできていなかったもので屋外に飛び出した市民は、何れも付近の並木の樹間にしゃがみこんだり、地面

に伏して待機するより仕方がなかったであろう。何しろ市民にとって空襲警報を受けることは恐らく夢想だにしない、まさに寝耳に水の異変事だったので、為すところを知らず、已むを得ず突嗟に本能的にとった避難の動作であったに違いない。

やがて西方のかなたより金属性の爆音が聞こえてきた。夜間なので機種の識別はできないが、侵入の機数は単機に過ぎないことは確かであった。

日タイ両軍の防空部隊は直ちに一斉照射を開始し同時に高射砲も砲門を開き猛射を浴びせたが、高度があまりにも高いため対空砲の射程では十分な効果を発揮することができなかったらしい。

敵機は約三十分、市の上空を飛びまわり、数発の小型爆弾をトンブリー（メナム河をはさんで、対岸に在る小部落）の近くのメナム河に投下しただけで西方に飛び去った。

この空襲は単機で、しかも全く予想もしなかった突然のことであり、空襲といってもバンコクに対して、何らの被害を与えずに終わったため、一体いかなる目的で行われたものかということについては、日タイ両軍当局においても、共に判断に迷った。単なる視察に過ぎないとか日タイ両国の十二月八日の記念式典めがけてのいやがらせに違いないなどと種々様々の意見があって諸説まさに紛々たる有様であった。

江畑のキャッチした空襲の噂は市内に広まる前に、日ならずして事実となった。戦時中の故に禁ぜられた敵性放送を、禁を犯して秘かに聴取する者がある限り再度この種の噂の立つことも已むを得ないが、問題はこの事が一般大衆の間に広まり不安と動揺をきたすことである。敵性放送の電波をキャッチすることは、誰もが簡単にできることではない。とすれば一体誰が？　そこで第一に考えられることは空襲の噂の最初の出所、Qナイトクラブのメンバー、その他一般市民中のインテリ階層のグループの面々である。しかし、敵側としては宣伝放送を流しただけでは十分な効果を得ることはできず大衆の中へ広く拡散させる方法を講ずる必要がある。その方法とは、即ちタイ国内に利敵、通敵の秘密組織を設けその機能を組織的に働かすことである。

ところで、考えて見ると、素々タイ国が日本に協力して参戦に踏み切るまでの経緯をたどっても、簡単に世論の一致によってこの重大な国の方針が決定されたわけではないし、更にはタイ伝統の旗幟を鮮明にしない、言わば泳ぎ外交のテクニックを駆使して自国の独立をはかるという国柄であると聞いているから、ひょっとしたらこのような秘密組織の存在を見逃しているのかも知れないという疑念を私は抱くようになった。

翌日私はかつて日本に留学したことのある警察少佐（タイには国防軍のほか国内保安のために警察軍という組織があった）チャムラス氏〔チャムラス・マンダカナンダ, Chamras Mandukananda, 1911年2月10日生-1977年6月11日没, タイ語発音は, ジャムラット・マントウガーノン, พ.ต.ต. จำรัส มั่นทุกานนท์²²〕をタイランドホテルに招いて夕食を共にしながら初空襲のことについて私的に意見の交換を行った。彼は警務事項に関する対日連絡者であった。ジャムラット氏は久しぶりに日本食の招きを受けたので懐かしげに賞味しながら私の

対談に応じた。

十二月八日の敵軍機の空襲はどんな目的で行われたと思うか、と私は率直に意見を求めた。タイの警察当局もその点について検討中でまだ結論が出ていないとジャムラット氏は答えた。

わが方もまだ決定的な根拠のある公的な判断は出ていないが、実は空襲のあった四、五日前、市内の或るナイトクラブの集会で空襲の予言をした者があった。しかし予言といっても単なる噂程度のことに過ぎないと考え気にも留めなかったのだが、何とそれが事実となったので驚いている次第だ。

タイ側に連絡しなかったのは噂に過ぎないことであり、タイ側は既に敵性放送の傍受でキャッチしていることと考えたからである。幸いに今日はタイ側と初空襲のことについて、また、今後の対策などについて話し合う機会を得たことは大変有難い。この機会に初空襲のことに限らず治安維持上参考となることは何でも意見を述べてほしい。

空襲予告の敵性電波はタイ当局でもキャッチしていたので市民の動向を注視していたが、幾日もたないうちに不可解な初空襲が行われた。何らの損害も加えずにまるで遊覧飛行のようにバンコク市の上空を飛び回っただけで飛び去ったので一体何の目的での飛来か判断しかねるのだが、多分バンコクでは空襲に対する警戒が十分に行われていないことを知り空爆の具体的目標を偵察のためにやってきたのではないか。この空襲があってから政府並びに軍当局は応急の処置として市の要所要所に、また市民のためには行政区毎にチーク材で枠組みをした防空壕を構築する工事を始めたが粗末なもので対空処置としてはまことに不十分というほかはない。恥ずかしい限りだ。ところで、この度の初空襲その他のことについて自分個人の考えを述べれば、タイ全般の防空施設の不十分なことや空爆に都合のよい重要施設とくに軍事施設の所在を、敵側に通報するグループがタイ国内に潜んでいて、そのグループの通報を確認するために行われたのではないかという気がしてならない。と言うのはタイには戦前、西欧の国の人々と交遊のある反政府的なりベラリストのグループがあった。開戦と同時に外人は本国に引き上げたが、引き上げ外人と交際していたグループが国内に潜在しているという疑いを抱いたため、タイ側は職務上彼らの行動を警視の対象としている。今のところ表面的な動きは認められない。しかしひょっとしたらそのグループと連絡をとっているのかも知れない。自分はそれらの関連性を突きとめたいと思っている。

ジャムラット氏は敵襲について私達の考え及ばない貴重な意見を述べてくれた。

私は同じように治安維持に関する任務についているジャムラット警察少佐が、敵機の空襲に対する独自の判断を示してくれたので氏の見解に沿って警視活動を続けることとし、今後とも緊密な連絡をとって任務に当たることを約して厚くお礼を述べ氏と握手を交わした。

彼はなおよしばらくの間日本に留学当時のことを思い出し、目白の小林たねと言う下宿の主

婦が親切な人で浴衣をつくってくれ、日本人にしてあげるのだと言って帯の締め方を教え、また東京弁（江戸弁）を話すことも教えてくれたが、言葉の方はもう忘れてしまったなどと笑いながら語ったのち、招待のお礼などを述べて帰って行った。

8 自由タイ暗躍の兆

その後数日経った或る日、私は隊本部特高課の水野曹長より次のような報告を受けた。

タイが連合軍に宣戦布告をした際、英国に引き揚げたクロスビー [Josiah Crosby]²³ 公使は在タイ三十年（ママ）という長期勤務の経歴を有する外交官だったが、戦前クロスビー氏と親交のあったタイの或るインテリグループが初空襲の噂を立てたものらしい。開戦時海外にあって帰国せず、反政府、リベラリズムを唱えて連合軍の電波放送により反戦、厭戦の気分を大衆に吹きこむ、いわゆる謀略的宣伝戦に従事する自由タイと称する秘密組織のあることは既に知られている通りだが、その組織のメンバーの一部がタイに潜んでいて十二月八日の初空襲の噂を流した疑いが濃厚である、と言うのである。周知のように英国が外地、特に植民地などで勤務する外交官または行政官の永年勤続制をとっているのはその土地になじみ、執務能率を高めるためであるが、クロスビー氏はこの制度による老練な外交官で、在タイ三十年という記録的な永年勤続によって現地つまりタイの事情に精通するばかりでなくタイ朝野各層に幅広く数多の知己をもっていたことは想像に難くない。

私はジャムラット警察少佐が先頃タイ内に通敵分子が暗躍しているという疑念をもちたことと考え合わせ、タイ国内に敵性スパイの組織があると判断し、林隊長の承認を得て、本部特高課にタイ側当局と密接に連絡をとり本格的に探査を開始するとともに、自由タイなるものの正体を明らかにするように指示した。

十二月下旬、新年を迎える前に、ルンピニ公園の一角にあった憲兵隊の庁舎はメナム河畔の、戦前英国系の銀行 [チャータード銀行] だった建物に移転した。この建物は前庁舎と同様、タイ政府が敵産として接収したもので、それを日本軍が借用したのである。新庁舎は洋式の二階建、大理石の巨大な大黒柱が要所要所で全建築の重量をがっしりと支えるように建造物の骨格を形成していた。

日本流にみて建坪二百坪ほどで、約百三十人に及ぶ本部の人員を収容する広大なものであった。南隣には、日本の帝国ホテルが経営しているというオリエンタル・ホテルがあり北側にはタイ家屋三棟を隔てた所に仏国の領事館があった。庁舎の西側の広場を隔てて、その傍らをタイの数奇な歴史を物語るメナムの悠久な濁流が滔々と流れ、対岸には、好天気の時など、もやに霞む一種荘厳で神秘的な眺望を展開するトンブリーという小部落が影絵の如く庁舎と相対していた。ルンピニ公園の一角にあった旧庁舎は私達の宿舎に改造されたので私達は隊長や副官とは別に警務部員と共にタイランドホテルを引き払って旧庁舎に移った。

9 親日人民代表議会議員との接触

特高課の根木 [茂]²⁴中尉はタイの人民代表議会の議員に対する接触工作に当たっていた。ワンチャイ・トングッパ²⁵氏は親日的な実業家（米穀商）の一人で根木とは特別に親しく交際している政治家であった。彼はタイ人民代表議会の民選議員で反ピブンの立場をとり、派閥的系統としては前商相で議会副議長のクオン [以下クアン]・アパイウォン氏系に属していた。根木の温順、誠実な性格と円満な常識、更に燃ゆるような愛国の至情と鋭い直感力が奇しくも一致したので互いに胸襟を開いて語り合うまでに親交が深まっていった。

根木はワンチャイ氏を通じてタイ人民代表議会の状況や政界の事情を把握するとともに議会の動きについても、その都度連絡を受けるようになっていた。

十二月八日の憲法記念祝典が終わって間もない或日の夕刻、ルンピニ公園の池の上に設けられたレストランで、私は根木と共にワンチャイ氏と会食した。根木の紹介で氏と面識を得るためであった。

市民の夜の納涼の場として賑わうルンピニ公園内に比較的大きい人工池が造られ、その池の上には巨大なゴンドラの模型が浮かび、ゴンドラにはお伽の国の龍宮城の模造が乗っていて、その内部は市民の娯楽施設のほかに自由に飲食のできる飲食店などが上手に配置されて楽しい憩いの場ともなっていた。私達は風通しがよく居ながらにして公園の全景を眺めることのできるレストランを選んだ。涼風を浴びながら食事を楽しめる料亭であった。

ワンチャイ氏は四十歳前後の、浅黒い精悍な風貌の政治家であった。テーブルには日本式の寄せ鍋が準備され、飲物はビールであった。通訳は宮川であった。

互いに初対面の挨拶を交わした後、私の方から憲法記念日の祝典の様子はどうか。大事な祝典の第一日目から空襲という飛んだプレゼントをいただいたので緊張したことであろう。しかし大したこともなくて幸いであった、と話を進めるきっかけをつくった。

空襲と言っても単機では空襲という感じはしない。一九三二年の革命によって生まれた尊い憲法の記念日であるから、わがタイにとっては大変意義深い祝典であり、なかなか盛大であった。しかし戦時中のことであるから戦前と同じようにというわけにはまいらないが、何しろ一週間も続けて催されるほど大事な行事である。

国をあげて、祝福を受ける栄（はえ）ある憲法のある限り、十分にその機能を発揮しタイ国に繁栄をもたらすであろう。今後、日タイは共に繁栄の栄冠をかちとるため協力して最後まで戦わなければならない。タイの運命は日本と共にあることを確信するものである、

という意味のことを氏は初対面の私に述べて親日的態度を示した。

私は、この度の空襲は、今後の大空襲の前触のようなもので言わば偵察飛行で多分バンコクの主要部分の空中撮影を実施し防空部隊の配置、施設の状態、市民の動静、防空活動などを探ろうとしたのではないかと思う。これからは敵の攻勢に対してがっちりとスクラムを組んで対抗しなければならないと考える、と応じた。

彼はまた日本とタイは古来なんとなく親密の度合いが強く離れ難い絆で結ばれているような国だが、自分はこの何となくということが大事な意味をもっていると思う。つまりタイと日本の友好親善の深さを理屈抜きで暗黙のうちに認め合っていることを意味するからである。自分はまだ日本の土地を踏んだことはないが日本は大好きである。日本はアジア民族の指導国としての資格が十分にあると確信している。自分は日本のためなら進んで、いかなることも協力する用意がある、などと日本に対する全面協力の考えを示してくれた。

私は彼の日本に対する好意的態度に感謝しながらも日本は果して彼の信頼に答えることができるかどうかいささか懸念されると答えた。

彼は、根木氏という立派な紳士と交際のできるようになったことに感謝している。根木氏と自分はよく意見が合うと根木を評価した。

根木は誠実で責任観念の強い信頼に足る人だ。今後共二人の友情に幸いあれと祈る、と私は応じて高く杯をあげて互いに乾杯した。アルコールに弱い根木も珍しくかなり杯を重ねた。

寄せ鍋がワンチャイ氏の口に合ったらしく「おいしい、おいしい」と覚えたばかりの日本語を連発しながら寄せ鍋をつついていた。

この会食は言わばワンチャイ氏との顔つなぎのようなものだったので政治問題その他時局に関する事柄には一切触れず、間もなく根木に後のことを頼んで中座した。

10 隊務報告のため昭南総軍司令部へ出張

私は、林隊長の命により、タイ駐屯憲兵隊創設以来のサービスの状況を昭南（シンガポール）の南方総軍司令部に報告するため、十二月中旬タイ鉄道の旅客列車に便乗し、早朝バンコク駅を出発して昭南に向かった。列車はタイ湾に沿って黒煙を吐きながら西南に向かって快走し、夕刻タイと馬來の国境のタイ側終着駅ハジャイに着いた。黄昏の国境の町は斜陽を浴びて侘しい廃墟のようなたたずまいでひっそりと静まりかえっていた。私はこの駅で一先ず下車し、日本軍の占領地域の馬來側国境の駅で馬來半島を縦断運行している列車に乗り換え約一時間後に再び馬來鉄道の列車の人となった。

機関車の吐き出す黒煙はジャングルやゴム園の樹林の中に低迷し、まるで黒煙の充満しているトンネルを通過しているような感じであった。列車は怪獣のような黒い巨体を牽引力の弱い機関車に曳かしているため文字通りの鈍行で、のろのろと南へ南へと走り続けた。

車内は息苦しい思いであったが翌朝、スングパタニ市に着くまでグッスリ寝込んでしまった。スングパタニ市に着いた時偶然にも駅内警邏の憲兵の取計で、昭南に空車のままで帰ることになったという昭南軍政部の乗用車に乗せてもらうことができた。

午後一時頃この乗用車はスングパタニ市を出発した。英国の遺していった有名なゴム園を貫いて造られた立派なアスファルト道を時速八、九十キロの快速で飛ばす、この馬來半島縦断自動車行は私にとって再び味わい得ないであろう快適なものであった。それにしてもこの

見事な道路と言い、ゴム園と言い、大英帝国の植民地建設構想の素晴らしさを具象しているように思われ私は今更ながら驚いた。

沿道には馬路上陸作戦の兵火によって損傷を受け遺棄されたとと思われるトラックや車輛類の残骸が点在し当時の激戦の状況を偲ぶに十分であった。

馬来半島と昭南との間には小海峡のようなジョホール水道がありかなり長い橋がかかっていた。私の便乗した自動車が、この水道に差しかかった頃は夕陽もすでに没し夕闇の帳（とぼり）がおりていた。昭南市に近づくにつれて市の街灯照明の灯火があたかも紅蓮の炎の燃えあがったように夜空一面に映え、大火災発生という錯覚を起こすほど異様な情景が身近に迫った。総軍司令部の所在地たる昭南市は、比較的連合軍の根拠地に近いのに、こんな状態で果していいのか。灯火管制などは一体どうなっているのだろうかという疑念と不安の念をいだきながら、予約していた海浜ホテルに到着した時はすでに二十一時をまわっていた。

翌日、私は総軍司令部に出向し情報、宣伝、謀略など担当のF参謀に面接し、タイ駐屯憲兵隊の編成完了より現在に至る状況を詳細に報告すると同時に最近のタイ事情とりわけ政治情勢と治安の状態について説明し、F参謀担当の関係事項についての質問に対して納得を得られるように答えた。

F参謀は駐タイ憲兵隊に対する総軍の意向として次のことを私に指示した。即ち、

タイが枢軸陣営より離脱するような事態は絶対に防止しなければならない。現況ではタイの離反防止のために兵力を増派することは到底不可能であるので、在タイの軍、官民は一体となってタイ側との友好親善の関係を強化しタイの政情の安定、治安の確保に万全を期するとともに、あらゆる手段をつくしてタイ朝野の指導層の対日協力の気風を高め今後戦況が悪化しても、いささかの動揺も来たすことのないような方策を立ててもらいたい、

というのであった。

F参謀のタイ国についての認識はさすがに情報参謀だけあって、大体において私がタイ国に赴任当初、内地へ帰還した守屋少将より聞いたようなタイの事柄については、一応正確につかんでいるらしいが、タイは先ず心配あるまいといった楽観的な信頼感をいただいているように思われた。

私は守屋少将の対タイ観察を引用し、更に戦局推移の如何によっては予め離反の危険性も十分考慮すべきであることを主張した。無論、F参謀もその点では私の主張に全面的に賛意を表した。そして彼は離反の危険性をはらんでいるからこそタイ朝野との接触を緊密にし、友好親善工作を強度に進めることが必要なのだと強く求めた。

私は林隊長のタイに対する友好親善工作とタイの枢軸陣営よりの離反に対する事前査察という、二つの主たる警務指導方針を報告するとともに、これに対する工作資金を請求し、F参謀もこれを了承した。その額は林隊長の請求をはるかに上回る増額であった。総軍当局の駐タイ憲兵隊に期待することの大きいことがうかがわれ、責任の重いことを感じた。

総司令部に対する隊務報告を終えた私は、昭南憲兵隊を訪ね、Y隊長に来昭の挨拶をした。隊副官は私と憲兵学校で机を並べたY大尉であった。私達二人は久しぶりの再会を喜び合い懐旧談に花を咲かせた。

その夜私はY隊長より英蘭という中華料理屋に夕食の招待を受けた。出席者は招待側、Y隊長、Y副官のほか、Y隊長のはからいで私と陸士 [38期] も憲兵学校も同期で昭南軍政監部に勤務しているN少佐も加わったので計四人であった。

席上Y隊長を始めYもNもタイ事情について私に色々な面から交互に質問を発したが、タイの重要な事情についての質問は殆どなかった。それも無理からぬことであった。私は断片的ながらタイの風俗習慣などから始めて歴史や最近の政情、守屋少将より得た知識、初空襲などを披露し治安状況などにも触れて説明した。

NもYも占領地たる馬來や昭南の事情について私の問いに色々と答えてくれたが、二人とも口を揃えて現地住民は英国の植民政治よりも、わが日本の占領地行政の方がはるかに優れていることを礼賛、謳歌していると誇らしげに語った。Y隊長は微笑しながら二人の話を聞いていたが、敵性分子の潜伏は十分注意を要する事柄だと付け加えた。

ぼくも貴公らの見解には一般論としてはまさにその通りだと思う。つまり、かつての植民地時代に、彼らが奴隷のような扱いを受けた時よりも、日本の占領地政策が恩威並び行われているという点では現地住民に歓迎されているに違いないとね。だがぼくが、よく例としてあげることで、またよく知られてもいることだが、満州事変当時の占拠地（国際法上の宣戦布告によって適法に交戦したのではなく、彼我の兵力の衝突による戦争行為であるため占領地とは言わず占拠地と言った）などで兵隊が現地人をなぐってひどいことを強制したり、部隊付通訳が自分の使う支那語がわからないと言ってなぐりつけたため問題となったり、また或る部隊長は自分の警備区域の住民に日本の神を信仰することを強制して神棚を造らせたりしたために反感を買い、物笑いの種となったような笑えない馬鹿なことがあったため占領（拠）地行政に著しい妨げになったそうだが貴公らの占領地ではそんなことはあるまいな。

と私は口をはさんだ。

実はその点がちょっと心配なのだ。軍の方針は現地住民を大切に扱うようになってはいても、実際は占領軍对被占領地住民という関係にあるので誤った優越感などから、下級部隊の幹部や兵の中には心ない粗暴な振舞をする者がいないとは言えないのだ。しかし、その点では各部隊が夫々細心の注意を払って、軍の方針の徹底をはかっているはずなので、今のところ何ら問題はないばかりか却って彼らは軍の宣撫工作は適切だとして何らの不平不満もなく喜んで軍の指導についてきているのだ。

Yは勇ましく応じた。

それなら大変結構だが、どうかな。タイ国が絶対に親日的で友好親善関係は極めて緊密だなどと全面的に信じこむ楽観論と同じで、どうも少し話がうまくでき過ぎた、お目出

度いことではないか。知らぬは何とかばかりなりというやつではないのか。

私は真面目とも冗談ともつかない、言わば冷やかし半分のように返した。

酒席に侍った現地華僑の美女達が、たどたどしい日本語で歌う流行歌に調子を合わせて、ドラ声をはり上げ合唱をくり返し座はひとしきり賑わった。何れも、夫々メートルが上がり上機嫌で英蘭を引き上げた時はすでに夜の十一時をまわっていた。

翌日、私は帰隊のためバンコク-昭南間の定期旅客機に便乗し昭南を発った。バンコクに本部のある光機関（インド独立運動の工作機関）のM中佐も同じ便であった。旅客機は馬來のスゲパタニ飛行場に連絡のため一時着陸し、燃料の補給、郵便物、その他の書類などの授受の後飛び立つたが約十五分ほどで、エンジンの不調に気がついたパイロットは急遽再びスゲパタニ飛行場に引き返した。整備班の点検によってラジエーターの一部の故障とわかったので修理完了までスゲパタニ市とマラッカ海を隔てた対岸の小島、ペナン市に一泊することとなった。ペナンは英国の築いた清潔な感じの近代都市であった。私は軍より委託を受けて東京の白木屋が経営するペナン・ホテルに泊まった。このホテルも敵産として軍の接収したものであった。

ペナンに一泊の後修理完了の連絡を受け再び機上の人となり、見渡す限りジャングルに覆われた馬來半島の上空を一路バンコクに向かい飛行を続け十四時頃バンコク郊外のドンムアン飛行場に到着した。

帰隊後私は早速林隊長に詳細に出張の報告をした。林隊長は総軍参謀部がわが憲兵隊の対タイ警務方針を全面的に是認し、工作資金を増額してくれたことを総軍当局に期待されていることが大きいとして、それに答えるよう努力しなければならないと感謝の意をこめて述べた。

さて昭和十七年も間もなく過ぎようとしているが、南方総軍は次期作戦の準備態勢にあり他方、敵側は十二月八日（ママ）のバンコクに対する偵察的初空襲を試みただけでその後は全くの音無しの構えである。八月下旬タイ国に赴任してから今まで駐タイ憲兵隊警務部長として一体何をなしたか、顧みると先ず第一に守屋少将よりタイ事情に対する既成の認識を根本より改めるべきだとするショッキングな示唆を得たので、これを再検討するため在タイ親日家の物色を始めたこと、総軍より与えられた駐タイ憲兵隊の任務即ちタイ当局と緊密な連絡をとりタイ国内の安定をはかるため友好親善工作を極度に強化すること、この任務を達成するために駐タイ憲兵隊の行動基準要綱を作成したこと、総軍当局によって勤務方針が全面的に是認せられ工作資金の望外の増額を得たこと、本部の特高、警務両課並びに各分隊の夫々の機能を活用してタイ事情の基礎的、動態的探査、敵側の諜報、宣伝、謀略を事前に警防封殺する準備を整え活動を開始したこと、である。

やがて昭和十八年を迎えるが今後戦局はいかに展開するであろうか。敵は必ずや陸海空軍の総力をあげて東西両戦線において大反撃作戦を敢行するであろうし、同時に作戦の戦略的補助として電波による謀略宣伝の戦法を併行して行うであろう。タイに対する空爆にせよ、

電波による謀略戦にせよ、タイ朝野の人心の動揺を招くことは必至である。人心の安定をはかることは、わが憲兵隊に与えられた重要な任務である。そのような事態に備えて諸般の準備を整えなければならない。かくて昭和一七年は静かに過ぎ去った。

一九四三年（昭和十八年）

11 情報提供者（連絡者）の選定

昭和十七年は比較的平穏に過ぎ、新しい十八年を迎えて間もない或る日、この頃は次第に酷暑の季節に向かっていたが、憲兵隊本部の隊長室で対タイ施策についての会議が開かれた。

この会議はタイ側の政府始め財界、その他の指導的立場にある、言わば朝野の要人と裏面的な接触のできる連絡者を詮衡するための会議だったので、林隊長は自ら会議を主裁し、私を始め森〔勇記〕特高課長、根木〔茂〕特高課員、小林〔茂彦〕警務課長が参席した。タイ側の重要人物と裏面的に不断の接触を保ち動向を観察し得る者、またタイとの友好親善の強化をはかるという我が方の至上命題に理解を示して共鳴し協力するように要人を説得し親交を結び得る連絡者を選定する会議であるが、これらの連絡者の候補は林隊長の内示を受けて特高課が中心となり秘かに調査を進めていたものであった。

最初に議題にのぼった問題は、接触すべきタイ側の重要人物いわゆる要人の選定であった。要人候補者については林隊長の手元で各種資料に基づいて絞り込まれていたもので、会議の席ではそれら要人の来歴や現在の地位、影響力などについて紹介があったに過ぎなかった。会議で議論されたのは、誰を要人と連絡する担当者とするかであり、連絡者としての適否、評価に関して質疑応答が隊長と列席者との間で交わされた。

対象要人の第一号は、タイ国の非常時における指導者として最適と思われ、またタイ指導者として隠然たる勢力を有するプラヤー・パホン将軍である。彼は一九三二年立憲革命における元勳の一人で陸軍大将であるが、老齢であるのと健康状態も余りすぐれないため第一線を退き野にあって国家の命運の推移を見守っていた。将軍は人格、識見共に申し分なく朝野の崇敬の的となっており、野にあって朝野のインテリ層特に青年層に祖国愛を説き祖国防衛について奮起を促す蔭の力となっている最高級の要人である。

第二号は、第二摂政（当時タイの国王ラーマ八世は未成年者で、スイスに留学中のため摂政府を設け、国王に代わって政治を行う言わば国王の権限を代行する機関とした。なお、第一摂政はアーチット殿下）のプリディ・パノムヨン氏である。氏はプラヤー・パホン将軍と同様、立憲革命当時文人派を代表する巨頭でピブン内閣（ピブンは軍人であるので武断派と称された）の蔵相を歴任し、現に第二摂政という要職にある優れた政治家でもあって、これまた第一級に属する人物であった。ただ北分隊の調査によればプリディには、前述の前英公使クロスビー氏の残存分子との密絡、更にはジャムラット警察少佐の伝えてくれた自由タイ（反政府的秘密政治結社）とのつながりがあるという容疑もあって、その点では連絡者をし

て接触させることには注意を要するものがある。

北分隊の管轄区域内には、開戦当初タイ側によって抑留された連合国側の敵性分子を収容する収容所²⁶があり、ここでは一日一定の時間、街頭に出ることを許していたので、北分隊では予めタイ側より送られてきた収容所内の敵性特別監察者のリスト中の人物に焦点をあてて監察を続けるばかりでなく、タイ側の要人で収容所を訪れる人物も注意深く見守っていた。昨年十二月八日（ママ）初空襲後間もなくプリディ氏が始めて収容所を訪れたのを北分隊の憲兵が目撃して以来、頻繁に出入するプリディ氏の行動に不審を抱いた北分隊は、タイ側当局にその旨連絡したが回答は曖昧で要領を得ず、到底納得し得ないものであったため、たとえプリディ氏の訪問が、通敵容疑はなく単なる旧知の人々に対する慰問であったとしても度重なる訪問は異常だとして引き続き注視を続けた。プリディ氏のようにタイ最上層に属する要人が通敵容疑者と見なされているので、かえってわが方の接触すべき人物として選定することはタイ上層部要人の動向を知り得るという点で意義があった。

第三号は、現ピブン内閣の商相クアン・アパイウォン氏である。氏はカンボジア王室の流れをくむ言わば毛並に申し分のない名門の出身、フランスで通信技術の最高学府を卒業した技術者であるが、閣僚として政治感覚の鋭い政治家の一人であるという定評があった。氏は以前より親日家として知られ親日要人の第一人者であった。

第四号は、商工会議所会頭〔以下中華総商会主席〕の陳守明²⁷という華僑で、温厚かつ頭脳明敏で商才に長けた肥満型の紳士であった。氏はタイ国でも有数の富豪であり中華総商会主席として運営に敏腕を発揮し、在タイ日本人間にも評価されていた第一級の民間人、現に有能な経、財界の名士の先頭に立って統制指導する要職にあって信望を得ている職量豊かな人物であり、無論親日の華僑であることは申すまでもないので財界実力者の協力を期待するために接触の対象とすべき人物であった。

さて、この日の会議は、以上述べた要人と接触を保って夫々各方面における彼らの動態をキャッチする連絡者を選定するために開かれたものであるので、その適否に関する出席者の意見は夫々種々の角度より活発に行われたが慎重な討議の結果次のように決定された。即ち先ず第一に、プレイヤー・パホン將軍との接触者には江畑通訳の夫人（タイ人）²⁸を当てることになった。江畑夫人はプレイヤー・パホン將軍とは遠縁にあたり、教養の点でも容姿の面でも申し分のないインテリ女性で、平素プレイヤー・パホン將軍邸には自由に出入りしていた。

問題のプリディ第二摂政に対する接触は、ラーシー・ラタナチャイ [ราชินีไทย] 女史に当たってもらうことになった。ラーシー女史は私の親友前出ソムアン・サラサス氏の母の妹で、煙草、塩などの専売関係の政府高官だった夫と数年前死別。目下ニューロードで酒類販売の店舗を構え豊かな生活をしている上流階級に属する女性であった。彼女の義兄つまりソムアン氏の父、前出のプラ・サラサス氏がプリディ氏とは立憲革命当時文人派の同志として親交があったため彼女はその当時よりプリディ氏と親しく交際していたのである²⁹。

次はクアン・アパイウォン商相に対する接触の担当である。これの適任者は在タイ定住

四十年の宮田³⁰ [宮川] 通訳の父親 [宮川岩二]。彼は永くタイに居住しているので政、財界要路の人々との交際が多く特にアパイオン商相とは別懇の間柄だったためアパイオン氏も日本の動静を常に知ることができたという。

中華総商会主席陳守明氏との接触は在タイ数十年の台湾人医師、王 [王鏡秋]³¹ 氏を当てることになった。王氏は社交性に富み、職業柄、朝野知名の士との交際が多かった。彼は陳守明氏とは格別の親交があった。

以上四人の連絡者候補として選ばれた人々に接触の仕事を引き受けてもらうため、目的を説明し納得させて承諾を取付けることが、林隊長より私に課せられた任務であった。

私は先ず第一に、江畑夫人を宿舎に招き夫君同席の下で目的を説明し連絡者として協力するように依頼した。協力に対する見返りは、現地における日本当局のなし得る範囲の、物心両面の便宜を供与するということであった。江畑夫人は、夫君の口添えもあって快諾してくれた。接触の目的とは申すまでもなく接触対象の要人の世界情勢とりわけ東西両陣営における戦局の推移に対する彼らの反応をキャッチし、たとえ諸情勢に変化があった場合でも、今次大戦はアジアにおける白人の勢力をアジア人の手に取り戻すという堂々たる根拠（大義名分）を有することを指摘し、日タイ相互の信頼の度を深め日タイ攻守同盟遵守に協力してもらうということである。

引き続き私は連絡者候補を次ぎ次ぎと招き、以上の目的を述べるとともに招かれた人々は何れも親日家として日本に好意を寄せる人々で他に代わる人のいないことを強調して、丁重に依頼した。なお、連絡者となることを依頼した人は専ら、タイ各層の指導的存在であると同時に親日家として知られている人であり、彼らこそ日タイ友好親善関係を強化推進する最適者であると考えた結果であった。

タイの指導階層の要人に接触する連絡者を介して日タイ友好親善強化推進をはかるというアイデアは兎角、要人のプライバシーを犯す低俗な行為と誤解され接触候補者に拒否されることを懸念したが、幸いにも誤解どころか何れも進んで協力することを確約してくれたので私には一種の驚きであった。つまりこんなに順調に事が運ぶとは夢にも思わなかったからである。これはやはり日タイ同盟関係による相互信頼の結果であろうと想われた。

この会議が終わって二、三日経った或る日、本部特高課の根木中尉がタイの新聞の報道として、昨年九月（ママ）、国立煙草工場の支配人サグオン・トララク [以下サグアン・トゥラーラック] が公金八十万バーツ（八十万円）を費消したため逮捕をおそれ国外に逃亡、仏印より中国に潜入した形跡があるということを私に報告した。私はタイ役人によくあるとされる一種の汚職行為に過ぎないだろうと考え、後日ジャムラット警察少佐より真相を聞くつもりでいた。ところがこれが、後になって自由タイと関係のあることが判明したので愕然とした。自由タイと関連があるとあっては全貌を明らかにすることが必要であるため林隊長の指示により特高課の根木を中心にタイ当局とも連絡をとって探査活動を開始した。

12 ソムアン氏タイ事情を語る

一月も半ば過ぎた或る日の夕方、予め宮川通訳を介して私と面談したいと連絡していたソムアン氏が自家用車ルノーを駆って単身軽装で私の宿舎にやってきた。宮川が通訳に当たった。

ソムアン氏は、長い間彼の父がお世話になっている日本の最近の事情や今後の戦局の推移予想などについて知りたいと切り出し、

実はわが同志のなかには世界の強国を相手に挑戦し、しかも緒戦の輝かしい戦果をあげた日本という国は一体どういう国なのかを知りたいと思っている者や、強い日本に憧れを抱く者もいるので、この人々のために友邦日本の真の姿を披露してもらいたい、と、訪問の目的を先ず端的に述べた。私は、タイ人の中に強い日本に憧れている者がいるなどと聞いてどう説明したらいいのか、また今後の戦局の展望などについて語れと言われても軍の最高機密たる作戦企図を知らなければ戦局の展望も不可能なので、已むを得ず次のように抽象的、概念的なことを私見として述べざるを得なかった。即ち、

日本の国民はいかなることがあろうと今次大戦を勝ち抜くという悲壮な決意で、たとえ日常生活が苦しくても歯を食いしばって耐え忍んでいる。日本では今、全土に亘って日常の主な必需品は嚴重に統制を受けており、また一切の娯楽機関なども極端に制限され緊張の連続であるが、皆よく一致団結して頑張っている。元来、戦争は味方が苦しければ敵もまた同様に、いや場合によっては味方以上に苦境にあるもの。従って戦の勝敗の鍵は、どっちが最後まで苦しさに耐え得るか否か、であり言わば戦は最後の五分間という戦史の訓えもある。今後の戦局の推移については予測甚だ困難だが、これまで無気味な沈黙を守っていた联合国側は、恐らく東西両戦線相呼応して陸、海、空による一大反撃作戦を展開するであろう。これに対しわが方、とりわけ南方総軍は現在の占領地域を確保し如何なる反撃戦にも対抗し得る物心両面の戦力を貯え、たとえ戦いが長期にわたっても不敗の態勢を整え、これに耐え得る構えをとるであろう。日本と同盟関係にあるタイに対する敵側の直接的反撃は、昨年暮れの初空襲の成果つまり空中撮影した目標に対して爆撃を加える戦法を用いることは必至と思われる。タイ国は南方総軍にとって、前線の作戦部隊の後方基地として戦略上重要な地域であるので、絶対に平静、安定を保たなければならない。これには地域住民の惜しめない協力なしでは望み得ないので、日本の現地当局者としてはタイ朝野の人々と日々誠実に接し信頼を得るように努力し、所謂日タイ友好親善により離れ得ない関係を築かなければならない云々。

以上の私の長い所懐の開陳に耳を傾けていたソムアン氏は、日タイ両国はこの戦争を勝ち抜くことはなかなか容易なことではないと思うが、自分は日本民族の優秀性、勤勉さ、バイタリティー、軍の勝れた作戦能力を堅く信じて疑わない。タイは今後も強い日本としっかり手を握って戦いを続ける、とソムアン氏の方から手を差し伸べて握手し互いに励まし合った。

ソムアン氏は自分の方からタイの事情について語ることにすると概要次のように述べた。

タイが今次の戦争に参加することを朝野の人々は、必ずしも全面的に賛成したわけではない。むしろ中には迷惑とさえ思っている者もいる。何故なら、既にマンネリに陥り、また清潔とも言えない独善的ピブン政治は、次第に国民の信望を失い人気も下降の傾向にあるのに、そのピブンがいかに強国日本との協同作戦とは言え、世界を相手の世紀の大戦へ参加を決定したことは多くの人々には無謀と映り不安を抱いたためである。大戦突入後のピブン政治は、戦時に名を藉りて国民の生活を形式的外面的なことで徒らに圧迫しながら、他方では国民の中に買溜、売惜しみ、官公吏の間には汚職などの悪徳行為が横行しているのに、取締りを強化するどころか敢えて黙認さえしているというので、日を増す毎にピブン政治への批判が高まるばかりである。国の存亡にかかわる大戦下で、国民大衆の信望を失いつつあるピブン戦時内閣が、国民大衆に一致結束して戦争に協力することを求めても恐らく無理であろう。更に、タイ人の中には戦争を利用して自己の財力を増やそうとする一部の悪徳企業家、また戦争に協力することによって不当な利益を得ようとする政商などの言わば戦争を食物にする輩がピブン政府の周囲にとぐるを巻いて、あたかも国家のために戦争に協力しているかに見せかけ、実は私利私欲のために動いている。しかし、タイにはこのような不心得な者ばかりではなく大部分のタイ朝野の人々は、内心不平不満があっても為政者に従順であることが国家のため、自分のためであると考えているのだが、これらの人々の中にはまた、強い日本とともに戦うということは、アジアより白人の勢力を駆逐できることになると将来を達観して戦争に協力しようとする愛国的青年のグループもある。日本の人々は、偽装親日家か誠実に日本と提携しようとする人であるかを見極めた上で接触する必要がある。さもなければ偽装親日家の野望に加担する結果を招くことになるからである云々、と。

ソムアン氏の語ってくれたタイ事情は、概要以上の通りで私の最も知りたかったことであるので一先ず厚くお礼を述べた。夜も更けたがソムアン氏はお茶を呑み喉を潤した後、再び熱弁を続けた。

最後に自分は先にタイ事情を話した中でちょっと触れたタイの愛国青年グループについて一言触れる。

このグループは白人勢力下のアジアをアジア人の手に取り戻すということをモットーとし、日本と固く手を握り、日タイ攻守同盟条約を尊重し遵守するという原点に立って、他からの一切の干渉を排し世上の言動に左右されることもなく飽くまでも日本とならば協同作戦を続け戦い抜くことができるという固い信念をもった愛国青年グループである。タイ国が日本とともに最後まで戦い続けることは、タイは信義を守る国であることを世界に示すことになる。これは、タイ国が将来国際社会で列国と対等に付き合う上でも大事なことだ。このグループは日本軍や現地機関の施策や行動についても鋭く批判をするが、これは日タイ関係をより一層親密にするためである。このグループのメンバー

には陸、海、空、警察軍の青年将校を始め、かつて日本に留学したことのある青年知識人、その他若手官公吏などが名を連ねている。しかしこれらの親日家達も、同志として結束し、強い組織体として親日的愛国運動を決行することになった場合、果してどれだけが組織に加盟し、参加するかということ是不確定である。しかし、何れにしても彼らには、戦争への協力体制を固め最後まで戦い抜くという気運が擡頭してきていることは間違いない。

タイ人の中には、いくら日本が唯一の友好国だと言っても連合軍という大敵を向こうにまわして世紀の大戦を続け、不幸にして敗戦ということになれば今までの協力は無駄となるばかりか連合軍のいかなる制裁を受けるかわからないと心配し、われらの主義主張を非難し排斥する者も多数存在する。

しかし、われらはたとえ如何なる反対者が現れたとしても、タイの不幸不利は日本の不利不幸、日本の不利不幸はタイの不幸不利であり日タイは一体である、という主義主張を飽くまで曲げず、断乎として反対派の非難を斥けるとするのが我々グループの一致した意見である。われらは決して初志を曲げることはない。タイにこのような親日的愛国青年グループのあることを知ってほしい、

と、ソムアン氏の熱弁はこうして終わった。秀でた白い額にはベッタリと汗がにじんでいた。ピブン政権の施政に対してタイ朝野の間に兎角の批判のあることは、私が赴任当初、前駐タイ大使館武官守屋少将からのアドバイスによってそれとなく知っていたが、今ここで親日青年ソムアン氏より直接聞くのは始めてである。ピブン政権は、日本政府及び軍中央部が、開戦当初に日タイ攻守同盟条約を結んだ親日政権として全面的に支持しているのに、当のピブン政権の施政が芳しからぬ批判をタイ国民より受けているとあっては、ピブン政権を支持する日本軍に対してタイの国民が果して進んで協力してくれるであろうか。しかし、また他面、タイにはこの大戦を日本に協力して如何なることがあろうとも最後まで戦い抜くという頼もしい信念の固い愛国青年のグループがあるという。ソムアン氏の語ってくれたことが事実だとすれば、日タイ友好親善の強化推進をはかろうとする我々の工作にとっては、二つの相反する流れがあるので成果を期することは相当の困難を伴うであろうが、タイ国の青年層に日本に協力するというグループの存在することは、工作の強化推進に役に立つことは間違いあるまい。

私はこれまでに全く知り得なかったタイ国の内部事情をソムアン氏がさりげなく語ってくれたので、我々の重要な仕事の上で大いに役立つものと考え深く感謝するとともに今後の一層の協力を要請し、更に私はソムアン氏と会ったのが僅かに二回に過ぎないのに、互いに胸襟を開いて語り合う永い付き合いの友人にでも打明けそうな国内事情を伝えてくれたので、父上が親日家で長く滞日していることと日タイ両国が互いに仏教の国であるということと一種の仏縁のもたらした幸運かも知れない、と思いのままを率直に述べてソムアン氏の手を固く握りしめた。ソムアン氏もまたどうぞ今後とも宜しくと言いながら私の手を握り返した。

13 タイ国駐屯軍（義七九七〇部隊）の誕生

昭和十八年二月一日付でタイ国駐屯軍（通称義七九七〇部隊，軍司令部，混成一ヶ旅団，その他兵站業務に従事する部隊，付属機関で編成され，憲兵隊もその隷下に入る）が誕生し軍司令官中村明人中将，参謀長山田国太郎中将〔少将〕，参謀副長浜田中将（ママ）³²，その他高級参謀，各課の参謀並びに部付将校という陣容で前線各兵団の予備軍的使命と補給部隊的任務を達成することとなった。軍司令部の庁舎はバンコク市内シーロム街の元大使館付武官の公舎内〔正しくは，サートン路の中華総商会〕におかれた。

軍司令官中村中将は着任後隷下各部隊に対し，概要，次の要旨の訓示を行った。

タイ国駐屯軍は，昭和十六年十二月二十一日に締結された日タイ攻守同盟に基づきタイ国軍と協同作戦を行うために設けられ，南方総軍の予備軍的使命を有する。タイは独立国であり今次大戦の勃発と同時にわが日本と共同して西欧の列強，連合軍に対し敢然と挑戦した東洋における唯一の友邦である。タイは総軍にとって後方における物資その他の補給基地として作戦上の重要な要域であり，前線各兵団の作戦行動を容易にするためには，タイ国の治安その他諸般の安全が何よりも重要である。しかして，タイ国の安定はタイ国朝野の人々の協力なくしては期待し得ない。仍って隷下各部隊及び諸機関は常にタイ国の独立国家たることを意識しその主権の尊重即ちタイ国の法令を遵守し，平素国民大衆に接するに方っては，誠実を旨とし礼儀を重んじ言動を慎み謙虚に振る舞い皇軍の真価を発揮して彼らの信頼と尊敬を得，もって親交を深める如く努むることが肝要であり，これがため軍紀風紀を厳正にし，前線にあって日夜強敵と対峙し緊張を続けているわが戦友の労苦を偲び，われら後方において比較的平穩な任務に従事するものは精神の緊張を欠き不覚をとるが如きことのないように厳に戒めるように切望する，

という意味のものであった。

憲兵隊は義軍の設置によってその隷下に入ったため，林隊長は中村司令官に，私は山田参謀長に夫々軍の設置前の半歳に亘る間のタイ事情を報告した。山田参謀長は駐タイ日本大使館付武官を兼任することとなっているので，軍と大使館との間の任務遂行上の連絡提携が都合よく行われることになった。山田武官の補佐官は軍の渉外参謀を兼任する英語の堪能な岸並〔喜代二〕中佐³³であった。岸並氏は昭和十五年頃私が上海憲兵隊の外事課員だった当時支那派遣総軍の上海における渉外部員として活躍されて名声を博した有能な渉外係で私とは旧懇の間柄であった。

軍の対タイ工作の直接担当の責任者は浜田参謀副長（ママ）で岸並参謀はその補佐をすることになった。軍の対タイ工作に関する限り，私は浜田参謀副長（ママ）の直接区署を受けることになったのでこれまで工作のために収集した基礎資料を参謀副長に報告しその指示を受けることとなった³⁴。

軍司令部の対タイ工作の基本方針は，駐屯軍設置の主旨に鑑み軍司令官の訓示に基づき決定され夫々隷下各部隊及び諸機関に下達されたが，憲兵隊に対しては対タイ工作に重点を置

き創立当初に作成された行動基準要綱に基づき任務を達成するように指示された。

14 ピブン政権凋落の兆現れる

各分隊、本部各課より提出される月報その他の情報書類に目を通す毎に私は、どの書類にも簡単ではあるがピブン政治の在り方に対する国民の批判が記載されていることにそれとなく注意していた。その批判とは国民生活の過度の引き締め、服装、生活態度など形式的なことへの厳しい取締、上下級役人の醜聞などに関するものであった。

政権の座についてすでに四年有余に亘る軍部中心の独裁政治においては国民大衆の間に多少の批判があっても已むを得ないことで、敢えて取りあげてタイの国民はピブン政治に嫌気がさしたとか民心すでにピブンより離れたなどと断ずるのは尚早と考えていた。しかし、日本政府の支持する友邦の首相への批判が国民の間に起こっているというのであれば等閑に付するわけにもいかないので、私は各情報書類を見なおし、ピブン政治の現況、更に民心の現政権に対する動向について本部特高課並びに各分隊に探查を進めるように指示した。

探查報告を総合判断した結果は次の通りである。即ち、開戦の名分を十分に理解し得ない国民大衆は戦時態勢にあるという実感が湧かないのに、次ぎつぎと厳しい布告を発して国民生活を圧迫するため、また、国民に耐乏生活を強いる政府の閣僚より上下役人に至るまでの職権乱用汚職などの不正行為が国民の間で噂され、兎角ピブン政府に対する不信の声が高まっている。更には、敵側の神経作戦（連合軍の戦力回復、大反攻勢の準備完了などの電波宣伝）などによって政府部内には戦争の前途に不安の雰囲気が漂い、閣僚の間にも戦争肯定の積極派と消極派との確執が生じ、ピブン首相は部内の統制に苦慮し困難な事態を打開するためにエネルギーを費やして憔悴の色さえ見えるので、戦争指導内閣に支障を来すのではないかと危ぶまれるというのである。

以上は諸情報に基づく分析的結論だが、参戦の決断を下した剛毅なタイ最高軍事指導者ピブンソクラン元帥ともあろうものが、開戦以来わずかに一年有余に過ぎない今日、たとえ国民の信望が一時的に芳しくないとしても、また閣内に不和があったとしても局面打開の能力に欠けるとは思えないし、ましてや戦争指導力に不安があるなどと評価することはできない、またすべきではない。しかし、ピブン氏は案外神経の細かい面もあるので事態が複雑化すると戦争指導の信念に動揺を来すこともあり得るとも考えられ、私は引き続き探查を進め警戒を要するという意見を付して林隊長に報告するとともに、隊長の指示によって参謀副長（ママ）にも報告した。本国中央政府がピブン氏支持の方針である以上ピブン批判はタブーであったので、副長も私の報告を額面通り受けとめることはなく、そういう兆しもあり得るだろうが噂程度のことを取りあげるわけにはいかないと否定的であった。しかし対タイ工作専任の副長（ママ）³⁵はタイ事情に関する情報をすべて見直し、ピブン政治の在り方を注意深く見極めることとした。

さてこの間の戦局の動きを見ると、占領地整備と次期作戦準備に専念しているわが軍も、

二月にはガダルカナル島よりの撤退という戦略上の重大な局面の転換が行われた。一方、西欧ではドイツ軍がスターリングラードでソ連軍のために殲滅的敗北を喫し枢軸側の戦列に致命的衝撃を与えた。

15 親英米派グループの会合

この頃の或る日、特高課の水野曹長が、前に空襲を予言した親英米派グループ（Sグループと仮称）がまた某所で会合し日本軍のガダルカナル撤退について意見の交換を行ったと報告した。Sグループなどという正体のはっきりしないグループが、前の空襲の予言にしても今回の秘密会合にしても、事ある毎に動きを見せるということは同盟国内での出来事としては奇怪でもあり、異常とも思われるので私は水野にタイ国内に潜伏している敵性の秘密組織の内偵をタイ側とも連絡をとり続行するように指示した。水野によれば、短波受信器などで敵の宣伝放送を密かに聞いている者は相当数にのぼるが、タイ側警察当局においても取締まることは甚だ困難だと嘆いているという。もしSグループが敵性放送の聴取を禁止している戦時国内法の禁³⁶を犯して密かに傍受を続けているとすれば通敵容疑としてタイ側に協力して警視に当たらなければならない。私は森特高課長とSグループの正体を見届けることについて協議の結果、タイ警察当局に探査の主体を托し憲兵隊もできる限り協力することとした。水野にSグループの探査に専任することを指示し、彼に本件に関する日タイ両当局間の連絡を兼任させた。なお、特高課として独自の探求を進めるために江畑通訳を当てることとした。

日本軍のガダルカナル撤退に関する市民の反応は極めて低く殆ど無関心ともいえる状態であるが、華僑の一部には連合軍の大攻勢が間近に迫っているという噂を立てる者もあり一部の政府要人やインテリ層或いは富裕な華僑の間には枢軸軍は果して連合軍の大攻勢に対抗し得るかどうかという不安の念を抱く者もあって、今次戦争の将来に早くも悲観的傾向が目立つようになったので、わが現地当局としても厳戒を要する事態の到来と受けとめざるを得なかった。

16 ピン内閣の総辞職と間もない再登場

タイの最高軍事指導者、ピン内閣が何の前触れもなく突然摂政府に辞表を提出するという意外な事件が起こった。義軍（タイ国駐屯軍）が設立されて間もない二月中旬頃のことである。開戦以来連合軍に対し、わが日本と共に協同作戦を敢行した盟邦として日本政府が今日まで支持してきたピン内閣総理大臣が、その地位を棄て退陣するというのであるから現地軍並びに大使館にとってまさに寝耳に水の一大衝撃であった。タイの国内治安はもとよりその他の面でも、これまで安定を保ってきたのは何と言ってもピン氏の権勢のおかげであることは事実である。しかし、その権勢が揺らぎ、機能を失うことになれば国内のすべての安定も怪しくなる。仮にピン氏に代わって政権を担当する者が出たとしても、果して

ピブン氏ほどの指導力を期待できるかどうか、またその人物が有能であったとしてもピブン氏のようにわが日本と友好的に提携できるかどうか疑問であるとするれば、現地日本側当局としては本国政府の指示を待つまでもなく取敢えず代理の人物を見出すまで極力ピブン氏の翻意をはからなければならない。

在タイ日本大使館ではピブン氏に辞意を思い止まるように申し入れを試みるなどの一幕もあったが、自国の国内問題に他国の介入を容れるつもりはないと巧みに日本側の申し入れを退け辞表の提出を撤回しなかった。

ピブン氏の辞表を受理した摂政府はラジオその他の報道機関を通じてピブン氏の辞任を発表し、受理手続きも正式に完了し法的には辞任が発効したはずであった。ところがここで奇妙と言えどもことに奇妙、不可解のことがもちあがった。それはピブン氏が側近などの意見を聞き一旦提出した辞表を貫下げにし、腹心の部下をしてラジオ放送の担当者に強引に摂政府の発表した総理辞任の公報は全くの誤報であったと取消声明を放送させ、国民一般には何のこともかさっぱりわからないうちにピブン氏が再び政権の座にもどることでこの辞任劇はあっさりと閉幕した。一国の総理の進退を決める辞表が、キャッチボールのようにもてあそばれて事が決せられるということは私共には到底理解できない。タイ政界の内幕の怪奇性が公然と罷り通るといっているのであるから何とも言いようがなく、ただ驚くばかりである。

しかし後になって聞き込んだことだが、この裏には次のような信じられない事が隠されていたことが判ったのである。即ち、ピブン氏は自分の政治に対する世評が芳しくないので本心ではないが先ず辞任の意志を表明し各方面の反響を見る、その反響が世論においても日本側の支持の点でも自分に比較的有利なることが判明すれば辞意を翻す、反対に不利であればかねて時局の前途に不安を抱いている時でもあるから総理の座を退くことも已むを得ないと考えていたという。ところで、もともとピブン氏はこの重大な時局を乗り切れるのは自分以外にはないと自負していたので、たとえ辞表を提出したとしても、よもや受理され辞任が公表されることはあるまい、と高をくくっていたが意外なことになってしまったためピブン氏並びに側近は大きなショックを受けた。

確かに、ピブン氏は見込み違いの結果にショックを受けたが、辞任に対する反響に賭けた。その反響は、必ずしも自分に不利ではなかった。即ち、時局重大の折に辞任するのは責任回避であり辞任などはあってはならない、それにピブン首相に代わる者はいないという国民の声であり、日本側の支持も変わるどころか翻意をすすめるという信頼ぶりだったので、ピブン氏は自信を取り戻し再び首相の座につく気になったが、一旦公表された事実を国民の前で取り消し、声明を発表しなければならない。そのためには摂政府にある辞表を取り戻す必要があるが、これが摂政府の権威を保つためそう易々と返却されるはずはないと知り遂に実力、つまり不法手段に訴える決意をし、手兵を摂政府の周辺要所に配置して、プリディ第二摂政を半強迫的に威圧、強要して辞表を奪回することに成功したという。このような行為が一国の首相のすることか、とただ啞然とするばかりである。

この政変の後ピブン氏は商務相クアン・アパイウォン氏と工業相（ママ）タウィー・ブンヤケート氏とが閣内にありながらピブン氏の行為を憲法違反として激しく批判したので二人を罷免し、代わりに腹心の部下を夫々商相、工業相（ママ）に任命し、その他の内閣改造は一切行わず表面的には何事もなかったように、平然と引き続き政権の座に居据わったのである³⁷。

この両相の罷免の経緯については色々な説が流れた。その一つは、この政変で第二摂政とピブン氏との間に確執を生じ、また政見対立などのこともあったのでこれを契機に閣内のいわゆるプリディ色を一掃し、腹心をもって内閣の陣容を強化して、来るべき議会に臨むことにしたというのが多数説であり、罷免された両氏は政治的には中立だが文官よりも武官を優先的に登用することが戦時内閣の体制にふさわしいため両大臣を犠牲としたというのが少数説であった。

何れにしてもタイ政界の裏面の複雑怪奇性は容易にその真相を把握し得ないのが私の大なる悩みであった。

17 ラーシー女史のピブン氏辞任と再登場の事件報告

ピブン内閣の奇怪な政変後間もない或る夜ラーシー女史が江畑通訳と一緒に宿舍にやってきた。ラーシー女史はプリディ摂政に接触する連絡者であり、ピブン氏政変劇の経緯を報告するためであった。

彼女はこの度のような事件はタイの市民さえ奇怪な出来事として苦々しく思っているのだから、日本の皆様や他国の人々はあり得べからざることとして呆れ返っていることだろう。まことにお恥ずかしい出来事であったと前置きしたのち、概ね次のように話してくれた。プリディ側より得た情報であった。

ピブン氏の辞任次いで再登場劇の経緯については、ピブン氏の心境を含めて第15、16項に記録した内容と略々同じであるが、

辞表提出の理由については、単に辞意の表明だけでは国民より辞任の真偽を問われ、それでは辞任に対する真の世評つまり反響をつかむことができないので側近をして摂政府に辞表を提出させた。プリディ摂政は再考を促したが、ピブン氏は撤回の意志がない。プリディ氏はプラ・サラサス（前出のソムアン氏の父親、目下日本にあって三井タイ室で日タイ財、経の研究に従事）と共に文人派の同志として、ピブン氏は武人派の総帥として両者は立憲革命を達成させた³⁸ 言えば盟友であると同時に政治的ライバルでもあった。従ってピブン氏の進退については比較的冷静に取り扱う構えであった。ところが、ピブン氏辞任劇の反響は、国民のピブン政権に対する批判も低調否むしろ誰が総理になろうと大して変わりがないとして殆ど無関心の状態であり、また友邦日本政府も駐タイ現地当局を含めて依然強く支持しているためピブン氏は案ずるよりも産むが易し、とばかり再び首相の座に戻る決意をした。しかし、既に辞任が正式に公表された後なので辞

表を摂政府より取戻さなければ首相の座に帰ることができない。そこでピブン氏は辞表提出の役割を演じた側近をして辞表取戻しの交渉に当たらしめたが、無論摂政府では国王の威信にかかわり憲法に背くとして拒否した。しかし、軍をバックに彼らは不穏な動きを見せたので、プリディ摂政は一時海軍の親プリディ派の保護を受けたが、これ以上拒否し続け万一流血の惨事という悲劇を招くようなことをおそれ、ピブン氏の交渉団に辞表を返還してやった。その際後日のため辞表の写しをとっておいた。辞表返還に当たっては、プリディ摂政は強制的な奪回行為は明らかに憲法を犯すことであることを銘記すべきであることを申し渡した。たとえ、一国の総理と言えども憲法に反する重大な政治上の誤ちを犯したのではピブン氏の政治生涯に一大汚点を残し将来議会において問題となって野党側の合法的攻撃を受けることは必至であろう。

ラーシー女史は私のすでにキャッチしていた風説（噂話）程度の未確認情報と略々同じようなことを伝えた後、自国政界の内紛を告げることはまことに不本意であるが時局重大な時であるので敢えて打明ける次第だと結んだ。

タイ国は無血クーデターなどにも、あまり驚かない国柄であるとのことなので、日本では到底起り得ない奇怪極まる辞表奪回などにも全く無関心にひどい様子であるが、私などはそのようなこと自体異常事と思わざるを得なかった。しかし、友邦とは言え他国の内政問題に口をはさむ、いわれもないので彼女に感謝の意を表し更にプリディ摂政の心境はいかにと尋ねた。

ピブン政権は他の適当な人物に変わるべきだとの強い意向であると言う。

ラーシー女史は報告を終え辞去する際に「自由タイという妖怪が蠢動していることにご注意あれ」と言い残して江畑通訳の車で帰って行った。

18 ソムアン氏、ピブン氏辞任と再登場について語る

ラーシー女史が情報提供のため来訪した翌日、ラーシー女史の情報について更に同志、ソムアン氏の意見を聞くために氏が専務取締役をしているウートン・タイ・カムパニー（在タイの米国ラックス石鹼製造会社をタイ政府が敵産として接収したもの、ニューロード）を訪ねた。ソムアン氏は多忙の様子だったが快く迎えてくれた。江畑が通訳に当たった。私は今までに得たピブン氏の辞任と再登場劇についての情報をソムアン氏に伝え本事件に関するソムアン氏の意見を求めた。ソムアン氏は概要次の如く述べた。

この度の事件は総理大臣としてのピブンの重大な政治的誤りであって到底許すことのできない違憲行為であるから何れ合法的に下野に追いこまれるであろうが、一方、プリディ摂政の本事件に対する措置はピブン氏の辞表奪回という前代未聞の違法行為に屈し摂政府の権威を傷つけたという意味において重大である。ピブン氏側の不穏な行動によって流血の惨事を惹き起こすことを避けるために已むを得ず穏便な処置をとったということは理解できるが、今後摂政府の威令が行われないようなことが起きることが懸念

され、まことに遺憾に堪えないことであった。しかし、摂政府の責任を問うても直ちに摂政の辞任などは手続上の困難、人選難などで実現が難しい。従ってそのような時日を要する問題を取り上げるよりも、戦時の最高指導者ピブン氏の犯した違憲という重大な誤りに攻撃の矢を向ける方がこの重大な時期に適したやり方だと考える、とソムアン氏は主張した。私はソムアン氏にピブン氏の違憲行為をいかにして追及するのかと尋ねた。

その追及は、勿論、タイ人民代表議会において重要な議題として取り扱われる問題である。議会における反ピブン派は違憲行為の有力な証拠を握っているはずだから何れ議会において明らかにされるであろう、とソムアン氏は答えた。私はソムアン氏の、議会で明らかにされるという有力な証拠なるものに期待を寄せ、それ以上尋ねることを控え再会を約して別れた。

19 ピブン氏に王位篡奪の野心ありや？

ピブン氏の辞任次いで再登場劇後間もなく南方総軍司令部のタイ国関係を担当している参謀より林隊長宛に、ピブンに王位篡奪の野心ありとの風説が流れているが、貴隊の有する情報を伺いたい、という意味の電報での問い合わせがあった。隊本部では例により総軍よりの電報に対する憲兵隊としての意見を統一するため、林隊長主裁の下に警務部長、特高・警務両課長が出席し協議が行われた。

特高・警務両課長はピブンに王位篡奪の野心³⁹があることは歴然だと主張したが、私は次のような理由で両課長の意見に反対した。即ち、

タイ国民の王室に対する尊崇の念は、永い歴史的伝統において培われたもので、一種の信仰のようになっている。従って王族でない一般の国民の中から、いかに優れた人物例えばピブン氏のような者が出て国家の最高指導者の地位に就いたとしても国民がその指導者に対して尊敬の念を抱くことと王室に対する敬慕の感情とは全く異質のものである。つまりタイ国では王室と国民との関係は伝統的にも精神的・心情的にも特種の間柄や繋がりがあるのだから、ピブン氏はいかに最高指導者の立場にあっても王族でもなく、王族になれるというものではない。仮に王位をねらったとしても王族と同様な国民の崇敬の的となることはあり得ない。もしピブン氏がそのようなことを強行したとしても国民が衷心より国王として迎えるようなことは到底考えられないことである。ピブン氏が強行すれば、場合によっては現在の地位を失うばかりか身辺の危険さえ招きかねない、賢明なピブン氏は権勢におごっているきらいはあるがそのような大それた考えを抱くはずはないし、ましてや篡奪などという愚かな行動をおこすことはない、という主張である。

これに対し他の二人は、

一九三二年の立憲革命以来ピブン元帥は軍、政、経等の権力を手中におさめ国民に対し

王者のような威厳をもって臨み、言わば絶対的権勢をほしいままにしている。然るに王室においては、国王ラマ〔ラーマ〕八世は成年に達せず、国事は摂政制度によって代行され、戦時下にも拘わらず故国を離れてスイスに留学して帰国せず国民と親しく接していないため王室に対する国民の敬慕の念は昔日の如き熱いものではない。人間の欲望は限りがないので、国内のこのような体制ではピブン氏でなくとも王位を狙うのは当然とも言える。この好機をピブン氏ほどの人物が逃がすはずはない。これまでのピブン氏の動静に鑑みピブン氏の王位篡奪の野心は必然的である、

と私の意見に反論した。そこで私は、

この問題は確証をピブン氏の側近がピブン氏の言動からつかんだとか、ピブン氏が知友か同志などに送った書簡より得たとかいうものではなく、これまでのピブン氏の動静の観察によって判断したことである。言わば情況証拠によって推測したものに過ぎないことであって決定的な結論が出るはずはない。そこで当隊としては総軍の今後の対タイ施策を決定する重要な資料となるような回答をする必要がある。従ってこの回答は情況証拠によるとして二つの見解を併記して提出することが適当だと考えるが隊長の裁決を乞う、

と隊長の決定を求めた。林隊長は各々の意見を聞いた上、総軍が判断に迷うような曖昧な回答を避け両課長の意見の通りピブン氏に王位篡奪の野心ありという意味の回答を駐タイ憲兵隊の意見として総軍宛に送った。

20 タイ国日本へ仏舎利贈呈

タイ国より日本に贈られる仏舎利の贈呈式が四月下旬の或る日〔正しくは7月1日〕ワット・プラケオで行われた。

ピブン総理より坪上〔坪上貞二⁴⁰〕日本大使に仏舎利の入った壺が手渡され式は荘厳のうちに終わった。仏舎利というのは釈尊のお骨であってタイでは国宝以上に尊いものとされているが、もともと、これは今年（昭和十八年）よりさかのぼること約四十四、五年前に印度政庁よりタイ政府に贈られたものであった⁴¹。タイは小乗仏教一本にまとまった仏教国であり、寺院の数は全国で略々一万数千に達し、バンコクだけでも約六百をはるかに超え、僧侶の数も約七千以上に及ぶという仏教国、バンコクは仏教の都であった。

私が始めてバンコク入りをした頃、早朝黄衣をまとった老若の数多の托鉢僧が街頭を行き交う情景を見て、その異様な眺めに目を見張ったものである。

仏舎利贈呈式が終わって間もない或る日、わが陣営の戦局が必ずしも芳しいものとは言えない時機に国宝以上に貴重なものと言われている仏舎利をわが国に贈呈したタイ側の真意はどこにあるのかについて各幹部が互いに意見を交換し駐タイ憲兵隊としての見解を統一するため、隊長室に、警務部長、森、武山〔典正〕（この頃には小林警務課長は北分隊に転勤し、武山中尉が警務課長となっていた）両課長が招かれ林隊長統裁で協議が行われた。

協議開始に当り、林隊長は次のように会議の目的を述べた。即ち、

わが日本軍は二月にガダルカナルの転進という戦線の一部縮小を決行したが目下のところ大勢に大なる変化はない。タイにおいては、ガダルカナル転進情報の際の反響調査によれば、一部有識者間に悲観説があり、その反響は日本人の考えているほど単純ではない。西欧では東部戦線のドイツ軍は殆ど致命的な大敗北を喫した。この反響もかなり深刻な状態となって表れるであろう。このような戦局の悪化している時機に取えてわが国に仏舍利のような尊い御物を贈るというピブン氏の真意はどこにあるのか、この会議ではこのことについて当隊の見解を統一したいので出席の各官が夫々忌憚のない意見を開陳することを望む云々。

最初に発言したのは武山警務課長であった。武山によれば、

今回のピブン氏の日本への仏舍利贈呈は、枢軸陣営の利、不利とは大して関係がない。むしろ悪化をたどる場合こそ同盟国日本との誼の変わらないことを示すことによって将来、仏舍利以上のものをわが日本に期待しての言わば一種の投機的行為ではないかと思う、

というのである。次は森特高課長の発言である。

タイ側よりの情報によれば、ピブン氏の辞任に次ぐ再登場劇の際日本が予想以上の好意を示したことに對し報いるためということが一つ、もう一つはギブアンドテークの考え方で同じ仏教国である日本に国宝以上と言われる貴重なものを贈って日本の占領地、馬來内の旧タイ領地を返還してもらうことが狙いだということである。この二者は何れもあり得ることだと思う、

と特高課らしい情報に基づく見解を述べた。最後に、私は林隊長より意見を述べるよう求められた。

わが枢軸陣営の戦局が悪化の方向をたどる現在、ピブン氏が仏舍利のような宝物を分骨してくれたということは、盟邦たるわが国を激励するとか慰めるとか乃至は日本国民の士気を鼓舞するためなどは必ずしも思えない。何故なら最近ピブン氏の対日協力の態度は俄に消極的となっている。わが軍がタイに對し作戦上の要求と称して飛行基地、物資集積地、泰緬鉄道の建設、戦時物資や労働力の供給など相当無理な申し入れをしているので極力わが軍の要求を抑え緩和をはかる必要がある。中でも日本側の要求のうちタイ側の最も頭の痛いことは、わが軍の軍事費の要求額をパーツ紙幣の増発に次ぐ増発で答えることは通貨膨張いわゆるインフレを招くおそれがあることである。勿論わが国はこれを防止するため、つまりパーツの価値を維持するため、金塊を始めその他の裏付物資を供給することになってはいるが必ずしも円滑には行われていない。タイ経済に破綻を来すことが懸念される事態を招くことは、タイにとって耐えられない大なる負担となる。このことはどうしても避けなければならない。事ここに至ってはたとえ日タイ軍事同盟によってわが軍の作戦上の要求に応じることになっているとは言え、自ら限度があ

ると考え、已むを得ず対日協力の度合を制限したので消極的に見えるようになったのではないか。然るに枢軸側の戦況の不利なこの時に、選りに選って敢えて国宝以上の貴重なものを贈ることにしたのは恐らく対日協力の意志に変わりのないことを態度で示し、わが国に一種の「貸し」を作り、後日その代償として実質的に仏舍利以上の価値がある物、例えば馬來の旧領土返還というようなことを求める下心があるのではないか、或はまた前に挙げたわが現地軍の無理な要求の緩和をはかる、言わば御手柔らかに願うという意味もあるのではないか。つまりピブン氏の人気が落ち目となっている現在、いかに戦時中とは言えこれ以上タイの国民に日本軍の過度の要求の故に窮乏生活を強いることはピブン氏自身の政治力の如何を問われることになるので、日本側よ、これ以上無理な要求はご遠慮願いたいという、いわば拝み倒しの手法でわが軍の強引な要求を極力かわし、人気回復をはかったのではないか。森課長の述べた馬來の旧領土返還要求の準備をすでに整えているという情報も警務部長の手に入っている。その他、ピブン氏の首相再登場劇における日本側の支持に対する謝礼であるとか、昨年の大水害に際して日本より贈られたお見舞品に対するお返しをしるしとしてとか、更には、タイと仏印の紛争の終結時に当り日本が仲裁に入ってカンボジアの一部がタイに返されることを斡旋したお礼だ、などといろいろの説が流れているが、戦争のため種々の犠牲を払っているタイが、わが日本に返礼するというゆとりある心境にあるとは思えないし特に戦況悪化の傾向にある現況ではなおさらである。

ところで以上のようなギブアンドテークという打算的な意図ばかりでなく、ピブン氏は純粹に敬虔な気持で同じ仏教国たる盟邦日本へ仏舍利という最高の宗教的贈物を贈呈することによって未来永劫の宗教的つながりを保つためであると言う説もある。何れにしても、この度ピブン氏が戦況不利な状態にあるわが国に国宝以上のものを贈ることになった動機については種々の憶測が行われているが、要は現地日本軍の無理な要求を緩和してほしいということが真の狙いであろうと思う、

という意味のことを警務部長の意見として縷々述べた。

林隊長は諸君の意見はすべて傾聴に値するが警務部長の意見は判断材料が豊富で一步踏みこんだ見解で評価できるし自分も同じ意見である、仍ってこの件に関する当隊の統一見解として警務部長の意見を採用する、と最終的決定を下した。

この種の会議はタイ国内で重大な事件が起きた場合、或は日タイ友好親善を阻害するような動きがある場合に、部内の各幹部を集めて情報の交換或は統一した見解を決めるか又は対策を協議するために隊長の統裁でしばしば開かれた。

さてその後私達は隊長の指示によって、ピブン氏再登場劇後ピブン氏とタイ海軍との確執が激化したという情報或はプリディ第二摂政とタイ海軍との関係が著しく緊密化したという情報について確認するとともに、ピブン氏一派が来る六月に行われる人民代表議会の対策をいかに進めるかを探查する仕事に取りかかった⁴²。

21 ピブン氏の日本側現地当局に対する非友好的ラジオ放送

五月（ママ）初旬の或る朝、ピブン氏はラジオを通じてタイ国民にアピールする談話を発表した。この談話の中に、わが政府の閣僚を故あって解任しようとしたところ、わが政府のライバルの強引な牽制によって已むなく見送ったと、あたかもライバルによって重要な人事異動を実現できなかったと言わんばかりに、明らかにわが国に対すと思われる悪意にみちた表現が折りこまれていた。更にまた、タイ国民大衆が自分を信用しないならばいつでも総理の座より退くという表現も使われていた。自分が総理の地位を離れたら、まるで羅針盤を失った大艦が洋上をあてもなくさまようような惨めなことになると言わんばかりに、自分なしではタイ国民も日本現地当局もこの大戦を戦い抜くことはできないだろうと言う意味を含めて談話を結んだのである。

何しろ親日の最高指導者として日タイ間の友好的交誼を続けてきた、当の本人が意外にも日本を悪しきライバルになぞらえたのであるからわが現地当局のショックも大きかった。一体こんな外交上の不祥事がどうしておこったのか、現地の軍や大使館はこの不可解の出来事の原因を懸命に探查した結果、次のようなことが判明した。

大東亜戦争勃発前よりタイ産米統制会社代表取締役社長ワニット・パーナノン⁴³氏は、タイ外務省の高級官吏でもあったので、日本は三菱商事会社を通じてタイ米を入手する際、格別の便宜供与を受けた。それ故、三菱商事会社とは親しい間柄であった。

彼は日タイ攻守同盟締結の際、外務省最高官僚として締結の過程、事務手続等で親日友好の立役者的役割を演じ、大戦勃発の翌年（昭和十七年）閣僚の一員即ち蔵相代理並びに商相代理となり同年四月頃日タイ攻守同盟締結慶祝使節団長プレイヤー・パホン将軍に随行して訪日した。この訪日に当たって彼は経済全権大使として日タイ間の経済上の重要な問題を処理した。即ち、円とバーツを等価とする前出の円、バーツ等価協定を結び、両国間の円建決済を実現させたこと、タイ通貨の法定準備金に円を認めたこと、タイ通貨を安定させるため二億円の借入を取極めたことなど、両国の重要経済、財政上の案件はすべてワニット氏が責任者として衝に当たったという⁴⁴。

つまり彼は日タイ友好親善の紐帯となり、日本に対しては親日の第一人者として、タイ政府というより主としてピブン総理に対しては、政治資金源の側近第一号的貴重な存在として縦横の活躍をした人物だったのである。要するに、ワニット氏は政治家または外交官というよりも一種の政商的存在だったのである。それは彼の政界入り後の行動をたどれば歴然たるものがある。即ち彼は政界入りをしてから先ず政治的要職を覬い、その地位を占めるやそれを踏み台にして蓄財を企て、例えば利権を漁り取賄の疑いある行為をなし、また或は日タイ両国の間において経済的取引のブローカー的役割を買って出てマージン、リベートを手に入れるなど、政府の要人としてあり得べからざる振舞を敢えてして平然としているので朝野の人々の評判がよくなかった。もっともこの悪評も一種のジェラシーより生まれたものに相違ないが、悪評の起こる背景には不正行為の嫌疑という面もあったのでワニット氏の失脚をね

らって暗躍するものには、スキャンダラスな浮説を流して中傷する者も現れた。

ピブン氏の側近の一人と目される警視總監⁴⁵ アドン・デッチヤラス [以下アドウン] 氏はかねてよりワニット氏の悪評の原因について内偵を進め密かにワニット氏解任を進言しているという情報を私は入手した。

親日家として日タイ両国の重要な折衝を友好的に処理し幾多の重要な案件をまとめ、わが国に対しても大いに功績のあったワニット氏がタイ政府より追放されることは今後の日タイ交渉に支障を来す、と考え私は林隊長に報告してその後の成行を見守ることにした。

不徳の致すところとは言えワニット氏は自己の行為を省みて身の危険さえ感じるようになったので、かねてより親交の深かった在タイ邦人商社の有力幹部に苦境を訴えた。商社の有力幹部は在タイ日本大使館に連絡してワニット氏の保護について救いを求めた。日本大使館ではワニット氏を失うことは今後の両国交渉に一大支障を来すとして軍とも相はかりピブン総理に対しワニット解任を思いとどまるようにというワニット氏罷免を牽制するような申し入れを行った。ピブン氏にとっては、ワニット氏は前出のように政治資金調達源であり、タイ外交、経、財政の面でも大いに貢献している重要な閣僚の一人であるが、ワニット氏の悪評は広く知れ渡っているのも、既に斜陽の傾向にあるピブン氏の権勢をもってしては如何ともなし難い状態であった。そればかりではなく、もしかしたらワニット氏との癒着の疑惑が深まれば却って自分自身が泥をかぶる破目に陥らないとも限らないため遂にワニット氏の閣外追放を決意した。丁度その頃日本大使館より前出のようなピブン政府の閣僚解任を牽制するような申し入れがあった。ピブン氏はこれ幸いとばかりラジオを通じて自分は政府部内の肅正をはかろうとしたがライバルのために達成し得なかったという、わが国をライバルに擬した非友好的な談話を五月（ママ）初旬に発表して国民に訴えたのだという⁴⁶。

日本の現地当局即ち、大使館及び軍では相互打合せの上大使館の政治担当の高級幹部たる参事官 [石井康] が談話の真意を尋ねるためにピブン氏を訪れ折衝に当たったが、老獪なピブン氏はあの談話は一国の総理として国民の政界に対する疑惑を一掃し非常時における一層の緊張を求め戦争に対する協力の実をあげるため奮起を促す、言わば戦時下の国民に対する指導のための談話であって純然たる内政問題である、ライバルは国内にもいる、友邦たる日本に限ったことではないと日本側の抗議めいた申し入れを言葉巧みにかわして釈明した。

日本側としては同盟国の首相の釈明に対し、これ以上疑いをもって対することは今後の協力提携上得策ではないと判断して今後お互いに誤解を招くような言動を慎むことを約束して打ち切った。

この事件は日タイ友好親善上重要視しなければならないにも拘わらず、ピブン総理の要領を得ない釈明であっさり閉幕となった。

この事件があつて間もない或る夜、義軍の参謀で情報宣伝を担当している K [富永亀太郎] 少佐⁴⁷ と軍司令部のクラブ白雲荘で夕食を共にしながらタイ政府の現状などについて語り合った。白雲荘はタイの敵産であるオリエンタル・ホテルを日本軍が借り受け、東京の帝

国ホテルが軍の委託を受けて軍専用のクラブとして管理、運営している⁴⁸もので日本内地より数人の女子軍属がサービス係として勤務し軍人や関係者の会食のサービスをしてくれるようになっていた。

ピブンはどうも日本と手を握って戦うことに嫌気がさしたのではないか。五月（ママ）初旬国民へ呼びかけたラジオの談話の中に事もあろうにわが国をライバルと見たてた非友好的な文句があるじゃないか。ピブン総理はそろそろ地金をあらわし始めたのではないか。君はこの問題をどう思う？

Kは苦り切った表情で私の考えをただした。

どうもこうも、私に言わせると同盟国の総理が戦時下で、国民に緊張を求め励ますために行ったラジオ放送の真意を質すなどということは、ピブン総理の国民への呼びかけに水を差すようなもので、友邦の総理に対して大変非礼なことではあるまいか。タイは立派な独立国だ。しかも相当誇り高い民族だと言うことも、交渉に当たる当事者は十分承知はずだ。ピブン氏だったとえ最近朝野の信望が落ちこみ加減であるとは言え、タイ国総理として国民に君臨しているのだ。純然たる内政問題、とりわけ閣僚の人事問題で同盟国日本にあれこれ干渉がましい申し入れをされたのでは、体面上黙って引っこむわけにはいくまい。やはり日本側としてはあまり神経質にならずに大国の態度で臨んでほしいな。こちらが神経を尖らしては相手をますます刺戟し、密接な友好親善の関係を保つという至上命題を維持することもむずかしくなる。

外交的折衝には用語の使い方にも十分慎重な構えで臨まなければならないのではないだろうか。私の乏しい経験だが昭和十五年上海駐屯憲兵隊の特高課外事係として勤務していたときのことである。当時上海は重慶より派遣されたテロの横行が激しく上海在留の日本軍や朝野の邦人を無差別に襲い凶行後小蘇州河を越えて、外国と見なされている共同租界に逃走するので、上海憲兵隊はテロ分子の探査のため共同租界当局との協定で租界内でも捜査活動し得ることになっていたが、七月上旬中支〔支那〕派遣軍総司令官西尾大將が租界を視察することになったので、万一の場合を顧慮して護衛の必要上租界の要所に拳銃をもった私服憲兵を配置した。このことを察知した米軍海兵隊司令官ベック大佐は西尾総司令官の巡視が終わった直後、無断で米軍区域に入ったとして海兵隊をして無抵抗のわが憲兵を殴打し足蹴にしてトラックに引き摺り上げて拉致し海兵隊の留置場に監禁させた。

これを知った三浦〔三郎〕憲兵隊長が私と通訳を帯同してベック大佐を訪れ、緊急の事で已むを得なかったと言い訳して監禁された憲兵を連れ戻した。ところがその後、憲兵が拉致された際衆人環視の中で暴行を受けたことが判明したので三浦憲兵隊長は再び私を帯同して、特に海軍渉外部長も支援のため同行して、陳謝を求めするためにベック氏を訪れ、無抵抗の憲兵が恥辱を受けたことに対して陳謝を要求したが、ベック氏は遺憾の意は表すが陳謝はしないと拒否したため物別れとなった。その後この未解決の事件に

終止符を打つために上海駐在の米国パトリック代理大使と米海軍揚子江艦隊司令官グラスフォード少将とが、三浦隊長とベック大佐をカセイホテルのレストランでの昼食会に招き和解するように説得に当たったが、双方共自己の主張を曲げないため不幸にして不調に終わってしまった。つまり遺憾の意を表する米側と陳謝を求める当方との交渉の際の用語の解釈に相違があり、誤解を招いた問題であったのだ。

この用語の選定ということは外交交渉のイロハではないのか。今度のピブン氏の談話の真意を直談判で説明を求めるなどと言うことは私のような素人が見てもちょっと荒っぽ過ぎはしないか、

と私はピブン氏の談話に対するわが方の対応について感想を述べた。

オイッ！ちょっと待った。君はいつからピブン派に転向したのだ。

冗談じゃない。私がピブン派にまわるなんて飛んでもない。わが国の中央部こそピブン氏支持の方針なはずだ。まあ、それは兎も角、君が本気でピブン氏に傾いたなどと疑うならそれは全く見当はずれだ。この私は、ピブン派どころか最近のピブン氏のわが国に対する態度を考えるとピブン氏退陣要求の旗をかかげて先頭に立って行進したいほどだ。

無論、君が本気で私がピブン氏に傾斜しているなどと言っているとは思わないが、お互いの中で意見の相違があるなどと思われたら、それこそピブン氏一派に乗ぜられることになる。まあここまできたら、そんな馬鹿なことにならないように互いに足並みを揃えて仕事をして行こうじゃないか。この機会にもう一つ君に聞いてもらいたいことがある。それはこういうことだ。つまり、ただ徒らに強がるばかりでは、対タイ工作はできないということだ。軍刀で脅して力で抑えるようなつき合いをするのでは親善工作なんてできるわけがない。もし或る程度できたとしても必ず行き詰まりがくる。私の一番心配するのはこの軍刀交渉なのだ。作戦上の要求に名をかりて軍刀交渉をやればいかなる難題でも実現できるというやり方は、対タイ工作としては好ましいことではない。在タイ現地軍、官公機関がそうだななどというつもりは勿論ないが他の満州、支那などの占拠地域や南方作戦の占領地などはそういうこともあると聞いたからだ。

今度のワニット氏の汚職にからむタイ側の処置に対して内政干渉がましい申し入れや五月（ママ）初旬のピブン談話に対する抗議めいた交渉などは、ちょっと拙かったのではなかろうか。なるほど、ワニット氏は日タイ友好親善に貢献し実質的にも協力の成果をあげた功労者には違いないが、結局は彼が私腹を肥やし栄達をはかるためだったということは君も承知のはずだ。そんな者を日本側の外交交渉機関が今後の対タイ工作に支障を来すことまでしてかばう必要がどこにあるのか、と私は思うがどうだろう。私の考えが間違っていないとすればピブン総理の談話の中で、表現上穏当を欠く点があったとしても他国の人事に干渉したなどと誤解されるような交渉は日本側のとるべき態度とは思われない。自分で種をまいておいて、芽が出たと言って摘んでしまうようなものでは

ないか。どうも少し狂っているように思うが、
私はKの誤解を解くためにいくらか長ったらしく、くどいほどに自分の考えを述べた。

よし、君の言うことはよくわかった。ただ私は君のような道義外交は戦局が次第に悪化して行く現在では全面的に通用するとは思えないのだ。断っておくが私は飽くまでも軍側の立場で作戦上の見地から物申すのだからそのつもりで聞いてくれよ。君のようにお題目を唱えていては、いつの間にかタイに裏切られ、元も子もなくなる様な馬鹿なことにならないかと言うことを一番恐れるのだ。やはり現実の問題としては多少手荒なやり方でも思い切ってやってのけ、言わば先手を打って十分ににらみをきかせ、少しでも不信な兆しが見えたら未然に喰い止めるために強行手段をとる方が戦時下では当然なことだと思うのだ。重ねて言うが、君の主張は戦時下ならぬ言わば平和時ならば正論と思うし、私もよくわかる。だが現情勢下で万一、タイの寝返りという事態にでもなったら一体どういうことになるのか。絶対にそんな事態にはならないという保証は何一つないじゃないか。そう言う意味で、私はこの際多少の行き過ぎがあったとしても毅然とした姿勢を持ち続ける方が適当だと思うのだ。

Kはなおも自説を主張し続けた。

そこが、つまり君と私の考え方が根本的に違う点なのだ。どっちが正しいかは時日が決めることになると思うが、私は情勢が緊迫すればするほど、飽くまでタイの主権を尊重し、タイが体面を保つことのできるようにしてやって、最後まで日本に協力させるという方向にもって行くことが本筋だと思うわけだ。君の現実論は私だってわからないわけではない。軍の行動は本来作戦上の要求に基づいて機を失せず迅速果敢に決行すべきであると言うことを陸士時代から戦術の学習で盛んに吹きこまれてきた我々だ。その点では君の意見に異存のあるはずはない。君の言うことは軍の立場としての主張で、まことに当然であり正しいと思う。君と私の意見はどちらもそれなりに正しい主張であるとすれば、これからはタイ側が果してどちらの行き方を受け入れるかというタイ側の動向も注意深く見届けて決定しなければならないことになる。私は前に言った通りタイを信じあくまでも友好親善と言う基本的な行き方を貫き通すこと、言い換えるとタイをしっかり抱きしめて離さないようにすることが、我々の枢軸陣営からの離脱を防ぐ最善の方法だと思うのだ。しかしここで断っておくがタイを信じるということは、ピブン氏を信じるということではない。むしろその逆だ。つまりピブン氏は最早当てにならないと言うことだ。これは今までタイをいろいろな面から眺めてきた私の最終の見解だ。私も自分の主張を変えない、

私は前々からの持論をもう一度確かめ、自分に言いかせるように強く主張した。

この議論はタイの現在の対日動向とくに協力の度合、誠実性などをいかに判断するかによって君と私の主張の根拠も前提も違うことになるのでどこまでいっても果てがあるまい。どちらに軍配があがるかはもう少し経ったら、時が決めてくれるであろう。まあそ

う言うことで今日は打ち切ろう。さあ、これから大いに飲もう。もっともこの議論の勝負が決まるまで、お互い、この娑婆におれるかどうかかわからんがね。

Kは議論の打ち切りを宣して私のコップにビールをなみなみと注いだ。私はコップの泡と一緒に一気に飲み干した。議論を打ち切った二人は文字通り痛飲し鼻歌などを口ずさみながら白雲荘を引き揚げ宿舎に帰った。

22 理解し得ぬ戒厳令

五月下旬 [4月22日] 大東亜大臣青木一男氏が日タイ友好親善を強化するという触れ込みで軍用機に搭乗しバンコクにやってきた。(大東亜省と言うのは東亜共栄圏内の国々との外交関係を統制、強化するために外務省のアジア局を格上げしたものである。)

タイ側はこれを契機に治安強化を理由に当分の間バンコクに戒厳令を布くこととなった。戒厳令と言えば、戦時事変の場合、立法、行政、司法事務の全部または一部を軍の機関(軍司令官)に委ねるということを宣告する命令で、これが宣告されると軍の権能によって国民の権利が従来より一層、極度に圧迫制限されることになるが、日本の一閣僚が訪タイするのに戒厳令を布かなければならないほどバンコクの治安が乱れているとは思えず、私にはどうもタイ当局の真意をはかりかねた。もっともピブン政府はこれまでも事あるごとに私達には想像のつかない驚くべき異常な措置をとってきたのであるから、戒厳令とはいささか大げさとも思えるが例によって例の如しと受けとれば不思議ではないのかも知れない。強いて言えば、わが国に対してはオーバーな外交的儀礼、国内的には反政府分子に対する威嚇弾圧がねらいだったのであろう。

私は戒厳令施行によるタイ側国民各層の反響に注意を払った。果してタイ朝野各層間には今までも必要以上に国民生活を圧迫してきたのに、更にまた戦時中に名をかりて強権を発動してまで弾圧、制限を強化する必要はどこにあるのかという非難の声は盛んに巷間にまき起こった。

青木氏はピブン総理に表敬訪問後三日間バンコクに滞在し、タイ国を去った [4月25日、日タイコミュニケ発表]。

その後間もない或る日、特高課員の根木中尉は六月下旬に始まる人民代表議会における方針を協議するために、ピブン政権反対派の議員がしばしば某所に会合して密議を重ね、また同所を根城として反対派議員の獲得工作を行っている、と私に報告した。

私はこの情報を確かめるため同志ソムアン氏に連絡した。ソムアン氏はある事情のため暫くの間自宅を離れ私達の前に姿を見せなかったが、私が連絡をとった時には既に帰宅していたので、彼の自宅において面談することとなった。その夜、私は身分証明書をもって宮川通訳を伴いソムアン氏宅を訪ねた。(戒厳令下では日本軍所属の者でも夜間の外出の際には特に身分証明書を携行していないと要所で検問に当たっているタイ側の警戒線を通り過ぎることが出来なくなっていた。)

私はソムアン氏に会うや早速、氏が暫くの間私達の前に現れなかったことについて尋ねた。氏は近頃のように情勢が切迫してくると戒厳令の名の下で自分のようなクセのある人間はどんな目に合うかわからないので、一時某所に身を隠して様子をうかがっていたのだと語った。私は、同志ソムアン氏はピブン政府には親日家の第一人者と見なされているものどばかり思っていたが、ソムアン氏の話聞いて始めて戒厳令のような非常事態においては当局に要注意分子と擬せられているらしいと知って驚いた。それだけにソムアン氏が何もなくて元気な姿で会ってくれたのは、何よりも喜ばしいことだった。私は喜びを率直にソムアン氏に述べた。彼は笑いながら実は身の危険を感じたために一時某所に身を隠したのではない、自分はそんな臆病な人間ではない。同志と共に某所で密かに会合して時局についての研究を重ねていたのだと答えた。無論私はソムアン氏がそんな小胆な人間と思っているわけではなく、むしろその逆であるが、やはり同志たるソムアン氏の所在が気になったからだと思じた。

私は久しぶりにソムアン氏に会うことができたので時局について概要次のようなことを尋ねた。

個人的見解であるが、ピブン総理の最近の対日協力態度は極めて消極的となった。例えばタイ国内における飛行基地、集結基地、泰緬鉄道建設、作戦物資の供給、労働力の提供、パーツ貨の増発など作戦上の要求の何れの面に対しても従来のような積極性が見られない、しかも五月（ママ）初旬にラジオを通してわが国を暗にライバル視するような放送を行い、タイ朝野の人々に日本は非友好的であり信用のおけない国であるかのような印象を与えかねない談話を行っている。わが国と同盟条約を結んだタイ国の最高指導者のわが国に対する態度が灰色となったのでは協同作戦にも支障を来す恐れがある。日本の中央部ではピブン政府支持の方針だが、現地において直接ピブン政府に接している我々現地当局者には、その変化がヒシヒシと感じられる。この際私は日本の中央部に対し方針の転換を求める手続きをとりたいと思っているが、同志ソムアン氏の率直な意見を聞きたい。但し、これは前にも述べた通り私の私的意見である、というのが私の質問であった。

すでに述べた通り戦時の、わがタイの最高指導者たるピブンの政治的姿勢は信念に欠け時折動揺し一貫しないのでタイ朝野の人々からも信頼されていない。それに、日本の現地当局に対する協力の度も低下して消極的となったと聞いている。ピブンの政治、経済及び軍事面の協力が消極化したことを国民大衆も日本当局も感じるようになったことは、日本と運命を共にすることを誓った我々のグループとしては、断じて見逃すことはできない。自分が一時身を隠したのは実は、来るべき人民代表議会でピブン政府与党といかに戦うべきかを協議し、同時にピブン政権打倒に成功した場合の次期組閣をいかにすべきかについて同志と共に密議を重ねていたためである。この対議会作戦は我々の支持する野党がピブン内閣打倒を目指す議員をできるだけ多く獲得し数の力でピブン内

閣を窮地に追いこむというものだが今のところ、この多数派工作は有利に進展している。ピブン政権瓦解後の最高責任者はピブン氏辞表奪回事件でピブン氏の行動に反対したために閣僚の椅子を追われた人々で、彼らには文人派グループの支持があるばかりではなく海軍の領袖が後楯となっている。なお議会においては正副議長の座を二つとも勝ち取ることにしているので選挙の際所要の議員を抱き込むように鋭意努力していると、ソムアン氏は打ち明けてくれた。

私は根本情報を確認できたことに加え、ピブン政権打倒の企図が野党側にあることを知った。このことは以前より噂程度には巷間にも流れていたが、議会对策に直接関与しているソムアン氏より打ち明けられたので、私はソムアン氏宅を早々に引き揚げ隊本部に帰り林隊長に報告した。林隊長は予想していたことだが遂に来るものが来た、とつぶやきながら自ら軍司令部に出向いて軍司令官に確度の高い情報として報告した。軍司令部もこの情報を知って中央部のピブン政権支持の方針に重大な影響を及ぼすことだけに、さすがに驚きの色を隠せなかったという。

23 警視総監アドゥン氏内務大臣代行兼任

六月の月上旬頃、内務副大臣兼警視総監の職にあった警察大将アドゥン・デーチャジャラット氏は内務大臣プロムヨティ〔以下プロムヨーティー〕氏が病気のため内務大臣代行となった。アドゥン氏はインド人とタイ人との混血であるが一般タイ人の社交好きに較べて極端な社交嫌いで、日タイ間の公の社交場だけでなくタイ国内の社交的会合にさえも一切姿を見せない、言わば覆面男のような存在であった。彼は警察畑で生涯を捧げるために生まれて来たような男で、これまで一度も警察官以外の職についたことがなく⁴⁹、平素陰鬱な表情で笑いもなく黙々として執務に専念するばかりであるという。

彼は職業柄、政治家を始め国家の要職にある者の経歴、長短所、動向、政治上の弱点、私行に至るまでキャッチしているという。この陰険そのもののアドゥン氏が内務大臣代行となったことは六月下旬から始まる人民代表議会の議員、特に反ピブン派にとっては一つの脅威であった。アドゥン氏は一応ピブン派と見られ、議会でも場合によっては警察権力を武器として政府擁護の側にまわりその冷酷な性格を露骨に発揮して、いかなる勢力にも屈せず非情極まる取扱を敢行するであろうと野党の間で恐れられていた。

この人事はアドゥン氏の性格上の特長を極度に利用して来るべき人民代表議会における反対派攻勢に備えるピブン氏の布石であったと思われる。

24 ピブン政府、議会において逆転勝利

六月二十四日はタイの革命記念日並びに人民代表議会の開会日であり、多彩な記念式典と一緒に厳粛な開会式が行われた。

ピブン氏は軍事及び国政の最高責任者として各種の行事に出席していたが、辞表奪回事件

以来勢威も衰えを見せ、表面的には華やかに見えるが最早、得意の絶頂にあった昔日の面影はなく、その挙措動作にも何となく一抹の斜陽的淋しさがほのかに感じられることも事実であった。

六月二十六日国会議事堂で人民代表議会の本会議が開催され、正副議長の選挙が行われた。

この選挙では予想通り正副議長の椅子を二つとも反ピブン派が勝ち取った。即ち、議長は前工業相〔無任所相〕タウィー・ブンヤケート氏、副議長には前商務相クアン・アパイウォン氏が当選した。議会におけるイニシアティブは野党や反ピブン派の手に握られることになった。しかし、ピブン氏の勢力が昔日の如くではないとは言え、政府与党の最高権力者ピブン氏のことである。徒らに反対派や野党の優勢に屈するはずはない。ピブン氏は次に開かれる七月一日〔二日〕の本会議開会までの短期間に野党議員に対する必死の買収工作を開始すると同時に、アドゥン警視総監に指示して反対派議員や野党への威嚇を行わせるなど、独裁者として為し得るあらゆる手段を駆使して失地回復の裏工作を開始したため反対派勢力の陣営は相当の動揺をきたした。

七月一日〔二日〕には予定の如く今期、第二回目の本会議が国会議事堂において開かれた。

この会議ではピブン派の議会対策は見事に成功した。即ち、ピブン派の一議員が前回の正副議長選挙は出席議員が定足数に達していなかったため無効だとする緊急動議を提出した。採決の結果賛成多数で動議が可決された。引き続き再選挙が行われ、結局、形勢は逆転して正副議長の座は共にピブン派が獲得することになり、再び与党ピブン派が勢力を挽回することとなった。これに反し折角一度は議会内の主導権を握った野党もピブン一派の圧倒的資金力と既成勢力には抗し難く数日にして、あえなく敗れ去り悲憤の涙を吞んで城をピブン派に明け渡すことになってしまった⁵⁰。

先のピブン氏辞表奪回事件では、ピブン氏の不法な行動を糾弾することもできず、今度また、ピブン派の強引な議会対策によって敗北の憂き目をみた野党、反ピブン派は全く意気消沈の態で、今後果して打倒ピブンの果敢な作戦が展開できるかどうかさえも危ぶまれるに至った。

25 東條総理、旧タイ領返還

六月下旬頃、東條総理近日訪タイと言うことが軍司令部より通知された。

林隊長は軍司令官より東條総理に報告すべきタイ事情に関する資料提出を求められたので、その資料に折りこむ種々の事項について私に意見を徴した。私は警務部長として最近の一般事情の外、特にピブン氏の対日戦争協力に関する態度の消極的变化は、問題として検討の必要があるという強い主張を挿入してもらうことにした。即ち、これまでの各種情報を総合判断した、結論として次のことを林隊長に率直に進言した。要するに、ピブン氏支持の頑

な考え方を速やかに改める必要があるという主旨であり、中央部のこれまでのピブン氏支持の方針を覆すような強い意見具申であった。ピブン氏支持の方針を変えるべきであるという憲兵隊の提出した資料を見た中村軍司令官は、このような意見は以前も憲兵隊長の口頭報告があったので承知している。しかし、中央の基本方針変更の問題に関することだけに決定的なこととして公に報告することは一考を要するとして、林隊長を招いてその根拠を強い調子で尋ねた。

林隊長は、この詰問に対しピブン氏の最近の対日態度、ピブン派内の内部事情（閣僚同士の確執）、権勢の衰退、世評、ソムアン一派や反ピブン派の活発なピブン氏打倒の動きなどについて詳細に説明して、ピブン政権の命脈は既に限界に達していること、もしこのままピブン政権の支持を続けるならば戦況の悪化に伴い最悪の事態となりかねないと強い調子で訴えたという。

東條総理の訪タイは、極秘のうちに計画が進められ、敵側の空中よりの攻撃を極度に警戒しながら予定通り、空路で七月三日にバンコク、ドンムアン飛行場に到着した。訪タイの目的は、大東亜共栄圏内の最重要友邦国たるタイと友好親善を強化するために総理自らタイに乗りこんで直接固く手を握るという点にあった。当日午前九時頃、鼻下に黒髯を蓄えた東條総理は、陸軍大将の通常礼服に戦闘帽という戦時向きの軽装で赤松秘書官らを従えて軍用機を降り飛行場に勇姿を現した。

戦時下にも拘わらずドンムアン飛行場は日タイ朝野の出迎えの人々で埋まった。

ピブン氏は、儀仗兵を整列せしめ最前地点に立って迎え外相その他軍の代表もこれに従った。

日本側より中村軍司令官、山田参謀長、参謀副長（ママ）を始め各部長、大使館よりは坪上大使を始め各参事官が緊張の面持ちで出迎えた。

東條総理はピブン総理の案内で型通り儀仗兵の閲兵を終えた後空港の休憩室でタイ側の歓迎に答えて挨拶した。

私は総理護衛のために制服を着用し部下を指揮して総理の身边近くに随行した。

飛行場より総理の宿舎となった迎賓館に向かう道路はタイ側がオートバイで先導してくれたので私はサイドカーに搭乗して行進序列に入り総理の側方近くを行進した。

中村軍司令官は迎賓館で総理に軍情並びにタイ事情などについて現地当局者としてナマの情報进行を報告した。その報告でピブン政権を支持することは再考を要する旨の進言がなされたが、東條総理の承認を得るには至らなかったと言う。

東條総理は以前内地において憲兵司令官だった関係もあってか、特に林隊長を引見し憲兵の職務を行うに当たってはタイ側の主権尊重、タイ国民に接する場合には親切、丁寧を旨として、タイ国民の信頼と尊敬を得るように心掛けよと注意を促した。東條総理と在タイ憲兵隊とは直接的指揮系統にはないが、元憲兵司令官という経歴の東條総理は、恐らく憲兵に対する親愛感から憲兵の警務行為に行き過ぎのないようにとの親心が働いたのであろう。

東條総理は儀礼的な行事を滞りなく終えた後、タイ首相官邸でピブン氏と公式会談を行った。この会談で東條総理は北タイとビルマとの境にあるシャン地方のケントン、モンパンの二州と、また南タイと馬來の国境となっているペルリス、ケダ、ケランタン、トレンガヌ四州とをタイ国に返還するため即日調印（ママ）を終えた。

この頃は丁度、人民代表議会における反対派の反撃が次第に激しくなった時だったので、東條総理の領土返還の賜物はピブン政権の受太刀の態勢に活を入れるのに役立つとして、ピブン氏は大いに歓迎し東條総理に対して衷心より感謝の意を表明した。

調印式（ママ）の翌日、東條総理は南方総軍の占領地視察のために空路昭南に向かった。

ピブン氏は日本側より返還された六州をタイ領土に編入するために、人民代表議会に協賛を要請した。

野党反対派は新領土の返還を受けることによって日本側より、これまで以上の苛酷な反対給付要求の重荷を負わされるのではないかという懸念と新領土統治のために当然伴うべき物心両面の負担に比して、タイの受ける利益は少ないであろうと言う疑念を抱き政府に説明を鋭く迫ったが、結局人民代表議会は新領土編入を承認し、野党反対派の追及は、編入後の処理を慎重にするように政府に注意を促す程度にとどまった。

領土返還について、タイ政府の公式発表のあった後、私は例によりタイ国朝野の反響を調査するとともに、ソムアン氏やタイ要人の意向を裏面接触の連絡者を通じて個別に打診した。

ソムアン氏は例の如くズバリと次のような見解を述べた。

日本のタイ国に対する領土の返還は時宜に適っていると思うが、もしこのことによってタイより何かの代償を求めることがあれば、それは日本にとってマイナスになりこそすれ決してプラスにはなるまい。かつてタイの領土であったものをタイに返すのは当然であって、特別に有難いものでも贈ったような恩着せがましい態度をとるならば徒らにタイ国民の反感を招くことになるからである。むしろ、タイが返還された領土を統治するに当たって、日本は物心両面で積極的に援助するという気構えを見せることが日タイ双方のためになると思う、

というのであった。

このソムアン氏の見解を聞いて私は甚だしいショックを受けた。馬來の国境四州は、わが軍が貴い血を流して英国より勝ち取ったものである。この貴重な領地を無償で返還するというのに、なおその上、領地の統治にまで日本の積極的な援助を求めるといふ、とんでもないおまけを付けさせようとするのであるから随分厚かましい話である。しかし、ソムアン氏の一見甚だ身勝手と思われる見解を取り入れたならば、現下の日タイ関係からみて最も適切かつ有効な、言わば高度の対タイ施策となるかも知れない。ソムアン氏は熱烈な愛国者であると同時に大親日家でもあるのだ。この重大な局面に、日タイ間の諸問題について無責任な発言をするはずがない。とすると、このソムアン氏の見解は、日本側が率直に受け入れ実行す

れば、日本にとって有利であると、暗に好意ある助言を与えてくれたものとも解される。

ラーシー女史（プリディ第二摂政との接触者）はタイインテリ階層の意見を総合して、次のように述べた。

日本が領土返還の代償としてタイに無理な要求をするようなことがあれば、これまでの日タイ間の友好親善の関係を害する恐れがある、
というのであった。

江畑通訳夫人（プラヤー・パホン将軍との接触担当）は、日本がタイに対して何らの代償も求めずに、言わば無条件で領土を返還することは名実共に東亜の盟主として大国たることを示すことになるので タイ朝野における信望を高め一段と友好親善の実があがるものと確信する、と言う見解であった。夫人が要人間の意向を打診して廻った結論である。

宮川通訳の父〔宮川岩二〕（クアン・アパイウォン前商務大臣の接触担当）は、領土返還などのようなことは戦争終結後に行ってほしかった。目下作戦中なのでいつまた日本軍の要求で戦争地域となるかも知れないし、また今返してもらってもタイとしては戦時中のことでもあり、いろいろの面で負担が増えるばかりである。要するに、領土返還は日タイ双方にとって得るところは少ないのではあるまいか、と言う意見であった。

王医師（台湾人、陳守明中華総商会主席との接触担当）は、日本はこの際領土返還の代償として作戦に必要なものをドンドン要求して提供させる好機会だと思う。日本軍の貴い血を流して折角克ち得た領土を無償で返還することは日本の国民に対して申し訳ないということにならないだろうか、というのであった。

タイ側朝野の反響は低調、無関心であるばかりでなく一般にはむしろタイの行政的負担が大きくなるばかりという考え方の方が強かった。ただ王医師の収集した、華僑代表の陳主席一派の意見が日本に比較的好意的だったことは意外であった。

このような反響は在タイ日本軍並びに外交機関の今後の対タイ施策に大いに関係があるので、憲兵隊の報告は慎重に検討の後提出した。

26 北タイ視察

七月上旬、欧州においては、米軍のシシリー島攻略によってイタリアの政情が一変した。即ち、ファシスト党の領袖で独裁者として枢軸陣営内の一大国イタリアに君臨したムッソリーニも戦況の悪化の責任を問われ最高指導者の地位よりひき降ろされた。枢軸陣営のショックは絶大であった。ムッソリーニ氏に代わってバドリオ将軍が政権の座につき枢軸陣営よりの離脱宣言をするに至っては、最早枢軸陣営の戦局の将来も暗澹たるものとなった。在タイ日本軍、官民の反響は極めて悲観的でイタリアが枢軸陣営より離脱したという情報によって深い憂色に包まれるに至った。

タイ側の一般国民には大した反響もなかったが一部のインテリ階層の間には戦局の将来について悲観的言辞をもらすものが多くなった。

丁度この頃は雨期に入っていたので敵の空襲も多くはあるまいというのが一般に予想されたことであった。比較的空襲の少ないと思われるこの時期に、私は林隊長の命によって北タイの事情を視察することとなった。主な目的は、時局下の地方民衆の動向をキャッチし治安の情況、防諜の適否を査察し指導するためであった。

七月下旬私は単身鉄道を利用して北タイ唯一の都会チェンマイに向かった。チェンマイには阪田大尉を長とするチェンマイ分隊が駐屯していた。

私の乗った列車は薪木を燃料とする蒸気機関車の牽引によって運行するので牽引力は極めて弱かったが、車室は個室もあり乗客係りのボーイも親切でサービスもまた上乘であった。車外の風景は、起伏に乏しい草原地帯で単調であるが野趣豊かな放牧の群れが次ぎ次ぎと車窓より目に映り戦時下とは思えないほど、平和でのんびりした雰囲気漂う景色を味わうことができた快適な汽車の旅であった。

私は久しぶりで快い睡りに入り車中で一夜を明かし翌日の午後チェンマイ駅に着いた。チェンマイ分隊長阪田大尉が出迎えてくれた。宿舎は阪田が予約してくれたチェンマイホテルであった。このホテルはホテルとは名ばかりで施設も備品もお粗末なもので、どう見てもホテルという体をなしていない田舎宿でほんの雨露をしのぐに過ぎないものであった。しかし、チェンマイは北タイの物資の集散地であり交通の要衝でもあったので近郷より物資交換のために集まる商人達を客の対象としているので、この程度の宿屋でも結構繁昌していると言う。夕食の食膳にのったピフテキなどは水牛肉のように固いので私には歯のたたない代物であった。

夕食後阪田よりチェンマイ事情を話してもらった。

チェンマイは北タイの行政上の中心地であるばかりでなく経済、文化の中心地であり商業都市でもある。タイには意外に近代的形体を備えた都会がないと言われているがチェンマイも北タイの都会とは言え、例外ではない。いくつかの行政上の役所の庁舎はあっても、大した仕事もなく、町民の出入も少なく、まるで空き家がいかに軒を並べているに過ぎないような味気ない寒々した感じではあるが、さすが商店街（といって朝夕の市場のようなものに過ぎないが）は賑わい、人出も多く活気を呈している。

住民の生活程度は低く文盲者が多いので文化的施設なども見るべきものがない。この地方では凡そ文化などとは関係なく住民の生活が単調に続けられている。

気候は北方という地理的關係もあって年間を通じて、暑からず寒からずの、南国には珍しい地方の一つである。住民は都会的な汚れた風塵と隔絶しているので純朴であり、何の刺戟もなく、無気力である。

気候が比較的しのぎ易いので人々の衣服も簡素なもので間に合うし、食料なども簡単なものですませるため、向上心も起こらない。それ故国内情勢がいかに変化しようとも大した反応を示さない。ましてや国際情勢や時局の変転があろうとも全く無関心に均しい。

ただ、チェンマイは北辺のビルマ並びにラオス国境に近いチェンライと言う町に駐屯しているタイの国境監視軍〔外征軍〕の将兵が休養のために、前線より交代でやってくるので言わば休養地のような存在である。この軍は日タイ協同作戦協定に基づいて戦略軍として配置されたものである。

チェンマイはタイ南北縦断鉄道の終点であるため、鉄道によってバンコクの各種の都会文化が運びこまれるので国境を接する僻地における荒んだ生活を送っている将兵の慰安ともなる適当な町である。

この遠隔の地、チェンライに駐屯する軍の司令官はピブン氏の腹心の部下であるが中央より離れて勤務するため情勢を自由に考える機会が多くなるので動もすれば中央部に対して批判的となり、部下青年将校の中には過激な反政府的言辞を吐く者もいるという。ピブン氏がかねてよりこの監視軍内に反政府分子のあることを察知していたが昭和十八年初頭、この軍内に不穏な動きの兆候があったため逸早く視察と称して現地に乗り込み、軍司令官以下の高級幹部を説得して未然に防止したこともあり、タイ軍事当局もピブン氏の意図を体して不断の警戒を続けている状態である。

チェンマイ分隊としても、このような事態は軍事的にも、治安維持の面でも重大な関係があるのでタイ側の現地当局とも密接な連絡をとって常に警視を怠らず、何事も事件として発生する前に兆候をキャッチして、言わば事前防止に努めている。無論、目下のところ表面的には何ら不穏の兆候もなく平静であり、監視軍の士気もまた旺盛である。ただ、海外からの敵性放送、例えば「連合軍の戦力恢復」、「タイが日本と提携を続ける限り潰滅的な空襲を免れ得ない」、「ピブン政権は日本の傀儡である」などという電波放送をラジオを通じて聴取するので上級幹部の間には不安の念をいだく者もいる。この不安な雰囲気はいつとはなしにチェンマイ方面にも流れ、町の識者の間にも戦局の前途に危惧の念をいだく者がある。しかし、現時点ではいかにわが情勢不利のニュースが流布されようとも軍の将兵、チェンマイ・チェンライ地域一帯の住民には動揺の兆しはいささかも見られない。と言うのはこの方面の軍隊は苛烈な交戦の経験を有する部隊とは異なり、枢軸陣営の戦況不利などと聞いても実感がわかないし、一般住民にしても教養が低いためか、実生活に直接影響のない情勢の変化には大して反応を示さないのである。防諜については、ビルマやラオス方面の国境監視が十分ではないため、諜者潜入の取締は甚だ困難であるが、憲兵の重要な任務の一つなので重点をおいている。即ち、国境周辺の六つの要所の町村長や部落の長に、タイの監視軍や現地警察軍と緊密な連絡をとり防諜に協力するように依頼している。また、直轄の諜者群を適宜放って国境周辺の防諜協力者と連繋して情報収集に当たらせ、かつ、部下憲兵から成る二人一組のグループ数組を作って巡回勤務させて、防諜協力者と諜者とを監督、指導させている。分隊長自身は、チェンマイ県の警察軍本部の防諜担当者と情報交換を行い事前警防に当たっている。以上のような防諜態勢で勤務しているが、これまでに疑わしい兆候らしいことは現

れていない。しかし、なお引続き分隊員一同は一致団結して、僻地・前線勤務の重要性を考え任務に努めるつもりだ、

と結んで、阪田の北タイ事情並びに勤務の概要の説明は終わった。

翌日私は阪田の紹介で、チェンマイ県のタイ警察軍本部でケアルン司令官（警察大佐）と会見し、警務事項とりわけ防諜に関する問題について互いに協力し合うことを申し合わせた。

チェンマイに三日間滞在してバンコクへ帰る前夜、私は阪田を夕食に招き僻地勤務の労を次のように犒った。

私は工八連隊〔工兵第8連隊〕の独立小隊長として今から約十年前満州事変の頃、熱河省の灤平（らんへい）市〔現在河北省承德市の一部〕から約二十数キロほど離れた尖山子と言う僻地で勤務したことがある。関東軍は、熱河省の湯玉麟將軍の率いる抗日軍を長城外に駆逐したが、未だ掃蕩が充分行われていないので敗残兵が至る所に出没し各要地に分屯する部隊を襲撃することが頻発した。これはわが小隊とて例外ではなかった。無論敗残兵は組織された部隊のようなものではなく、言わば烏合の衆の類であるから大規模な襲撃はできないが組織的でないだけに時として単独で思いがけない凶暴な不意打ちをしかけてくることがあるので小隊も警戒班を編成して交代に勤務に当って襲撃に備えたが、勤務に当たらない者、つまり非番の者は大して為すこともない。言うまでもなく日課としての日々の訓練は行すがそれとて午前、午後の、精々数時間で終わるので、あとは休養の時間であり、ひまな時間である。このひまな時間を退屈せずに過ごすことができるように本隊より娯楽品（碁、将棋、マージャン、トランプ）、スポーツ用品（野球用具、フットボール）、娯楽雑誌、書籍などを備えつけてもらった。それで何とか辛うじて退屈もせずに不便な生活を約一年間続けることができた。かつてのこの経験によって当分隊の僻地勤務の苦労は十分推察できる。当分隊こそ僻地勤務の代表的な部隊と言えらる。都会に勤務する隊本部の人々は、本隊を離れて遠く僻地に勤務する当分隊が孤独に堪え不便を忍んで勤務していることに感謝している。当分隊の日常生活で不便なこと、何かしてほしいということがあったら遠慮なく申し出てほしい。隊本部としては林隊長の意向でもあるので、できる限り希望に添うように努めるつもりだ。当分隊長も隊員達も時々交代でバンコクに出張し都会の空気を吸い気分を入れかえて能率をあげることも必要ではあるまいか。

阪田は次のように答えた。

林隊長以下隊本部一同の配慮に感謝する。隊員は何れもよく不便を忍んで勤務しているので統御し易い。何れその中に当分隊の要望事項を更めて申し入れるし、またこれからは隊員をバンコクへ時々出張させるので宜しく頼む。今後も一同団結して隊長の意図を体して任務に邁進するつもりだ、と。

タイの国境監視は区域の広大さに比して監視組織も必ずしも十分とはいえないため甚だ困

難と思うがそれ故に重点主義によって行動し特にラオス、ビルマ、場合によっては中国より潜入するスパイ団の出没に備えて警視することを望む、と私は阪田に要望した。

飲料は安物のブランドーだったがメートルをあげるには十分だった。阪田の帰ったのは十二時過ぎであった。

翌日早朝、私は阪田の部下の案内でチェンマイの有名な白瀧を見物した。チェンマイ西北約一キロのところにある、この瀧は高さ約五米の、タイ国唯一の珍しいものである。

久し振りに日本内地のような風物に接した私は一瞬、郷愁の念にかられた。

チェンマイは常夏の国にしてはいくらか涼しい地方で草花や果物なども日本内地のものに似ていて、この白瀧などもさほど高くはないが近くで眺めていると涼味を覚え内地の瀑布を偲ぶに十分であった。

チェンマイの滞在は短時日に過ぎなかったが、私にとって戦時中故国を離れて中国に約二年、タイ国に二年を過ごした現在、異国タイにおいて日本内地の気分をささやかながら味わうことのできたことは大いなる喜びであり、有難いことでもあった。

当日の午後私は阪田大尉以下隊員の見送りを受け、バンコク行き列車に乗りこみチェンマイを離れ帰隊の途についた。

木炭を燃料とする機関車では牽引力も弱く速力もおそい。隊本部を離れてわずか三日に過ぎないが、その間に重要事件でも起きないかと気にかかり列車の速力のおそいことには、もどかしさが募るばかりであった。列車は翌日の夜、無事バンコクに到着した。

27 チャンドラ・ボース、印度国民軍を編成

チェンマイより帰って間もなく印度独立仮政府の首席、チャンドラ・ボース氏が、独逸より潜水艦で馬來半島のペナンに潜行し、独立運動開始のため幕僚を従えて陸路バンコクに入り、アンバサホテルに投宿した。

憲兵隊は軍司令官の命により、ボース氏のタイ国滞在中の護衛に当たることとなった。

インド独立運動に対する援助、指導は岩畔少将を長とする光機関（本部はバンコク）が担当していたので、私は機関員と密接に連絡をとり、更にタイ側当局とも提携した。ボース氏の身辺護衛のためには、私服の下士官二名を専任させた。

ボース氏は〔1943年7月27日に〕タイ国唯一の総合大学チュラロンコン大学校庭に在タイ印度人を集めて独立運動大会を開催し、独立運動の趣旨即ち永年に亘る英国の植民地支配の束縛より脱して今こそ、日本、タイ、その他枢軸陣営の支援を得て、宿願の独立運動を展開する好機である、本大会に参集した有志諸君は決然立って独立運動に参加するように、という意味の熱弁をふるい聴衆に呼びかけた。約五千人に及ぶ聴衆は大学の大きなキャンパスを埋めつくし、この救世主の火を吐くような舌演に万雷の拍手を送った。

ボース氏はバンコクを根拠地として独立軍の編成、訓練を開始すると共に装備を整え、充足に意を用い、その他仮政府首席としての諸般の政務を総覧するためビルマ、馬來などを頻

繁に往復し、文字通り東奔西走の目まぐるしい多忙の日を送っていた。

ボース氏は、私に西欧の汚れた手からアジアを奪回し解放するためには日本を盟主として大同団結し、今次大戦を勝ち抜かなければならない、印度独立運動もこの好機に乗じて強力に推進し目的達成のために最大の努力を傾注するとともに、日本軍の対印作戦に多少なりとも協力して戦勝をもたらすことに寄与し得るように奮闘する決意である、と目を輝かしながら語った。

28 インドシナ独立運動の首謀者タイに亡命

八月中旬（ママ）の或る日、仏印駐屯軍林〔秀澄〕憲兵大佐の書簡をもって久我〔道雄〕歩兵中尉が私を訪ねてきた⁵¹。林大佐は私が昭和十五年に上海憲兵隊勤務の時の直属上司で、奇策縦横、知謀百出の特高課長として勇名を馳せた人であった。私は旧上司の書簡を懐かしい想いで開披した。書簡の内容は、フランス当局にマークされている安南王族の末裔、壮烈〔Trang Liet〕、壮拳〔Trang Cu〕兄弟の独立運動の動きがあまりにも露骨なため当局の監視の目が厳しくなり、二人は身の危険さえ感じるようになったので身柄の保護を駐仏印日本軍に申し入れてきたが、当日本軍が仏印内において二人を匿うことは必ずしも安全とは言えない。よって一時タイ国に亡命させるので宜しく頼む。もともとこの亡命は戦時下の運動の性質上、フランス官憲に絶対に察知されることのないように注意する必要がある、しかも二人が安心して秘策を練ることのできる環境でなければならないため取りあえずバンコクを選んだ、と言うことであった。

私は林〔秀澄〕大佐の書簡を林〔清〕隊長に提出して指示を仰いだ。隊長は取りあえず私に二人のためにアジト（隠れ家）を探すとともに保護の方法を講じるように指示して、早速軍司令官に報告した。軍司令部には、既に二人の亡命に関し便宜供与を頼むという依頼の公文書が届いていたので、軍司令官は林隊長に司令部に代わって受け入れるようにと命じた。私は隊長の指示に基づき、秘密の漏れないように十分注意しながらタイ側当局とも連絡してバーンカピにある葉という華僑の別宅を借りて、壮烈、壮拳兄弟のアジトとし私服の下士官二人に起居を共にさせ護衛に当たらした。

フランス本国ではヴィシー政府がドイツ軍の占領下で枢軸側に協力を誓っているのに、アジアにおける植民地たる仏印でも少なくとも表面上は日仏友好関係を保っていた。独立運動を企図した仏印の現地要人が、距離的に極めて近い隣国タイに亡命した場合には、その身边は必ずしも安全とは言えない。運動妨害の魔手が伸び、或はテロ分子の潜入、横行も予想されるので、友好国タイの国内においても十分な警戒の必要があった。両兄弟の亡命目的についてタイ側の護衛に協力する幹部などは秘密を探ろうとして、私にも部下憲兵にも再三働きかけてきたが巧みに避けて相手にしなかった。

チャンドラ・ボース氏と云い、壮両兄弟と云い何れも独立運動に身を投じ、しかも両者とも日本の友邦たるタイ国を根拠地として日本軍の協力を得て独立運動の準備を推進しようと

言うのだから、両者の間には多少のズレはあったとしても日本軍の作戦指導の推移と歩調を合わせて行ったものと言えよう。

ボース氏は対印度作戦の準備の進捗に伴い、日本軍との協同作戦の必要もあって大本営とも言うべき作戦指導の本拠をビルマ方面に移動させた。一方、壮両兄弟の運動はバンコクのアジトで側近などの手によって綿密に計画され、その完成をまって、実際運動を展開するため本国の仏印に引揚げた（ママ）。何れも十一月前後のことであった。

29 国境画定作業に着手

九月に入って間もない頃、東條総理によって返還された馬來四州の国境を確認する所謂国境画定委員会が南方総軍によって設けられた。この委員会は日本側より、委員長藤村〔益蔵〕少将（馬來軍政監）、二人の委員（馬來駐屯憲兵隊司令部警務部長浦部大佐、タイ駐屯憲兵隊警務部長堀井中佐）、タイ側より二人の委員（コビット・マナチット陸軍大佐、ベラサット・ナンタナ大佐）が夫々任命され委員長以下五名で構成された。任務は申すまでもなく永年英国の植民地だった四州の国境の標識が年月の経過と共に或は破損し、或は衰滅して著しく不鮮明となっているので日タイ相互で、現地において確認し合い、かつ旧標識を補強または新標識と取り換えるということであった。

九月中旬、私はタイ側二人の委員並びに通訳としてカマレス〔カマレート・チャンルアン⁵²〕中尉（カマレス君は日本の桐生高等工業染色科卒業）らと共に軍用機に搭乗し馬來のスングパタニ飛行場に着陸した。

私達とタイ側委員の宿舎は、スングパタニ市と海を距てた対岸にあるペナン市のペナン・ホテルであった。飛行場もペナン・ホテルも昭和十七年の暮れ、私が昭南（シンガポール）の総軍への出張を終え帰途の途中、搭乗機の故障のために一夜滞在したところのある思い出の場所であった。

藤村委員長と浦部委員とは、二人の司政官を伴いすでにホテルに止宿し画定作業の準備を整え私とタイ側委員の到着を待っていた。

委員会の業務開始の第一日目は、藤村委員長主裁で、各委員並びに予め招致していた馬來四州の各担当司政官列席の上、日程や実施要領などについて図上の打合せが行われた。全日程の前半はペルリス、ケダ州の国境画定作業のため、ペナン市より乗用車で毎日現場に通い、後半はトレンガヌ、ケランタン二州の作業をハイランドホテルとフレーザーヒルの総軍司令部の保養地に夫々宿泊して、日々乗用車を利用して現地に出向いて作業に当たることになった。各委員は翌日より各州担当の司政官の案内で現地へ赴き作業に着手した。

現場では旧標識の位置を地図と照合しながら確認し標識の変敗、衰損、消滅などで更新または新設を要するものは、州において雇い入れた現地人作業員を指導し、またこれらの記録は州の係員が夫々担当して作業が進められた。作業の進捗は順調だったが、宿舎より作業地への往復に費やす時間や記録の整理作業が意外に時日を要したため前半の予定を終えたのは

作業に着手してから十一日目であった。

後半は最初ハイランドホテルを根拠としてトレンガヌ州を次いでフレザーヒルの総軍司令部指定の宿舎に滞在して、日々現場に向向いてケラントン州の画定作業を行い、合計約十日で完了した。フレザーヒルの宿舎は英国の元総督の別邸だったものを寺内〔寿一南方〕総軍司令官が避暑のために使用していた所だけに設備は整い調度品なども豪華なものが揃っていた。

後半の作業も事なく終わろうとする前日、私は浦部委員及びタイ側の二人の委員並びに通訳と別れの夕食を共にした。宿舎に住み込みで働いている料理人の華僑夫婦が腕を振った中華料理で、飲物は英国産のウイスキーであった。

約三週間に亘る連日の画定作業も明日一日を残すばかりとあって、作業に従事した一同は何となく重荷を下ろしたという喜びの色を隠せなかった。英語に堪能な浦部委員はタイ側二人の委員に旧領地の返還について感想を尋ねた。コビット大佐は英国に長い間支配を受けた馬來のタイ領地が返還されたことは今次大戦の緒戦における日本軍の輝かしい戦勝のお蔭であると日本に感謝している、ただ長い間英国の植民地統治に服してきた住民を今後タイの統治方式で指導するには相当困難であろうと答えた。ベラサット大佐は、旧領地の返還されたことは大変有難いことで、日本に大いに感謝するが、戦時下のタイ政府には四州の統治は相当負担になるであろう、と率直な感想を述べた。

中華料理のテーブルには私達のために英国製高級酒が準備されたので、大事な作業を終える前日とあって作業からの解放感と責任を果たし得た喜びとで笑いの雰囲気につつまれ何の遠慮もなく思いのままメートルをあげ、果てはタイの民謡、日本詩吟（浦部委員）、通訳のカマレス中尉は日本の軍歌、流行歌なども披露したので拍手鳴りやまない盛りあがり夜更けるのも知らないほどであった。

翌日、各委員はケラントン州を最後に、全作業を終了し再びペナン市に帰り、夫々分担して記録を整理して、確認書を作成し日タイの代表が夫々調印して、ここに三週間に及んだ国境画定作業も事なく終了した。

調印終了後藤村委員長はペナン市の南側にあるペナンヒル（ケーブルカーで約十五分の丘陵）に新築されたというホテルの別館で祝宴を張り関係者十二名の労をねぎらった。

ペナンの有名な楽団を買い切り、現地の民謡、舞曲、西欧のクラシック、日本の歌謡曲、軍歌など出席者の好みそうな曲を選んで演奏するようにと指示し、またアルコール飲料なども不足することのないように準備させるなど慰労に遺憾のないように注意が払われていた。楽団の演奏が一曲終わる毎に拍手がおこり曲によってはアンコールを求め演奏に和して合唱する熱狂振りであった。

翌日私は任務を終えたのでタイ側委員一行と共に馬來軍政監部の委員一行と別れの挨拶を交わしてスゲパタニ空港より空路バンコクに帰還した。九月下旬であった⁵³。

30 自由タイの正体

国境画定作業を終え、帰隊して間もない或る日ジャムラット警察少佐が私を訪れ自由タイの暗躍について次のように詳しく語ってくれた。

昨年九月下旬つまり約一年前（ママ）のことであるが、国営煙草専売公社の支配人サグアン・トゥラーラック氏が葉煙草買付と称し、数人の共謀者と共に公金を拐帯して仏印方面に逃亡したという記事がタイ紙カオパーブに掲載された。この記事では公金約八十万バーツ費消の発覚を恐れたためと言うことになってはいるが、実はクーデターの陰謀が事前に発覚したので公金を持ち出し行方をくらましたものらしく、しかもタイ国内外の自由タイと密接なつながりがある。この首魁のサグアン氏というのは、立憲革命の大立者の一人ソンスラッチ [プレイヤー・ソンスラデート] 大佐（当時陸軍司令官だったがピブン氏と意見が合わず仏印に亡命、ピブン政権打倒を唱え続けている）の一味で、ピブン氏が政権の座についてからも人民代表議会官選議員、煙草公社支配人の地位にあったが、ピブン政権を批判し反ピブンの側に立っていた⁵⁴。（これは特高課員根木中尉がすでに報告済み）自由タイとは、タイ国内に組織された抗日秘密団体である。大戦勃発後彼我共に盛んに行われている神経戦つまり謀略宣伝放送或は放送妨害または逆用などに便乗して反枢軸陣営の中国、英米などの国外組織と密接な連絡をもっている。開戦当初タイの駐米公使セニプラモード [セーニー・プラモート] 氏が、ピブン政府の帰国命令を拒否して米国に残っている留学生などを集めて抗日戦線を形成し、ラジオを通じてサンフランシスコより祖国に対し抗日を呼びかけた。これと同様な組織が英国において駐英タイ公使モムチャイ・サリット氏⁵⁵（ママ）によって形成され、この組織の一部が印度ニューデリーに進出して盛んにタイ国内に向けて電波による神経戦を行っている。タイ政府は自由タイの秘密組織が国内にもあって海外の組織と密かに連絡をとっていることを察知し、昨十七年当初より警視を続けている。

私はジャムラット警察少佐の説明でサグアン逃亡事件は、自由タイと関係があることを知り、プリディ摂政との接触を担当しているラーシー女史が自由タイの動向に注意せよと警告したことを思い出した。しかし、ラーシー女史の警告当時は、まだ自由タイの暗躍は一般の人々には殆ど関心がなく、また気がつかないほどの事象だったので隷下諸隊などには自由タイの動向に留意するように、との指示だけで積極的に探査することを促すまでの指示はしなかった。しかしジャムラット警察少佐の自由タイの正体に関する連絡によって確認し得たので、林隊長の命によって憲兵隊の全力をあげて探査に当たることとなった。

31 ピブン氏大東亜会議出席を辞退

日本政府が十一月上旬に、東京に東亜共栄圏内の各盟主を招き大東亜会議を開催するという情報が現地で流れた。

タイ側はこのことを知るや招きに応ずるかどうかの態度を決めるため検討を始めたとい

う。本来なら現政府の首班たるピブン総理が七月上旬の東條総理訪タイと旧タイ領土返還のお礼の意味を含めて逸早く訪日を決めるのが国際儀礼上当然のことであり、ことにタイは東亜共栄圏内唯一の独立国で、しかも日本とは攻守同盟まで結んでいる友邦第一号であるのだから率先して会議に列席するのが当然であろう、と言うのは何人も疑わないことであった。従ってこの問題は最早検討などを始める段階ではなく、日本政府よりの正式の招待があったら折返し応諾の回答を發するはずである。ところがピブン氏は在タイ日本大使館より正式招待を受けたのに、政務多忙と健康上の都合を口実に回答を保留遷延していた。その間タイの王族で外交顧問のワンワイタヤコン殿下を首相代理として訪日させることを考え、この問題がもちあがった時から密かにワンワイ氏に交渉していたと言う。ピブン氏が何故大東亜会議に出席することを渋っているのかと言えば、枢軸陣營の戦況が不利に傾いてきたため前途に不安を抱いたらしい。対日協力も消極的となっていることを考えれば当然あり得ることである。何故ワンワイ氏を代理として選んだかと言えば、氏は王族であるという点で格式が高いこと、人格高潔、識見また高邁という何れの面から見ても適任であると評価できること、と同時にワンワイ氏が東大東亜会議という対日的に重要な会議に列席するという経験を経ておけば、今後しばしば行われるであろう在タイ日本現地当局との間の公式会合にも都合の悪い場合、例えば過重の作戦上の要求を受ける懸念のある会議などには、代理として出席させることもできると考えたためであると言う。しかし、ピブン氏は立憲革命以来、王族に対する処遇が圧制的かつ冷淡だったのでワンワイ氏もピブン氏に対しあまりいい感情をもっていなかったという。

ワンワイ氏はピブン氏より会議出席の交渉を受けたとき内心甚だ穏やかでなかったが、そのような態度は表面には出さず丁寧な交渉を巧みにかわして返事を留保し続けて来たという。

ピブン氏には、もともと訪日の意志も会議出席の考えもないらしく、何としても代理で間に合わせようとして舞台裏でワンワイ氏に交渉をしたが容易に成功しそうなため少々狼狽気味であったという。ところが偶々以前公金拐帯事件で逃亡したサグアンが仏印亡命中の同志〔プレイヤー・ソンスラデートなどか〕との連繫でクーデターを計画していたことが発覚したので、ピブン氏にとっては会議出席辞退のいい口実となったのだという。

日本大使館ではピブン氏よりの回答はないし、本国政府よりは速やかに回答を求めよとの強い要求がくるので困窮の態だったらしく、已むを得ず強い態度で回答を迫る結果となった。日本側の強い要求に対して、ピブン氏からは健康状態が長途の旅行に堪えるかどうか検診を受けているので暫く確答を待ってほしいという返事を受けたに過ぎなかった。

ピブン氏の訪日態度があいまいだという情報を聞いた私はKと例により白雲荘で会合し夕食を共にしながら意見の交換を行った。

「ピブン氏は大東亜会議に出席すると思うか」と先ず私の方から話を切り出した。

そんなことは当然じゃないか。無論出席するさ。ピブン氏は東條総理の贈物に対する返

礼をまだすましていない、そんな非礼なことがあるものか。今度こそはいくらピブン氏でも腰を上げざるを得まい。何と言っても唯一の友邦の盟主だ。私はピブン御大、自らご出馬すると確信するね。

Kは当然なことだと主張した。

なるほど、君も矢張りそう思うか。ところが私の方へ入った情報では必ずしもそうじゃないのだな。むしろ否に近いのだ。いつも君には反対の意見をいうようで申し訳ないが、どうもこの卦は凶だよ。

私は率直に反対意見を述べた。

何だど。そんな情報があったのか。どうも信じられんな。一体どういうことなのだ。

Kは驚いた面持ちで尋ねた。

私はこれまでに得た情報をまとめて説明した。即ち、ピブン氏の側近筋から入手したピブン氏の心境、動静などについてのニュースである。

無論まだ、出席しないという確答があったわけではないから、何とも言えないが内外の情勢が必ずしも好転というわけではないのと敵の巧妙で執拗な心理作戦に惑わされ、出席を断る可能性が強いのではないかと思うのだ。何と言っても先般明らかになったサグアンのクーデター計画事件がピブン氏にはかなりのショックだったらしいが、それを口実に重要な会議に出席することを断ると言うのだからピブン氏も一筋縄では行かない大した人物だよ。ところで軍司令部ではどう思っているのだい。はっきりした回答がないのでやきもきしているのだろう。

そうなのだよ。軍司令部でも中村のおやじさんは大変気をもんでいるが、君の言うようにピブン氏が出席を断るということが事実とすれば、夢にも思っていないことだけに失望することだろう。私も君の言うことを聞くまでは、いや聞いた今でもまさかと思う。しかし、君の話を聞くとどうもそういうこともあり得るとい気がしてくるよ。大体、こんなことは始めから出席する腹さえ決まっていれば一晩で決まることだ。それが、こんなにいつまでも返事を長引かせるということはおかしいと言えば確におかしい。ウーン。これはどうも君の言うことが当たっているかも知れんよ。

Kは天井を仰いで嘆息しながらあふれる様に注がれたコップのビールをグイと呑み干した。

数日後Kは電話で中村軍司令官が坪上大使と共に大東亜会議への出席を促すためにピブン氏を訪れたことを伝えてくれた。

おやじさん、到頭出かけたか、だがまた意外なニュースが入ったよ。この情報は出所が不確実なので噂程度で、ニュースとして公にはできないものだが君にだけは取敢えず知らせておくよ。それは大東亜会議にはピブン氏の代理としてワンワイ殿下が出席を引受けたというのだ。無論未確認情報だよ。

私は持前の慎重さで伝えた。

その後間もなく、ピブン氏大東亜会議出席の招きに対するタイ政府の正式回答が日本大使館に届いた。大使館では百パーセント、イエスの回答を予期していたが、全く反対のノーであったため坪上大使以下首脳部にとって大いなる失望と夢想だにもし得ない驚きであったという。この状態は軍司令部においても同様であった。軍司令部、大使館の若手幹部の怒りは頂点に達したが、事既に遅く如何とも、なし得ないことであった。

この頃の欧州の情勢は、八月中旬、米英間に次期作戦として第二戦線結成が取り決められ、更に十月下旬〔10月19日～30日〕には米英ソ三国の外相会議がモスクワで行われ、早くも戦後処理の問題が討議されるという情報もあって枢軸側にとっては、まことに憂慮すべき事態が着々と進行していた。

32 ソムアン氏の国内二勢力の態勢形成論

大東亜会議はタイ側よりピブン首相の代理としてワンワイ殿下、その他満州国、中華民国、ビルマ、フィリピン、自由印度の各代表が夫々東京に参集して昭和十八年十一月月上旬、予定の如く国会議事堂で行われた。この歴史的会議は二日間に亘って厳粛に行われ第二日目には大東亜共同宣言が採用された。この宣言は民族自決の理想を高唱し、大東亜共栄圏の諸民族が永年にわたる欧米の植民政策の圧政から脱して、均しく独立自尊の意識に目覚めるための示唆に富む、重要な意義のあるものであった。

ピブン氏がこの意義ある貴重な会議をボイコットしてからは、日本側現地当局は勿論日本政府首脳部との関係も急に冷ややかとなり日本側にもピブン氏に対する不信の兆しがあらわれ始めたという。軍司令部においても大使館においてもピブン氏頼むに足らずの声が聞こえるようになったが、会議に参加しないことが公然たる背信行為というわけではないので中央政府のピブン氏支持政策に変更のない限りは少なくとも表面的には友好親善の態度を崩すわけにはいかないという現地当局の苦しい立場があった。

大東亜会議終了後、間もない或る日ソムアン氏より夕食の招待を受けた。私は時局の諸問題についてソムアン氏の意見を聞く機会を得たので内心大いに期待しながら、手土産として洋酒一本を持参し宮川通訳を帯同してソムアン氏邸を訪れた。ソムアン氏は一番上の妹さんと共に快く迎えてくれた。食膳にはソムアン氏の母と妹達の手製のタイ料理がならべられ、私の持参したブランデーの栓が抜かれた。食席には家族の人々も顔をつらねて私の健康のために乾杯してくれた。

話題はピブン氏が大東亜会議をボイコットしたことに対する、ソムアン氏の批判から始まった。

アジア民族の団結のための歴史的意義ある大東亜会議にはピブン首相こそ率先して自ら出席すべきなのに代理者を出席させてお茶を濁したことは、会議を軽視することであり、日本政府並びに国民に対する非礼極まる行為であって、タイ朝野の多くの人々も日タイ友好親善上好ましくからざることで遺憾に堪えず申し訳ないことと思っている。

一体、なぜこのような非礼な行為をしたかと言えば、それはピブン氏個人の都合のためである。つまりピブン氏は米英に対し枢軸陣営一辺倒ではないことを印象づけようとした、と思われることが、彼の最近の奇怪な言動によって推測できるからである。更には言えば、欠席の理由を健康の不調にあるとしている。日本に行くこともできないような弱い体の者が、この重大な戦時下でタイの最高指導者としての激務に堪え得るはずがない。しかるに、平然と政権の座に居すわっているというのでは、誰も健康不調などということを信じる者はいない。そのような見え透いた嘘を欠席の理由とするに至っては、タイ国の最高指導者のとるべき行為ではない。まことに恥ずかしいことで我慢のならないことであり、その上また会議に出席するための政治的外交的能力乃至資格の未知数なワンワイ殿下に王族であるということだけで代理を委任し自ら出席の責任を果たそうとしなかったことは許すことのできない行為だ。

ソムアン氏は杯を重ねながらピブン氏に対し痛烈な批判を加えたのである。同席の家族の人々もソムアン氏のピブン氏批判を聞いて互いに顔を見合わせうなずき合った。私は、ソムアン氏の批判が本当とすれば、日タイ友好親善上甚だ遺憾なことであるが同盟国の総理が正式に出席を辞退したのだから、たとえ理由がどうであろうと口をはさむ筋合いではなく、額面通り受取らざるを得ないであろうと応じた。

ソムアン氏は、ピブン氏の施政に反対する立場で今次の対日非礼行為は決して看過しないと述べた後次のように話を進めた。

ところで、何故一体、我々が総理であるピブン氏をこんなに批判すると思うか、と彼は私の答えにくい質問を發した。それはどこの国にもあるように国策に反対的立場にあるグループ、言わば野党的存在としては、当然だと思うが、と答えることしかできなかった。

ソムアン氏は確かにその通りだが、我々のグループのねらいは他にあるのだとして大要次のような考えを述べた。

わがグループは、先ずタイ国内の対日協力派グループと非協力派グループの二つを徹底的に峻別して後者の勢力の弱体化をはかる。そのためにはピブン氏の対日非協力的、灰色的態度をあらゆる角度から痛烈に批判するとともに彼ら灰色分子に対して対日協力の理念の正しさ、即ち白人勢力のアジアよりの駆逐を目指す日本の主動的立場の正しいことを鼓吹し、説得して彼らの共鳴を得、わがグループへと誘引する。つまり多数派を造り反対分子の暗躍を封じるといった目的である。これによって一層対日協力を強化、緊密化でき、ゆるぎなき勢力とすることができる。ピブン氏の言動に対する強い批判はそのためであり、要するに協力派の数が非協力派の数を圧倒して優勢となるように工作し、数の力によって反対分子の対日協力に対する阻止妨害などの動きを事前に封じためだ、

というのであった。

私は対日協力を強化、緊密化するのにどうして国内の勢力を二分し協力、非協力を峻別す

る必要があるのか、それにいかなる意味があるのかという疑問があったので通訳に聞いたが、よくわからないというので、ソムアン氏に具体的な説明を求めたところ彼は次のように説明してくれた。

タイが日本に協力すると言っても色々な分野がある。野にある一般の人々が日本の現地当局より物心両面の協力、提携、援助などを求められた場合、特に作戦上の要求を求められた場合には、対日協力的であるとは限らない、対日非協力グループも存在し、これらの分子が日本側の要求に対して直接、間接に妨害、阻止、いやがらせをすれば、大なり小なり作戦遂行に支障を来すことは必然である。このような事態を対日協力グループはなんとしても未然に防止しなければならない。しかしこの種の行為は表面に現れることは殆どなく、何人の仕業か判らないように行われるものである。仍って協力グループは平素より国内の非協力分子の暗躍とその政治的背景を綿密に調査して協力派、非協力派を峻別しておく必要がある。非協力派を顕在化させることで、タイ国の態勢はこの二つの勢力で分断されていることを明示したいというのが、わが協力グループの考えである。

とのことであった。

私はソムアン氏の二つの勢力をもってタイ国内の態勢を形成するという考えは、結局タイが国内の対日非協力派の勢力をきびしく注視し、現地における日本当局の要求を阻止、妨害などする行為を未然に防ぐのが目的である、と理解してよいかと問い返して、その通りだという答えを得た。だがこれでは何のことはない、タイ国内の朝野の人々が協力派と非協力派とに分かれて暗闘を続けるようなものであり、そんなことで日タイ協同作戦が何の支障もなくできるかどうか疑わしい。それに協力、非協力の識別さえ警察など官憲の力をかりなければソムアン氏グループだけで、できるはずはないと思ったが、反問する場合ではないので先ずはお手並み拝見をというので一応誠意あふれる対日協力の企てに感謝しお礼を述べて握手した。ソムアン氏より夕食に招かれて数時間を経ったがこの間、ご家族お手製の、中華料理よりは薄味で、あっさりしたタイ料理で暖かいもてなしを受け、しかもソムアン氏より対日全面協力の力強い意図を披露されたので新たに感謝の念をこめて厚くお礼を述べて辞去した。

私はソムアン氏の、あまり理解し易いものではない対日協力の持論、二勢力態勢形成論を上司や関係機関に夫々報告、通報しKにも紹介した。

33 親日国務相逮捕拘禁される

十一月下旬、連合国側は英、米、中三国の首脳がエジプトのカイロに集まって戦後の日本処理について協議の結果、カイロ宣言なるものを全世界に向かって〔12月1日に〕発表した。

ピブン首相は欧州情勢の変化に異常な関心を寄せ、東西陣営の戦局の推移を絶えず比較検

討していたという。欧州の戦局が次第に連合軍側に有利に進展するのでピブン氏は大東亜会議に出席しなかった自分の判断の正しかったことに密かに満足しているという。

偶々親日要人である国務相ワニット氏（五月頃汚職の疑いで拘留（ママ）されたが日本側の懇請もあって一応その地位に留まっていた）が金〔きん〕の密売買の容疑で、戦時法規違反として警視庁に逮捕されるという事件が起こった。情報によるとワニット氏を逮捕するにあたってピブン氏と警視総監アドゥン警察大将との間でその当否について激論が交わされたという。アドゥン氏は職務上当然のことながら立派に証拠をかため、手落ちなく手順を決めてピブン氏に裁断を迫ったがピブン氏は日本側を刺戟することを恐れたのと現職の閣僚を刑事事件で逮捕監禁することについては法的に疑問の点もあったので一応逮捕は見送るという意向を示したために論争となったということである。しかし結局、ピブン氏はアドゥン氏やその他の閣僚の意見を容れ逮捕に踏み切った⁵⁶。

日本大使館では前回と同様釈放交渉を始めたがピブン氏の巧みな回答によって成功するには至らなかった。

34 クリスマスイヴの大空襲

十二月上旬、米、英、ソ三国の首脳がイランのテヘランで第二戦線形成後の作戦並びに軍、政両面に亘る討議を重ねた結果、テヘラン宣言なるものを発表した。これは見方によっては、先のカイロ宣言とともに十一月上旬東京で行われた大東亜会議に対抗して連合国側の団結の強固さを誇示するための演出とも考えられた。

東南アジア方面の戦局は各地とも一応平静を保っているかに見えたが、欧州戦場では着々と次期作戦の準備が進められ、特に独、伊など枢軸軍に対する包囲網を縮小しジリジリと迫っていった。

バンコクでは十一月上旬の雨期明けともなれば敵機の空襲があることを予想し、タイ側は勿論、日本側でも防空壕を構築したり対空防衛組織を整備強化するなど、一通りの防空準備を整えたが、一向に空襲の気配が見えないのでむしろ不思議なことと思うようになった。

ところが師走の年の瀬も迫った十二月下旬、しかもクリスマスイヴの夜おそく突如猛獣の咆哮に似た、不気味な空襲警報のサイレンが一斉に猛り狂うように鳴り出したので人々は安眠を破られた⁵⁷。

クリスマスイヴは欧米人にとっては日本のお盆やお正月と同様に、年一回の楽しい夜のはずなのによりによって、この日に空襲を行うとは誰も予想し得なかったことだけに寝耳に水の、空からのプレゼントに市民は周章狼狽なすところを知らないほどの驚きだったに違いない。

居室で読書中だった私は前回の初空襲の時と同様速やかに武装を整え防空壕に飛び込んだが、既に市内諸所方々で爆弾の落下する音が物凄く地響きを立てていた。

敵機の数はいくつかとも十数機と思われ、空襲の主要な目標はニューロード方向と判断され

た。この辺りは邦人居住者の多い地帯で敵機に狙われるような重要施設のある地域ではなかったが、敵機編隊の集中爆撃の行われた所は盲爆ではなく明らかに計画的な空爆区域であり、言うならば一種の心裡爆撃であると推測された。

敵機の空襲は波状的に行われ約三時間も続いた。

翌日私は林隊長の爆撃地域巡視に随行し被害地を見てまわった。

市街は火災の熱気で息苦しささえ感じた。空襲の目標は、爆撃の跡を見ると、どうやらニューロードとこれと直角に交わり、互いに平行に走っているサートン、シーロム、スリウォン、シーピヤの四道路一帯とメナム河畔にある三井ワーフ埠頭付近であると推定された。

爆撃の目標が日本人居住地域だとすればその割には日本人の被害は少なく、むしろタイ人や第三人の高層建築の方が爆撃の投下目標となり易かったためか被害が大きかったようである。特に気の毒だったのはタイ人の一密集地帯が全滅したことと三井ワーフ付近のタイ人居住地の一角がかなりの被害を受けたことであった。

空襲直後の印度ニューデリーからの宣伝謀略放送は、もしタイが日本に対して協力を続けるならば、引き続き徹底的な爆撃を行うであろうという威嚇的なものであった。被害調査は軍司令部の調査班によっても綿密に行われ、被害状況をタイ側の軍部と共同発表するはずだったが、タイ側の反対で実現できなかった。

この爆撃を皮切りに敵の空襲は隔日に行われ、年末まで続き空襲の範囲も次第に拡大していった。

日本側の対空兵器は極めて貧弱で空中戦用の戦闘機も数機に過ぎないので敵機の優勢な編隊を迎撃することは甚だ困難であり、一方、タイ側は数十機を保有しているが敵の優秀な大型爆撃機に対して挑戦する能力は遺憾ながら具えていなかった。このためバンコクの制空権も完全に敵の手中に握られているという有様であった。

敵側は空襲の度毎に謀略放送によってタイ側に日本人をバンコクより追い出すように呼びかけ民心を動揺させることにつとめたが、日タイ両当局ともこれに対して何らの対策を講じることができないまま昭和十八年は不安のうちに暮れていった。

一九四四年（昭和十九年）

35 タイ政府遷都の噂が流れる

昭和十九年の元旦は静かに明けた。

だが、年明け早々、タイ政府ベチャブんに遷都という思いがけないニュースが流れて市内の人々を驚かした⁵⁸。

バンコクは日本軍の駐屯する限り、空襲が続くに違いないからバンコクと遠く離れているベチャブンのような地域に政府の機関を移転させるというのである。このことを実行に移す法的手続としては遷都に関する緊急勅令を公布すればすむわけだが、いかに独裁者ピブン氏

でもこれを実行するには相当な困難が伴うはずである。その一つは緊急勅令案が果して簡単に摂政府の承認を得られるかどうかということである。二つには国民が大した抵抗も感じずについていけるかどうか、三つ目には遷都の準備、労力、手順、輸送、経費など。何れも厄介な問題ばかりでこれをいかに扱うかが重要である。特に二つ目にあげた国民の意志がたやすく遷都賛成に傾くためには遷都の予定地ペチャブンを果して遷都に適し、かつ国民一般の意志に添うかどうかであろう。しかし、自らオールマイティを以て任じているピブン氏は如何なる困難な障害があろうとも断乎として敢行する決意だという。

私はこの突如降って湧いた、まさかと思う噂に驚いたが、事実とすれば国内に動揺が起こることは間違いないので、先ず噂の真否を確かめるため特高課に事実の確認を指示した。

特高課の報告は概ね次のようなものであった。

空襲の激化に伴いタイ政府部内は動揺し、特にピブン氏は憂慮のあまり首都移転の意志を側近にもらしていたことは事実である。市民は、始めはショックだったが次第に落ち着きを取戻し動揺の気配は感じられない。ピブン氏は空襲の被害を避けるために、バンコクは首都にあらずと中外に非首都宣言をすると同時に、政府機関の大部分をペチャブンに移す考えである。このため近く緊急勅令を公布するはずだという。

まさかと思った噂が本当だったのである。

特高課の調査によればペチャブンはバンコク東北方約二、三百キロ [直線距離 291 キロ] のジャングル地帯にある僻村で飲料水の水質も悪く、その上ジャングル特有のマラリヤ蚊の発生著しく非衛生極まりない荒地で居住地とするには大規模な開発作業を必要とすると判断されるという。

私はこの衝撃的なニュースを林隊長に報告した。隊長はピブン氏遂に乱心したか、何という取り乱し様だと苦笑したが、速やかに関係機関に連絡するとともに遷都に関するタイ政府の動向を見守るようにと隷下全隊に指示した。

36 親日愛国婦人団体の活動

タイ国ペチャブンに遷都の噂が市内に流れて間もない頃（日本の七草を過ぎた頃）江畑通訳が次のニュースを報告した。

スリウォン路のラーシー女史の自宅応接室に数名の愛国婦人が集合して時局について重要な討議を行ったというのである。（ラーシー女史はプリディ第二摂政に接触している連絡者である。）

討議の内容は概ね次の通りである。

メンバーはソムアン氏の母親サワデイ夫人、外務省の日本課長 M 氏夫人、民選議員 W 氏夫人、官選議員 S 氏夫人、警察大佐 P [プラ・ピニット] 氏夫人 [ブンラップ] (靴下工場を経営している)。

最初に主催者、ラーシー女史は次のように挨拶した。

昨年のクリスマスイヴにはとんだプレゼントを頂戴し、その有難い贈物をご丁寧にも年末まで続き市内に大きな損害を与えた。今後もこの状態が続くことは必至である。ところで、街には政府がペチャブンに遷都するという噂が流れている。敵の爆撃を恐れた結果であろう。爆撃を恐れて首都を遷すなどは、ひと度日本と協同作戦を決意した独立国としてはまことに醜態であり、我々タイ国民にも取り乱したあがきとうつり恥ずかしい限りである。

さて国内の状態はどうであろうか、インフレで物価は日増しに上がり、われらの生活も例外なく苦しくなっている。このような状態が続く限り人々は前途に何の希望ももてず、暗黒の日々を暮らし続けることになり、やがては厭戦気分が臺頭し日本との提携協力の意志もくじけるおそれがある。

そこで、国民の不安、動揺を鎮め、不安を幾分なりとも軽減できるような具体的な事柄を我々女性の力で実現したいと思う。この方法などについて自由に意見を述べてほしい、

というものであった。

バンコクがかくもひどい空襲を受けても効果的な反撃ができないというのでは、日本の空軍もあまり当てにならないのではないかとか、日本も戦線が拡大し過ぎているのでタイの防空までは手がまわらないのではあるまいかとか、一体タイの空軍は何をしているのだとか、また、世界を相手の戦争であるからタイも空襲を受けることは当然だ、皆一致協力して最後まで頑張ろうと発言する者もいたと言う。

タイは日本と攻守同盟を結んでいるのであるから、日本を信頼し、衷心より協力して最後まで戦い抜く覚悟が必要である、と思うとラーシー女史は強調し、更に日本とタイ国は山田長政などの例から見て、昔より因縁浅からぬ間柄であり、日本は今後も我々がしっかり手を握り親交を堅持していくに十分な、立派な国家であると思う。更に、日本はアジアの指導国として白人特に英米の勢力をアジアより締め出すという使命感をもって起ちあがった、言わば我々と共通の立場にたつて国の命運をかけて戦っている友邦である。この貴重な国とは最後まで協力提携していくべきであると付け加えた。

この意見には、全面的に賛成、と最年長者ソムアン氏の母、サワデイ夫人が真っ先に賛意を表した。M夫人は、国民の間には不安の空気が漂っているので速やかに対策を講じなければ不幸な事態が起こらないとも限らない。国民が安心して戦争に協力できる方法を相談しようではないかと提案した。会議に列席してから一度も発言していないW夫人、S夫人、P夫人はラーシー女史の提案に何れも異議なく賛同した。

提案具体化の骨子は、各種愛国婦人団体の大同団結、それらの諸団体の定期的会合、更に、時と所を問わず日タイ協同作戦の尊い意義並びに日本民族の優秀性をタイ朝野の人々、特に学生、青壮年層に鼓吹して、わが愛国婦人団体に加盟するように勧誘して日タイ両国のゆるぎない友好親善関係をつくる、というのであった。加えて、最近ピブン政府の対日協力

の態度が灰色に変色する傾向にあるので、将来に対する国民の不安をかき立てかねない、仍ってわが団体も現政権に代わる強力な親日政権樹立に向けた政治運動を展開すべきであることも提案された。ラーシー女史提案の愛国運動の構想は、熱心な討論の末問題なく承認された。引き続きラーシー女史は次のような説明を付け加えた。

この運動で重要かつ困難な問題は、運動資金をいかにして調達するかということであるが、これについては一つの私案がある。即ち、目下諸物価高騰の要因となっている、売り惜しみ買い溜めなどのため、市場における品不足の現象が目立ってきたが、繊維製品については現地日本軍より比較的廉価に放出を受けることが可能であるという情報がある。安価な品を日本側より供給を受け、これを市場に適当な価格で売りさばき、その差益を運動資金に当てる考えである。

この説明に対しP夫人〔ブンラップ〕から詳しい入手ルートの説明を求められたが、ラーシー夫人はサワディ夫人の長男は日本軍と特別な連絡関係があるので、日本軍に繊維製品廉価払下げの交渉をすることは容易であり、すでに日本軍の幹部より了解を得ていると回答した。

タイの上流婦人でさえ入手困難な繊維製品が日本軍側から比較的容易に取得できるというので出席の人々は何れも驚くとともに大いに喜んだ。P夫人からは、ラーシー女史の活躍を賞讃して、外交官夫人M氏に、外交のお株をラーシー女史に奪われたのでは、などという冗談も飛び出したという。問題の資金調達はラーシー女史に一任するという事で時局に関する会合は終わった。

その後数日経った或る日曜日、私はソムアン氏の母親サワディ夫人とラーシー女史の訪問を受けた。予め打合せしていたのか江畑通訳が一緒であった。日曜日に二人もの婦人の訪問を受けたことはこれまでなかったので、何かあるなど不審に思いながら応接した。

サワディ夫人は親日家ソムアン氏を通じて、またラーシー女史は私に協力して第二摂政よりタイ政情の動向を聞き出してくれる連絡者なので、言わば熟知の間柄であるのに、あらためて訪問などということもおかしな話である。しかも二人揃って面会というもの、いつもと違い異常なことである。年明けて間もなく、つまり七草あけの頃江畑通訳がもたらしたタイ愛国婦人団体運動の中心的存在である二人なので、その活動振りを語るためにやってきたに違いないと感じた。

私は二人揃ってあらためて訪問などとは変だと言いながら迎えた。一人暮らしは何かと不便なことも多いでしょう、と二人とも女性らしい心遣いを訪問の挨拶として述べた後、予想通りにタイ愛国婦人団体運動についての相談があった。主にラーシー女史が語った。

日本円とタイ・パーツの等価裏付物資として、在タイ日本軍が備蓄している諸物資のうち繊維製品を廉価で払下げを受け、これを適正な安値で市場に流すことによって捻出する運動資金を用いて、日増しに激しさを加える敵の空襲のため市民が不安にかられ動揺を来すことをいくらかでも解消できるように宣撫し、対日協力、提携を容易にする運

動を展開したい。運動資金は日本軍からの放出物資（繊維製品）を市場に流す場合の差益を当てるという構想であるので、日本軍よりの繊維製品払下げを斡旋してほしい、というのである。

何のことはない江畑情報が確度甲であることを確認した結果となったのである。

当時、前述のように昭和十七年四月に結んだ日タイ通貨協定によって日本円とパーツ貨とが等価となったため、切下げられたパーツの価値を維持するために必要な裏付物資として日本より送られるはずであった金の延べ棒その他の有価物資が思う通りには実行されないばかりか、タイ側の物資統制に乗じて買い溜め、売り惜しみなどの悪徳行為が横行したので、市場はたちまち品不足の状態を来し物価は高騰していた。加えて、日本軍の軍費がかさむに伴いパーツ紙幣の増発をもたらし資金量が増してもこれに見合う物資の供給がないので、所謂インフレの様相を呈していた。繊維製品の著しい欠乏も値上がりも例外なく市民にとって不平不満の原因となった。

このような現象はタイ国朝野の人々の生活に直接影響を及ぼす大きな問題なので、日本側当局としても悩みの種であった。私は江畑情報によって婦人団体の動きは承知していた。しかし、まさか既知の二婦人が揃って直接相談にくるとは予想していなかったので面喰らったが、かねてより日タイ友好親善強化をはかるには婦人グループの協力を得ることが是非とも必要だというのが私の持論でもあるので、婦人集団の指導的立場にある二人の女性の申し入れをいかにしても叶えてやり、それを機会に私の持論、即ち友好親善強化推進工作に婦人層の強力な参加協力を取りつけることを実現したいと真剣に応じた。

私は、

インフレのため物価高騰を来しタイの人々の生活に大変な影響を及ぼしていることは日本の現地当局も何とかしなければならぬと思ひ悩んでいることである。申し越しの件は突然のことで果して満足な結果を得られるかどうか、わからないが自分は全力を尽くして軍当局と交渉し実現できるように努力するつもりである。お二人には平素仕事の面で色々協力してもらっているが申し越しの件については自分の方がお二人の役に立つようにつとめる番が来たようだ、

と答えた。

ラーシー女史は無理な願いを受け付けてくれて本当に有難い。もしこの願いが叶えられ、安価な品を入手できれば、我々の運動の資金源となる。自分達の運動はまだ準備の段階なので具体的な話をすることはできないが、何れ運動を開始することになれば真っ先に相談し協力を得なければならないと思っている、と感謝の表情を現して付け加えた。二人の申し入れの内容については江畑情報ですでに承知していたが、今ここで兩人よりはっきりと申し入れを受けしかもその運動で、女性に協力を頼むという私の望みが実現化することになるのであれば、どうしても彼女らの求めに答えざるを得ないと考え、その実現に努力することを約束した。二人は何度も宜しく頼むを連発しながら帰って行った。

翌日私は林隊長に戦時下タイ民衆とくに婦人層の不安動揺を緩和する一種の宣撫運動を展開するために、タイ上流婦人団体が運動資金獲得の目的でわが軍からの繊維製品の放出を斡旋してほしいと私に申し入れをしたと報告した。林隊長はかねてよりタイの対日協力提携の強化推進にはタイ民衆のエネルギーを利用することを意図していたので、私の報告は、まさに隊長の意図と一致し、わが意を得たりと大いに喜び早速軍司令部当局と交渉を開始するように私に指示した。

憲兵隊が軍司令官に事案の報告をする場合には本来、副官部か参謀部を通じて行うべきであるが、軍事以外のタイ問題については直接報告する、言わば木戸御免の慣行がつけられていたので（中村軍司令官は本国で元憲兵司令官だったので特にこの慣行を黙認された）、私は両夫人の申し入れの模様を、両夫人の憲兵隊に対する協力の実績などを含めて詳細に報告した。中村軍司令官はタイ上流婦人団体が自発的にタイ民衆、とくに婦人層を宣撫することによって日タイ協力提携の強化推進をはかる運動を展開するという構想に大いに賛意を示し、繊維製品放出について山田参謀長を始め幕僚、軍経理部の意見を求めて円・パーツ貨等価の裏付物資のうち両夫人の望む繊維製品の若干を放出することを決め、軍経理部に処理を指示した。

私は取あえず申し入れは軍司令官の認可を得たことを二人に伝え、物品の取扱いについては軍経理部の担当者と直接交渉するようにと担当経理官を紹介した。

37 新年早々より敵の空襲始まる

その夜、新年に入って初めての空襲があり、その規模は昨年末の時とほぼ同じ程度だが投下爆弾の数は前回をかなり上廻ると思われた。攻撃法は波状的で諸所に火災が起きたが被害は前回よりもいくらか少ない模様であった。ただ新年初めての爆撃とあって市民にとってはかなりのショックだったようである。

この夜の空襲を皮切りに、その後引き続き頻繁にやってくるのでバンコク駅一帯が焼野と化したばかりか、日本大使館や邦人住宅などにも被害が及ぶようになった。バンコクはあたかも無人の境を行くが如く、まさに何の抵抗も受けることのない空襲の好目標と化してしまった。防空施設としては日タイ両軍の地上防空機関の外は前述の如く見るべきものはない。市内には憂慮と不安の雰囲気は漂い、民心動揺の著しい兆しが見え始めた。[1944年雨期前のバンコク空襲は、1月10日、19日、2月5日、10日、3月6日、6月4日の順]

空襲が激しく続くので私はソムアン氏の母親サワデイ夫人に宮川通訳を介し、安否を尋ねるお見舞いの電話を入れた。

サワデイ夫人は空襲の被害も受けることなく至って元気で、それどころか空襲が激しければ激しいほど敵愾心が湧き、空襲による神経戦で日タイ離反をはかろうとするなら婦人団体のメンバーを励まして益々団結を固め闘志をかきたてて最後まで戦い抜く覚悟だと飽くまでも強気な返事であった。なお、繊維製品の放出については軍司令部の石村主計中佐より所望

の数量を受け取り、夫々市場へ流す処置をとっている、については中村軍司令官にお礼を述べたいので都合を聞いてもらいたいということであった。私はサワデイ夫人の申し越しの通り取り計らうと約束して電話を切った。それにしても大した気丈夫な婆さんだ、さすがにソムアン氏の母親だけのことはある、まさに女傑だなと宮川と話して笑った。

38 愛国婦人団体代表軍司令官に面会

数日後、サワデイ、ラーシー両夫人は私の案内で中村軍司令官を官邸に訪ねた。官邸は旧駐在武官官邸だった建物を臨時に軍司令官の居宅としたもので軍司令部構内の一角にあった。当日は空襲を避けるため早めの晚餐が中村司令官の心遣いで日本式の水たきで準備された。

ラーシー夫人は婦人団体代表として、ジェネラル中村がタイ愛国婦人団体の運動を評価され運動資金取得のために大事な物資を放出されたことに深く感謝する、と挨拶を兼ね丁寧なお礼を述べた。

中村軍司令官は二夫人の訪問を歓迎し時局重大な時に自国のため民衆の力を結集して難局を切り抜けようとする愛国運動を展開する健気な行動を賞讃して激励し、更に、

連合軍の反攻も活発化し現にバンコクに対する空襲も、また激しさを加えているので民衆の生活も日に増し困難になるだろうが、戦争というものはこちらが苦しければ敵方もまたこちら以上に苦しいのが常、この苦しさに最後まで耐え戦い続けることこそ勝利を克ち得る鍵である、この鍵を握るには日タイ両国が互いに固く手を握り団結を強固にして難局に当たらなければならないが、この関係を長く維持し最後まで提携協力を続けるには婦人団体の粘り強い底力のある支援と協力が今や欠くことのできない要素であるから是非とも愛国運動と日タイ友好親善を強化して対日協力の実りある活動に発展させられるように願ってやまない、

と、中村司令官は八つ手の様な大きい手を差しのべてラーシー女史とサワデイ夫人の手を次ぎ次ぎと固く握りしめた。

初対面の挨拶が終わるや一同は丸い食卓を囲み、中村司令官自ら水たき鍋の日本食の説明をするなど和やかな会食が始まった。

タイは仏教の国で信仰の篤い国、至るところに御仏の大慈大悲のお恵みの光が満ちあふれているので一度タイ国に足を踏み入れるや誰もが御仏の恵みの光を浴びて御仏のような情け深い心になる有難い国である、と中村司令官は賞め称え、次いで日本の紹介として、日本は小さい島国だが国民は天皇陛下を仰ぎ一致団結してこの困難な戦いを勝ち抜く決意で歯を喰いしばっている。また日本には周知のように富士山という日本一高い山が国の略々中央に美しく際立って聳え立ち国民の心を清くなごませる。更に富士山と同じような美しい景色の名所が数多く存在し国民に安らぎの場を提供する。日本には清潔で美味しい水がどの地方に行っても豊富にあり、飲用として飲む時でもいちいち煮沸しなくてもそのまま生で飲める便

利な国である。また日本には生の魚を細かく切り醤油をつけて食べる習慣があるが、これは世界の多くの国には殆ど見られないならわしであろう。これらのことは恐らく日本が衛生の心配をしなくてもよい自然環境に恵まれているからかも知れない。多くの国に知られている日本のものに桜花がある。桜は一度にパッと咲くが散るのも早いので日本人の気性に似ていると言われている。桜花の季節ともなれば日本各地で花見の会が催され美しい満開の桜花の下に敷物をしき料理をならべ、酒を飲みかわし民謡などを手拍子揃えて唄い踊り賑やかに楽しむ、ならわしもある。このために桜花を觀賞するよりも花見に名をかりて酒盛りやご馳走を食べることを目的とする催しに変えられてしまったので、人呼んで花より団子、つまり花見よりも酒宴を楽しむという滑稽な比喩となっている。戦争が終わったら一同そろって日本まで花見、いや花より団子、とジョークを混じえて説明したので笑いが続いた。

中村司令官はタイ語を習得中だったので、私にラーシー女史からタイ語を習いたいので交渉してくれと耳打ちをしたため、私は機会をみてかけ合うと答えた。中村司令官には往昔ドイツに留学中、語学の勉強には女性の教師の方が上達が早かったという経験があったためだとのことである。空襲の恐れもあるので会食は早めに切り上げられた。

39 タイ政府ペチャブンに移転

二月初旬タイ内務省は

先に国立煙草専売公社支配人サグアン・トゥラーラック一味五名は巨額の公金を拐帯し煙草原料買付の名目で一昨年（ママ）九月サイゴンに向け出発したが、その後の調査の結果北部仏印より重慶に潜入し在中国の自由タイと連絡しタイ国内攪乱の謀略宣伝工作を開始していることが判明した。この国家に対する反逆行為は断じて許せない、という意味の発表を行った⁵⁹。

この時期にタイ政府がこのような発表を行う真意は私には理解できなかったが、情報によれば政府のペチャブン遷都の口実の一つとするためだという。

私はサグアン氏逃亡の情報はすでにジャムラット警察少佐より連絡を受け特に自由タイの動向については全隊をあげて警戒中だっただけにタイ政府の公式発表は何か新たに重要な意味を含んでいるのではないかと思ったが、単なる遷都の口実に過ぎないというのではピブン政府の真意が奈辺にあるか疑いを抱かざるを得なかった。

正月早々のピブン政府のペチャブン遷都の噂は事実であり緊急勅令を出して実行することになったという情報が特高課より報告された。

敵の空襲を避けるためと自由タイの地下通敵行為を封ずるためだという理由であった。

間もなくピブン氏は政府機関や、手兵ともいべき一部の軍隊を伴って移転を始めた。ペチャブンの周囲一帯は、「外人立入禁止区域」に指定された。この無通告の早業には日本側現地当局は不意打ちを喰らった思いで大いに憤慨したが後の祭りであった。

情報によればピブン氏は大分以前から密かにペチャブンを首都移転の候補地として選定し

ていたので建設の準備もひそかに進められていたという。憲兵隊では隊長の指示によって特高課の二人の優秀な課員をペチャブんに遷都の実相を探查するために潜行させた。その報告によれば概ね次の通りである。

遷都市建設工事は国家財政より巨額の経費を支出し、数多の強制徴用によって得た豊富な労働力をもって幾多の犠牲をもちえりみず昼夜兼行で強行された。従って間に合わせたに建築された庁舎だが、事務の停滞をきたさないため取りあえず政府の各機関を言わば押し込め同様に収容している。設備も施設も不十分な環境の下で執務する職員の事務能率はあがらず、更には立地が非衛生的なため病人が続出し取捨困難な有様である。この移転は当初より無理だという部内の反対の声が高かったにも拘わらず強行されたが、案の定各方面で施設や設備の不備、欠陥があらわれ不満の声が次第に高まった。不満の第一は、公設の娯楽、慰安の施設を設ける余裕のない地域の選定とともに住宅設備の不備であり、都会生活の便利さに慣れてきた人々がジャングル地帯の草深い片田舎に移住するというためには、それ相応の準備がなければならぬはずなのに、この基礎的要件を欠いた無茶な移住策では家族の同伴も住宅不足で不可能であり、職員の生活に最低限の満足さえ与えることができていない。

第二は移住地の人口の急増に対し食料その他日用必需品の供給が円滑に行われていないことである、特に食料の供給が十分に行われていないことは移住者にとっては死活問題であるだけに深刻である。

第三は衛生管理の不十分、特に悪疫流行に対する対策の拙劣なこと。

第四には学童の教育問題の解決が不徹底であることなどである。

これらの問題は私達が正月早々遷都の噂を耳にした時に、すでに必要最低限の条件としてあげたものだが、それらの準備ができていない。この途方もない企画は到底決行されなだろうと余り関心をもたなかったが、現実に移転が行われた後の結果をみると、私達の当初予想していた通りの悲惨な現状となってあらわれ、移住者の不平不満が表面化する事態となってしまった。

タイ政府のペチャブンの移転は日本側現地当局も予知していたことだが、現実には決行されてしまうと、やはり衝撃であった。ことに日本大使館ではピブン氏に全面的に信頼を寄せていただけに、その驚きようは大であったが、次第に激しさを増してくる爆撃を避けるためには已むを得ないであろうと、ピブン氏の決行に賛意を表する向きもあったという。わが軍当局においては、まさかと思っていたことが現実には決行されたので一時は驚いたが、ピブン政府がペチャブんに移転したと宣言しても王室や摂政が依然バンコクに留まる限りは、公式な遷都ではなく、言わばピブン政府機関の一時的疎開であるという見解をとっていた。軍当局は、ピブン政府を刺戟するような交渉は避ける方が賢明だと考え、殊に憲兵隊の現地探査の報告によって遷都は必ずしも成功したとは言えず、欠陥の多い現況であることを知り、ピブン政府のバンコク復帰も時間の問題であるとして冷静に見守ることにした。

こうした或る日、軍司令部の浜田参謀副長室に、私は呼ばれた。Kも同席した。

浜田副長（ママ）⁶⁰が二人を呼んだのは、ピブン政府がペチャブンへ首都を移したことに
関して意見を求めるためであった。副長はピブン政府の首都移転は一時的疎開であって永く
は続かないと思うが、軍が作戦上緊急の事項を要求する折衝の場合に時機を失することがあ
るとすれば、重大な問題である、幸いに軍としては日タイ連絡事務局〔日泰同盟連絡事務
局〕がバンコクに残っているので目下のところは、支障はないが、ピブン政府の行政機関の
大部分が移転してしまったので迅速かつ円滑な連絡交渉ができない、まことに困った事態と
なってしまったが、今後どうするかについて意見を述べてほしい、と言うのであった。

私は副長の求めに応じて、先ず次のように述べた。

タイ政府の戦時下における首都移転という異常事態に対して憲兵隊は独自に探查班を現
地に潜行させ実状を探查したが、その結果首都の移転は明らかに失敗と思われる。とい
うのは立地の選定を誤ったこと、まだ十分に準備の整わないのに急に移転を執行したた
め、職員は日夜惨めな生活を送らざるを得ないので部内に不平不満の声が絶えないばか
りか、なかにはペチャブン生活に堪えられず密かにバンコク方面に逃げ帰る者さえある
という。従って副長の予測通り、この状態は永く続かないだろう。この詳細は憲兵隊よ
り正式に書類報告する予定になっている、と。

次いで副長はKに意見を求めた。

ピブン氏の軍に対する度重なる消極的協力態度といい、何ら事前連絡もなしに突然の首
都移転決行など、非友好的で奇怪な行動の続く限り、わが軍との協同作戦の積極的意図
を欠くものと認めざるを得ない。最早ピブン氏を支持することを見直す時機が到来した
のではあるまいか。これを契機にピブン氏に代わる親日の人物を政権の座に据え、少な
くとも日タイ協同作戦の妨げとならない親日政権を樹立する工作を進めるべきではない
か、と。

これに対し副長は、政権交代などという問題に軍は介入すべきではない。友好国に対する
内政干渉となる、と答えた。

副長は更に私に意見を求めた。

ピブン氏の態度からは明らかにわが軍に対する協力の度合いが低下していると言えること
は、K参謀と同意見であるが、ピブン政権に代わる親日政権を樹立するなどということ
は、タイ国民が自発的に行うことであり、日本側が介入することはできないことは副長
の述べた通りだと思う。従って親日政権樹立の工作は、あくまでタイ人民代表議会を通
じて合法的に達成されるように広く政界に働きかける工作を展開する必要があると思
う、

と、私は述べた。

副長は

両名の意見に同意するが、ピブン氏支持を変更することは中央の重大な外交政策を転換

することであり、現地軍の一存で決定できることではない。この問題は現地軍としては参謀長の意図も聞き十分協議を重ね、軍司令官の決裁を得た上で軍としての態度を決める必要がある。だが、このこととて中央が承認するかどうかは疑わしい。しかし、タイ軍と日々直接協同作戦に従事しているわが現地軍が、タイ側のわが軍に対する協力を当てにできないとあっては今後果して協同作戦の実を發揮することができるかどうか、まことに心配である。従ってわが現地軍としては中央のピブン氏支持の方針がいつ変更されても対応できるように、万一の場合を考えピブン政権に代わる親日政権を迎える用意をしておかなければなるまい、その意味において二人とも夫々の分野で抜かりなく準備をしてほしい、

というのであった。

私は隊本部に帰り林隊長に、副長の意図を報告した。隊長は我々の考えの通り、軍もいよいよピブン政権交代工作に乗り出すことになるな、と満足そうであった。私はピブン政権に代わる次期政権担当人物の物色を林隊長より指示されたので森特高課長と根木特高課員に隊長の意図を伝え、タイ政界の親日分子物色の活動開始を指示するとともに、自ら各連絡者の意見を徴しピブン氏に代わる政権担当の能力ある人材を選定する仕事に着手することにした。

40 憲兵隊長の交代

この頃は南太平洋方面において敵の反撃作戦の火蓋が切って落とされ二月上旬にかけてマーシャル群島の島嶼、ラバウル方面に点在する小島など、日本軍の占領地域が次ぎ次ぎと奪回され守備隊の玉砕という悲劇が相次いで起こった。戦況はまさに重大な局面を迎えた。

タイ国に対する爆撃作戦は敵の大反撃作戦の開始の兆しと受けとられタイ国内の緊張が高まるとともに空爆もいよいよ熾烈を極めた。

林隊長は敵の反撃作戦開始に当たり隊内の態勢を刷新するため人事異動を行った。即ちカンチャナブリー分隊長の山本少佐がインドネシアに転勤したのでその後任に特高課長の森大尉、特高課長の後任には特高課員の岩崎〔禮三〕⁶¹大尉（後少佐）を任命した。

二月一日付（ママ）で林清隊長は内地の憲兵司令部付となって転勤し⁶²、その後任に同司令部より徳田豊大佐が二月中旬頃赴任してきた。私は隊長の次級者として徳田新隊長に憲兵隊の現況とタイ事情について報告した。特にピブン政府のわが軍に対する協力の度合いが低下の傾向にあるので、警戒を要することを強調した。

徳田隊長は着任後間もなく警務部長、特高課長、警務課長並びに各分隊長及び無線探査班長を隊本部に招き敵の反撃作戦の激化傾向に鑑み隊内的には精神の緊張と士気の高揚を、隊外的にはタイ側との友好親善を一層強化することを統率方針とすることを示し、服務に当たっては前隊長が指導規範として定めた勤務要綱に基づいて行動するようにと訓示した。

私は、暗躍を活発化させた自由タイが、ピブン政府の対日協力の消極化に乗じてタイ政府

と密絡し、日タイ協同作戦の妨害を企てるおそれがあるので、不断の探査が必要であると、特に進言した。

三月上旬より中旬にかけてニューギニア方面の日本軍占領部隊は周辺の島嶼に散在する陸海軍守備隊の相次ぐ玉砕によって孤立化するという重大な危機に直面するに至った。他方三月中旬よりチャンドラ・ボース氏の自由印度仮政府の印度国民軍が日本軍のインパール作戦に呼応し協同作戦のため一斉にビルマより進撃を開始した。まさに戦雲急を告ぐるの様相を呈した。

欧州方面では米英連合軍とソ連軍とが東西一斉にドイツ、イタリア枢軸陣営攻撃の作戦行動を開始し、戦局は次第に緊迫の度を加えた。

41 敵機に便乗したスパイ、タイ国内に降下

三月初旬の或る夜、バンコク上空に飛来した敵機の編隊が西方に飛び去ったが、翌日カンチャナブリー分隊から昨夜飛来した敵機の編隊より若干の人員が地上に降下したという住民よりの聞き込み情報を報告してきた。

隊本部より特高課員を分隊に派遣し情報を確認した後、徳田隊長（ママ）は森分隊長に対して徹底的に捜査するように命じ、三名の本部特高課員を臨時応援のために配属した。森分隊長は直ちに捜査隊を編成し自ら捜査隊長として憲兵を主体に補助憲兵若干名を加えて第1～第3捜査班に分け、タイ警察当局とも密接な連絡を取って共同で容疑地域内の捜査を開始した。タイ側は主として住民よりの聞き込みその他の情報収集と道案内の役割を引受けて協力した。

各捜査班は夫々担当地域を三日間、捜査を懸命に続けたが遂に第1班がウタイタニー県内の或る村落に潜伏中の数名の降下スパイを発見し急襲してこれを逮捕するとともに小型短波無線の送・受信器、暗号書、被服、多量の食料などを押収した。

カンチャナブリー分隊ではタイ側との関係上、一応、逮捕者をタイ当局に引渡し取調の上容疑関連事項を日本側に通報することを確約させた⁶³。

私は隊長の指示により憲兵の立場より諜報活動について、また軍司令部のK参謀は作戦上の見地より、軍事情報について夫々スパイ容疑者を取調べることとなり二人は取調の打合せを終え早速ジャムラット警察少佐を通じてタイ側にスパイ取調の件を申し入れた。三月下旬の或る日の午後、蒸し暑い日であったがトンブリーの或る華僑の居宅の一室でK参謀と共にジャムラット警察少佐の立会の下で二人のスパイ容疑者の取調を行った。

スパイ容疑者の一人、サムロンというタイ人らしい名前を名乗る少佐は中背の精悍な面構え、ブンナークというこれまたタイ人らしい名前を名乗る大尉は小柄のアゴの張った頑健そうな男であった。

Kと私は交互に敵側の軍事情報、諜報活動について訊問したが二人とも口を閉ざして多くを語らなかった。

軍事情報については二人とも口を揃えてインド方面の英軍の兵力・装備の優秀さ、特に空軍兵力、戦車軍の優勢は断然日本軍を圧倒すると悪びれることなく昂然と言いつつ放った。しかし兵力の配備、数など具体的なことについては極力陳述を拒んだ。

諜報活動については一切知らぬ、存ぜぬの一点張りだったが、落下傘降下については上司の命令によりカルカッタを発ちタイのウタイタニー県のジャングル地点に降下し、無線の受信その他通信連絡に必要な不可欠の器材、携帯衣食を落下させ、タイ国内の日本軍の動静を探って報告することになっていたと述べた。

ジャングル内の秘密飛行場の建設については、二人とも見当がつかないと言いつつ張って要領を得なかった。一応の取調の終わった直後、ジャムラット警察少佐は私に未確認情報としてスパイは海外自由タイ本部よりプリディ宛の重要文書を携行しているという疑いがあると耳打ちした。この二人の取調の報告によって、現地軍も憲兵隊もタイ国内の他地域におお秘密飛行場の建設の疑いがあるとして夫々容疑地域の探査に当たり、特に憲兵隊においては前回と同様3箇の捜査班を新たに編成して敵性飛行場の発見のために活動を開始するとともにジャムラット警察少佐が伝えてくれたスパイの第二摂政〔プリディ〕宛秘密文書携帯の情報に関する捜査を、本部特高課を主体として南北両分隊の担当憲兵増援の下に始めた。

42 ソムアン氏自由タイについて語る

タイ国内に自由タイの地下組織が存在しているという噂が一昨年暮れのバンコク初の敵機空襲以後バンコク市内に風説の如くに流れていたが、私にはその存在がはっきりとはつかみ得ず、多くは幻の影に怯える類いではないかという疑念があった。しかし、バンコク初空襲以後、タイ側の対日態度が、非友好的で奇怪な行動として現れることがしばしばあったので、背後に離日的要因となる何かがあるに違いないという感じを抱くに至った。無論その何かというのは自由タイの実像を想像したわけではないが、われら防諜機関の警防の対象として現れる自由タイなるものについて、スパイの取調を終え数日を経た或る日、同志ソムアン氏を宿舎に招いて意見を聞くこととした。ソムアン氏は夕食を終えた後軽装でルノーを運転してやってきた。私は連日の空爆にも拘わらずソムアン氏が元気な姿を見せたので何よりも喜ばしい限りだ、と迎えた。

敵は神経戦の一環として空襲を行うのかも知れないが、われら同志は却って敵愾心が募るばかり、どうして白人勢力に屈することができようか、我々は最後まで頑張らなければならない、とソムアン氏はまことに意気軒昂、頼もしい発言をした。私は先般、母上との電話で度重なる空襲に慰問の会話を交わしたときの母上もソムアン氏と同じようなことを言われ、私達日本側を力強く励ましてくれたとソムアン氏に伝えると、ソムアン氏は、母は気丈な人だと言って苦笑した。

さて、私は警防任務の参考のため自由タイに関して知りたいと、ソムアン氏に次のように尋ねた。

大東亜戦勃発後、駐タイ英国公使クロスビーがタイを離れ帰国する際タイ国内に残置したスパイ群が潜伏しているとか、一昨年（ママ）暮れに公金拐帯したサグアン・トゥラーラックが中国にあって、タイ国内の地下組織自由タイと密かに連絡をとってスパイ活動を行っているとか、また最近では、先般の空襲の際スパイ数人がタイ国内のジャングル地帯に造られた秘密飛行場に降下して自由タイと連絡をとっているとか、更には、降下したスパイがプリディ摂政宛の密書を携帯しておりいずこかに潜入したとか、まるで見て来たような噂が乱れ飛ぶのであるが、具体的な事実が動きとして浮かんでこないで今なお半信半疑の状態である。果してタイ国内に自由タイなる地下組織のようなものが存在するのであろうか、同志ソムアンはどう思うか、と。

これに対しソムアン氏は概要次のように意見を述べた。

自由タイは地下組織であるから一般の人々には知られていないが潜在していることは事実である。我々グループにはそのメンバーも略々見当がついている。政府要人のなかにも自由タイと関係をもっている疑いのあるものは、何人かはいる。しかし、もともと国内の自由タイはピブン政権打倒をはかる言わば反政府グループである。一方、海外の自由タイと称するものは、ピブン政権の対日友好親善政策を妨害して日タイ離間をはかる目的で、或は懐柔調で或は恫喝的な宣伝文句を駆使してタイ向け謀略放送を行い、ピブン氏の精神を動揺させる、所謂神経戦を企図しているグループであり、連合軍の作戦の末端組織であることは想像に難くない。国内と海外の両者は、電波や秘密文書などによって或る種の交流があることは疑いない。しかし、ピブン氏の心が動揺し、その宣伝に惑わされたとしても反日的行動を実際に表に出すことは先ず不可能であるから、せめては日本側に対して灰色的ポーズをとることによって、敵側に必ずしも対日一辺倒でないことを見せているのであろう。その点がわれら、日本と運命を共にすることがタイの永遠の国益であると確信しているグループと、ピブン氏一派並びに敵性自由タイとが根本的に異なるところである。何れにしてもタイ内外の敵性自由タイがピブン氏の灰色政権と提携し反日・抗日運動を展開する虞が全くないとは言えないので、われらグループは自由タイの暗躍を封じる意味においてもピブン氏の灰色政権に代わる強力な戦時内閣の出現を望むものである。先に政府要人の中にも自由タイに関係をもつ疑いのある者もいと述べたが、現政情下ではそれらを明らかにできる段階ではない。彼らは現下の日タイの動静をよく知っており、露骨な反日、反政府的行動に出るほど愚かではないので、その偽装、隠密な謀略行為には細心の警戒を要する、

と言うものであった。

自由タイに関するソムアン氏への意見聴取がはからずもピブン氏灰色政権の交代論にまで発展した。私は引き続き質問した。「自由タイの地下活動はピブン政権の打倒をなし得るか」、と。彼は、

ピブン政権の打倒は国内自由タイの地下活動では無理である。われらのグループの勢力

が他の反ピブン勢力と提携すれば十分可能性はあるが。但し、国内自由タイの、ピブン政権打倒の目的が、日タイ協同作戦に非協力的な政権の樹立を目指し密かにその組織の拡大強化をはかることであれば、たとえ打倒実現の勢力にまで成長することはできなくともわれら戦争完遂強力政権の登場をはかる親日グループの運動の妨げとなるので、その点については大いに警戒を要する、

と応じた。

私はまた自由タイに関係ある容疑の政府要人はプリディ摂政と何らかのつながりがあるだろうかと、かねてよりとかくの噂のあることを聞いていたのでさりげなく尋ねた。と一瞬、ソムアン氏は狼狽の色をみせ慌てて手を振って否定した。

プリディ摂政が自由タイに関係ある政府要人と直接的につながりがあるとは信じられないが、愛国者のプリディ氏は危機に際会した場合には、これを救うために已むを得ず自由タイの一部分子を利用することもあり得るであろう。しかし、目下のところその動きはないが、もしその動向がピブン政権打倒の目的を超えて発展する場合、即ち日タイ間の盟約を妨げるように変貌するならば、われらのグループは断乎として反対の立場に立ち阻止する用意がある、

とソムアン氏は深刻な表情で言い切った。

私は自由タイと関係している政府の要人とは警視総監のアドゥン氏ではないかと単刀直入に尋ねた。私は、プリディ氏は自由タイと関係があるとか、アドゥン氏はプリディ氏と接触があるなどという情報を前々より耳にしていたからである。

それは想像にまかせるが、その要人のうちの主たる人物は陰険極まる性格の男でピブン氏の権勢におもねることがないばかりか時としてピブン氏を酷評するほどの冷たい目で眺めることもあり警察行政の名の下に他政府機関との協調性を欠くなど、果して戦時下のタイ国のために積極的に職務を遂行するかどうかも疑わしい、厄介な存在であることは確かである。彼は恐らくピブン政権に代わるいかなる政権に対しても積極的に協力しようとはしないだろう。アドゥン氏とプリディ氏とが親密な関係にあるというのは噂に過ぎない、言わば風説であろう。もし両者に接触があるとしても、それはプリディ氏がアドゥン氏の地位を救国のために利用しているに過ぎないだけだと思う、

とソムアン氏はいささかプリディ氏の立場を擁護する口調で説明した。

国内の自由タイがピブン政権打倒を目的として暗躍しているとすればピブン氏は当然監視警戒の措置をとるであろうが、もしこの両者が合流して日タイ間の盟約を損なう反日運動に変わるようなことになれば当然日タイ協同軍事作戦に決定的な支障を来すことになる。そのような事態となった場合どう対処したらいいだろうか、

と私は最後の質問を発した。

そのようなことが全く起こらないとは言えないが、元来両者の暗闘は、中国における国府軍と八路軍との関係とは異なる。即ち、中国では両者の主義主張は根本的に異なる

にも拘わらず抗日戦線形成という共通の目的では一致していたので合流できたのだが、タイの場合は権力闘争つまり奪権闘争に過ぎないので、合流することはあり得ないと思われる。

タイの軍隊の指導者の多くは親日か中立的で、統率力も優れているので、ピブン政権が自由タイと合流して日タイ協同作戦の妨げとなるような動きをしても、各軍が一致協力して防止するであろう。ただ警察軍の動向については予測し難いので不断の監視警戒を必要とする、

とソムアン氏は説明してくれた。

ソムアン氏によれば警察軍の動向以外は自由タイの政府機関に対する暗躍、恐るるに足らず、である。私は自由タイについての疑念がソムアン氏の説明で略々氷解したので、丁寧にお礼を述べ、ソムアン氏の家族宛に予め用意していたケーキを託して、再会を約して門前まで送った。ソムアン氏は空襲があるかもとつぶやきながらルノーを駆して帰った。

ソムアン氏の説明では自由タイとの関係においては、軍部は心配ないが、警察軍だけは油断がならないと言う。警察行政の最高責任者アドゥン・デーチャジャラット氏の態度が親日的でないための懸念であろうか。もしそうだとすれば政府要人のうち自由タイに関係ある人物とはアドゥン氏のことであろう。ソムアン氏が語った、プリディ氏が自由タイやアドゥン氏を救国のために利用しているかも知れないということは、如何なることなのかよく理解できなかった。プリディ氏が覆面を脱いだら自由タイの領袖だったなどということにならないだろうか。ソムアン氏の父プラ・サラサス氏が革命時代に武断派だったピブン氏よりも文人派の巨頭だったプリディ氏に近かったので、ソムアン氏は父の同志プリディ氏が自由タイの代表的存在であることを知りながら、それとなくかばっているのではないかという疑念も私には湧くのであった。

翌日の日曜日に、私は徳田隊長を訪ねソムアン氏の自由タイに関する説明を報告し、特に警察軍の動向には注意を要することを強調した。

その後間もなく（ママ）、林前隊長の構想で懸案だった日本憲兵将校とタイ側警察将校の社交クラブが徳田隊長の官舎の近くに開設された。

このクラブでは、日本軍の軍費としてタイ政府より供給されているパーツ貨の裏付物資の一部が安価で販売され、また、委託食堂経営者を雇用して飲食のできるようにし、両国の警察関係の将校が自由に入出入りし懇談、連絡などに利用し親交を深めることができるようになっていたので利用者も多く先ずは所期の目的を達する如く繁昌していた。

43 タイ青年愛国党深夜の謀議

西欧における枢軸陣営の戦況が日に悪化の一途を辿る一方、東においても連合軍の反撃が次第に活発化し、バンコクに対する空襲も激しさを加えるにつれ市民の不安が高まった。この連日の空襲で朝野の人心の動揺が日毎に募り反政府的な動きも漸く表面化し、親日的分子

は白眼視され不穏な雰囲気さえ漂うような世相となった。

昭和十九年四月上旬の或る夜、ヤワラート街のPクラブの一室で、私と極めて親密な関係にあった親日愛国青年ソムアン・サラサス氏によって結党されたタイ青年愛国党（本稿第12項参照）の時局に対する秘密会合が行われた。私はソムアン氏よりオブザーバーとして出席を求められたが、ピブン現政権に批判的なグループの会合に日本憲兵隊の将校が出席することは不適切と判断し、ソムアン氏の了解を得て部下のM〔水野〕曹長（タイ語に堪能）を、宮川通訳を伴い出席させた。

会議の様子はMの取材によって次の通り。

日時 昭和十九年四月十日 自二十二時至十一日三時

出席者 S陸軍大尉、K海軍少佐、N空軍大尉、M内務官僚、O外務官僚、T文部官僚

会議の冒頭に議長（タイ青年愛国党党首）ソムアン・サラサス氏は次のような挨拶をした。

周知の通り時局はいよいよ重大かつ深刻化してきたので、党员として率直な意見を述べてほしい。日本本土に対する敵の空襲は日毎に激化し、軍事施設には勿論、他にも無差別な爆撃さえ行われていると聞く。南方の島嶼を占領している守備隊も次ぎ次ぎと敗北している。

一方、西欧では一九四三年イタリアのバドリオが枢軸陣営より離脱して以来ドイツ軍の戦況も次第に悪化している。

米英軍は破竹の勢いでドイツ国内に侵入し、ソ連軍もドイツ東部国境を突破して怒濤の如く進撃している。わがタイにおいては敵の空爆がご承知のように激化し、国民大衆の日常生活機能さえ麻痺しかねない。

ピブンはバンコクに在住する日本の軍民の施設に対する空爆の巻き添えを食らうことを恐れて、中央行政機関の大部分と防衛軍の一部を伴ってペチャブンに移転してしまったのでバンコクに残っている政府機関は出先機関に過ぎないものばかりであって、事実上バンコクには政府は存在していないのである。

以上の厳粛なる事態を総合観察するとタイを含む枢軸陣営の敗北は必至と思われる。かかる情勢におけるわが青年愛国党としては、今後いかなる考えをもってこの難局に立ち向かうべきかについて意見の開陳を望むものである。

青白い秀でた額に汗をにじませ幾分顔面を曇らせながら鋭い眼で会場を見回した。ソムアン氏の挨拶が終わるや最初に手をあげて発言を求めたのはS陸軍大尉であった。

S、結党の基本方針から考えても党発足当時の同志各位の不動の決意から言っても戦局が幾らか悪化したからと言って、少なくとも我等同志の間に動揺が起こるといふようなことはあり得ないし、ましてや党発足当初の不動の決意を変えるなどということは絶対にあり得ないこと、またあってはならないことだ。われらは飽くまでも結党の目的、方

針を貫徹することを更めて確認し合おうではないか

O, S大尉の発言はまさに正論だが、ここで考えなければならないことは、我々は飽くまでもタイ人であり、決して日本人でもドイツ人でもないと言うことだ。愛国と言うことは我々が祖国タイを愛することである。これだけ言えばS君始め同志各位は、自分が何を言おうとしているかお察しがつくことと思う、

とS大尉の発言に半ば反発するようなことを述べた。次いで発言を求めたのはK海軍少佐であった。Kは静かな口調で発言した。

K, O君の発言は謎のような話でよく判らないが、はっきり言えば枢軸陣営からタイは離脱すべきだということなのか、

とO氏の発言に疑問を投げかけた。

O, はっきり言うともまさにそういうことだ。ただ問題はそれを決行する時期、順序、方法である、

と答えた途端、「黙れ！」激しい怒声が起こった。「今さら何を言うか」とソムアン氏以外の他の同志が一斉にO氏に詰めよった。ソムアン氏はいきり立つ同志を制し

ここは喧嘩口論をしたり暴力を振ったりする場ではない。討論を尽くす所だ。タイを愛する者の中にはO君のような意見をもつ者もあるに違いない。この際タイ人として冷静に祖国タイの将来を考え思う存分の意見を述べることを望む、

と注意を促した。同志達の発言を黙々として聞いていたM内務官僚は静かに発言した。

M, O君の意見は確かに大事な一つの意見であると考え。このように時局の悪化した今日では愛国者として一大決意を要する重大な時期に直面していると思うが同志各位はいかがであろうか、

と同志一同の決意を改めて促した。これまで一言も発せず専ら他の意見の聞き役に廻っていたN空軍大尉は早口で発言した。

N, わが愛国党は、タイが日本と同盟を結び圧倒的に優勢な連合相手とに戦争を開始した当時、アジアは一つ、アジアはアジア人の手にというソムアン・サラサス党首の主張に基づいて白人の勢力をアジアより駆逐する年来の宿願を達するため、日本と提携、協力して飽くまで戦い抜くという固い決意の下に結党して立ちあがった。枢軸陣営の戦況は今や日毎に不利である。しかもイタリアのバドリオはわが陣営より離脱して連合軍に投げ明らかに反旗をひるがえし節操を曲げ裏切行為をした。一方タイに対する敵の空襲も益々激しさを加え人心動揺の神経戦を狙っている。だが我々は一体これまで苦しい生活に堪えながら何のために戦ってきたのか。日本と互いに手をとり合って最後まで我々の信念、即ち日本と運命を共にするという固い決意を貫き通すためではなかったのか。しかるに救国に名を藉りて手の平を返したように枢軸軍より離脱したらどういうことになるのか。タイは信義を踏みにじる信頼のおけない劣等国として彼我両陣営より笑ひ者

にされかねない。しかも一度このような決定的な汚点がついてはその信用や名誉を挽回することは一朝一夕にはなし得ない至難のこととなる。不幸にしてこの戦争が敗北に終わろうとも、タイは最後まで盟邦を裏切らなかつたということになれば平和の日を迎えたときには国際的にも高い評価を受けるであろう。われ等同志が祖国タイを愛するならばこの際、日本との盟約を忠実に守って最後まで戦い抜くという決意を新たにしなければならぬと断乎主張するものである。この事が即ちタイが永遠に国際的社會において対等の国交を維持することのできる道と確信するものである、

と言うのであった。T 文部官僚は同志の意見の開陳が一通り終わったので自分の意見を述べるとともに次のように提言した。

T、自分は最後まで日本と共に戦い運命を共にする決意である。同志各位の熱意あふれる愛国的意見は、要するに枢軸陣営より離脱するか或は飽く迄まで日本と共同して戦争終結まで戦い抜き運命を共にするかどうかという二つの意見に分かれると思う。それではここで同志、ソムアン党首の意見を聞こうではないか、

というのであった。無論この提案は異議なく全員の賛成を得た。ソムアン氏は同志の要望に答え舌端火を吐く熱弁を揮って次のように述べた。

自分はO君の述べた通り同志諸君と同様に紛れもないタイ人でありタイを愛する点では恐らく何人にも劣らないつもりだ。それだからこそ名誉ある愛国党の党首に推されたものと思う。そこで自分は愛国党の党首として、祖国タイの危急存亡の重大事態に直面して、タイはいかにあるべきかについて意見を述べたい。日本は確かに比較的強大で知能と言ひ、作戦能力と言ひ連合軍をはるかに凌ぐものを持っており東亜圏内の指導国としての資格を十分備えていると思うが、何しろ地球上の大部分の資源を確保できる可能性のある連合軍と物量戦を続けるのでは、その勝敗は自ずから明らかである。つまり日本の敗戦、従って枢軸軍の敗北は必至である、

と一旦言葉を切り一同を見廻し、ちょっと間をおいて再び続けた。

しかし、ここで同志諸君と共にもう一度考えてみたいことがある。それは何か。それは即ち日タイ間のこれまでの関係つまり日タイ間の歴史的、伝統的に親密な関係並びに開戦当初に締結した日タイ軍事同盟が現存することも想起し、タイの将来はどうあるべきかを総合的に考え合わせることである。わが愛国党はタイの歴史の一頁を飾る山田長政の故事、更には両国がいずれも仏教国であるという言わば仏縁という関係にあることも再認識し、東亜の指導国たる日本と提携し永年の宿願だった白人帝国主義勢力を一掃するという理想を高く掲げ、いわゆるアジアは一つ、アジアはアジア人の手にをモットーとして発足したものだ。

この最高の目的を達成することこそわが党の尊い使命だということを慮り、幾多の苦難に堪えて今日まで日本と密接に提携し戦い続けてきたのだ。もし不幸にしてこの大戦が枢軸軍に利あらずして敗戦という世紀の最大悲劇を招くとしても、その国土は勿論、

民族も宗教も文化も決して消滅することも滅亡することもない。むしろ敗戦という厳しい試練を受けた民族は却って復興の逞しい民族的エネルギーを発揮し国家の再建をはかり素晴らしい成果を挙げるであろうということを自分は強く信じて疑わない。日本民族はそのような素質と能力を十分に持っているのだ。タイは事態がいかに悪化しようともイタリアのバドリオの轍を踏むようなことがあれば、今後国際社会に伍して他国と対等の交際を続けることは困難となり相手にされないこともあり得るのだ。

結論的に言えば、わが青年愛国党は日タイ軍事攻守同盟を忠実に守り両民族の不滅の宿縁を維持することが党として取るべき態度である、ということを強く主張するものである。

「それでこそ真のわが愛国党だ。党首の意見に全面的に賛成、愛国党万歳！」の叫びが期せずして起こった。

次いでこの会議で飛び交わされた党員の意見をまとめた党の決議（宣言）文を作成して会議を終えた。

クラブ周辺の庭木が夜露を吸って濃緑の色彩が色濃く映えて無気味に静まり、降るような無数の明星が夜空にきらめき、この上もなく美しい深夜であったが、明日はまた激しい爆撃を受けるかもと案じながら M 軍曹は取材を終えて帰隊した。

44 軍の長老プレイヤー・パホン将軍との私的会見

愛国党の秘密会合の報告を受けてから数日後の或る日、江畑通訳よりプレイヤー・パホン将軍が日本の中堅将校と私的に話し合ってみようという意向をもらしたと連絡してきた。プレイヤー・パホン将軍は、現職の激務には堪えないがタイの元老的存在である。私は彼が我々に何を言おうとするのか、何を求めようとするのかに関心を抱き喜んで招きに応じた。

会見場所は江畑の選定した、シーピヤの江畑夫人の親戚の邸宅であった。邸宅には芝生の手入れの行き届いた広い庭園があり庭園には色とりどりの美しい花で飾った長方形の花壇が点在し美観を添えるばかりでなく清潔な感じを与えた。この美しい、感じのいい庭園に囲まれた邸宅は瀟洒で、黄色で外装された二階建であった。

会見は広い応接間で江畑の通訳によって始まった。空襲を考慮し昼間の午後一時である。

将軍は肥満の巨体をいくらか不自由な右脚に托し紺の背広姿で現れた。私にとってはタイ軍の長老と親しく対談できることは感激であり光栄なことであった。私は白髪、赤銅色の堂々たる風貌に接し、いささか威圧を感じた。老将軍は、

昭和十七年四月、日タイ攻守同盟締結の慶祝のためタイ国の団長として訪日し至る所で温かい歓迎を受けたことは、忘れ得ぬ感激である。日本の国民が老若男女、一致協力して大戦を戦い抜くという熱意に燃え日々の仕事に励んでいる姿を見て深く感銘を受けた。本日友邦日本の中級士官と親しく懇談のできることは喜ばしい限りであり、大変意義深いことと思う。そこで先ず第一に戦局の見通しについて意見を伺いたい。連合軍の

反攻作戦も最近いよいよ本格化寸前の様相を呈し前兆として空襲も激しくなってきたが将来戦局はどのように展開すると思うか、決戦も間近いこの時期に日本軍の中堅士官に戦局の推移についての判断を聞くというのが今日の対談の主たる目的だ、と落ち着いた口調で話し出した。

私は戦局が重大な局面を迎えた現在、パホン將軍のような質問に対しては、たとえ私的な意見であっても軽々しく答えることはできないのである。何故なら仮に終局において日本軍の勝利などと答えた見え透いた強がりを行っているということになるし、また敗戦は時の問題などと云ったらタイ側に決定的な不安感を与え離反の因となりかねないからである。日本軍、枢軸軍の情勢不利などというようなことは絶対的禁句となっているので不用意な口外は許されない。返事に窮した私は折角意見を求められたにも拘わらず適切な答えができないので、已むを得ず飽くまでも個人の意見であると前置きして次のように述べた。

彼我の戦力の比較においては、日本軍は作戦能力、知能、統帥、兵員の素質、訓練の点では決して敵軍に劣らないと確信するが、敵側は作戦に必要な資源、物資を測り知れないほど、巨大に保有しているので、その物量を投じて反攻作戦に転ずることは必至である。とすればわが枢軸軍は連合軍の圧倒的に大きな物量と戦うことになり今後は容易ならざる局面を迎える覚悟が必要だと思う。とは言うものの、わが枢軸側においても世紀の命運をかけた大戦争であるから、そう易々と引き退がるわけにはいかない。仍って枢軸側も周到かつ巧妙な作戦を展開し反攻の敵に対して一大痛撃を加えるためあらゆる分野をあげて着々と戦備を整えているので両者の次期攻防においてはわが陣営の輝かしい戦果を期待している次第である、

と私は一見希望的な判断を述べざるを得なかったのである。

パホン將軍は私の見解に略々同意したが、続けて次のように述べた。

戦争は有形無形の各分野の力が結集されてこそ偉大な成果を発揮するのであるから徒らに精神主義に頼るだけでなく作戦に必要な物資を収集し開発して戦いに臨むという方針で準備を進めているということは結構なことであるが、枢軸軍の勝算については、どう考えるかという角度の質問である、と。

今の段階では勝敗を予断することはできないが少なくとも決定的打撃を加えることのできる戦力を整えていると確信する。日本には負けつづりをよくするという言い方がある。つまり勝敗は時の運、勝つ者があれば負ける者も必ずあるのであるから、たとえ不幸にして負ける側にまわっても最後まで悔いのないように全力をあげて戦い、決して見苦しい負け方をしないということである。我ら枢軸軍もこの精神で戦い抜きたいものだ、

と、私は答えにならない歯切れの悪い答えをした。

これに対しパホン將軍は、

戦争というものは、こちらが苦しければ相手はそれ以上に苦しい状態にあるものだから、最後まで砕けることなく頑張って見事な堂々たる戦果をあげることだ。タイは日本と攻守同盟を結んでいるが十分に協同の実があがっていないことは甚だ遺憾である。我々はお互いに東洋民族としてがっちりと手を結んで（彼は私の手を固く握りしめ、このように組んで、と言いながら）最後まで戦い抜くつもりだから、その点をよく理解して日本軍側にも伝えてほしい。最近敵の空襲が激しくなり、タイ政府機関の大部分がペチャブンに移転してしまったので国民一般に不安動揺の兆しが見えるが、多少の動揺は戦争においては当然であり治安に影響するほどのことではあるまい。自分は軍の長老として最後まで日本と運命を共にする決意であり、自分の側近もその覚悟である。ただ政府上層部は近頃対日態度が非協力となったのではないかという疑いがあるので憂慮に堪えない。そうかと言って自分が現政府に代わって政権の座に着くには老齢に過ぎる。しかし、自分は志を同じくする親日要人と協議し時局に対する思い切った対策を講ずる用意がある。現下の非常事態にあっては、若い世代のエネルギーが必要であることは歴史の教えるところであり、自分は親日的で愛国心に富んだ壮、青年層の勢力を結集して時局に対処するための強力な運動を展開するように働きかけている。日タイ両国は互いに固く手を握り合って最後まで戦い抜こうではないか、

と再び私の手を握りしめて強く振った。

パホン将軍は老齢の故に第一線を退いているが、国家の危急存亡にかかわる重大な局面に際会して救国の情熱をもやす態度は気高く尊敬に値するものであった。

対談を終えた後私は、パホン将軍が私のような微力な者にいかなる理由で会談を求めてきたのか暫くの間、疑問をもった。彼の発言の内容には格別変わったことが織り込まれていないわけでもない。強いて言えば私が職務柄、軍首脳と親しく接近できる中堅将校、佐官級である故、私を通して連合軍との一大決戦に臨む日本軍を励ますと同時に、老将軍を中心に愛国グループは一致団結して日本と協力、提携する決意を変えるつもりはないという意向を日本軍首脳に伝えさせるためだと思われた。とすればこの会見は重要な意味を有することになる。つまり、この会見はソムアン氏を党首とする青年愛国党の対日協力運動、ソムアン氏の母堂並びにラーシー女史一派の日タイ友好親善促進運動のまさに燃え上がっている時に、タイ軍の長老が老齢にも拘わらず決然立って愛国グループを糾合し危局に直面する日本側を激励するとともに、日本とは最後まで協力するという不動の誠意を日本軍首脳に認識させようとしたものであり、老将軍の苦心の演出だったということになる。当時、軍首脳部が最も心配していたことは、タイの上層部とりわけタイ軍の最高指導部がイタリアのパドリオのように枢軸国に対する背信行為に出るのではないかということであったが、パホン老将軍の、日本と最後まで行動を共にするという固い決意を知ることによって日本側は一先ず安堵の胸をなでおろした。何れにしても戦局の悪化にも拘わらず日タイ友好親善の風潮があることは、大いなる喜びであった。

翌日私は徳田隊長にパホン將軍との単独会見の様様を報告し、更に軍司令部に出向いて副長にも同様の説明をした。

浜田副長（ママ）⁶⁴はパホン將軍とソムアン氏のグループとの関係を探るように指示し、更に近く中村司令官とパホン將軍とが秘密裡に会見することになっていると打ち明けた。数日後徳田隊長は、中村司令官がパホン將軍と時局について会談を行ったが、その際パホン將軍はピブン政権の灰色化をきびしく批判した、と私に伝えた。

45 親日の国務相拘禁所で変死

四月中旬、釈迦に因んだ祭日が行われた直後、日タイ経済交流に尽力して功績のあった第一人者ワニット・パーナノン前国務相兼商相代理が、昨年十一月（ママ）以来金塊密売容疑でタイ警視庁に逮捕監禁されていたが、タイ側の発表で最近拘禁所で変死した⁶⁵ことが判明した。タイ当局は縊死つまり自殺と主張したが、死因が甚だ疑わしいので憲兵隊としては上司の指令により、日本に対する功労者たるワニット氏に敬意と弔意を表する意味で検死をタイ側に申し入れたが、タイ自身の問題だとして態よく拒否された。日本当局としてはワニット氏が戦時法違反（金密売買事件）容疑で逮捕された当初、タイ政府に対日功労者の故に、善処を要望したがその際はまことに好意的な回答を得たので信頼し切っていた。しかしその後何らの連絡もないまま徒らに日時が経ってしまった。ところがこの度何らの前触れもなく突然、拘禁所内でワニット変死と発表されたので、日本側はまるで親しい人に突如、横っ面をはり飛ばされたか突き倒された様なもので茫然として為すところを知らないほど、その驚きは極度に達した。日タイ経済問題の交渉に当たっている日本大使館では、ワニット氏の変死の真相についてタイ側に説明を求めたが憲兵隊に対すると同様、一切の回答を拒否された。

46 ピブン氏の対日非友好的態度

丁度この頃、農相のシン海軍中將〔ワニットの義兄〕とアドゥン警視總監とが、ワニット変死事件をめぐって不和を生じたとか、内相プロムヨーティー氏（病気のためアドゥン氏が代行）が下僚のアドゥン氏の不遜な行為を快く思わず忠告を發する有様で警察関係の業務が円滑に行われていないとか、或は二、三の閣僚の中には政府関係事業にからむ汚職容疑者がいるという噂が相次いで流れた。

ピブン首相がアドゥン氏をプロムヨーティー内務大臣の代行に任命したのはアドゥン氏が自分と政治思想や主義主張が一致しているためではなく、警察行政における最高責任者であるアドゥン氏の地位を利用するために過ぎなかったと思われる。ピブン政権が、急激に対日非協力政策に転換をはかることは、現段階では内心はともかくも外面的には不可能であった。それ故、枢軸側の戦局が不利に傾き、敵のタイ国に対する爆撃も激しさが加わる、いわゆる客観情勢の悪化によって国民大衆の間に不安、動揺果ては厭戦気分が芽生える頃合いを

見計らって、徐々に政策を変更する形をとることが得策であり自然であろう。今回の対日回答拒否は、対日非協力の隠微的表明の一端であり、これまで個人的とは言え露骨で激しい対日批判を繰り返して憚らないアドゥン氏の意見を、部下とは言え尊重せざるを得ないとして採用したものである、と憶測することは、穿ち過ぎることであろうか。それとも、戦況の悪化による国民の厭戦傾向を見越して共同戦線を張ったものと見るべきであろうか。なお、もう一つ考えられることは、前記のピブン政府部内の閣僚間の確執やスキャンダルなどの風説に対する国民の疑念を吹き消し政府を信頼させるため、ワニット氏のような有能にして功績大なる人物であっても不正行為があれば肅正し、たとえ友邦日本であっても内政干渉がましい要求、申し入れに対しては断乎として拒否し不当な対日協力はしないという毅然とした態度を内外に示したのではあるまいかということである。何れにしても推測の域を出ず、理由のはっきりしない、理解困難な事件であった。

さてワニット事件に対するわが方の申し入れを拒否するというタイ側の回答を得た、わが軍始め大使館など現地当局の間にはタイは東洋のバドリオに変貌するのではないかという懸念と緊張が漂い始めた。イタリアのバドリオ寝返り事件は、不意打ち的に行われたので驚天動地的な大変事だったに違いない。しかしタイにおいては日タイ軍事同盟によって作戦上の要求には相互に協力するという協定があり、その協定を着実に遵守するか否かを見守っているので多少の非協力的な態度があっても、或る日突然手の平を返したようなイタリア型の事態にはならないであろう。ただ非協力の動向が度重なれば、嚴重に反省を促し場合によっては政権交代の工作を開始することも必要となろう。私はピブン政府の対日協力態度の灰色に変色する度合が限度を超えたと感じ、徳田隊長に、ピブン政権に代わる親日政権の樹立について検討すべき時機が到来したことを進言し、同意を得たのでピブン政権の非協力的事例を収集することを警務、特高両課に指示するとともに情報収集のため連絡者や協力者と協議することにした。

欧州においては連合軍の第二戦線が設定され、六月上旬北仏への進出に成功した連合軍は引き続き大挙西独への進出を開始した。

他方北仏への進出の友軍と策応して地中海方面より上陸した米英軍はイタリアを席捲し南仏へ進出するに至って戦局は枢軸軍にとって、いよいよ危機の様相を呈するようになった。

枢軸軍側は連合軍の反攻作戦の苛烈さに伴いドイツ国内においてはヒットラーの戦争指導に疑念をいだき、反戦運動を企てる者、軍部内においてさえ叛逆を企図する者が続出し、まさに戦局は末期的症状を呈するような事態となった。

わが軍においては南方諸要域は寸土といえども絶対に放棄することは許されないとする最高指導部（大本営）の方針にも拘わらず相次いで攻略され、六月中旬遂に南方の作戦上の絶対的要点、サイパン島が米英の手中に帰ってしまった。

47 青年愛国党，政府に下野勧告

六月に入るとタイ国の政界は，下旬に開かれる人民代表議会の準備のために，俄に活気を呈するようになった。

憲兵隊では情報組織を総動員してタイ政界の動向をキャッチする仕事に当たった。

六月の中旬の或る夜，ソムアン氏主裁の秘密会合がヤワラート街のPクラブで行われた。列席者は陸海空軍の青年将校の同志数名であった。憲兵隊よりは例により水野曹長が列席した。会議の状況は水野の報告によれば，概要次の通りであった。

テーマは現ピブン政権を飽くまで支持すべきか否か，もし支持しないとすれば如何にして退陣させるか，ということであった。

陸軍側にはピブン政権支持の空気が強く，海軍側は反対，空軍側は事態の推移を見守るといのが各軍の大体の態度であった。

陸軍側は時局重大な時に，たとえ現政権に多少の失政があったとしても政変を起こすことは国民の動揺，混乱をひき起こす虞があると主張し，海軍側は国家非常時の際であるからこそ，戦争貫徹の決意に欠ける兆しの見える現政府を速やかに退陣に追いこむべきであるとして譲らず，空軍側においては時期尚早として態度決定を保留するという構えで激論をかわした。ソムアン氏は統裁者として最後の決定を下し，ピブン政府に退陣を要求することになった。会議は予定の如く次のテーマに移った。

ピブン政府に退陣を求めるには，同志青年将校の連名で，下野勧告書を政府要人を通じてピブン総理に手交すると同時に，合法的手段としては，六月下旬に開会される人民代表議会で政府が首都移転に関する緊急勅令法律化案を上程した時，野党反対派は全員こぞって緊急勅令の乱用として反対するように勧告することとなった。

ピブン総理の下野勧告書には，

時局重大の折，現政府には友邦日本との盟約を誠実に守って最後まで戦争を遂行しようという強固な決意が遺憾ながら見られない。この様子では将来の国際関係においてタイの信用を失墜し国益を著しく損じるおそれなしとしない。更には現政権の数々の失政は国民に不安と動揺をもたらし，すでに大部分の民心は離反している。このままの状態では現政府が政権の座に居居わるとはタイ国の運命に重大な影響を及ぼすものとする。仍って速やかに下野し強力，有能かつ国民の信頼を得られる新政権と交代することを陸，海，空軍青年将校同志の名において望む。もしこの勧告を無視することがあれば，我ら同志一同は所信に従って独自の行動をとるであろう，

という内容を盛り込むことを決議したと言う。

48 政府与野党の議会対策

敵の空襲の激しさが増す中で，人民代表議会の開会に当たって，政府与党，野党は夫々議会対策に秘術を尽くして活動を開始した。

憲兵隊は情報組織をフルに活用して政府、与・野党の議会対策の活動状況の収集に当たった。その概要は次の通りであった。

ピブン政府では連日のように密かに首脳会議を開き議会対策を協議したが、政府部内、特に閣員の間には内訌があるので、ピブン総理は来るべき議会で部内が一致団結して臨み得るか否かに不安を抱いて落ち着かず、自信喪失の態であるという。ピブン氏はこれまで政権維持のため必要とした警視總監アドゥン氏の行動が奇妙かつ冷淡で反内閣ではないかと疑ったので、アドゥン氏を秘密会議など重要な会議には出席させなかった。更に、アドゥン氏には、反政府派と気脈を通じて政府の議会対策を妨げているばかりでなく、国内の自由タイ分子とも連絡があるという噂が流れるようになったという。

私は時局が急迫するにつれデマの乱れ飛ぶのは常であるので、大して気にもとめなかったが、そのうちに、そのデマが概ね事実として表面化してきた。

タイ政府がペチャブんに移転後ピブン首相は殆どバンコクに姿を見せなかったのが憲兵隊は軍司令部の指示によりピブン氏の所在を突き止める仕事に当たった。

六月中旬頃、バンコクから離れたロップリーに在るピブン氏の別荘でタイ政府の重要な軍事会議が極秘裡に行われることを私は聞き込んだので、私服の特高課員二名を潜入させ情報の収集に当たさせた。タイの協力者一名も従った。

潜入した二名の報告によれば出席者は軍の重要な地位にある將軍級の人々が大部分であった。即ちプロムヨーティー内相、シン農相、ピシット [ピチット] 陸軍中將、空軍司令官、その他北部、南部よりも陸軍の司令官級の人々が参集した。ピブン首相は会議開催の挨拶として、来るべき人民代表議会で政府が優位を占めるため、日タイ攻守同盟を着実に守り日本に飽くまで協力するという従来の方針を堅持することによって日本側の支持を取り付け、現政権を保続するようになりたいと強調したという。

徳田隊長はピブン首相の日タイ攻守同盟遵守の発言を重要な会議におけるピブン首相の真意の表明かと注目してみたが、やはりピブン氏一流のはったりではないだろうかと思案しながら、私に意見を求めた。

日本の中央政府の最高方針がピブン氏支持なのに現地の日本側当局がピブン氏不支持の態度を内心はともかくも表面に現すことができるわけがない。それどころか、わが方は中央政府の方針に従い極力タイ側との摩擦を避けてきた。むしろタイ側こそ、しばしば非友好的態度を示しわが方を失望させるような振舞があったほどである。日タイ攻守同盟条約がある限り日タイ双方には、友好親善の関係強化を強調する発言などをする必要はなく、むしろ不自然である。そういう意味で今度のピブン発言は氏の真意とは思えない。強いて言えばピブン政府が日本側の支持を得ることによって来る人民代表議会において優位を占めようとする、言わば議会対策に利用しようとしているのではあるまいか、

と私は率直に意見を述べた。

その後間もなく、六月下旬より始まる人民代表議会の与、野党の攻防、結末などについての予想を私は特高課長岩崎〔禮三〕少佐と語り合った。言うならば、親日政権樹立の秘密工作の協議である。

日本としては枢軸軍と連合軍の一大決戦が迫っている今の時機にこそ、ピブン政権が他の親日政権、少なくとも対日協力政権と交代することが望ましい。今度の議会はその意味でピブン政権退陣のための議会つまり葬送議会となることを期待する。これまでの諸情報を総合判断すればどうやら、そうなる公算が大きい。しかし、現実には政権の座にあるピブン首相のことであり、特に軍の指揮権を一手に握っているという強味があるので、いかなる形勢になるかは、なかなか予測し難い。我々は政府、与、野党、反対派の議会対策準備についての情報を集め、場合によっては現政権打倒を企図する民間の愛国グループに働きかけ、野党、反対派を背後より支援させる工作を行う必要がある。このため特高関係の情報網を総動員すること、これに要する経費は上司の諒解を得て多額を支出する用意を整えている、

と私は岩崎に話した。

岩崎は全面的に私の意見に賛意を表し特高課の情報網を主として、報道関係も動員すると快諾した。私は最後に老婆心ながら内政干渉的な行為は絶対的に避けるように、と念を押した。

私は私自身の連絡者、協力者を個別に招いて議会情報、特に各派の議会対策に関する情報を収集するように依頼した。

同志ソムアン氏は例によって私を宿舎に訪ねてきて議会開会前の政界の動きについて語ってくれた。

議会では開会式に引き続き正副議長の選挙が行われるはずである。この選挙では、政府与党は、現正副議長をそのまま立候補させるはずだが、野党、反対党は議長にピヤ・マン〔プレイヤー・マナワラーチャセーウィー〕を、副議長にはクアン・アパイウォンを立候補させることになっている。反政府派は文人派の巨頭プリディ第二摂政が中心となって議会対策を練っているが、議員は官選民選を問わず大部分はすでにピブン政権に見切りをつけているので正副議長の選挙は反政府派の勝利となることは殆ど間違いない、と言ってもよい。反政府派が議席の多数を占めると議会に上程して承認を得なければならない緊急勅令のうち、特に問題となるべき例のベチャブン首都建設法案とサラブリー仏都設置法案も否決されることになるであろう。更にピブン政権の守護神とも言うべきアドゥン警視総監が意見の相違でピブン氏との間に溝ができていたこともあって、これまでのように警察権を駆使して反政府議員の運動を弾圧するようなこともないため、今議会では反政府側も何の妨げもなく政府攻撃の戦法を展開することができるに違いない。我ら同志は挙って反政府派を支援するつもりだ、

というのであった。

私は、プリディ摂政は自由タイの国内、国外運動の主演を演じているという情報によって、要注意人物の一人と見做していたのでソムアン氏から、プリディが政府打倒の中心人物だと聞いていささかショックであった。次期政権担当者についてソムアン氏の意向を聞くつもりだったが思い止まった。そのことに触れることは時期尚早と判断したばかりでなく、プリディ摂政に対する疑惑が消えなかったからである。

ソムアン氏より議会の始まる前の与、野党の議会対策の状況を聞いた後、私は連絡者や協力者などの情報を集めて総合判断した結果、同志ソムアン氏のもたらした情報と大差がなかったが、彼ら連絡者たちは、プリディは大戦勃発前、ピブン内閣の蔵相として内閣に列した大物政治家の一人なのでピブン氏に代わる首相の資格を備えた申し分のない人物だという意見で一致した。ところが北分隊よりの情報によればタイ政府が大戦勃発と同時に抑留した敵性白人の一部が、日々、一定の時間に外出を許されているが、この機会を利用してタイの上層部に接近する兆候があり、しかもその上層部のなかにはプリディ摂政も含まれている。更には自由タイと思われる分子との接触の傾向もあるという。北分隊は、タイ政府の抑留している敵性白人、約三百名を収容している軟禁所⁶⁶の所在地域を管轄の一部としている分隊であった。

本部特高課の情報によればプリディ摂政は、自由タイの一味と目されるグループの会合にお忍びで姿を現すことがある。その場所はスワン・クラブ [スワン・クラブ] (バラの宮殿) と言い、タイの保安警察隊の事務所があるといわれている所だという驚くべきことが判明した。

このように重要な情報は手に入ったが、私はプリディ氏を抗日の元凶と断定するわけにはいかないし、仮にそうだとしても憲兵隊などが独自に行動することもできないので、軍司令部を通じタイ政府と交渉して適当な処置をとってもらう以外に方法はない。ところが、タイ政府内部において警視総監アドン氏がピブン政権より離脱する兆しがあり、しかもピブン氏の政敵とも見なされるプリディ氏と内通の疑いがあるとあっては、タイ政界内部の複雑怪奇性はいよいよもって混迷を深め軽々しく内部に近づくこともできないし、タイ側当局にも、うっかり重要事項を連絡することは避けなければならない。ことに日本側は密かにピブン政権交代の工作を行っている時だけになおさらである。

徳田隊長は、プリディ氏の疑わしい行動は引き続き警視を要するが、ピブン政権打倒のために彼を利用して親日政権樹立の実現をはかる方法を見出すことはできないものかと、私に相談した。

無論私は賛成であるが、実際問題としてはなかなか困難である、プリディ利用工作を行うにはソムアン氏を始め多くの親日グループの協力を得る必要があると進言した。

六月中旬の或る日、例によって私はK参謀と白雲荘で会食しながら人民代表議会開会前のタイ政情などについて語り合った。Kは来る人民代表議会開会に当たってピブン氏はいかなる戦法で議会を乗り切るつもりだろうかと切り出した。

最近ロブリーで軍事最高会議なるものを開き軍首脳が集まった席上で大変親日的で、しかも日本と協力して飽くまでもこの戦争を戦い抜くという決意を表明した。だが戦雲急を告げる今日、しかもわが方が必ずしも有利に展開しているわけではないのに日タイ友好親善を強調したり、日タイ協力して最後まで戦い抜くなどと部下に呼びかけることは、何となく白々しい奇異な印象をいだかせるが、これには裏がある、

と、私は応じた。

彼はすかさず裏があるとはどういうことだと問い返したので、私は、今度の議会の乗り切る自信がないピブン氏は日本の力を借りて、言わば他力本願で何とか切り抜けるという窮余の策を思いつき、そのため日本側の意向を確かめようとしたのだ、と答えた。

そんな白々しい演技で日本側が本気にすると思うかとKはいまいましたげにつぶやいた。私は、ピブン政権支持の日本中央政府や一部の現地当局は今回のピブン氏の発言を大いに歓迎することだろうが、これまでしばしばピブン氏の非友好的な態度に直面した我々現地当局としては、到底ピブン氏の真意であると額面通りには受けとめるわけにはいかない、この度のピブン氏の発言は明らかに議会対策のためにわが方を利用する魂胆だと思うと述べた。

今後議会は与、野党の攻防が激烈を極めるだろうが果して与、野党の何れに軍配があがるだろうかとKは端的に疑問を發した。私は、

議会は型通り先ず政府側と反対派つまり野党側から夫々正副議長の候補者を立て選挙を行い、引き続き本会議を開いて議案の上程、採否議決という筋書きであろう。正副議長の選挙では野党側の優勢が早くも伝えられているし、本会議に上程される法案はペチャブン首都建設緊急勅令とサラブリー仏都設置緊急勅令の事後承認法案であろうが、その審議に当たっても政府側に利あらずと言われているので差し詰めピブン政権の退陣ということになるだろう、

と述べた。

Kは、ピブン氏は現実に政権を握っているし革命以来の功労者であり、軍の最高指揮官として実権を一手に集めているので、甘く見過ぎると飛んだことにならないとも限らない、慎重な構えで事に当たることが必要ではないかと慎重論を提唱した。

日本現地当局としては直接的にタイの政界に立ち入るわけにはいかないのであるから、矢張り、野党、反対派を密かに背後より支援し飽くまで彼らの手で合法的にピブン氏を下野に追い込む必要がある。情報によれば反対派は結束を固め与党議員にも計画的に働きかけて切崩しを行っており或る程度成功の見込みがついている。また同志ソムアン氏の青年グループや愛国婦人層の有力メンバーが政府内の或る要人に強力な働きかけを行っている。ピブン政権打倒の運動が燃えあがりつつある、

と私はこれまでに入手した情報の概要を説明した。

Kは相手が相手だけに抜かりないように頼むと念を押した。

49 ピブン政府の正副議長選挙の敗北

議会開会の数日前、ピブン氏の親衛隊とも見られる有力な一部隊がピブン氏の身辺護衛と人民代表議会反対派に圧力をかけるためバンコク周辺に集結されたという情報が流れ、更にアドゥン警視総監の主宰で全国の警察署長会議が警視庁内で行われ人民代表議会開会に当たっての国内治安維持に関する協議が行われたことも伝えられた。

議会は六月二十四日革命記念日の日に開会式が行われ、いよいよ開会となった。

人民代表議会の模様は特高課のルート（報道関係）と根木中尉の連絡者よりその都度報告された。

本会議は開会式の日より四日を経て漸く開かれ、正副議長の選挙が行われた。候補者はすでに予想された通り、政府側は前任者をそのまま、反対派は議長にプラーヤー・マナワラーチャセーウィー氏、副議長にクアン・アパイウォン氏を立てて闘うこととなった。

選挙の結果は議長、副議長とも反対派が圧倒的勝利を克ち得た⁶⁷。なおこの選挙に続いて行われた各常任委員長並びに委員の殆どの選挙では反対派の占めるどころとなった。議会正副議長選挙におけるピブン政府の敗北は、日本大使館にとってはかなりのショックであったという。と言うのは、大使館ではピブン氏の対日態度が日毎に灰色に変色するので苦々しく思っていたが、日本を裏切るような不信行為まではしまいという楽観的信頼感とピブン氏に代わるタイの最高指導者は乏しいという二点を政情判断の基礎としていただけに、この度の敗北は予測し得なかった重大な誤算だったからである。

本国中央部（大東亜省）の方針に従い、ピブン政権支持を標榜してきたのに、これまで目立たない弱体な存在と考えられて、あまり問題とされなかった野党、反対派が優勢を占めたとあっては、外交の出先機関たる大使館としては有形無形の打撃を受けたであろう。

私はすでに予想していたことだったが一応徳田隊長に報告するとともに山田参謀長、浜田参謀副長（ママ）に報告した。軍当局も中央部のピブン氏支持に拘わらずピブン政府の敗北を予期していたので来るべきものが来たという構えであった。

正副議長選挙のあった本会議終了後間もなく、七月初旬の或る日の夕刻、私は例によってソムアン氏をバーンカピの私宅に訪ねた。母親のサワデイ夫人始め三人の妹さんなど一家をあげて歓迎してくれた。

サワデイ夫人はわが軍より放出を受けた繊維品の処理が順調で運動資金も予定通り獲得でき、愛国運動つまり宣撫工作もまた着々成果をあげていると言って感謝の挨拶をした。

ソムアン氏は早速、私に六月下旬に行われた人民代表議会開会後の政情について語ってくれた。

この間の正副議長の選挙は予想通り反ピブン派の勝利となったが、これはまことに当然なことであった。あの後、ピブン氏は緊急閣議を開き種々対策を協議した結果、いかなる手段を用いても例の二つの緊急勅令（首都建設、仏都設置）の議会通過をはかって切り抜けることを決めたという。その手段とは反対派の切崩し、逆宣伝、中傷などによる

攪乱，買収というようなことであろうが，そのような奸策を弄してまで，しかもそれが成功するかどうかわからない，低級にして不浄な手を使ってまで議会対策を講じなければならぬほど弱体化した現政府などには，時局担当能力なしと我々は見限っている。それでも我々の問題にしないような，見え透いた，低劣な議会対策の闇戦法でも，タイ政界では罷り通り案外功を奏することがあるので油断はならない。我らのグループは我らなりにピブン氏の闇戦法に対しても十分に注意を払いながら或る行動を起こすことにしている。ピブン政府首脳部の間には次回本会議で再び形勢不利な場合には，実力によって議会の機能を停止させるという非常手段に訴えても政権を保持すべきだという強行意見を吐く者もいるというが，ピブン氏は強行手段をとり事態の混乱を引き起こすようなことになれば，日本軍の軍事介入を誘発する虞があるとして極力強行分子をたしなめているのみならず，日本側を刺戟する態度を避け友好親善をはかり協力するという擬態を示すことによって日本側の支持を得る方が得策だ，と強行分子を説得しているが大体説得に応じる方向に動いているということである。しかし，日本側にも如何なる魔手が伸びるかも知れないので十分用心あれ，

とソムアン氏はピブン政府の動向に対して注意を促した。

ピブン政府与党の勢力は斜陽の傾向にあるとは言え議会において正副議長の椅子まで反対派に譲らなければならないとは予想しなかったことだけに，今後の行方はどうかと私は尋ねた。

ピブン政府与党が議会の第一歩でつまずいたとしても第二歩もまたつまずくということにはならないが，わがグループの探査では来るべき議会でも政府与党内の結束は必ずしも固くないばかりか議会対策も進展せず，揺らぐばかりなので切り抜けることは困難であろう，

とソムアン氏ははっきり答えた。

ピブン政府首脳の中には非常手段に訴えても切り抜ける必要があるという強行分子もあるというが，その非常手段とは如何なることかと私は尋ねた。

ピブン氏と警視總監アドン氏との間はすでに疎遠となっているがピブン氏は軍の最高指揮官として実権を握っており，現に不測の事態に対する警戒とか治安維持とかに名をかりて，相当の混成部隊をペチャブンからバンコク周辺に集結させているのであるから，ピブン氏も場合によっては強行手段を，という考えは胸底に去来していたかも知れないが，思い止まったのであろう，

とソムアン氏は答えた。

ピブン氏は今でも強行分子を抑える実力があるのかと私は尋ねた。

ピブン氏の力は次第に弱って今までのように絶対的に抑えることはできなくなったので，つまりオールマイティではなくなったので，もし強行分子の主張を受け入れて武力行動に出て混乱を招いた場合には，議会で勢力を獲得するどころか，政府自体が破滅に

陥る虞がある。情勢がこのようになった今ではむしろ日本側の支持を得て政権の維持をはかる方が得策だ、と極力強行分子を説得して、成功したためにピブン氏の日タイ提携協力の必要という発言となったのであろう、

と言う。

ピブン氏が日本側に信頼されていることを誇示することによって野党反対派に闇戦法をしかけ威圧し切崩しをはかる作戦を企てているらしい、とソムアン氏は詳しく長い説明してくれた。

日本側の支援を得て政権の座を守ろうとしても、独立国たる友邦タイの政治に関与することは日本側としてはできないことなので、一体何を日本に求めるのであろうか、と私は更に尋ねた。

ピブン氏は、具体的に日本に何かを求めるというわけではなく日本とタイの関係が親密であることを野党、反対派に誇示することによって彼らの氣勢を殺ぎ、ひるむ隙に乗じて中傷、買収などの闇戦法をしかければ議会における勝利間違いなく判断したためだ、と言われているが果して、そううまくいくかどうか。ピブン政権の命脈は今や風前の灯火で、次回本議会における敗北は必至だ、

とソムアン氏ははっきりと言い切った。次回本会議前のタイ政局について判断をする上で、いろいろと参考となることを知ることができたので、私は篤くお礼を述べて辞去した。

帰宅後私は徳田隊長を訪ねてソムアン氏との対談の模様を、特にピブン派首脳陣の中には強行分子のいることについて報告した。隊長は重要事項であるとして、山田参謀長に連絡した。

タイ国駐屯軍はタイ人民代表議会の次の会合において政府対野党反対派の間に不測の衝突事件の発生することを顧慮し、在バンコクの駐屯部隊に警戒態勢をとるように、と秘密の指令を発した。憲兵隊は、不測の事件発生を事前に探知することを指示された。

50 青年愛国党ピブン政権への下野勧告書の手交を依頼

六月下旬の人民代表議会後、私はソムアン氏よりの政情についての見解、連絡（協力）者よりの情報を総合整理して次回本会議に臨むべく待機していたが、或る夜またまたソムアン氏主裁の愛国党青年将校の秘密会合がPクラブ（前回青年愛国党の会合のあったと同じ所）で行われた。水野曹長が宮川通訳と共に列席した。

会合の様子は、水野の取材によれば次の通りであった。

愛国党は、反ピブン派の領袖、前海軍艦隊司令長官、パン・ナワウィット少将⁶⁸を招き、先頃行われた愛国党の青年将校の会合で決議したピブン政府に対する下野勧告書を差し出した。愛国党代表の三人は夫々拳銃を隠し持って、この会見に臨んだという。パン將軍は代表者ソムアン氏から勧告書の主旨説明を聞いた後、静かに口を開いて次のような意見を述べた。

愛国党の青年の至情は十分理解出来るが時局は極めて重大な時であるので、もし現内閣が退陣し政権交代のようなことがあれば、それだけ政治の空白が生じ政局の不安を招き、この非常時を乗り切るのに支障を来し、国家に不利をもたらすのではないかと愛国党の三同志に反省を促す説得調で語りかけたので、ソムアン氏は、將軍は海軍部内でも反ピブン派の闘將として有名なはず、すでに国民の信頼を失い、壮、青年層の支持を得られない政府がタイの命運にかかわる非常時局を乗り切ることができると思うのか、と応じた。

これに対し將軍は更に語り続けた。

たとえ現政府に多少の失政があったとしても大戦勃発以来これまで国民の指導に当たってきた功績は認めなければなるまい、がそのことは現政権が引き続き政権を担当する方が良いということでは決してない。ただここで考えなければならないことは、政局の不安定に乗じ、政界を混乱に陥らしめようと企んでいる一派が、わがタイ国内に潜伏しているはず（自由タイのことか？）である。しかもこの一派は在外の敵性分子に左右される危険性のあるグループである。政界内の各勢力の間には複雑かつ微妙なならみ合いがあるので政界内にトラブルを醸すようなことが持ち込まれると彼ら反国家的グループ一派の乗じるどころとなるので、この際慎重に行動する必要がある、と。

ソムアン氏は將軍の誤解を避けるため、

タイに潜伏する反国家的グループに対してはわがグループも常に警戒を怠ってはいない。従って今日の我らグループの会見申込みは、反国家グループに政界攪乱の機を与えるためではなくて、タイの破局を招く虞のある政策を続ける現政府に下野を求めるのが目的である。

パン將軍の上司、シン（ソクラムチャイ）海軍中將が農相として内閣に列しているのと同中將を通じピブン首相に勧告書の手交を願う次第である、

と釈明するとともにお願いした。

將軍はソムアン氏の釈明を諒承し、取次を引き受けた。会見は案外簡単に終わった。

51 与党の対野党切崩し工作成果あがらず

根木中尉より来る人民代表議会本会議に臨むピブン派の裏面工作についての情報が報告された。

正副議長選挙で敗北を喫したピブン氏は自派の勢力が前年度の議会の時よりも明らかに弱勢となっていることを自覚し、来るべき本会議は、日本流に言えば天王山の戦いに比すべき天下分け目の戦いであるとして、野党、反対派に対して買収、デマ宣伝、中傷、切り崩し、攪乱など必死の勢力挽回工作を展開している。今回の戦いにはアドゥン警視總監による反政府派弾圧は期待できないので、裏面での闇戦法が熾烈を極めていることは間違いない。現に根木の協力者ワンチャイ（ママ）民選議員に対しても買収の手が伸びたという。

私の連絡者王鏡秋医師によれば氏の友人、民選議員シャリオ [チャラオ・タオラーノン?] 氏は土木関係の利権と数千パーツの現ナマで政府案賛成にまわるようにと勧誘を受けた。シャリオ氏のような金銭に恬淡で、硬骨漢で名の通っている者にまで魔手を伸ばさなければならぬようでは、ピブン派の最後のあがきと見るよりほかない。

このような有様ではどんなに狂った誘惑の手が用いられるか知らないが、買取などの工作が狂えば狂うほど、足許を見透かされて買取費がハネ上がり、遂にはその負担に堪え得なくなるのではないかと言う。この事はワンチャイ氏（根木の協力者）の伝えてきたことの具体的事例である。その他の連絡（協力）者の報告は何れもピブン政権成立以来かつてない大掛かりな闇戦法が行われているが見るべき成果はあがっていないという事では概ね一致していた。

52 東條内閣退陣とピブン政権の受けた影響

七月中旬 [7月18日]、東條内閣は総辞職した。ピブン氏にとって盟友東條の率いる内閣の退陣はかなりのショックだった。というのは枢軸側の戦局が日増しに悪化しているこの際、東條氏に期待することは殆どないのだが、ピブン氏にとっては当面の議会対策や反対派牽制のために東條首相の直接、間接の支援を必要としていたのに意外に早く不可能となり、言わば頼みの綱が切れたと同様のことになってしまったので、最早自らの手で局面打開をはかる以外に手がなくなったからである。

タイ国駐屯軍当局は、東條氏の支援を期待できなくなったピブン氏が、自ら単独で議会対策をはかるために強行手段、つまり武力によって議会を占拠することもあり得ると判断して、本会議の開会前夜より予めから警戒態勢を命じてあった隷下各部隊に出動待機を発令した。

この日、ソムアン氏は突然私を宿舎に訪ねてきた。用件はピブン内閣への下野勧告と本会議前夜の与、野党の動静についての連絡であった。前者については、水野の取材報告と全く同様なので勧告書の行方がどうなるかを見守ることとし、後者については、ピブン氏のあらゆる闇戦法使用にも拘わらず、強力な愛国諸団体の反政府運動的抵抗があつて意の如くには成果があがらず、さらばと言って、武力行使で議会を占拠するような非常手段は、一時的には成功しても混乱を招き政府破滅の悲劇に終わるという結論に達して思い止まった。つまりピブン氏は議会対策で勝算見込みなしと観念したらしいと言うのである。

連絡が終わった後ソムアン氏は私に願いがあるとして、次のことを申し込んできた。

我ら愛国党同志の大部分が、今後の日本との協力上日本の現国情つまり戦う日本の姿を視察する機会を与えてもらうように交渉すべきであるという意見を持っているので、この際自分の日本行きを関係機関に連絡して斡旋してほしい。自分の父は永く日本に住んでいるので、党においては自分が日本視察の適任者ということになっている。明日からは人民代表議会の本会議が始まるが勝算は野党、わが反対派にあることは間違いない。

もし自分が訪日できたらピブン氏退陣の報を父へプレゼントとして持参したい、
というのである。

ソムアン氏の訪問の主目的は、訪日の斡旋を依頼するためであったようだが、明日より重要な本会議が始まるのに渡日のことなどを依頼に来たのは、やはり野党反対派の議会における勝算間違いなしという見通しに自信があったので、日本側の懸念を逸早く和らげて安心させたい、また在日の父親に会いたいという気持からであったろう。私は同志ソムアン氏のため本会議が終わったら実現できるように努力すると約束するほかなかった。

私はソムアン氏の申し入れを隊長に報告し指示によって軍の渉外参謀、岸並中佐を通じ山田参謀長に取次を依頼した。

53 ピブン政府本会議において敗北

東條内閣に代わって小磯国昭陸軍大將が後継内閣の首班として登場した翌日即ち七月二十日、タイ人民代表議会の本会議が開催され問題のペチャブン首都建設緊急勅令が議会の承認を得るため上程されることになった。

本会議は当日十四時より予定通り開会され、議員は官、民選両議員合計八十数名、政府閣僚、その他政府委員が計十数名出席した。

先ず予定の如く首都建設緊急勅令が上程され、政府側より提案理由の説明が行われた。その主旨は、

この法案を緊急勅令として公布した理由は内外の情勢切迫のためであった。その建設は
予期以上に順調に進み、目下応急施設の設置も終えて政府機関は何らの支障もなく待機
している。政府のとった施策は、まことに時宜に適ったものであった、
という自画自賛的なものであった。

これに対し、野党反対派議員代表の反対意見は、

首都建設法案のような重要な案件は先ず議会上に上程し審議決定の後に法律として制定施行すべきもので、緊急勅令などで公布すべき性質のものではない。然るに政府はこれを独断で強行した。その横暴な行為は議会制度上許されない。世論はこの史上類例のない違法な勅令を認めることはできない。速やかに撤回すべきだ、
とかなり厳しいものであった。無記名投票による採決の結果反対四十数票賛成三十数票で勅令は否決された⁶⁹。

ピブン総理以下各閣僚並びにピブン派議員一同は、憤然として議場を去ったという。

日本側の現地軍と大使館は本会議の模様を本国政府並びに関係各省宛、両者同文の電報報告をすることとなり当日午後、大使館に軍よりは山田参謀長（大使館附武官兼任）、岸並渉外参謀、K参謀、堀井憲兵隊警務部長、大使館よりは水野〔伊太郎〕公使、岩田一等書記官、石川〔實〕⁷⁰一等書記官らが集合した。

電文の起草は軍側ではK参謀と堀井警務部長、大使館側は石川書記官が当たり、双方、

別々に案文を作って、両者を照合し、両者の情報や意見の一致をみた上で最後の案文を作成することに話し合いがまとまった。

参集した各担当者は議会の経過を案じ情報の到着を待っていた。十六時少々過ぎ、私の部下根木が第一報をもって駆けつけた。まさに第一着のゴールインであった。根木に続いて大使館の情報員よりの報告も到着した。

諸方面よりの情報は大同小異、問題となるような点はないので軍、大使館の案文起草担当者は夫々の情報に基づいて草案作成の作業を始めた。ピブン政権を支持している本国政府中央部に及ぼす影響を考慮して案文は数回練り直され修正されて作業は終わった。

結局、報告の成文は、

第一回の本会議においてピブン政府上程のペチャブン首都建設緊急勅令は遺憾ながら小数の差で否決された。政府与党の勢力は野党、反対派に比し必ずしも劣勢とは言えないが第二回の本会議の情勢は樂觀を許さず、

という意味のもので直ちに暗号に組み立てられ夫々本国中央部及び関係各機関に打電された。

54 ピブン政府第二回本会議でも敗北

次回本会議は一日おいて二十二日十四時少々過ぎに再開された。

この日、政府側は突然、官選議員数名を臨時に追加任命した。前回の敗北挽回に備えた窮余の策であろうか⁷¹。野党、反対派議員側もこの奇襲戦法にはかなりショックだったと言う。

議題は、サラブリー仏都設置緊急勅令の審議であった。

政府側の説明によれば、設置の目的はサラブリーを世界的な仏都とするためであり、このことはすでに専門的機関の検討を経たものである。緊急勅令として発令したのは六月初旬に行われた仏教大祭までに起工のできるようにするためだったというのであった。

この説明に対する野党反対派側の反対意見は、内外多事多難の折りに、仏都を設置する必要は認め難い。緊急に設置を要する根拠も明らかにせず、有難い仏都の設置を急遽強行することは粗製を免れず、この様では御仏を冒瀆することとなる。断じて承服できないという激しいものであった。

賛否の投票の結果は両派共に四十数票だったが、政府側は僅少の差で野党反対派に敗れた。ピブン政府としては最後の頼みの綱としていた案件も空しく葬り去られた瞬間愕然としてスゴスゴと議場より姿を消すというみじめな終わりを告げるに至ったのである⁷²。

第二回本会議の模様を本国に報告するため前回と同様、同じ顔ぶれで大使館に参集し議会情報の届くのを待って待機した。

今回も根木の情報が第一に到着した。大使館側の情報も相次いで到着したので前回のようになり成文が作成された。その要旨は次の通り。

タイ国の最大の實力者、指導者たるピブン氏の率いる政府与党も議会の大勢にはいかんとも抗し難く、最後の望みをかけて上程したサラブリー仏都設置緊急勅令も僅少の差で議会通过するに至らず、事実上敗北す。目下のところ、議会に対する不穏な動きの兆候なきも引き続き警戒中、

というものであった。

ピブン氏遂に敗れたという情報を知った日本大使館は予期していたこととは言え、本国政府の意図に従いピブン氏を支持していたので、敗北が現実になり事実となって現れるとさすがに驚きの色を隠し切れず、特に平素ピブン氏一辺倒で凝り固まっていたI〔岩田冷鉄〕情報部長の狼狽振りは一入（ひとしお）だったという。

ピブン氏敗れたり、という電報を受けても中央のお偉方は直ぐには信じまいとKは皮肉混じりに私に話しかけた。

まさに君の言う通りお偉方は今まで頑固にピブン氏を信じ切っていたから、まさかと思ひ容易に信じまいよ。ひょっとしたら、こいつは何かの間違いだ。南方ボケしたタイに長く駐屯している連中のたわごとじゃないかと、こちらの方が却ってボケナスにされてしまうかも知れない、

と私も笑いながら応じた。大使館側からも笑いが起こった。

55 ピブン内閣総辞職

本会議終了の夜おそくソムアン氏はルノーを駆って私の宿舎に駆けつけた。今後の政局について意見を述べるためであった。

ピブン内閣は総辞職した、とソムアン氏は開口一番告げた。本会議開会の当初より諸情報によりピブン政府の行方については予測していたが、ソムアン氏より決定的な知らせを聞くと、やはり一体どうして退陣したのだと、私は問い返さざるを得なかった。ソムアン氏はピブン内閣退陣の理由を私の予想通り、ピブン氏は首都建設と仏都設置両緊急勅令を成立させて政治勢力の挽回をはかろうとしたが、野党反対派の勢力が上廻ったので遂に両勅令とも葬り去られたため、緊急閣議を開いて対策を協議した。両案とも適法に処理された結果、不成立となったのでは最早、どうすることもできない。一時軍事力をもって非常手段に訴え議会を占拠することも検討したらしいが、アドゥン警視総監の警察部隊の治安監視が厳しく、また在タイ日本軍も警戒態勢に入っていることを、手に取るように知っているピブン氏には到底決行ができない、言わば手も足も出せない状態にまで追い詰められてしまった。今では、総辞職以外に手段、方法はなく閣議でも、また、そう決まったとのこと、まさに来るものが来たというところだ、と説明してくれた。

そこで私は問い返した。オールマイティとして政界に君臨しているピブン氏のこと、総辞職などせずに解散して国民の意志を問うという道もあり得るのではないかと。

ソムアン氏は、すかさず戦時中は解散できないことになっている。今年の議会で四年間は

解散できないことに決まっていると答えた。ピブン内閣が退陣したとしても、それに代わる強力な内閣が生まれる可能性はあるのか、また何人が首班の座に据わるのかと、ソムアン氏の意向を尋ねた。

わが愛国党は、パホン大将を推すことにしているが、わが父ブラ・サラサスをという者もいる。なかには人民代表議会副議長のクアン・アパイウォンはどうかという意見もあるが、彼はプリディ第二摂政の系統という疑いもあるので、まだ決まっていない。プリディ第二摂政は敵性外国人の収容されている収容所に姿を現すという噂の人物であるからだ、

とソムアン氏は率直に考えを述べた。

そこで私は、実は先般私的にパホン將軍の招きによって彼を訪ね、時局に関する所信を拝聴することができた、とソムアン氏に打ち明けた。パホン將軍は、今次大戦の意義、東亜より白人の勢力を排除し黄色人種の勢力圏を取り戻すという使命、タイ国の将来などについて愛国の至情にあふれる高邁な識見を開陳されたので、深い感銘を受けたが、高齢の様子で果して内閣首班という激職に堪え得るかどうか心配だ、と私は意見を述べた。

ソムアン氏も、將軍は高齢で健康もすぐれないので、わが党が推薦しても出馬するかどうか、と答えた。私は、もし將軍が出馬しない場合に代わる人物は？、と尋ねた。

すでに名を挙げたクアン・アパイウォン副議長は、技術者出身だが政治的見識が高く、人物も申し分なく、それに大親日家で議会内でも評判がよいので、わが愛国党としても大いに尊敬している人物の一人だが、プリディ第二摂政一派との関係があるという疑いもあるので更に詳しく調査の上、推薦するかどうかを決めることになっている。政情不安定な時は、ためにする被推薦者に対する中傷、誹謗が乱れ飛ぶので、そんなことに惑わされることなく間違いのない推薦をするつもりである、

と答えた。

夜も更けたのでソムアン氏は取りあえずピブン内閣退陣の前兆をお伝えするために訪ねたのでと、断り帰って行った。

私は深夜にも拘わらず徳田隊長を訪ね、大使館における本国政府への電文の共同作成とソムアン氏よりのピブン内閣退陣の前兆についての情報を報告した。

翌日私は徳田隊長の意図を受け前日隊長に報告したと同じ情報を報告するため浜田副長（ママ）を訪ねた。私は先ず、ピブン内閣の総辞職が近く摂政府より公表されることになっていると報告したが、副長も予測していた様子であった。

副長は、ピブン氏失脚は已むを得ないとしても次ぎに首班の座に据わるのは何人と思うかと私に尋ねた。

戦局の悪化の傾向をたどる現況では飽くまでもわが方と協力、提携し作戦遂行を容易にするような強力な親日政権が樹立されることが望ましい。従って行政的手腕の勝れた、ピブン氏に匹敵する政治家は存在すると思うが、この非常事態に直面している際に、ピ

ブン氏のようにこれまでの親日的態度がにわかにくらつき出して灰色に変色するが如き指導者では安心して協同作戦に従事することはできないので、この時局を背負って立つと思われる二人の候補者を挙げたい。その一人は広く日本にも知られている軍の長老、プレイヤー・パホン将軍、他の一人はクアン・アパイウォン人民代表議会副議長である、しかしこのことは憲兵隊としての意見ではなく私的な意見に過ぎない、

と述べた。

副長は、プレイヤー・パホン将軍は中村軍司令官との会見で高齢と健康の都合で非常時の政権担当は無理であることが判ったので問題はないが、アパイウォン氏については、プリディとの関係もあるので問題があると思われる。このような重要な情報は、軍司令官に報告し指示を受けるべきものであるから山田参謀長にも連絡し、一緒に軍司令官の許へ報告に行くが、我々と同行し、タイの政情について細部の説明をするように頼む、と私に同行することを求めた。

中村軍司令官の官邸に、山田参謀長、浜田副長（ママ）、K参謀、堀井警務部長が集合した。

私は浜田副長（ママ）⁷³の指示により、タイ人民代表議会の本会議の様様、ピブン内閣退陣、後継内閣首班などの問題についてソムアン氏その他タイ側より得た諸情報に基づき、有りの倂詳しく説明した。

軍司令官は立場上、タイの内政に干渉するようなことは出来ないから大使館筋の意見もよく聞いて、お互いに密接な打合せをした上で態度を決めたい、と述べた。しかし、同時にソムアン氏の愛国党、その他の婦人層の愛国グループのような日タイ友好親善の熱意にあふれた団体の推薦する人物は尊重すべきだ、という意向を洩らし、暗にアパイウォン氏を推すことに賛意を表すというようなニュアンスの発言をした⁷⁴。

本会議終了の翌日、予想通り、ピブン内閣は摂政府に対し総辞職の手続をとった。

摂政府では前年二月十四日の政変の轍を踏まないように慎重に構え、翌一日の間をおき不祥事の起きないことを見届けた上で正式に勅許することを人民代表議会に通告し一般に公表した⁷⁵。

ピブン内閣の総辞職が公表された時、ソムアン氏は電話で宮川通訳を介して連絡してくれた。

この度はピブン氏も辞表を撤回するような不法なことはできないはずだから退陣は決定的であろう。後継内閣の首班には、我々同志の尊敬している人物が候補者に浮かんできているので登場することは間違いないが、そのことについて説明するために訪問する、と言って電話を切った。

翌日ソムアン氏は早速私の宿舎を訪れ、後継内閣首班の候補者として出馬する人物について語った。

ソムアン氏によれば、

候補者と目されるクアン・アパイウォン氏は文人派プリディ第二摂政派に属する政治家だが、政治的識見に勝れ、政治感覚が鋭くかつ冷静にして頭脳明晰、ジャーナリズムの評価も高い人物で戦時下の内閣首班としての貫禄十分であるばかりでなく、何よりも親日的な点では政界随一であることだ。ただ問題は、自由タイの国内代表などと噂されているプリディ氏とつながりがあるということである。しかし、プリディ氏は第二摂政という要職にあり、タイ国の運命を憂う点では一般愛国者に劣らない高潔な人物である。ピブン内閣退陣によって戦時非常時にふさわしい新内閣誕生の機会を得たので、彼は自由タイの国内暗躍を極力抑制するようにアドゥン警視総監との間に合意ができた、という有力な情報もあるので、たとえアパイウォン氏とつながりがあったとしてもアパイウォン氏の政策、とりわけ対日政策に影響を及ぼすことはない、

と信じて説明を加えた。

私はソムアン氏の伝えてくれた情報を徳田隊長に、隊長は軍司令官に夫々報告したので、軍部としてアパイウォンの立候補を知ることができた。

56 アパイウォン親日政府誕生

七月下旬の後半、ピブン内閣全閣僚の辞表を勅許した摂政府は人民代表議会に通告し、後継首班の選出を求めた。この指名選挙は、ピブン内閣退陣後一週間の後、即ち七月三十一日〔7月29日〕十四時に議会が開会され本会議において行われた。

候補者は野党側より予定の如くクアン・アパイウォン氏が立候補したが、投票の結果、政府与党の立候補者とは比較にならないほどの多数で当選し、議長より正式に指名された。アパイウォン氏〔1902年5月生〕は、四十歳を過ぎたばかりの年齢であるから、言わば始めて壮年宰相というべき若い総理が誕生したわけである。

アパイウォン氏は早速組閣にとりかかった。文相にタウィー・ブンヤケート氏（副総理兼任）、国防相兼農相にシン海軍中將（前農相）、内相にスパチャラーサイ海軍大佐、外相にシーセーナー、工業相にパン・ナワウィット海軍少將（反ピブン派の海軍側の闘將）を夫々任命しアパイウォン氏自身は商相並びに交通相を兼ねることになった。警視総監はアドゥン氏が他に適任者がいないのと、社交嫌いが警察行政について特に失態を演じたということもないので、引き続き総監の地位にとどまることになった。ソムアン氏は内閣官房長官として入閣するよう要請されたが辞退しフリーの立場をとることになったという。

アパイウォン内閣は八月上旬、人民代表議会に閣僚名簿を提出し正式に発足した。

新内閣の政策の基調は、日タイ攻守同盟の誠実な遵守及び友好親善の強化、日本の現地軍及び諸機関に対するパーツの円滑な供給、国内治安を脅かすあらゆる策動（自由タイの暗躍、抗日運動など）の取締の強化というものであった。

57 ソムアン氏の訪日

私は、新親日政権の成立の過程並びに新政権が所信表明した新政策について整理して徳田隊長に報告した。隊長はタイの政変は、重要事項であるとして私を帯同し軍司令官に報告を行った。私は情報担当のKにタイ政変その他、とりわけ軍費用パーツの円滑なる供給などについて通報した。

親日政権成立の蔭の功労者としてソムアン・サラサス氏を犒うための祝宴が軍司令官官邸で山田参謀長の主催（ホスト）で催された。参席者は中村軍司令官、参謀副長（ママ）、岸並参謀、K参謀、徳田憲兵隊長、堀井警務部長、大使館岩田情報部長であった。祝宴のメニューはスキヤキと天ぷら、飲料はビールであった。

山田参謀長は開宴の前に親日政権の誕生に対する喜びを述べるとともに、その過程におけるソムアン氏の功績について次のように披露した。即ち、

ソムアン氏が、壮青年層の愛国精神を結集して創設した愛国党は、アジアはアジア人の手に、のスローガンを掲げ、タイと日本ががっちり手を握り大東亜戦における日タイ協同作戦に全力をあげて協力し最後まで戦い抜いて運命を共にする、という堅い決意をもって友好親善関係の強化を朝野の人々に働きかけた。と同時に、東亜陣營の戦局の緊迫化に伴いピブン政府に対日非協力の傾向が見え始めたばかりでなく、同政府が世論にそぐわない政策を断行し国民の強い批判を浴びるような始末になったのでは日タイ協同作戦の遂行に支障を来す虞ありとして、当局の厳しい警戒、監視の目をくぐり抜け下野運動を展開し、清潔にして知性に富んだしかも政治的センスの鋭い、更には政界における親日家の第一人者と目されているクアン・アパイウォン氏を新政権の青年宰相として擁立した。青年愛国党は政界で陰に陽に影響力を行使し献身的に努力して、遂に新親日政権の成立と相成ったもので、その貢献するところ、まことに大なるものがある、と結んだ。

中村軍司令官は、新政権の成立はソムアン氏の愛国党の蔭の功労に負うところが大であると讃辞を呈するとともに、日タイが今後も固くスクラムを組んで友好親善の関係を強化し協同作戦を完遂するために、青年愛国党の活動は重要であるので、ますます強大に発展することを望むという意味の激励の言葉を述べた。

ソムアン氏は、タイは日本と最後まで運命を共にする覚悟であり、それによってこそタイの運命は終極的に開けるということを確信し愛国運動を続けるつもりであると応じて、お礼を述べた。

山田参謀長は陸大卒業後フランスに永く駐在したことがあり⁷⁶、ソムアン氏もまたフランス留学の経験があるので互いに当時のことなどを語り合い、懐旧談に花が咲いた。メートルが上がるソムアン氏へのサービスのつもりで参席者中の若い三人がウロ覚えのラムトン（日本の盆踊りに似て民衆が豊年祝いの歌として楽しむタイ民謡）を歌い出し大いに賑わった。

幸いにこの夜は空中よりのプレゼントもなくソムアン氏は感謝して帰った。

翌日軍司令部の渉外参謀岸並中佐からソムアン氏の訪日が大東亜省と陸軍省より承認されたので八月下旬頃出発できるように軍で輸送機を準備することになった、と私は電話連絡を受けた。

私は早速ソムアン氏に面会を求めバーンカピのソムアン氏宅を訪ねた。一家はソムアン氏を始め明るい表情で迎えてくれた。私は一家揃って待望のアパイウォン新政権が誕生したことについて、お祝いを述べた。ソムアン氏は新政権の滑り出しは順調で日本に対して軍事、経済その他の面で従来より一層積極的に協力する用意があることは間違いないと述べた。

私はソムアン氏と訪問の挨拶を交わした後、早速ソムアン氏の訪日が八月下旬頃現地軍の準備する飛行機に便乗し先ず東京に直行するという手順で実現することに決まると伝えた。ソムアン氏は戦雲急を告げる時節柄実現は不可能と半ば諦めていた願いが叶って大変喜ばしい、と私の手を握って嬉しさを隠し切れない表情を示し、更に、一個人の訪日という無理な願いを実現できるように尽力してくれた日本政府と現地の日本軍に感謝する、このことは、わが愛国党の同志も喜ぶであろう。在日の父にも連絡するつもりだと述べて訪日念願成就に感謝の意を表した⁷⁷。

私はソムアン氏の母や妹達の何度目かの手製の夕食のもてなしを受けた。ソムアン氏は私のために百数十年も前のフランス製白ワインの栓を抜いてくれた。父親を欠いた一家の晩餐であったが一家揃っての楽しい和やかな会食であった。ソムアン氏は妹達に日本からのお土産として富士山をトランクに詰めて持って帰ろうなどと冗談を言ったので大笑いとなった。母親サワデイ夫人が、戦争が終わったら日本の桜見物に出かけることを楽しみに待っているから皆もそれまで我慢するように、と提案し妹達も賛成した。

ソムアン氏一家の家族的な温かいもてなしを受け厚くお礼を述べて二十時頃辞去した。

八月（ママ）の終わりに近づく頃、ソムアン氏はドンムアン飛行場より空路訪日の旅に出ることとなった。当日ソムアン氏は見送りの妹達を伴い、軽装で携行品などもスーツケース一個という身軽さで飛行場に現れた。

軍よりは岸並参謀、大使館よりは高岡書記官が同行することとなって、すでに待機していた。見送り人は軍より浜田副長（ママ）、K参謀、堀井警務部長、大使館より関係書記官数名でかなり賑やかな見送りであった。この日はいくらか風の強い日であったが上空には雲一つなく澄み渡った好天気であった。私は旅行の無事を祈るとともに豊富な土産話を期待していると述べ、在日の父上に宜しく伝えてほしい、と頼み、ソムアン氏は留守中家族のことを頼むと互いに言葉を交わし握手した。ソムアン氏は見送りの人々にお礼を述べ機上の人となった。ダグラス型輸送機はエンジンの音も快調に、やがて滑走を始め、東方に向かって舞いあがり青空のかなたに姿を消した⁷⁸。

58 新任日本大使アパイウォン政権との親交を深める

アパイウォン新政府は、国民の生活を極端に引き締める政策をとって来たピブン前政府とは全く反対に、徐々に緩和の方向に変える政策をとったので国内は何となく明るさがよみがえったように見えた。

新政府が第一に着手したことは、ペチャブンの政府機関を徐々にバンコクに復帰させる処置をとったことであった。政府職員はもとより朝野の人々も首都の復帰を喜び歓迎した。アパイウォン内閣となってからは王族に対する規制も緩和され、政治犯の釈放、亡命政客の帰国許可、華僑に対する職業選択制限の緩和など前内閣時代の暗い政治を際立って明るい政治に切り換える政策を次々と打ち出したので朝野をあげて壮年宰相アパイウォン礼賛の声が街々に響き渡った。特に報道機関の間には、アパイウォン氏の政治感覚並びにその能力は、技術者出身の政治家（彼はフランスに通信技術の修得のため留学した経験があった）とは思えないほど、鋭いものがあるという評判が専らであった。

九月上旬日本大使館では坪上大使の後任として、小磯内閣の大東亜省事務官次官であった山本熊一氏が新任大使として赴任してきた。

新任の山本大使は中央政府の対タイ新方針に基づきアパイウォン新内閣との外交折衝に当たることとなったが、戦局の悪化特に九月に米軍によってパラオ群島の二つの島が奪取され、十月にはレイテ島へ敵の上陸の危険が迫っているという事態となつては果して日タイ両国が互いに膝を交えて話し合いで円滑に交渉を進めることができるかどうか、ということが軍側の最も懸念するところであった。

軍司令部では山田参謀長兼駐タイ大使館附武官は南方ニューギニア、チモール島方面の師団長〔第48師団〕として転出、後任に浜田副長が参謀長兼大使館附武官となった。

軍司令部では本国中央部よりすでにタイに武力を使用するような事態は、絶対に避けよとの訓令を受けていた。

特高課の情報によれば山本大使とアパイウォン首相とは日タイ攻守同盟の遵守について提携できたという。特に日本側の最も悩みの種であった軍費用パーツの調達についても、アパイウォン首相があらゆる犠牲を払っても日本に協力するという極めて友好的な態度を示し両者は完全に提携できたという。戦局の将来を考えれば、日本側より得るものが殆ど皆無の状態にも拘わらず、インフレを招くおそれのある問題に全面的に協力するなどということは、まゆつば的な或は奇蹟的なこととしか考えられないが、紛れもない事実とあっては、恐らく山本大使の個人的人柄がタイ側に好意をもって迎えられたためであろう。

59 徳田隊長ソムアン氏の留守家族慰問

九月中旬の或る日曜日、徳田隊長よりソムアン氏の留守家族を慰問することにしたから同行するようにと誘われた。徳田隊長、竹内副官、私、宮川通訳の一行は、九時半頃バーンカピのソムアン氏の留守宅を訪れた。サワデイ夫人は自ら玄関に出て私達を迎えてくれた。

徳田隊長はソムアン氏の訪日のため女だけの留守居では何かと心細く、淋しいことであろうと慰問の言葉を述べ土産のケーキをサワデイ夫人に差し出した。夫人はお礼を言いながらケーキを受け取り、ソムアンは戦時中の大事なお務めを背負って訪日したのだから、たとえ我々女ばかりの留守居に如何なる不便があっても、家族一同励まし合って明るい日々を送り、彼が無事に務めを果して帰国することを待っているのだから、心配しないでほしいと力強く答えたが、一人息子のソムアン氏の戦時下における異国への長旅をひそかに案じる母親の表情がうかがわれた。一応両者の挨拶が終わったところで、サワデイ夫人は我々を郊外へのドライブに誘った。サワデイ夫人は、今日は天気もいいし風もなく好日和であるから我々一家と一緒にドライブしピクニックをしようではないか、我々はそのために食事も準備し、車にはガソリンを満たし末の娘が運転するように用意を整えて待っていたのだ、と言うのであった。

私達は全く予期しなかったことだったが、折角の誘いなので快諾した。隊長の車には、サワデイ夫人、次女、竹内副官（竹内は英語ができるので通訳の役を引き受けた）、末娘の車は、私、長女、宮川通訳が乗り末娘の車が道案内の役を引き受けることとなった。

バンコク郊外の道路はまだ舗装されていないので時速六十キロの速度でも砂塵が舞い上がり後方の隊長の車は、往昔私達が中国での自動車行で経験した黄塵万丈、見通しの悪い状態ではないかと心配するほどであった。

パークナム軍港をはるかに望むメナム河畔の美しい部落で私達は車を降りた。この部落は濃緑の森と林の中に色とりどりに花咲く美しい庭園があり森と林を吹き通る涼風は暑さを癒やし快適であり、また私達の選んだ花園の近くの休憩所から眺める、メナム河の注ぐタイ湾の河口付近にあるパークナム軍港の景観は、大小数多の艦艇が威容を整えて整然と浮かび、神秘的な聖なる城を仰ぐに似て美しく壮大であり、人々の行楽地として好適な所であった。

出発の際持ち込まれたタイ料理や飲物、果物などが急造の野外食堂に並べられた。隊長は、愛用のスコッチを取り出して私達がタイ料理の昼食をご馳走になっている間、タイ料理を肴にチビリチビリやっていた。

野外で食べる料理はどんなものでも大抵は美味しいものだが、持参の手製料理はソムアン氏一家ご自慢の共同製作の産物であるだけに舌鼓の音しばし鳴りやまなかった。

食事が終わると末娘の提案でタイの野外踊りが三人の娘達によって歌に合わせて始まった。手と足をしなやかにリズムカルに躍動させる優雅な踊りはタイの誇る独特の民族舞の一つだという。私達も思わず歌に手拍子を合わせて妙技を讃えた。最後に娘達がいつの間にか覚えた日本の愛国行進曲の一節を歌い出したので私達も唱和し、これをもってこの日の野外パーティの幕を閉じた。

帰途は車の順序を変えた。隊長の車が先頭に、私達は後についた。途中娘の車が道路を横切る女兒をひいてしまった。幸いに、怪我は大したことはなく女兒が車に軽く接した程度だったが、母親の抗議に対し相応の見舞金を出して示談で済ませることができた。この事故の

ためソムアン氏邸に帰ったのは夜の八時頃であった。徳田隊長はサワデイ夫人に、ソムアン氏の留守宅を慰問に来たのに却って慰問されるという、おかしなことになってしまったと恐縮するとともに歓待を受けたことに丁寧なお礼を述べた。

ソムアン氏邸を辞去する際、サワデイ夫人は我々にお茶を勧めながら、わが家にはソムアンのほかに、もう一人男の子がいる、それはこの人だと私を紹介した。私は急に妙なことを言い出したのでびっくりしたが、ソムアン氏一家と交際するようになってからサワデイ夫人は、ソムアンはたった一人の男の子、一人では不安だから彼の兄となってくれ、と独りで決めたことがあったことを思い出した。居合わせた一同が不思議そうに私を見つめたので、サワデイ夫人は、この人とわが家との交際が親密となった際冗談に言い交わしたことで、その時この人はそれではタイ語を勉強しタイ人にならなければならないと言ったなどと打ち明け話をしたため、一同は成るほどと笑った。

私達は戦時下ながら行楽の楽しい一日を過ごすことのできたことをソムアン氏一家にお礼を述べ、幸いに空襲の気配もない静かな夜の星空を仰ぎながら宿舎に帰ったのは、二十二時をまわった頃であった。

60 ソムアン氏帰国

ソムアン氏は十月（ママ）下旬、日本軍のダグラス輸送機で約二ヶ月の日本及び中支の視察旅行を終えて岸並渉外参謀と共にドンムアン飛行場に帰着した。私は約二ヶ月前にソムアン氏が日本へ向け出発した時と同様、黄塵の舞い上がるような風の強い当日、出迎えのために飛行場で待っていた。

ソムアン氏は機内よりコートの襟を立てた姿で現れるやタラップの上で出迎えの人々に手を振って挨拶した。私はソムアン氏がコートの襟を立てて姿を現した時、気温の異なる日本や中支などでの晩秋の合衣のコートを要する季節における長旅は、彼の健康に害を及ぼしたのではないかと心配したが、それは全くの杞憂であって、いささかの衰えも見せず、血色もよく益々元気で帰って来たので安心した。ソムアン氏は出迎えの人々に簡単にお礼の挨拶をした後、出迎えに来ていた末妹と共に帰って行った。

翌日彼は軍司令部や大使館にお礼まわりをした後、夕刻私の宿舎にやってきた。私はソムアン氏の求めに応じてタイランドホテルに和食の予約をしていたので、ソムアン氏をホテルに案内した。

会食の前に私は宮川通訳を介し無事に帰国したことを祝いソムアン氏と乾杯した。私は彼に戦時下の日本の印象を語ってほしいと求めた。ソムアン氏はビールの杯を重ねながら次のように語った。

八月（ママ）下旬ドンムアンより空路日本に向け出発したが大陸の海陸の沿線に沿って飛行したため東京に到着するまでに三日を費やした。日本の陸軍省、大東亜省の人々の出迎えを受けたが何れも親切に、もてなしてくれた。父は元気な姿で空港に出迎えてく

れた。わが宿舎は日本当局のはからいで赤坂ホテルに準備されていたので父と共にホテルに入った。荻窪の父の家には日本事情を聞くとかタイの政情について或は国内事情などを伝えるために訪れたに過ぎなかった。日本の国民は皆、自国のために一致協力して、敵の激しい空襲を受け日常生活が苦しくなっても、よくこれに耐え生産部門の仕事に従事している。特に非戦闘員、婦人は老いも若きも黙々として軍需工場における生産品などの製造の仕事を担当し、日夜努力を続けている。東京並びに地方都市の町々には隣組という細胞的組織ができており、この組織が有機的に機能することによって上意下達が徹底するというようになっている。このようなことも日本の国民大衆が戦争の意義をよく理解し一致団結し国家のために献身的な努力をしているからである。

東條首相に代わって後継首相となった小磯大将を始め陸海軍、大東亜省、各大臣や財界の要人とも面接させてもらったが、現地における日タイの協力提携の点については、わが青年愛国党が双方のパイプとなって絶えず密接な関係を保ち、情報を交換し、日タイ協同作戦に妨げとなるような事態は未然に処置することにしてしていると説明した。また、青年愛国党の性格についてもアジアはアジア人の手に、のスローガンで以てタイは日本と最後まで運命を共にするという憂国青年のグループであると説明した。父は、日本の戦力はまだ続くがサイパン陥落は日本の運命にかかわる一大打撃であったと思うと語った。自分は愛国党同志に戦う日本の姿を正しく伝える義務があるので、父より聞いた日本の事情と自らの眼で見た日本観を率直に伝えるつもりだ。

わが父の協力者、三井の池田〔成彬〕氏は自分を大変歓迎してくれた。父は今後も引き続き池田氏とスクラムを組んで研究を続けるらしい、

と、ソムアン氏は日本視察の概要を以上のように語った。

私はソムアン氏に父上はいつ頃タイに帰るのかと聞いた。

父はピブン政権に代わってアパイウォン新内閣が誕生したのだから帰国の意向はあるが、家族（ソムアン氏には義母に当たるフランス婦人と異母妹）をかかえて八年間も日本に生活していたので、家財道具やその他の荷物も増えているため戦時下の日本では輸送の問題があり帰国は容易には実現しないかも知れない。しかし日本には要路の知己が多いので何とか便宜をはかってもらえるであろうとのこと。

日本は已むを得ず世界を相手に戦争することになったが、日に増し戦況が不利になっている。仮に日本が敗戦という不幸な事態となっても日本は必ず再起の潜在能力をもっていることを見抜いた。またこの大戦が終わったらアジアの国々は必ず独立することを予言する。この独立は日本のお蔭で実現するということになることを銘記すべきである。このことをアパイウォン氏に伝言してほしい、

と父はソムアン氏に頼んだという。

この予言は終戦後意外に重要な意義をもつようになった。

さて私は更に尋ねた。南京、上海方面の事情についてはどうか、と。

連合軍の全面反攻作戦が展開されているのに支那方面の戦線は意外に平静であった。これは汪政権が日本軍の占拠地域を支配するようになったからではない。恐らく連合軍の世界戦略上の一時的現象と思われる。抗日を展開している蒋介石との和平工作が不断に真剣に行われているという。ただ最も懸念されることは、共産軍と抗日共同戦線を張っている蒋介石政権つまり国民政府が最終的に共産化するのではないか、ということである。

ソムアン氏が訪日へ旅立つ際ドムアン空港で約束した土産話は予期以上の実りの多いものであったので私は厚くお礼を述べた。

ソムアン氏は明日浜田参謀長を訪ね同様のことを報告する、と言って帰って行った。

61 枢軸軍の戦況悪化

アパイウォン内閣となってからは雨期明けの季節に入ったにも拘わらず、敵機の空襲は減少した。[空襲は1944年11月2日、3日、4日、27日、29日、12月2日、14日、1945年1月2日、7日…と数は多いが、工場、橋、駅舎への限定空爆に変化した]アパイウォン氏は自由タイの領袖と目されている、プリディ摂政の系統であるため、そのルートを通して連合国側との密絡があったためではないか、と現地当局間には疑問の噂が流れたが、しかしアパイウォン政権は発足の当初より公然と親日を標榜しているのであるから敵側にも敵性政権と見做されているはずである。ところが空襲が少なくなって、つまり攻撃の手が緩められた。これは明らかに矛盾である。

アパイウォン氏が親日家であることは氏が総理の座についた時、逸早く日本の求めに応じて軍費用パーツを発行することを言明したことによって明らかである。日本側にとって、この問題は前ピブン政府の時から対タイ交渉事項中でも、最も困難なことがらであっただけにアパイウォン政権の対日特別円問題に関する言明は有難いことであっただが、やはり半信半疑でもあった。

敵の空襲の手の緩んだことはソムアン氏が中支、上海を視察したときに感じたことと同様に、敵の大反攻戦略上の一環であるかもしれない。

情報によればソムアン氏の同志がプリディ摂政に働きかけて国内外の自由タイの暗躍を抑圧する処置をとってもらっているという。本部特高課の情報の確認によれば、国内の自由タイの地下活動の取締はピブン総理の指示に基づいて、アドゥン警視総監が直接指揮していたが、アパイウォン政権誕生とともに日本軍と事を構えることは絶対に避けるという方針を以てアドゥン総監の活動を極力抑えているという。

昭和十九年の師走は、枢軸陣営の日独両軍に敗戦の非運の兆し濃厚な年末であった。即ち、日本軍は十二月中旬、レイテ島も遂に敵の手中に陥ち、南方軍の各要塞は孤立するという事態となってしまった。他方西欧の盟邦ドイツ軍も我がレイテ作戦と呼応して十二月中旬連合軍に対し最後の一大反攻を試みたが成功するに至らず、遂に反攻の企図を断念すること

となった。かくて昭和十九年の最後は東西枢軸両陣営の戦局の前途に悲しむべき暗影を投じて閉幕した。

一九四五年（昭和二十年）

62 仏印進駐日本軍の仏印武力接收

昭和二十年の新年は、バンコクに爆撃もなく平静に明けたが、日独両軍の戦局の悪化によって在タイ邦人にも、タイ朝野の人々にも不安な雰囲気は漂い、正月気分どころか暗い緊張感に包まれていた。

戦況は新年を迎えると同時に、ますます悪化の一途をたどるばかりであった、即ち米軍はレイテ島奪取後、一月中旬より二月上旬にかけ、フィリピン作戦を展開し遂に首都マニラを陥れ、他方西欧においては、東はソ連軍、西は米英連合軍の呼応総反攻作戦を受けたドイツ軍の崩壊は、今や時日の問題となった。

この間、二月上旬ヤルタにおいて米英ソの三巨頭が会談を行い（いわゆるヤルタ会談）、ソ連の対日参戦が決定され、その際日本及び満州の処理に関して、ソ連の主張が認められたという。

三月上旬、英印軍はビルマ領内に進入し首都ランゲーンの攻略準備中との情報がタイ内に流れるや、もし日本軍が英印軍のランゲーン攻略に対し敗北を喫することになれば、タイ領内に後退するやも知れない、という不安な空気がバンコク市内に広まった。

一方、仏印駐留日本軍と仏印日本大使府は日独両軍の戦況が日増しに不利になるにつれ、仏印総督の態度が次第に非協力的となり、また時としては反日・抗日的とさえなってきたので、安南を独立させるため三月十日の前夜武力によって仏印を接收したことが在タイ日本軍司令部に通報された。これによって在仏印フランス軍は武装解除され越南、カンボジア、ラオスは独立しタイ仏印国境は閉鎖された。

ビルマの戦況や仏印の日本軍による武力接收のニュースが市内に流れるや、憲兵隊は例によって国民大衆の反響調査を試みた。

タイ政府要人は何れも、多くはやがて仏印と同様の事態となるに違いないという多少不安感を懐いたが、如何に東西の戦況が枢軸側に不利となってもアパイウォン内閣によって日タイ協力が友好親善の状態では何らの異変もなく行われている現在、とりわけジェネラル中村の人柄からしてもそのような非常手段に訴えることはあるまいという楽観的な風潮が市内に漂っているという。華僑は一般に関心が薄く、よそ事のように冷静な構えだという。一般大衆は次はタイがやられるに違いないなどと噂するが大して心配をしている様子は見えないという。

特高課の情報によれば、自由タイは海外の自由タイを通じて連合軍に、在タイ日本軍の武力行使を牽制するため爆撃を要請し、爆撃目標はタイの陸軍の上級将校が、日本軍の施設を爆撃目標として空襲機に地上より合図するようになっているが、その人物の氏名はまだはっ

きりとつかんではない、という。

三月十日、陸軍記念日当日、中村軍司令官は日タイ朝野の要人を軍司令部の構内に舞台を設けて招待し、饗宴を張った。タイ側はアパイウォン総理を始めパホン將軍、シン国防相など多数の閣僚や陸海空軍の將軍、財界要人など出席し盛會を極めた。

この催しは時節柄、タイ側朝野の人々の不安を和らげるために機を失せず行われたもので効果的であった。

三月下旬ビルマにおいてビルマ国民軍はオンサンが主謀者となって日本軍に対する叛亂を起し、日本軍の南方戦線の態勢はいよいよ破局に追い詰められ、その上、作戦面においては英印軍はすでに首都ラングーンに迫っており、わが本土方面では三月下旬より四月始めにかけ米軍は遂に沖縄本島に上陸を開始した。ここにおいて大東亜戦争もいよいよ決定的勝敗の運命が近づきつつあるという感を深くするに至った。

63 憲兵隊無線探査班、電波スパイ検挙

南方総軍よりタイ駐屯憲兵隊に配属され、隊長指揮の下にチュラロンコン大学構内に秘密裡に位置して敵性無線の探査に従事していた将校以下十八名の無線探査班が、バンコク市内で偽装のラジオ修理店を営む中華民国国民党軍事委員会系統より派遣された諜者を検挙したことがある。

その後、清水大尉が無線探査班長として就任して以来、正体不明の容疑電波をキャッチしたので、バンコク市内における敵性電波発信所の所在を突き止めるため怪電波の受発信時刻、符号、電波の特徴などのデータを統計的に聴取していたが、このデータに基づき市内の受発信所の位置を概ね見当をつけ、更にこれを確認するため市外の或る民家をマークして怪電波の受発信、つまり交信の状況を交会的（数箇所より交會法の要領で傍受する）に探査を続けた。

昭和二十年三月中旬、探査班は重慶より放送される暗号指令とこれに対して応答する交信所は、マークしている家屋に間違いないことを確認するとともに、これまでの統計により交信の日時は、奇数月は月、水、金、偶数月は火、木、土。受信時刻は、奇数月は午後十一時四十五分より十二時まで、偶数月は零時五分より二十分まで、ということをつまえたので、徳田隊長は清水大尉並びに特高課長〔岩崎禮三〕と私を招き意見を聞いた後、無線諜者を逮捕する意向を示し、清水大尉を長として、無線探査班を主体とする無線諜者検挙隊を編成し逮捕の準備を進めることを指示した。

私たちは徳田隊長の指示により現地の立地状況などを検分し、清水の検挙実行計画作成の指導に当たった。

無線諜者検挙隊長清水大尉は、次の計画を立案した。即ち、隊を逮捕班（憲兵六名）、警戒班（補助憲兵要員として配属された歩兵二箇分隊）、予備班（憲兵四名）に区分する。

携行器材は、逮捕直前の交信準備時刻を確認するための無線器、逮捕用具、逃亡や外部よ

りの妨害を防止するために軽機一。決行の日時は、三月下旬のX日、水曜日の敵性交信時刻の寸前、即ち十一時四十五分。タイ当局との連絡は、秘密漏洩防止のため当日ジャムラット警察少佐（タイ側の日タイ連絡将校）に口頭で伝え、立会のため同行を求める。決行日の薄暮より検挙隊は、各班毎に分散隊形をとり匍匐前進し、逮捕班は家屋の南北の出口に突入するために南北二手に分かれ、警戒班は諜者の逃亡、内外部よりの妨害を防止するため目標の家屋に通じる通路の二ヶ所に、予備班は逮捕班の南口突入組の後方に控えるという配置につくために、目標家屋より概ね二百米前後の距離にある雑草や灌木の茂みを利用して集結し待機する。突入の合図は、検挙隊長の携帯電灯の点滅による。

以上が清水大尉の計画の概要であったが、徳田隊長は決行の際の集結地へ進入し配置につくまでが企図の秘匿上最も注意を要することである、と戒めて、計画を承認した。

決行の当夜は曇り空であった。隊長と副官、私と特高課長は検挙隊に同行することになった。タイのジャムラット警察少佐も当局の指示を受けて立会のために駆けつけた。

検挙隊は清水大尉の指揮により薄暮に乗じて昼間の待機位置より徐々に集結地点に肅々と匍匐前進し突入の時機を待った。

目標の家屋より洩れるランプの灯が、私達の潜伏している位置からも、かすかにうかがわれるが、屋内のたたずまいには何の異変も感じられないので検挙隊の隠密行動が適切であったようだ徳田隊長と囁きあった。周辺の静寂は不気味なまでに静まりかえっていた。

検挙隊の斥候の報告によれば屋内の諜者達は検挙隊の行動を察知した気配はなく無線器の操作に専念しているという。

時刻はまさに十一時四十五分である。

清水隊長は斥候の報告を聞き直ちに突入を決意し、予て打合せた通り携帯電灯を連続点滅した。検挙隊は行動を起こし、逮捕班は南北両入口より一斉に突入した。不意を打たれた諜者四名が対応の暇もなく無抵抗のまま逮捕された。まさにクリーンな奇襲であった。

検挙隊は夫々分担して暗号書、無線器材、交信記録その他、証拠となるべき物件を押収した。時刻は、丁度零時三十分であった。

検挙隊は逮捕により重慶側が異変を察知することを懸念し逮捕した諜者に偽交信を続けることを命じたが、重慶よりは遂に何の応答もなかった。

押収した諸物件は徳田隊長の命により北分隊において処理することとなったので再度物件の点検の上、保管した。諜者の取調は、逮捕班と北分隊とで行うように徳田隊長より命じられた。タイ当局に対しては立会したジャムラット警察少佐を通じて連絡の手続をとり何の問題もなく事は終わった。

北分隊の取調の結果、タイ国内の無線諜者の責任者は重慶の外務人民委員会系統より派遣された青雲という中国人で約一年半前よりタイに潜伏し、軍事・政経事情を無電をもって報告し、重慶よりはその都度指令を受け諜報活動に従事していたという。

自由タイ（戦時中タイ国内に潜伏し通敵行為の地下運動を行っていた秘密組織）とは全く

関係がないと言い張った。

軍司令部では、逆用して重慶よりの情報をキャッチすることを主張するものもあったが、成功の望みはないので断念することとなった。

この事件によって他にも重慶のスパイがタイ国内に潜在しているという疑いが、ますます濃厚となったのでタイ内のスパイ活動は戦局の重大化に伴い一層活発化することが予想され、とりわけ自由タイの暗躍が顕在化するおそれもあるので、タイ当局とも緊密に連絡して嚴重に査察する態勢を整えることになった。

64 プラ・サラサス氏八年振りに祖国タイに帰国

四月上旬の或る日、ソムアン氏より電話で氏の父プラ・サラサス氏が日本より仏印〔阿波丸で1945年2月25日にサイゴン着〕を経て帰国したことを知らせて来た。私はプラ・サラサス氏の帰国を予想もしていなかったので突然の「父帰る」の連絡を受けいささか驚いたが、取りあえず無事の帰国に喜びを述べ、早速ソムアン氏の会社ウートン・タイを訪ねた。

ソムアン氏はプラ・サラサス氏が日本の政府要人の取計で、海路サイゴンに上陸し四月初旬陸路帰国したと語った⁷⁹。

私は、日独両軍も遂に決定的な事態に直面するに至ったので、同盟国タイも国の安危にかかわる運命の転機に際会している重大な時に、タイの最上級の人物の一人であるプラ・サラサス氏が帰国したことは、サラサス家にとって大いなる喜びであることは勿論、タイ国にとっても救世主の帰国に等しい慶事である、とお祝いを述べた。

私は、プラ・サラサス氏は要職に就く意向があるだろうかと質問したが、ソムアン氏は老齢だから常勤職に就く意志はないが、財政通であること、日本の現事情に精通していること、更には祖国から離れて久しい間、客観的に諸般の情勢を観察してきたことからタイ政府の政策推進に適宜アドバイスを与える顧問のような役割を担当するであろうと答えた。

私はソムアン氏より聞いたプラ・サラサス氏の帰国の模様を夫々関係上司に報告した。

浜田参謀長からは、戦局が悪化の一途を辿る現情勢においては親日知日派たるタイの長老的存在のプラ・サラサス氏のような大物こそ、わが国とタイ国との友好親善関係を最後まで保ち得る要人として重要であるので、極力接触を密にするように、と指示された。

プラ・サラサス氏はすでに離婚しているサワデイ夫人の居宅に、フランス人の夫人並びに女兒と共に同居するわけにはいかないのでバーンカピのソムアン氏邸の近くに借家住まいをした。憲兵隊は中村司令官の指示により、時節柄プラ・サラサス氏の身边に万一の危険の起こることを顧慮して身辺護衛を行ない、特高課の水野曹長をプラ・サラサス氏の居宅に寝泊まりさせた。

プラ・サラサス氏はルンピニ公園の近くに豪壮な別邸を有していたが、彼が日本に長期滞在中に、日本軍の徴用した日本空輸会社バンコク支店の駐タイ職員の宿舎として、駐屯軍がタイ政府より借用して貸与した。ところが同職員の長期居住のため相当荒らされたので、帰

国後プラ・サラサス氏は私を通じて軍に損害賠償を要求してきた。軍は経理官をして調査させた結果、賠償額八千バーツ相当と査定し、プラ・サラサス氏に支払ったが、同氏は八千バーツでは賠償額があまりにも少な過ぎるとして息子のソムアン氏を通じて私に、軍に対して追加を求めるように依頼してきた。

私は浜田参謀長にプラ・サラサス氏の追加要求を報告したところ、参謀長は軍司令官の承認を得るようにはからい、追加額を七千バーツと決め経理部より支出させたので、私はこれを、ソムアン氏を通じてプラ・サラサス氏に手交した。追加支給を容易に認めたのは、対タイ工作上得策であると判断したためだったという。

65 空襲激化に伴い自由タイの暗躍活発となる

この頃のバンコクは度重なる空襲によって電灯は消え、水道も停まるという状態だったが、四月上旬の空襲は最も熾烈さを極め、バンコク市外にある鉄道機関庫並びに停車場までも大損害を受けるに至った。当時この停車場附近にはタイの軍隊が集結していたので、この爆撃により多数の死傷者が出るという惨事が起きた。敵機は恐らく日本軍の集結と誤認したのであろう。しかし、特高課の調査によれば国内の自由タイが敵機に目標の合図をする際、連絡に手違いがあったためだという噂もあるという。

その後間もなく三菱ワーフ付近にあった日本軍の兵器庫が何者かに時限爆弾を仕掛けられ爆発したので将兵に多くの死傷者が出るという一大不祥事が起きた。憲兵隊では自由タイの謀略とみて捜査を開始したが、時限爆弾を仕掛けたと推定されただけでその他の手掛かりは得られなかった。その後、警戒を嚴重にするため憲兵隊はタイ側に連絡して、北分隊の管轄内にある連合側抑留者約三百名に許していた毎日一定時間の市内散歩を、禁止する処置をタイ側にとってもらい、北分隊はこれを警視することとなった。

丁度この頃、敵機が来襲したが市内に爆弾を投下することなく北方に飛び去ったので軍当局は不審をいだき、特に憲兵隊に調査を指示した。

憲兵隊は軍の指示に基づき、タイ当局と協力し、南分隊長を長とする憲兵六名、補助憲兵軽機携行の一ヶ分隊の探査班を編成し、敵機の怪飛行の正体を突きとめるため敵機の飛び去った方向へ聞き込み捜査に派遣した。探査班は所在の容疑の村落において聞き込みを続けながらカンボジャとの国境近くまで苦難の探査活動が続けたが、残念ながら何らの手掛かりも得られず空しく帰隊した。

66 ソムアン氏仏印に亡命

五月中旬の或る日、ジャムラット警察少佐が、ソムアン・サラサス氏は日本側との接触が多過ぎるというので自由タイに狙われ、身辺の危険さえあると連絡してくれた⁸⁰。

私は平素ピブン内閣を退陣に追い込んだ工作の同志であり、兄弟のような交際をしてきたソムアン氏が日本側との接触が多過ぎるなどという理由で身辺に危険を招くかも知れない⁸¹

と聞いて大なるショックを受け、ソムアン氏に万一のことがあっては申し訳ない、一刻の猶予もならないと思い、直ちに隊長に報告した。隊長は取りあえず電話で浜田参謀長と〔中村〕軍司令官に報告し、軍司令官は速やかにソムアン氏を憲兵隊において保護するように指示した。

憲兵隊本部庁舎の南隣には、軍の依託経営を受けているオリエンタル・ホテルがある。私は早速隊長の意図に基づき、ホテルの支配人杉山氏と交渉し憲兵隊に最も近い北側の一室を借り受けることとしてソムアン氏に連絡した。

強気のソムアン氏は、

自由タイのような反祖國的グループを恐れてはいないが、飽くまで日本と運命を共にするという意図なので、不幸にして日本の敗戦という事態となっても、将来日タイが協力して白人勢力をアジアより駆逐する態勢を挽回することができるように自重する、という意味で、日本軍とりわけ憲兵隊の好意を受ける、と相変わらず壮々などころを見せ、直ちに愛国党の同志に連絡をとり、取りあえず日用品を携行してホテルに移ってきた。

憲兵隊では私服の憲兵二名をソムアン氏の隣室に起居させて身辺の直接護衛に当たらしめた。

ソムアン氏を憲兵隊庁舎に最も近いホテルの外壁、言わば隣室のようなところに一室を借り、保護していることを、私は彼の家族と父プラ・サラサス氏に知らせた。

両者とも意外な事態となったことに大いに驚いたが、母サワデイ夫人や妹達は格別取り乱した様子もなく面会に駆けつけ身の回りの世話をした。彼らは何故の保護なのか知りたいためソムアン氏に色々尋ねても、ソムアン氏は肉親に心配をかけないように、さりげない様子で大したことはない、日本の憲兵隊が付いているから大丈夫、心配することはない、と逆に家族を慰める有様であった。

ソムアン氏保護の応急処置を済ました私は、隊長とともに今後の処置について指示を受けるため軍司令部に出向した。軍司令部では中村司令官始め浜田参謀長、岸並参謀が集まり協議の結果、軍の特別機でソムアン氏の身柄の保護をサイゴン軍司令部に依頼することに決定し、岸並参謀が交渉に当たり承諾を得た。他方、軍経理部では軍司令官の指示により、手持ちの仏印通貨約二千ピアストルをソムアン氏に贈ることとなり、私はその受取り人となってソムアン氏に渡した。

これら一連の処理はジャムラット警察少佐より情報を受けてから約一日半で終わった。

ソムアン氏がオリエンタル・ホテルに移って間もなく、夜間ニューロードより憲兵隊庁舎に通じる入口付近の路上に、タイ警察官らしいのが張り込むようになった。ソムアン氏の動静をタイ警察官が監視するという穏やかならぬ露骨な行動に出るということはソムアン氏を犯罪人扱いするようなもので、親日政権たるアパイウォン政府の指示によるものとは思えない。何かの間違いであろうと思ったが、ソムアン氏の身辺に何が起るか予測し得ない事

態となったので、可及的速やかに国外へ脱出させることが肝要と飛行機の準備を軍に要求した。出発できる日は四、五日後とのことだったので已むを得ずソムアン氏護衛の要員を増加した。

この間当分の別れともなるであろうとソムアン氏の心情を察し、愛人のタイ女性と脱出まで一緒に過ごすように取り計らった。そのような不安な状態の中で、何と心ないことをするのだと批判する者もあったという。

その夜一変事が起こった。

身辺護衛の憲兵の報告によれば、深夜暴漢らしい曲者が、ソムアン氏の居室の窓から様子をうかがっているのに気がついたソムアン氏は威嚇のため、拳銃一発を発射した。曲者は慌てふためいて逃げ去った。夜間警戒勤務の補助憲兵が銃声を聞いて曲者を探したが遂に見失ったという。

この事件のあった日より三日後飛行機の準備ができたという軍司令部よりの連絡によって翌日の二十四日午前一時、私はソムアン氏を憲兵隊の構内に誘導し、私の車に乗せ、私服の憲兵下士官二名を護衛のため同乗させ、宮川通訳も帯同し密かに憲兵隊庁舎より四囲を警戒しながら出発し、深夜のバンコクをあとにフルスピードで一路ドンムアン飛行場に向かった。飛行場にはすでに整備を終えた九二式戦闘機が待機していた。戦闘機には軍人以外の者を搭乗させることは殆どなかったのだが、ソムアン氏の脱出のために言わば特別仕立の脱出機として準備されたものであった。

国外脱出という秘密を要する行動のため、見送る人もない。ソムアン氏は私を通じ、軍及び関係機関に脱出のための行き届いた配慮に対し厚いお礼の伝言を依頼するとともに、再会の機会をつくり日タイ提携、協力の実現をはかるために頑張ろう、父や家族を宜しく頼む、と手を差し伸べ固く私の手を握った。私も今後も必ず機会を捉え、同志として互いに協力し日タイ共同の所期の目的達成のために努力しよう、と答えて手を握り返した。

ソムアン氏はタラップを昇り、手を振りながら機内に入ると、上昇の早い戦闘機は見る見の中に東北方の上空に向かい突進して行った。

その後憲兵隊としてはアパイウォン首相は自由タイと関係があるという容疑を抱くに至ったので盟邦の最高指導者である首相であっても一応監視の要ありとして尾行を付けることに決定し北分隊が担当することになった。

67 辻政信大佐軍参謀として登場

六月上旬ビルマ方面軍から辻大佐〔辻政信、陸士36期、1902年10月生〕がタイ国駐屯軍〔第39軍〕の作戦主任参謀として転勤してきた。

私は辻参謀がアパイウォン首相に挨拶するというので案内することになった。かつて私はアパイウォン氏が首相になった時、彼と親しい間柄にあった宮川通訳の父〔宮川岩二〕に案内されて私的に訪れたことがあるのでアパイウォン首相とは面識があったため案内には好都

合であった。

国立競技場の近くにあるアパイウォン首相の私邸に、私は辻参謀を案内した。アパイウォン氏は私の初めての訪問の時と同じように、応接間に飾ってある京人形を示しながら日本の好印象を語るとともに辻参謀の軍歴、特に馬來作戦、ビルマ戦線における活躍振りを予め知っていたらしく、典型的日本の軍人であり名参謀だと最大級の讃辞を贈った。

過分の讃辞を受けて恐縮の態だった辻参謀は、今日は日タイ協同作戦の最高責任者たるアパイウォン首相に対する表敬の意味での訪問に過ぎないので高説拝聴の時間のないことは甚だ残念だが今や戦況が重大な局面を迎えている折柄、大東亜戦の目的達成のため、日タイ双方の協力提携をますます密にして戦って欲しいと丁重にお願いして辞去した。

その後間もなく花谷正 [1894-1959, 陸士26期, 1945年7月第39軍参謀長, 同月16日第18方面軍参謀長] 中將がビルマよりタイ駐屯軍(ママ)の参謀長として転勤してきた。浜田参謀長は副参謀長兼駐タイ大使館附武官となった。

この異動はビルマ方面軍の敗退によって南方総軍全隊の編成替えが行われ、ビルマより後退の部隊をタイ駐屯軍に統合してタイ方面軍[第18方面軍]と改称するに至ったため行われた、言わば南方総軍最後の決戦のための人事異動ともいべきものであった。

辻参謀はタイ事情、特に政情を知るために連日私を招いて説明を求めた。

自由タイの暗躍が、タイの治安を乱す基となることを強調し、その現況はプリディ摂政、その部下アドゥン警視総監、アパイウォン首相も文人派系統としてプリディ氏の指導を受ける立場にあり、言わばプリディ氏一派と見ることができ、アパイウォン内閣は軍として最も必要な軍費用パーツの無制限の供給をピブン前内閣よりも円滑に実行している状態であり、プリディ摂政は、日本より最近帰国したプラ・サラサス氏とは革命時代よりの文人派として盟友であり、しかも知日派、親日派と言われるプラ・サラサス氏と同一歩調をとって終戦まで日本を裏切るようなことはしないことを約したという情報もある。ただアドゥン警視総監だけは対日非協力態度を現し、国内の自由タイを密かに操縦しているという情報がしばしば報告されている。日本と最後まで運命を共にしようとする青年愛国党党首ソムアン・サラサス氏が戦況の悪化に伴い灰色と化したピブン前政権を退陣に追い込み、親日政権としてアパイウォン内閣を成立誕生させることに成功をもたらした、という愛国的功績をあげたにも拘わらず、自由タイの手で暗殺させようと企てた男である。このためソムアン氏は目下仏印に亡命中であるが、このように現地における日タイ関係は、必ずしも以前のように友好親善のよい関係ではなくかなり緊迫した雰囲気包まれている。しかしソムアン氏の青年愛国党の残党員がソムアン氏の意志を堅持して政府を見守り、また親日勢力たる海軍の大部は親日を標榜する現政権の政策を支持しているので、日タイ関係が今俄に急変することはないと思うが、憲兵隊としてはアパイウォン氏にしてもプリディ氏にしても自由タイとの関係があるという疑があるので、万一の場合を考え尾行をつけて監視させている。

最近敵機がバンコクの上空に進入しても爆撃を行わず、東北方に飛び去ったが、その後の消息は不明だったので探査班をして敵機の飛び去った方向に向かい地上の所在部落の聞き込み捜査をさせたが何の兆候も発見し得なかった、と説明した。

辻参謀は花谷参謀長の承認を得てバンコクの地上防備は不備だとして、戦術的要所にトーチカを築き防御態勢を整えるため着任早々にタイのチーク材と土嚢をもってトーチカの構築を自ら陣頭に立って指導に当たり、短期間に一応完成した。しかし、トーチカと言えば、元来、鉄材やセメントをもって堅固に造るものであるはずだが、チーク材と土嚢で代用しなければならないとあっては甚だ頼りなく心細いことではある。けれども当時はすでにそれらの資材の入手が残念ながら困難だったのである。

辻参謀は [7月9日]⁸² この防御施設を中村軍司令官の名によってタイ国政府首脳やタイの高級軍人を招き要所を案内し説明してまわった。

見学の終わった後、特高課で見学者の感想を聴取した結果は、タイに対する空襲のためには大して有効だとは思えず、またもし仮に英印軍がタイに進入してきた場合、果して防塞として役に立つかも疑問である。あのトーチカは、むしろタイに叛乱でも起きた場合か、仏印のような武力処理の場合に使用するために構築したもので、我々を招いて見学させたのは、我々を威嚇牽制するためではなかったか、という疑問が返ってきた。また、一般市民の間にもそうした不安が噂の種となっているというくらい厳しい状況であった。

五月八日、西欧では独軍が遂に連合軍の軍門に降りた。このため国民大衆の間に不安と動揺の雰囲気のみなぎった。

五月中旬（ママ）の始めの或る夜、プラ・サラサス氏は現在の居宅に中村司令官、花谷参謀長（ママ）、浜田参謀副長、徳田憲兵隊長を、タイ側よりアパイウォン総理、タウィー副総理、シン国防相、シナート陸軍副司令官、カーブ空軍司令官らを招いて夕食会を催した。私は会場の準備を手伝い、また、時節柄隊長の指示に基づきプラ・サラサス氏の居宅の四囲の要所に六名の私服憲兵を配置し警戒に当たさせた。

この夕食会の目的は、プラ・サラサス氏の挨拶によれば終戦を見越して日本軍現地首脳とタイの首脳陣とのお別れのために開いたものであるが、たとえ、終戦となっても日本とタイは飽くまでも盟邦として交誼を続けようという、言わば橋渡しのための演出だったように思われた。会は極めて和やかな雰囲気のうちに行われ、特にタイ側は日本軍の能力の優秀性を讃え、将来共互いに兄弟国として緊密に提携してアジア人のアジアを建設すべきである、と強調した。

68 ジャングル内に敵性飛行場構築

花谷参謀長と辻参謀とがタイ駐屯方面軍に転入した後、再び小規模ながら空襲が始まった。しかも昼間無人の境を行く如く悠々と行われるようになった。

辻参謀は国内自由タイの連合軍への通敵行為とみて、先日バンコク上空に飛来したが爆撃も行わずに飛び去った敵機の行方をたどって自ら軍用機に搭乗して飛び回った結果、バンコク東北方約二〇〇キロおよび西北方二五〇キロのジャングル内に秘密の飛行場らしきものが造られていることを発見し夫々空中写真を撮影して軍司令部に持ち帰った。そのフィルムを処理したところ明らかに軍機の離着陸のできる滑走路らしきものが存在することを確認し得たので大いに驚き、タイ側に徹底的に掃蕩するように強硬に申入れることを軍司令官に進言した。中村司令官は、中央の最高指導会議でタイを仏印のように武力をもって処理するが如き行動は絶対に避けることが決定されており、そのことが全軍に厳達されていることを挙げ、しかもアパイウォン内閣は莫大な犠牲を払って協力しているのに、強硬な態度で交渉に臨み、タイ側の首脳陣を刺戟することは得策でない、として辻参謀の進言を退けた。辻参謀は大いに不満であったが、中村司令官の思慮の深いことを知っているのも、それ以後は沈黙を守るようになった。

七月上旬の或る日、徳田隊長が中村司令官に呼ばれ、憲兵隊のアパイウォン首相の尾行について、同盟国の首相に尾行をつけ監視するとは何事か、と嚴重な抗議が来ているから即刻中止せよと指示された。軍司令部では、辻参謀が軍司令官を代表して同首相に謝罪したという。

七月下旬、中村軍司令官は、戦局の悪化によるタイ側の日本に対する不安と不満に応える意味で、タイ政府と協議の上、日タイ合同の戦没者慰霊祭をタイの寺院で行った。日本側は、中村司令官を始め幕僚全員、駐タイ海軍武官、大使館の山本大使、水野公使が、タイ側はアパイウォン首相を始め閣僚並びに軍の首脳部が出席し、タイの僧侶が司祭をつとめた。

参列者一同は、敬虔な表情で戦没者の冥福を祈って焼香し、慰霊祭は厳粛に行われた。この催しは日タイ友好親善関係の強化を確認し合ったという意味で、タイ側に好印象を与えた。

69 終戦

八月に入ると敗色濃厚となった戦局の前途を見越して、在留邦人の中にも戦後に向け身辺整理を始める者もあって慌ただしい雰囲気醸し出した。

本土中央部ではポツダム宣言受諾是か否かについて荏苒、日を過ごしている中に六日には広島に原爆、次いで九日にはソ連の突然の対日参戦、遂に長崎にも原子爆弾が投下され、ここに敗戦という未曾有の、世紀の決定的運命が訪れた。

八月十日、ポツダム宣言受諾が聖断によって決定されたのに、この事実をタイ国駐屯軍では十一日になってタイ側より知らされた。

皇国の不敗を確信している者には到底事実とは受けとめ難いことであった。中村軍司令官は緊急幕僚会議を開き、事実を確認するため辻参謀をサイゴンの南方総軍総司令部に派遣することとなり、辻参謀は急遽空路サイゴンに向け出発した。

辻参謀は、総軍当局より事実なることを知らされ、直ちにタイ軍司令部に帰り、軍司令官に報告するとともに一般にそのことを発表した⁸³。

八月十五日正午稍前に憲兵隊の将校は軍司令部に集合し、中村司令官を始め軍司令部幕僚並びに勤務員と共にラジオによる玉音放送を拝承した。私達は終戦のご詔勅を放送されるとは予想もせず、恐らく陛下より皇国のため最後まで戦い抜くようにとのお励ましのお言葉を賜るものと覚悟を新たにして拝承したが、この日は天気晴朗なれど空中の電波不良の故か雑音が入り途切れ途切れで音声はよく聞き取れなかった。しかし玉音の悲痛な内容は明らかに終戦を宣言せられたものであった。

玉音の放送が終わった瞬間、遂に来るものが来たのかと無念の涙が両眼よりとめどもなく流れ出し、しばし、嗚咽にむせぶと同時に、ああわが軍人としての二十年の生涯に終止符が打たれたのだと思い、たとえようもない淋しさと名残惜しい感慨を覚えずにはいられなかった。

70 終戦後ソムアン氏家より送別の晩餐の招待を受く

終戦後数日経った或る日、ソムアン氏の母サワデイ夫人より夕食の招待を受けた。

私は終戦後身の整理などを終え連合軍の指令を待つばかりで手持無沙汰だったので有難く招きに応じ宮川通訳を伴ってサワデイ家を訪れた。ソムアン氏の仏印亡命後は夫人と三人の娘達だけの侘しい生活を送っておられるだろうと想像していたが私の訪れたときの一家の雰囲気は案外明るく華やかであった。サワデイ夫人が私を晩餐に招いたのは送別を兼ね終戦のショックを慰め、かつ今後の再起などについて励ますためであった。

食卓には夫人が娘達に指示し、心をこめて造ってくれた豪華なタイ料理が品数も多く並べられ、フランス好みの一家らしくフランスワインの栓が抜かれた。

私はお招きのお礼を述べるとともに、サイゴンに亡命中のソムアン氏の消息を尋ねたところ中村司令官宛に元気で過ごしているという便りがあったと伝えた。夫人は私に対し次のように慰めと励ましの言葉を述べてくれた。

この度の戦いは日本が負けたとは思えない。日本が敵方と同じ量の物資を確保していたならば必ずや日本に軍配が上がったに決まっている。開戦の当初世界を相手に戦った勇気と緒戦の輝かしい戦果をもたらした優秀な軍隊並びに勝れた国民が存在する限り、日本は永遠に不滅だと思う。今後必ずやアジアの民族は物心両面で一致結束しアジア人のアジアのため再起をはからなければならない。そのためには日本が国力を回復し、再びアジアにおける指導国となってほしい。日本が速やかに復興することを念願してやまない。私は日本人の淡泊で美しい心を代表する桜花を見物したい。桜花見物のため必ず訪日するので、その節は宜しく頼む。サイゴンにいるソムアンを弟と思って、帰国後も倍旧の交際を続けてほしい、

私は終戦のため失意のどん底にあって快々として楽しまない日々を過ごしていた時だけに

夫人の慰めと励ましの言葉に対して感謝感激の極みであった。私は、

戦争のためにタイ国朝野の人々に詫びようもない迷惑をかけたばかりでなく敗戦という屈辱を受けたにも拘わらず、あらゆる犠牲を払って最後まで協力してくれたタイ国の人々の好意に対し言い尽くせない謝意を表するとともに、永く忘れ得ない温かい友情に深い感謝の真意を、夫人を通じ表明するものである。バンコクでは子息ソムアン氏を党首とする青年愛国党の同志、サワデイ夫人、ラーシー女史を代表とする愛国婦人グループの人々が最後まで日本と運命を共にする決意の下に日タイ友好親善の実をあげ、私どもの仕事に協力してくれたことに深甚なる感謝の意を捧げる次第である。ただ今、夫人より日本は戦いに負けたのではなく、物量に負けたので、夫人自身は、日本は敗北したとは思わない、日本は将来必ずアジアにおける指導国として再び立ち上がる、という過分の励ましのお言葉を頂いて恐縮の至りである。無論私ども日本人は再起、復興のため死力を尽くして努力するので、将来とも宜しく協力、支援を頼むものである。

私のため、家族一同心を込めて造られた手製のタイ料理で送別の夕食をご馳走してくださったことは私の生涯忘れ得ない感動である。厚くお礼を述べる次第である、と私は衷心より感謝の謝辞を述べた。

夜も更けたので私は夫人を始め、娘達とも固く握手を交わし、名残を惜しみながら辞去した。

私の駐タイ間の任務遂行を最後まで助け、また在勤中私的にも変わらない交誼を尽くしてくれ、しかも敗戦という世紀的大悲劇の憂き目をみたにも拘わらず、否憂き目を見た故に、わざわざ「慰めと励ましの送別の夕べ」まで家族一同で催してくれたソムアン氏一家の深い友情を記してこの記録を終わる。

付 録

『18方面軍参謀，原寿雄手記（備忘録 青年将校時代）』

陸軍終末期（バンコックでの体験）

この手記⁸⁴は第39軍参謀として南方軍直轄の1軍，つまり泰国とビルマのテナセリム南部地区を作戰任務とする軍の参謀としての眼界で書いている。勿論その他の南方軍地域の状況も概略は分っているが飽くまでもそれはよそ様のことであつて協同作戰に必要なだけの知識しか持ち合わせがない。但し最も関係の深いビルマ方面軍の事情は刻々と知らされているからこれは例外である。

人は誰しも高い地位につきたい。兵は自分のことだけを考え分隊長は部下14名のことを考え小隊長は60名の中隊長は200名の大隊長は1000名の連隊長は3～4000名の師団長ともなると2万人の生命をあずかる。それだけ広い範囲のことが分らなければならぬ情報機関も持つている。上からも流されるし自らも敵情地形その他を搜索することが出来る。これが軍となり方面軍，総軍，大本営と逐次上の司令部になればなる程広くものごとが分るようになるしまた分らなければ適切な作戰指導は出来ない。昔斥候教育を兵にする時は「100米走るより1米高い所に上れ」と教えたことを思い出す。高い所に上れば眼界が広がる。パニックを起すのは必ず無知の個人から初まる。これは全般の状況が分らないのと無知愚からによる。

さて，昭和20年4月ドイツが潰滅して欧州戦線は終結した。当然のことながら対独戦に使用されていた龐大な軍が極東の戦線にふり向けられるであろうことは素人でも分る。関東軍正面の状況が俄かに急迫して来たらしいが主な精鋭師団，航空部隊，戦闘部隊等は殆んど南方の島礁防衛，比島，沖縄，台湾等に転用されて残るは支那軍にも劣る劣等装備のそれも訓練不十分な補充兵による張子の虎のお粗末な関東軍であつた。この軍で勝に乗じたソ軍の優秀装備の前には一たまりもないことは火を見るよりも明かなものであつた。それは遙か南方に居た我々でも十分想像出来たものであつた。

そこで大本営は南方軍にいる幕僚の中関東軍に在籍したことのある優秀な人材を急遽関東軍にひきぬきサイゴンの南方軍総司令部に集合させた。

我が39軍の作戰主任だつた野原中佐〔野原博起，1910-1947，陸士42期，陸大49期，1944年12月-45年4月に39軍参謀，作戰主任〕にも白羽の矢が立つた。彼は陸士42期の俊秀で陸大軍刀，ノモンハン事件当時関東軍参謀だつた辻〔辻政信，陸士36期，陸大43期〕参謀と大本営参謀だつた野原参謀とが大喧嘩をしたことがあるという人で，ビルマ失陥後の次は泰国ということで我が軍に派遣されていたのだが半年もせぬ中に4月末盤谷を去つた。

彼は関東軍に関係がなくまた余り優秀でなかつたら泰国にいて安泰に過し生き長らえたこ

とだろうが人の運命は分らぬもので満州に行つたばかりにその後行方不明になり帰らぬ人となつてしまった。

太平洋方面の戦局は愈々最終段階になり、南方大陸に於いてもビルマ方面に於いて徹底的打撃を受け敗色益々濃くなつて来た折柄5月5日⁸⁵に南方軍の重要な作戦会議があり隷指揮下各兵団の参謀長はその作戦主任を帯同してサイゴンの南方軍総司令部に参集した。ふりかえるとこれが最後の南方軍作戦会議であつた。

私は野原中佐の去つた後次の作戦主任が決まらないままにその代理として浜田平参謀長に随行して総司令部に行つた。軍の作戦主任と言えば中佐で少佐参謀の如きは所謂作戦補助(教育、編成その他雑役)であつた。折悪しく飛行機が故障か何かでなかつたので車で陸行し、プノンペンで一泊、小さい美しい街であつたことを覚えている。

この会議は今までの南方軍の作戦計画を根本的に変更したもので、今までは南方の島々に散在している軍はその位置で自給自足して頑張り大陸又はその近辺にある軍は支那大陸を所在の敵を撃ちつつ北上して上海付近に集結し本土決戦に呼応して支那大陸に於いて米、支軍と決戦するという思想であつたがビルマ既に陥ち大陸を北上するにも仏印よりするもの1本のみとなれば小部隊ならともかくどうにもならずまた時間的にも間に合はないという所か、その理由は開陳されなかつたが今回の変更で敵の必ず奪回に来る南方の要地を確保して敵に出血を強い本土決戦に策応して持久作戦を行うという方針になつたものであつた。つまり南方地域で敵が最も欲しい所はシンガポールであるから我が方としてはこれを固守して敵を吸引し、その他の地域はこの作戦を有利にする為に作戦するという事で我が39軍に与えられた任務は泰国の要地を確保して泰国の動向に注意しつつあくまでもこれを我が方の陣営に留まらしめるようにつとめるとともにシンガポールつまり第7方面軍(板垣大将)の後方補給に任ずるといふものであつた。その言や甚だ良し、着眼は良好と言えるかも知れないがどうしてこれを実行するのか聊か当時の状況を考えると全く不可能に近いと言える。こんな任務を与えられた軍こそ災難である。しかし議論は出来ない。既に命令が下つているのであるから会議ではなくて無理矢理にやれという所である。

今や陸海の輸送状況は極端に困難を極めている。マレー半島を通ずる1本の鉄道と自動車道は常に敵空軍の爆撃を受け遅々として捗らない。現にスマトラから我が軍に来た第4師団の如きも半年を費やしてまだ完全に泰国に集まつていない。海上の輸送も昼間は悉く撃破されるので夜の蟻輸送という奴で昼は港の椰子林影にかくれ夜だけ動く小舟輸送である。

シンガポールには軍隊の外養わねばならぬ100万以上の人口(主として華僑)がある。ジャバからの海上輸送も思うに任せない。どうしてこの歴大な人口を養う食糧その他を送るのか。シンガポールにはゴムの木だけしかないではないか。米だけについても斯くの如し、他の軍需物資に於いてをやという所である。

次に泰国の安定確保という問題も然り。泰国にいる我が軍は戦闘兵力1ヶ師団と混成旅団1個。如何に泰軍が弱いと雖も一度反旗をひるがえせば我が軍司令部の寝首をかくことぐら

いは易々たるものであろう。唯これをやらないのは首都を破壊し諸々の文化施設特に無数の大小寺院その他の貴重品を一朝にして灰にすること、どうせ先は見えている、今慌ててやる必要はないということであるだろう。恐らく何処かで連合軍との連絡が保たれているに違いないと思われる。何しろ長い間英（ビルマ）仏（仏印）の間にはさまれてどちらにも旨く立ち廻つて独立を保つて来た国だから我々日本人のように単純ではない筈。余程注意していないと何時どうなるか分からない。

ともかく作戦会議は終つた。その時偶然総司令部で野原参謀に呼びとめられた。「まだ此所に居られたんですか?」「飛行機がなくてね、行くに行かれないのだよ」「それは困りましたなあ、南方総軍にも飛行機がないんですかね」「所で原、今度辻参謀がバンコックに来るぞ。33軍から39軍に転任だ。ビルマが終つたので今度は泰ということだろうが彼が来ると忽ち軍の平和が破られて中村閣下（39軍司令官中村明人中将）とは馬が合わんだらうよ。中村さんは駿河の大將のようだし（私は恰幅はそうだが余り頑固な人とは思はんし大見栄をきるのは好きだが度胸はどうかなあと観察していた）辻は（彼は呼びすてにした。6期も上の有名なエリート参謀に）無茶苦茶な奴だからな、貴様も大分苦勞するぞとおどされた。野原参謀とはノモンハン当時以来犬猿の間柄だつた（前述）通り口を極めて辻参謀の横暴ぶりを難じ決して歓迎すべき人物ではないと告げてくれた。

本件に関しては出発前バンコックでも既にウスウス噂に上つていたのでそれがいよいよ実現するということだがひとつ勘ぐると辻参謀を39軍に寄こす為に野原さんが居ると具合が悪いので先に野原さんを出して後に辻さんをタイに送りこんだのではないかとも受けとれる。何はともあれ我々如き下端参謀にはどうしようもないことであつた。

宿舎に帰つて浜田参謀長に概略申し上げると「そうかなあ」と一言、此の土佐人の凛々たるスマートな参謀長は悠々として何ら意に介せぬようであつた。この人は全く立派な人物であつた。所謂有名なエリートではなかつたが本当に外柔内剛の文化的素養をもつた信頼し得る人物であつた。閑な時にはテニスをやり「原先生いつちよやろか」と常に碁盤を持つて来させて必ず5目置けと言つた。誰とやる時でもそうするのだそうだ。つまり戦う前に先をとつているので対等の力量ならば必ず勝つと彼は私に説明してくれた。先々の先である。兵法の極意をはじめから体得していた。

また殆んど毎日の宴会、会食に我々幕僚共は大弱りだつたが「何処で食つても晩飯は同じだ」といつこうに頓着なく全く意に介していなかつた。つまりつまらんことに一々神経を使つていなかつたということだろう。その上英語が達者で泰軍首脳と折衝する時も決して通訳を連れて行かなかつた。殆んど私が随行したが全く達者なものであつた。嘗てメキシコの駐在武官をしたことがあるというので宣るかなと思つた。

とにかく我々は急ぎ帰つて大急ぎで会議の準備をし訓示を書き命令を書き全くの独壇場で5月10日〔5月13日以降の筈〕に軍の団隊長会同を開催し、作戦計画を示し新たな決意を促したのであつた。

辻参謀の着任

20年5月中ばのある日⁸⁶、カーキ色の三角巾で右腕を肩から吊し青竹を杖につきボロボロの図囊を腰にぶら下げ血痕生々しい無惨に破れた軍服を着た異様な参謀がビツコをひきながら軍司令部に入つて来た。陸大時代見覚えのある辻参謀であつた。春風駘蕩たる第39軍司令部のそこだけに戦場が忽然と姿を現わしたようだつた。第33軍参謀としてビルマの退却作戦を指導しつつあつた或夜ビルマ国軍の反乱に逢い軽機関銃で自動車の外から撃たれたもので肘と臀部に銃創を受けていた。

日本軍が編成し訓練したビルマ国軍は遂に反旗をひるがえし元の英軍に寝がえりをうつたものであつた。正に飼い犬に咬みつかれたもので日本軍は腹背皆敵、ビルマ方面軍は正に風前の燈を思わせるものがあつた。泰はまだ戦場になつていない。若し戦場になつたらビルマと同じ運命になること必定であろう。

私は辻大佐を始めて見たのは陸大の一年学生の時二年学生の兵学教官としてほんの少しの間将校集會所で食事中に遠くで見たので勿論言葉を交したことなどなかつた。

大佐は当時ガダルカナルや北部ニューギニアの作戦指導中敵弾にやられ東京の病院で生死の境を彷徨していたのが持ち前の闘志と頑健な不死身の体で奇跡的に恢復しその療養傍陸大教官になつたものであつた。当時の陸大兵学教官は概ね病人か他と協調のうまく出来ない癖のある人物が多く人呼んで病馬癖馬収容所と言つたものである。

ともあれ一応軍全般の状況を辻参謀に報告したが殆んど口を利かず黙つてうなずいていただけなので少々薄気味が悪かつたが、そう野原参謀が言つた程物凄い人物とも思われなかつた。彼は軍司令官や参謀長の入院療養のすすめを断乎ことわつて着任の日から左手で字を書きながら血のついた軍服のまま仕事を始めた。宿舎は野原参謀の後でこじんまりしたものだったが極めて立派で高級ホテルの一室という程度のもので勿論ガレージと立派な庭がついていた。金持ちの華僑の家を借り上げたもので司令部の近くでクリークを隔てた所にあつた。その通りはサートン路と言つた。殆んど司令部の人員はその付近に住んでいた。真中にクリークがあり両側が道路で立派に舗装されネムの並木が植えられた美しい街路だつた。どの家にもブーゲンビリヤやマンゴの木があつた。戦争でなかつたら誠に有難い所である。

辻大佐は数日その家にいたがこんな贅沢極まる部屋で山海の珍味を食っているわけには参らぬ。一体戦争に来ているのか遊びに来ているのかわからんじやないかと高級副官を怒鳴りつけ直ちに宿舎の住み替えを命じた。雨期に入つたビルマの山野を彷徨し竹の柱にバナナやニッパ椰子の葉で一時凌ぎに何か月も過した彼とビルマ方面軍の将兵を思うとバンコックの平和に強い憤りを感じたのだと思われる。その結果作戦、情報、後方の夫々の関係参謀及び部付将校が所要の当番兵と共に夫々別々の粗末な宿舎に入った。そして今まで殆んど毎日のようにあつた宴会会食が我々下っ端参謀まで行かなくていいようになって全く有難かつた。

軍司令官の趣味で大本營や総軍その他の連中が往来する度に毎夜兵站ホテルから官邸に引き宴会をやつたものでこれにはホトホト弱つたものであつた。稀に宴会のない日は当番のつ

くってくれる日本食か明和荘（将校集会所）の簡単な夕食が最もうれしかったがもう宴会は1度もなかった。軍司令官も辻さんの意気込みに辟易したらしい。

辻参謀が最初にやったことは軍司令部のタルミを治すことだった。先づ半ズボンを穿き膝までのストッキングを着用し短靴を穿いた将校は誰彼の容赦なく怒鳴りつけ少したるんだのを見つけると右手を肩から吊したまま左手で殴りつけた。3日を出でずして軍司令部は急に引しまった。

辻さんと毎日起居を共にしているとそんなにこわい人でもなく全く手八丁口八丁話は面白いし頭はきれいなし判断は優秀即決実行力抜群、また極めて乱暴であるが間違ったことでなければ乱暴はしないし決して野原参謀の言ったような人ではなく、子供が好きで通勤途中子供見ると本当に好々親爺になりあやしたり話かけたりしたもので近所の泰人の子供らもバナナ売りも皆なついたものだった。これから此の人の下で大いに鍛えられることは何程か我が人生のプラスになるのではないかと思った次第である。彼の支那大陸やガダルカナル、ビルマ等の戦訓は毎夕の食事時に微に入り細に亘って面白おかしく話してくれた。それは戦後出版された彼の著書の15対1、ガダルカナル等にその通りに出ている。

彼は惰眠をむさぼっている第39軍を極めて短時間に震え上がらせ緊張させた。彼は着任するや直ちに各部隊の駐屯する兵営内にトーチカをつくらせ兵器弾薬糧秣の準備を命じ籠城する戦闘訓練を行い盤谷のアチコチに堅固なトーチカ陣地が出来上った。そして例の通り下士官兵の外出を禁じ慰安所⁸⁷も料理屋も一朝にしてさびれた。彼が上海で料理屋を焼討ちした話は有名である。

私が着任した昨年〔1944年〕の8月頃は数千の日本軍しかいなかったバンコックはビルマからの引上げ部隊で充満した。その中には軍の指揮下でない部隊、例えば航空の地上部隊なども莫大なものであったがこれらも可なり影響を受けたものであった。

私共は宴会がなくなった代りに陣地構築の指導や訓練の計画指導検閲等に極めて多忙になった。宴会のきれいな私にはありがたかった。

当時太平洋方面に於いては沖縄は既に陥ち大本営は本土決戦を準備しつつ死にものぐるいの戦備をしつつあった。内地の軍は作戦軍に改編され方面軍が幾つも出来たらしい。「本土決戦訓」といふ小冊子が陸軍大臣から配布され「1億玉砕」を呼号した全く決定的段階であり、太平洋上の島々では戦った所は全滅し然らざる所は遊兵となって補給の絶えた島々で現地自活をしていた。辻参謀は「本土決戦訓」を机上に投げつけ「馬鹿野郎」と一声怒鳴った。「一億玉砕してどうなるのだ 大和民族は残さねばならない 血迷うたか大本営」

日本軍の戦術思想にはゲリラ戦といふ思想はない、会戦での殲滅戦思想を金科玉条としていた。士官学校より陸大まで未だかつてゲリラ戦を習った覚えはない。戦いの様相はドンドン変っている。硬直な頭ではこの戦いは律せられないだろう。

南方大陸ではビルマの大半は既に敵手に奪回され30万のビルマ方面軍はその大半を失って僅かにモールメン地区に泰国の橋頭堡的存在となって残存しているに過ぎず、北ビルマに

いた龍、菊等の最精鋭の兵团も大打撃を受けて逐次泰国に退却しつつあった。

次の戦場は当然泰であった。時恰も雨期の真最中であつたので雨期明けの9月末か10月頃が我々の命の終りであろうと観念していた時である。

泰国領内にも敵の秘密飛行場が出来たり夜間落下傘で情報将校が下降して要所々に潜伏しているという極秘情報が入り泰政府も何時寝がえるか分らない危険な状態になって来た。軍司令官は凱旋記念塔（バンコックの街外れに近く飛行場よりあり仏印との戦いで我が国の調停で泰国が勝つたことになった為建てたもの、バツタンバン付近が泰領になった）近くにあった獣医学学校跡にいた深山〔みやま〕部隊の陣地に在バンコック泰軍将校数百名を集めて陣地を見学せしめ大演説をブツて大見えをきったりした。辻参謀は秘かに失笑していたらしいが我が愛すべき軍司令官は大はりきりであつた。

この頃日本軍がタイ国に要求していた軍費は5億パーツを上回るものであり、これは泰国の予算の倍近いものであつてインフレをもたらすもうけるのは上層部と華僑ということで議会通過が困難視され、もし通らなければ力を行使せねばならぬと大使を通じて強談判をするとともに軍はその準備をしていたことであつた。しかし無事議会を通過して不発に終つてしまふであつた。本多熊太郎（ママ）〔正しくは山本熊一〕という大使は立派な人であつた。去年の大みそかに〔1944年末〕軍司令部と大使館との会食をしたが大言壮語することもなく静かに酒を飲んで最後は我々と肩を抱きあつて大いに騒いだが極めてよい印象をもっている。

この頃⁸⁸ビルマ失陥とともにパーモ長官がその家族と共に日本に亡命する為「光」機関（ママ）の連中がつきそつてバンコックに来た時一夕軍司令官邸で宴会を催した。3年前の進撃の時と比べて何と陰うつな会食だろうか。その令嬢など全くスラリとした麗人であつたが何となく影が薄いような気がしてならなかつた。印度独立の志士ゴース氏も四手井綱正中将がつき沿つて内地に向つた。この人々は哀れ台北飛行場を出る時墜落してなくなつた。

こうした急迫した情勢の6月中ば或晩⁸⁹泰国参謀本部主催で日泰両軍の懇親会が行われた。王宮近くのアンボン公園は雨期のこととて重苦しい雲におうわれ我々参謀の心も今宵の空の如く晴々しくなかつた。これは全く危いことであつて若し泰軍に異心があれば日本軍首脳その他各部隊の長は一網打尽にされて第39軍は戦闘力を失う虞があると同時に軍司令官以下の汚名は一生拭われぬものとなる。軍はこのことの為に辻参謀を司令部に残し極秘の中に在盤部隊に待機を命じて警戒に當つたが、両軍将校の隠し芸などがドンドン出て極めて友好裡に22時頃宴を終え無事各部隊に歸つた。辻参謀も待機部隊も胸を撫でおろしたことであつた。思うに泰軍としてはバンコックを戦場にしたいくないという切実な願いから日本軍の陣地作りを見ておそれをなし異心ないことを示したのか、或いは我を欺いて時をかせいでいるのではないかなどと思つたことであつた。

第15軍が第39軍の隷下に加わる

連合軍の空襲は日毎に激しくなりビルマ失陥後は戦闘機の地上掃射まで始まった。憲兵隊の下士官が頭部貫通銃創で戦死したという情報もあった（盤谷で）。バンコックの日本軍施設が次々とやられた。先に力石部隊（船舶司令部）がやられ軍司令部の直ぐ側だったので可なり緊張したが司令部はねらっていなかったらしい⁹⁰。

再建した61連隊〔武器なしでビルマから引き揚げて来た部隊〕もプラカノンという所（バンコックからパクナム——メナム河口——に行く途中にある）で爆撃を受けた。その隣に野戦自動車廠の燃料を集積していたのでこれと間違ったのではないかと思われる。お蔭様でやっと総軍から手に入れた重機関銃やその他の兵器多数をやられ兵員も可なり死傷があり総軍からきついお叱りを受け軍司令官、連隊長〔佐藤源八〕共に処罰を受けたことを覚えている。

辻参謀は内を大体固めたので第5飛行師団の小柳参謀（陸大同期，45期生）⁹¹の操縦する飛行機で連日秘密飛行場と覚しき所をしらみつぶしに超低空まで下って偵察に飛び回ったが、敵の飛行機は見つからなかった。

20年の□月〔何月か判別困難〕第15軍司令部を我が第39軍の隷下に入れられた。重大なる戦闘序列の変更であって軍の下に軍が来るというのはおかしな話である。もっとも泰国に来るので行く行くは泰に始めからいる第39軍を方面軍に格上げして中村將軍を方面軍司令官にする積りらしかったがそれならそれで先に方面軍にしてその後には15軍を隷下に入れば筋が通ることになるのではないかと思考したもので、尚この15軍という軍はビルマ作戦当初からビルマに進攻してこれを戡定した赫々たる伝統を有する軍で最後にはインパール作戦をやってひどい目に逢い更にイラワジ会戦等引続いて悪戦苦闘して兵はも早や軍隊の様相を呈していないという惨憺たるものであった。

流石に司令部はまだ意気軒昂たるものだったが全くの着のみ着のままで盤谷に到着した。早速軍司令官以下に軍服を進呈し先づ外観だけでも整えねばという所である。下士官兵はアラカン山中或いは泰緬国境の山地を歩き残った本当の敗惨兵となって銃も剣も重いものはすべて捨て飯盒をブラ下げ水筒を肩にかけ竹の杖をついてヒヨロヒヨロと泰国領内に入って来た。

我が軍はこの軍隊とは凡そ似ても似つかぬ幽鬼の如き集団を引受けて先づ第1にすることは栄養失調を治しマラリヤと脚気を治療して人間らしくすることであった。そうすれば銃を持たすことも出来るしまた元の軍人にかえるだろうことは明かであった。

ビルマと違って此所はまだ戦場にはなっていない。栄養になる食糧はいくらでもある。20万の軍が10年も戦えるだけの糧秣を集積してある。勿論ビルマと第7方面軍への補給分もあるがそのどちらかがもう余りいらぬ。いっても輸送出来ない状態だったからである。糧秣の外衣料品も余る程あった。我が軍は陸軍病院、兵站病院その他急造兵舎借り上げ兵舎等最善を尽くしてこれら傷病兵の収容に当たったので、これら生死の境を彷徨していた連中も

順調に恢復して行った。が軍の施設に入らず勝手に山中とか田舎の泰人の家に入り、或いは倒れている所を助けられてそこで巨介になりその家の娘と結婚したり作男になったりしたのが可なりあったような話も後で聞いた。

第39軍司令部の強化

第15軍は我が39軍より遥かに編成が古いし歴戦の大軍だったので軍司令官（前任者は牟田口中将）だけは中村明人中将の方が古いが参謀長、軍医、法務、高級副官等々は皆15軍の方が古かったので全部入れ替った。また部付将校も士官学校出身の若い有能なのが大部分入って来た。陸大同期の脇坂一雄少佐参謀も情報の方に入って来た。又久しく不在だった作戦主任として第7方面軍から市坡〔いちば〕信義中佐（43期）が野原参謀の後任として着任した。やっと重荷がおおりて私はホッとしたものである。

又参謀長も第55師団長から花谷正中将が転じて来た。浜田少将は参謀副長となって泰政府及び泰軍との接衝に専念されることになった。これは適任だった。泰国の政軍両方に非常に信頼を得ていた紳士だったからである。

参謀長になった花谷中将は見るからに人を震え上がらせるような鳶の様な眼光を持った豪傑で彼は満州事変当時溥儀氏を天津から引張り出して来た関東軍の若手参謀で所謂サムライであった。この人の専属副官に誰をするかについて参謀部では随分困ったもので小西〔健雄〕大佐はどうとう小林中尉という参謀部付で後方を担当していた練れたおとなしい人物を選んだ。大阪のレース会社の専務取締役であった。とにかく我がままで気にいらぬと怒鳴る、なぐる、何とも始末がわるい。「人は和を以って尊しとなす」この人のようにNAME VALUEがよいのでこの軍に持って来た大本営のというより陸軍の人事そのものがおかしいので浜田閣下で何故参謀長がわるいのか、第39軍司令部〔18方面軍の筈〕の空気はだんだん面白くないものになって来た。

浜田中将は敗戦後自決された。「碁に負けて眺むる狭庭花もなく」という一句を名刺の裏に書いて各参謀宛の遺書として淡々と此の世を去られた。プラズホコラズ全く立派な人だった。

日泰協同作戰計画の締結

日泰両軍は同盟軍であるにもかかわらず両軍の作戰計画は当初の進行作戰の時につくつた極めて簡単な藁半紙1枚にほんの申し訳的に印刷したものしかなかったため現在の状況では到底間に合わなかつた。今や泰国が戦場になろうとし日泰両軍が敵の進攻をむかえ討たねばならぬ切迫した状況である。そこで辻参謀が泰国全土に亘つて小柳参謀と敵の秘密基地偵察に寧日なき有様の時浜田副長は鋭意日泰協同作戰計画の策定に没頭されていた。私はそれに随行して屢々泰軍参謀本部にシン〔シナート〕中将（参謀次長）を訪れ会談するのを拝聴していた。勿論通訳なしで用語はすべて英語であつた。私も中学から大学まで英語を習つたので

泰人のしやべるぐらいいは分つたので一応の結末は理解出来た。そして両軍で概ね同意を得たので私は命を受けてその作戦協定案を起草し順序を経て軍司令官の同意を得て再び泰軍に到り日本軍の原案を示した。その大要は西部及び北部泰国境は日本軍が守り北方第2戦に泰軍(外征軍と称しチェンライに司令部があり我が菅谷中佐〔菅谷篤二、陸士39期〕が連絡将校として派遣されていた。)〔余談になるがこの菅谷中佐は終戦後渋谷の道玄坂で(恋文横丁)日本人婦女子の手紙の代筆をしてマスコミに取り上げられた面白い人である。〕を配置することにし西方及びドムアン飛行場その他現在日本軍が駐屯している地域は日本軍が守り、その他は泰軍が守るといふものであつた。此の協定案はその後数次の折衝を経て概ね日本軍案でめでたく締結を終り外交文書の形式で厳かに我が軍司令官と泰国参謀総長との間で調印が行われた。そしてその祝賀の意味で我々は泰王宮に招待され晩さんの後例の泰の古典の踊りを見せてもらつたり音楽を聞いたりしたが戦局の推移を考えると余り楽しいものではなかつた。本席には辻参謀も列席していた。今回は司令部だけだつたので特に警戒はしなかつたと覚えている。

印度国民軍武装解除準備命令

何とも言えない圧迫感が我々を支配しているような或日機密文書が届いた。それは暗号電報でもはばかるもので印度国民軍の武装を解除する準備のための命令であつた。印度独立の意気に燃えてインパールに向つたが時に利あらず15軍と共に後退して泰国南部の極秘地点にひそかに駐屯していた。シンガポール陥落の時多数の印度兵が捕虜になつたがその中で印度義勇軍を志願したものを以つて印度国民軍を編成しインパール占領の暁は華々しく印度国民軍となるべきもので藤原機関が手塩にかけてつくつたものであつた。

その武器を奪つて敗惨15軍の将兵の武装を整える一助にしようというのである。私はこの命令を浜田閣下に秘かに見せた。彼は「ウン」とうなずいただけで「金庫に入れておけ」と命じただけだつた。恐らく何を今更というより大日本帝国の信義の問題である。たった数百挺の小銃や軽機関銃を奪つてこの狂瀾怒涛を支えられるとでも思っているのか。「溺れるもの藁をもつかむ」といふようなこの準備命令は国の信義をかけた問題であつてどうにも我慢が出来なかつた。如何に下っ端の少佐参謀と雖も大本営や南方総軍は何を考えているのか、いよいよ血迷うたかと痛憤措く能わざるものがあつた。幸い準備だけで実行の命令は来なかつた。信を印度軍に失わなかつたことで誠にうれしいことであつた。現下の戦況を達観すれば印度国民軍の武器を奪つて見ても勝てる見込はない。若し印度軍が拒否すれば戦闘になり損害が出てアブハチとらずということになる。斯してこの命令は金庫の中に眠つたまま知っているのは2、3の幕僚だけで終戦の時焼いてしまった。

第18方面軍の誕生

7月16日に第39軍は第18方面軍に改編され新しい戦闘序列が令せられた。これは全軍的

に行われたもので内地にもいくつかの総軍、方面軍などが出来たのと併行して行われたものであった。いよいよ最後のドタン場ということだが機構をいじったり戦闘序列を変更してみても持っている力は少しも増えないし、特に支那総軍のように連戦勝っている所はよいがビルマの極端にみじめな敗兵を寄せ集めた兵団では志気の点で大きい差があるだろうことは自明の理である。必勝の信念は主として軍の歴史に根元し…という作戦要令の綱領にちやんとうたわれているのだから現実に散々敗れて来た軍（随意退却ならば別だが）の戦力、それも敵に比し極端に悪い火力、航空兵力など彼等は最もよく知っている筈。

それはさておき此の改編でビルマ方面軍は極端に縮小されモールメンに司令部を置き中、北部テナセリム地区を防衛して泰国の前進陣地的任務になるとともに次の主戦場たる泰国の戦備を強化することになった。この頃北泰には第15軍司令部が居り第4師団その他を指揮してランパン周辺に居り、西方国境には独立混成第29旅団がバンポン及びその南方地区に、カンチャナブリーには南方野戦鉄道司令部が駐屯し泰緬鉄道の保守運営に任じていた。又山西省方面から延々数千軒を突破して来た第37師団が盤谷東北地区に概ね集まり、第22師団も北部仏印から泰国に向け移動中であり、新たに第56師団が雲南作戦から後退してビルマのシャン高原から北泰に向い移動中、又インパール、イラワジ両会戦に莫大な損害を出した第15師団（祭）、第33師団（弓）元の第15軍隷下部隊も泰国に向け行軍中、尚ベンガル湾方面にいた第28軍の55師団は泰を通過して仏印へ移動中、その他軍直轄部隊、航空部隊の地上部隊が陸続としてビルマから東へ東へと移ってその中心地盤谷は全く日本軍で満ちあふれテンヤワンヤの大混雑であった。何分ビルマから飲まず食わずで逃走？（ママ）して来た連中なので泰国に入ったらふく喰い漸く人心地がついて或いは泰国に止まり或いは仏印に或いはまた一部マレー半島方面へと移った。この数カ月間は全くめまぐるしいことであった。

以上軍隊のことばかり述べて来たがビルマには在留邦人も多数居り一般商社員、商人の外料理屋、軍慰安所、水商売の女など種々雑多な人間が万を以って数える程いたものだ。軍は敗れたりとも未だ皇軍の面目を保ち概ね整々と行動出来るがこれら烏合の衆は全く始末がわるい。ビルマ戦線に於ける敵の進撃は予想を遥かに越した速さで機甲部隊の突進で退路を遮断するとともに航空部隊で要点特に渡河点を猛爆する。取り残された者はジャングル内をさまよい歩いて来る。女子供はそれも出来ない。道路を通れば昼間なら忽ち敵機の餌食になる。だから着のみ着のまま夜道を歩く、食もなく水も乏しい、本当に苦難に絶した退却行であった。特にラングーン陥落の時は既に後の渡河点が猛爆にさらされて居り取るものも取りあえず逃げて来た民間人達はモールメンに到る唯一の交通路が絶え間のない爆撃にさらされて居り特に要衝ペグー及びシッタン河の渡河点は混雑を極めその爆撃のため莫大な非戦闘員がやられた。この状況の下に生き残った連中はモールメンから泰緬鉄道でニーケという泰緬国境の兵站地に到着したもので勿論女はシュミーズ1枚、何ひとつ持っていないという状態、兵站病院の看護婦、将校集会所の給仕などはまだいいとして水商売の女、軍慰安婦に到っては誠に目も当てられぬ状態との情報が入った。

我々としては今までの泰国との関係上こんな姿の日本婦人を泰人の前に曝すわけにはどうしても参らない。そこで経理部、貨物廠の大活躍によりバンコック中の織物工場と縫製工場を督励して急遽ブラウスとスカートを数千着つくりニーケの山中に待機しておいた女の連中に配給し一応女らしい恰好にして泰国入りを許したものである。これと同時に備蓄していた軍服を将兵に支給し、軍容を一新したのである。貨物廠の岩端少佐など大活躍をした時である。これらの娘子軍は或いは泰に残り或いは仏印に行った。これは後日談であるがこの連中を終戦の時印度軍の悪いのにやられん為陸軍病院、兵站病院等に割り当てて臨時の看護婦とした。当時私は編成を担当していたので思いきって軍に編入したのである。つまり彼女等は体を売らなければ食えない、一般商人のように金を持っていないからとにかく病院に入れて飯を食わさなければ仕方がなかったのである。終戦処理の時英軍の将校は看護婦の多いのに驚き彼女等は看護婦でなくて厚生婦であると言った。全くそれを聞いて私は大いに愉快であった。病院長からは大いに恨まれた。軍紀風紀はなっていない。立膝で看護婦の服装をした女がタバコを吸ひながら兵隊をからかうのだから病院当局者も困ったものだろうがそれでも帰る時には一応の看護婦のようにになっていたし病院長も後では有難がっていたのは事実だ。お蔭様で英軍が進駐した時一部泰夫人は随分陵辱を受けたが我が俄か看護婦は誰一人やられた者はなかった。

現地軍司令官に在留日本人を召集する権限付与

7月に入って現地軍司令官に在留邦人の兵役適任者を召集する権限が与えられたので可なりの人を召集して訓練したり検閲したりして大変忙しかった。大部分の人は兵役経験者だった関係もあり当時の状況上どうしても緊張感が漲っていたので至短時間の中に立派な軍人になったが正に追いつめられた悲壮感が漲っていることは事実であった。

方面軍司令部の疎開

今まで方面軍司令部は1ヶ所に集まっていたが各所の軍事施設の爆撃がひどくなり戦闘機まで跳梁するようになったので各部毎に疎開した。これについて面白いことがあったのはこの案は辻参謀が今までの経験上早くから主張していたものなのでこの案を持って私が中村司令官の決裁を受ける為説明に行ったら「これは卑怯者の案である」と一喝をくらったものである。この司令官は誠に愛すべき尊大漢で徒らに強がりと言うのが好きである。今の司令部なら爆弾2、3発落ちたら方面軍首脳は全滅するだろう。それはあり得べからざることではなく極めて公算大なる発生率を有する時機に至っている。

そこで戻って来て辻参謀に「卑怯者の案だと叱られました」と報告すると彼氏大いに憤慨して「親爺さん、小さい爆弾でも落ちたらどんな顔をするかなあ。俺が行ってくる」と私の持っていた紙をつかんで司令官室に行ったが随分経ってから「おい原 やっどもらって来たよ。事務の敏活を欠くなど 皆死んだらどうするのだ。命令を書いてくれ」ということでそ

の日の中に命令を伝えその翌日に移転を完了した。どうも分らん話だったが私と辻さんでは貫禄が違うが思想は同じだから要するに私の説明の仕方が悪かったか辻さんには頭が上らなかつたかどちらかだろう。

ソ連参戦原爆投下

20年7月下旬方面軍の編成完了とともに情報の矢野 [正俊]⁹²大佐参謀は当面の敵情判断を提出した。それによると概ね9月末から10月上旬頃にかけて英印軍は強力な空軍を使用して本格的攻勢を開始し空輸部隊を以って日本軍の作った飛行場を占領し散在する日本軍を各個に撃破するとともに北及び中部泰緬国境を突破して機械化部隊を突進さすであろう。マレー及びシンガポールはその後の問題であろうということであった。

大体これに基いて我が方の戦備を早急に整えねばならないので8月9日に方面軍司令部に隷指揮下各部隊長を召集して作戦会議を開いた。方面軍司令官の訓示やら作戦計画の概要、新しい各部隊の任務を与える方面軍命令など殆んどが私の仕事なので目の廻るような忙しさであった。

その前に広島に妙な爆弾が落されたという電報が入り、その威力、種類などに関して多種多様な情報が毎日部厚い電報用紙の束ともなってもたらされた。これが原子爆弾であったことは後で分ったが当時は全く混乱した情報しか入らず、また会議中に長崎にも落とされたという情報が入った。

それと殆んど同時に情報の脇坂参謀が稍、血相を変えて会議室に入って来て辻参謀に緊急親展電報を見せた。辻参謀は職掌柄会議を主催していたが直ちに立ち上つて軍司令官と参謀長に耳うちした後、司令官の許可を得て「ソ連参戦」の第一報を落ちついて伝えた。会議場は一瞬名状しがたい沈うつな状態になった。

私はどうとう来るものが来たかという気持だった。私としてはもっと早く参戦出来たのではないかと思っていたが原子爆弾と因果関係があるように思われたのであった。

最も心配したのは泰国の状況だった。若し今寝がえられたらどうなるだろうか。各部隊長は皆司令部にいる。瞬時も早く自己の部署に帰ってもらわなくてはならなかつた。そこで軍司令官は直ちに会議をうち切り直ちに部隊に帰り各々戦備を強化することを命じた。各部隊長は挨拶もそこそこに自己の部隊に帰ったし15軍司令官など遠隔の部隊へは直ちに電命して戦備を整えさせた。

情報部は全神経全能力をあげて泰国の動向の探知に努めた。緊迫の時は刻々に過ぎて行く。将校全員司令部に籠城し、官舎にある身の廻り品は一切当番兵に仕末(ママ)を命じ、何時でも戦場に立つ準備が立ちどころに出来た。在盤各部隊は夜に入るとともに当座の弾薬、糧秣を陣地に運んで待機した。情報部その他の部隊から泰側の動向が刻々通報されたが極めて平静で何の変化もなかつた。そして仮眠している間に何事もなく8月10日の朝を迎えた。電報班長の長谷川少佐はこの所幾日も全く休む暇もなかつた。地下の電報班室は無休

であった。暗号係も電信係も全く気の毒な程であった。

夜が明けてから在盤部隊の状態を大急ぎで辻参謀と見て廻り各部隊長に状況を伝えるとともに協力を謝し、参謀副長、岸並参謀など泰側と密接な関係者は泰側に出かけて情報交換を行った。勿論泰側もソ連参戦の件は承知であるが後から思えば日本の降服近しと見て（或いは既に知っていたかも知れない）今下手に手を出してバンコックを兵火にさらすよりは後数日の我慢ということで静かにしていたのかも知れない。此の判断の方が正しいと思われる。

バンコックを除いたら泰国はないと言ってもいい程この首都は立派であって、例えば日本では東京がなくても大阪でも名古屋でもその他いくらでも首都に匹敵（ママ）する所はあるが泰ではバンコックを除けば後は北泰のチェンマイが5万くらいの小都市だし後はトタン屋根とニッパやしの葉でふいた乞食小屋のような家しかない小さい町しかない。泰の指導者は絶対にバンコックを戦場にしたくなかったに違いない。この意味に於いて辻参謀の行った陣地構築は大変な意義があったと愚考した次第。

終戦

8月13日⁹³になると同盟通信の記者連中が日本がポツダム宣言を受諾するという外電のニュースを知らして来た。情報の矢野〔正俊〕脇坂〔一雄〕両参謀は多忙を極めた。参謀会議が何度も開かれ真偽問合せの緊急親展電報が総軍に何度も飛んだが確たる返答はなかった。そこで辻参謀が直ちに総軍司令部に飛んだ。総軍からは櫛田〔正夫〕大佐が大本営に飛んだという電報が入った。寺内南方軍総司令官は御病気で全くお気の毒、沼田総参謀長も東京からの確報を待っている状況らしい。

14日になって阿南陸相の徹底抗戦の電命が来た。後で分ったことだがこれは軍務局の数名の課員が大臣の認可を待たずに発した偽命電だったのだが陸軍大臣から統帥命令が来るのが抑もおかしいのである。本筋ならば参謀総長の依命伝奏で来なければならない。つまり奉勅命令である。その後明15日正午陛下の玉音放送があるから謹しんで聞けという命令が来た。これは容易ならぬことで恐らく陛下がラジオ放送をするということは前代未聞であり愈々命を張っての御決心と拝察された。陸軍士官学校入校以来毎年の卒業式、陸大でも毎年計7回極めて間近に陛下を拝したが未だそのお声は聞いたことがなかった。

辻参謀が帰って来て主脳会議を開き〔8月13日と思われる〕、とにかく大命に随順し奉るということで第18方面軍の意志を統一した。我々末輩は余り発言しなかったが花谷参謀長などサムライは大いに興奮して絶対に降服しない、最後の兵まで戦うのだと一人力んでいたが誰も相手にしなかった。辻参謀の態度は誠に立派であった。「よろしかったら一人で敵に斬り込みなされたらよろしいでしょう」と言った。実に頭の転換の早い人で甚だ感心したものである。軍司令官はオロオロしたり力んでみたり、涙を流したり余り感心出来なかった。私はヤレヤレと思った。実の所今日あることを陸大を出る時〔1944年7月末〕既に分っていたから死なん中に案外早く来たなあと思ったぐらいで後がどうなるかと戦後処理に

頭をなやましていたがこの最後の会議はその人の性格が本当に出て或意味で面白かった。これで戦闘していたらどうなっていたらだろうか。

話は前後するがポツダム宣言〔7月26日署名、第10条に俘虜虐待を含む戦争犯罪人を嚴重処罰とあり〕を受諾したら当然戦争犯罪という問題が出て来る。捕虜虐待とか住民虐殺などの脛に傷を持つ連中は当然捕えられるということは明かである。

辻参謀は日本再建の具体策を幾つか箇条書きしたものを残し自らは直ちに地下に潜る決心をしその手段を決め私共は協力してその実行に移った。即ち南方で一番潜り易いのは僧である。小乗仏教の盛んなビルマ、泰、仏印等では僧は国の最高知識であり寺院は治外法権のようなものであった。8月14日から留学僧としての泰政府の証明をもらい（ワイロの利く国柄でその点大変便利である）18日深夜秘かに日本人納骨堂に入った。『矢野日記』にも8月18日に「辻大佐失踪」とあり]そしてその子分たるべき若い僧を人選せねばならないが最も好かったことは特別操縦見習士官が50名方面軍に配属されていて⁹⁴飛行機がないために特殊情報勤務将校とすべく教育していた大学出の優秀な人々の中から希望者をつのことにし極秘の中に手分けして各人の希望を聞いた。この時の若い学徒出身者は意気未だ衰えず全員志望したがそれでは多過ぎるので家庭の状況その他を審査の結果僧家の人が7名居たのでこれ幸いと早速矢野参謀が移民局に行ってビルマの留学僧が泰国に逃れて来て泰国に留学するという許可をもらって来て当分の糧食などとともに日本人納骨堂に入った。其の日からお経を読めるので誠に有難かった⁹⁵。

重苦しい日が来た。8月15日正午司令部将兵は地下の電報班室に入れるだけ入り流汗淋漓の有様で全く無言玉音放送を謹聴した。余りよく聞きとれなかったが忍び難きを偲び…信を中外に失うことなく…などとぎれとぎれに雑音や妨害電波の間々に聞きとれた。私の前にいた辻参謀は瞬間激しくすすり泣いたことを覚えている。それから毎日終戦処理に関する電命が来た。私達は戦争中より忙しい毎日が続いた。大本営は未だ嘗て経験のなかった敗戦に度を失ったのではないかと思った程だった。戦いは敗れても民族は残る。たとい4等国になろうともこの優秀な民族はじっとそれに甘んじて居る筈がない。余りヤケクソになって何でもかんでも焼いて失うのはどうか。しかし命令とあらば仕方がない。秘密書類の焼却、軍旗奉焼など次々と断腸の思いのする電報が来た。終戦後敵軍に降服した軍人は俘虜と認めないという電報が来た時私は軍司令官室に行ってこの意味の方面軍命令を起草したのを持って行くと司令官は花押を署名しながら思わずポタポタと涙を落した。33歳の私より56歳の老人の方が余程嬉しかったものと思われる。

敵軍はまだ進駐して来ない。未だ日本軍を恐れている。日本軍では一部で集団逃亡や個人の逃亡があったが比較的厳然と軍紀を維持していた。方面軍で持っていた酒その他の恤兵品は全部放出した。但し武器弾薬その他の軍需物資は連合軍命令によりそのまま保管を命ぜられていたので手をつけず専ら飲み食いの方は敵の進駐までというので毎晩大いにやったものである。

9月の始めに英印度軍第7師団がバンコックに進駐した。先づ武装解除を命ぜられ盤谷の町から次々に追い出されてジャングルをひらいたニッパハウスの小屋に移った。この接衝には甚だ困ったがすべて「何時間以内にどの地区をあけ渡せ」という命令で私共終戦処理に当る者は全く忙しかった。負けた以上仕方がなかったが連合軍が日本軍の組織をそのまま認め階級も復員までそのままとし全く日本軍の従順なのを見てとって旨く利用した点大いに感心させられたものである。無理な命令もあった戦犯の指名も随分あった。が概ね順調に終戦処理を終り4月頃最後にバンコックを引きあげて自ら方面軍の腹切場と決めたナコンナヨークの収容所に行った。バンコックには内地還送のための司令部が出来て後方関係の佐藤中佐参謀が主としてその業務に当ることになり私共はのんびり山のキャンプ生活を楽しんだ。

斯くて大日本帝国は亡び帝国陸海軍も消滅した。建軍以来幾多の赫々たる武勲を立て東海の一小島国をして世界の一等国たらしめた栄光の過去は全く無意味となり元の領土よりも小さくなり先輩の遺産をすべて失った。政治に関与してはならない陸軍が政治をした報いと思えばその罪万死に価するが将棋の駒は唯命のままに忙しく東奔西走したのみ。しかし一生陸軍で送ろうと思った天職は哀れ33歳をもって終った。

「いくさ敗れ つはもの我ら今日よりは せんすべもなく やみち行くなり」

(終わり)

巻末注

¹ 第二憲兵隊成立以後、同隊がタイ側に発遣した和文公文書においては、自らを第二憲兵隊とは記さず、「泰派遣憲兵隊」と称している。

² 村嶋は、特別円と交換に日本への軍費用パーツ貨提供が、積極的協力から出し渋りへ変化した動向を分析して、ピブン政権の対日非協力化を説明したことがある。村嶋英治「日タイ同盟下の軍費交渉 1941～1944」、『東南アジア—歴史と文化—』21号、30-64頁、1992年、参照。

³ 例えば、E. Bruce Reynolds, *Thailand and Japan's southern advance, 1940-1945* Macmillan, 1994は、アメリカが解読した日本の外交電報を多用している。

⁴ 全国憲友会連合会編纂委員会編『日本憲兵正史』(全国憲友会連合会本部、1976年)の945-960頁及び1211-1213頁に、戦中・終戦直後の在泰憲兵隊の活動、状況についての記述が存在する。終戦後30年近くを経た後に、元在タイ憲兵隊員の一部、しかも中位レベルの隊員から集めた回想証言を資料として記述したものである。本記述は、証言者が担当・関係した活動に関しては、他にはない興味ある内容となっているが、一次資料・同時代資料を参照することなく主に記憶のみによる回想であるようで、同時代資料と対照すると日時、人物名等に誤記が少なからず存在する、また資料提供者に在タイ憲兵隊のトップレベルの人物、例えば本手記の著者であり在タイ憲兵隊のナンバー・ツーとして3年間在勤した堀井龍司中佐、特高課長であった岩崎禮三(陸士52期)少佐などの回想は含まれていない。村嶋が、1990年12月15日に大阪の自彊館診療所で所長であった岩崎禮三(戦後阪大医学部に入学し、医者)氏に面会し、『日本憲兵正史』のタイ関係部分を読んでもらって、コメント

を求めたところ、数ヶ所に人名の間違いがあることを指摘し、とりわけ岩崎特高課長が指揮してピブン首相など非親日的4大臣の逮捕を準備したと書かれている部分（同書957頁）については、多分資料を提供したのは毛利要（少尉候補者試験第23期合格，中尉）氏だが、「作文に過ぎる」というコメントがあった。

⁵ 2017年2月14日に国土館大学人事課に問い合わせたところ、堀井龍司氏は1979年3月に国土館大学職員を退職したが、1973年時は学生部に勤務、1974年当時は広報課長であったことが判明した。

⁶ ソムワンの方がタイ語発音に近いが、堀井はソムアンと一貫して書いており、かつ戦後日本における同氏に関する報道でも、ソムアンの方が、ソムワンよりも圧倒的に多いので、本稿ではソムアンで統一する。ソムアン・サラサス（1913-1996）は、1913年1月13日にプラ・サラサスとサワデイ夫人の間に生まれ、父親が駐仏公使館に勤務していたこともあって、合計13年間フランスで教育を受けた。ソルボンヌ大学パリ化学学校で原子力化学の修士号を取得している。相当の艶福家であったようで、6人の女性との間に9男3女をもうけている（『ソムアン・サラサス葬礼記念本』，1997年）。ソムアンの日本との関わりは、守屋精爾（1934年～36年時に駐タイ日本公使館付武官）と知り合ったことで始まったようである。守屋はフランス語がうまく、両人はフランス語により交流した。戦中におけるソムアンの日本との関係は、日泰同盟によって成立した日タイ両軍間連絡機関（日タイ政府連絡所、後に日泰同盟連絡事務局）下のバンコク連絡委員会の職員の一に任じられたこと（タイ国立公文書館，以下NAT，[un.๓๓๓๓ 2.1/5](#)）が、大きな契機になったのではないだろうか。前記資料から、ソムアンは1942年3月には、同機関の職員であったことが判る。

⁷ プラ・サラサスは、陸軍士官学校教官から外交官に転じた。在パリ公使館書記官時代から555の筆名を用いてバンコクの新聞への定期投稿者であった。パリ留学中のプリディ等と親しくなり、共に革命について語りあった。人民党（1932年6月24日の立憲革命，即ち軍事クーデターによる絶対王政顛覆の実行者）のメンバーではないが、思想的には人民党左派に近い。タイ社会で影響力ある知識人の一人で、1934年にはプレーヤー・パホン内閣で経済大臣をつとめた。1935年9月から日本に住み、三井シャム室は当初プラ・サラサスの研究のために設立された。

昭和12年の外事警察概況に次の記事がある。

東京市赤坂区青山南町6-39 元暹羅国経済大臣 暹羅国人 ロング・サンダ・プラ
サラサス

右〔上〕者昭和十年九月本邦に渡来三井物産株式会社暹羅室に於て同社支援の下に日暹経済提携に関する研究中所「暹羅国経済開発私案」なる具体案を完成し我陸軍外務両省に於ても讃意を表し三井物産に於ても本年〔1937年〕二百万円投資の決定を見たるが同人は他面米國との提携に関しても策動し居る如く駐暹石射公使より「サラサスは米暹提携を画策する虞あるを以て極力日暹経済提携に努力せられ度」入電ありたり。然るに元三井重役東洋拓殖総裁安川雄之助は同国の政治的不安定，人智未開を理由に之に反対，又三井物産に於ても到底採算の見込無しと認めたるが軍部の要望もあり結局投資遷延策を採るに至りたり（内務省警保局編 石堂清倫解題『外事警察概況』，第3巻，昭和12年，龍溪書舎，1980年，246頁）。

プラ・サラサスはタイの立憲革命において果たした自分の役割を、プラ・サラサス述、タイ室訳『タイ革命の思出』（タイ室参考資料第82編，全25頁，出版年記載なし）で述べているが、誇張気味である。

⁸ 南方軍第二憲兵隊は昭和17年8月31日に「泰国盤谷に於て編成，後泰国に於ける保安並びに軍事警察に任」じた（厚生省援護局『タイ・仏印方面部隊略歴』，1961年）。

⁹ 藤原覚朗（かくろう）は，昭和17年7月1日時，タイランドホテル経営者（日本外務省記録J.2.2.0/J21「大東亜戦争に際し南方地域（占領地を含む）渡航制限並取締関係雑件」）。外交史料館所蔵の旅券下付表によれば，藤原覚朗は，広島県比婆郡東城町大字川東出身で，1889年11月10日生。1920年以來バンコクで藤原鑄造鉄工所を営んでいた3歳年下の弟，藤原源三郎（1892年8月生，1917年に大山商店に呼ばれて初来タイ）の呼寄で，妻と二人の子とともに1930年3月25日にシャム行きの旅券を取得している。『南洋時代』第8号（「今日の暹羅」特輯号，1930年10月10日発行）の168頁には，藤原鑄造鉄工所（バンコク市，タバンレク）大正9年開業。営業科目，一般鑄造業。使用人は邦人3名，支那人20名。所主，藤原源三郎，藤原覚郎（ママ）と紹介し，更に，「邦人唯一の鑄鉄工場である。所主藤原源三郎氏は大正6年大山商會に聘せられて来暹，9年に退店独立自営したが，当市内にも同業者は多数あるが，木型と鑄造方法に欠陥があるので，精巧なものは皆当工場に持込まれる。遠くは彼南からも，カスチングの注文があり，日夜注文に殺到多忙を極めている状態である」，と記している。

¹⁰ 武内秀男中尉の，1942年8月25日時の肩書は「泰国日本憲兵隊副官」（NAT 暹. 陸. 陸 2.6.7/13）。

¹¹ 正しくは，1941年12月21日調印の日本国「タイ」国間同盟条約（The Pact of Alliance between Japan and Thailand）。

¹² 木下秀清少佐は，1944年3月に病のため帰国するまで，開戦以來在バンコク憲兵隊の幹部（NAT 暹. 陸. 陸 2.7.1./32,2.7/223）であった。木下秀清は1941年12月より在タイし，42年7月に泰国日本憲兵隊長藤本治久吾の後をうけて，同隊長に任じられた（NAT 暹. 陸. 陸 2.11/31）。南方軍第二憲兵隊の成立によって隊長ポストは，林清に譲った。

¹³ 守屋精爾（1895年11月2日生-1943年5月20日没，陸士29期，陸大41期），1934年3月参謀本部付（シャム出張），1935年4月在暹羅公使館付武官，1936年8月陸軍大学校教官に転出（駐暹羅公使館付武官の後任は田村浩）。1942年4月7日再び駐タイ国大使館付武官，[同年8月1日少将に昇進]，1943年1月4日タイ国駐屯軍参謀長，同1月21日参謀本部付に（福川秀樹『日本陸軍将官辞典』，芙蓉書房，2001年，733頁）。守屋少将がドンムアンから飛行機に搭乗してタイを出発したのは，1943年1月29日。この日，三菱商事支店長の新田義實も飛行場で見送った（「新田義實日記」の同日の項）。帰国後同年5月20日に病死，中将に昇進。守屋は1942年秋のバンコク洪水で帰国の足止めを喰らったというのは，堀井の記憶違いで，正しくは，守屋は1943年1月に新設のタイ国駐屯軍の参謀長に任じられたが，病が重くなり参謀本部付で帰国したのである。なお，「新田義實日記」とは，新田義實（1894-1992）氏に，村嶋が1990年8月27日にインタビューした際，その存在を知らされ，同氏没後，御遺族より提供を受けたもの。1935年9月から10年間にわたるタイ関係部分は既に入力済みなので，いずれ刊行予定である。

¹⁴ 1942年1月に、ピブン首相は日独伊の三国同盟にタイも参加することを希望して、ドイツ側に打診したが、ドイツは日本が賛成するなら、という条件を出した。しかし、日本は賛成しなかったためピブンの希望は成就しなかった（村嶋英治「タイの歴史記述における記念顕彰本的性格：1942-43年におけるシャン州外征の独立回復救国物語化をめぐる」、『上智アジア学』第17号、1999年、41頁）。

¹⁵ プラ・サラサスは Money and Banking in Japan 論文を日本の外務省の斡旋で1938年に東京商科大学（現一橋大学）に提出し、博士号を申請した。その際外務省員が同大学に宛てた文書に曰く、プラ・サラサスは「三井の助力を得て暹羅に総合的産業開発会社を設立せんとする計画を有し居る者に有之候。同人の経済開発案に対しては従来当方に於て後援し三井へも勧告致居候…当省としては実は人物少き暹羅に於ては同人の如きは我方として将来之を利用することあるべしとの肚より…対暹工作上の政治的理由より利用すべき暹羅人殆どなき現状に於て是非とも同人を日本側に付け置き度き当省の考に御援助下さる…」(外務省記録L3.3.0/8-12「各国名士の本邦訪問関係雑件 暹羅国人の部」)。但しこの申請は却下されたようで、同名の論文で1950年12月28日付で日本大学から経済学博士号を授与された。

¹⁶ 堀井は、宮川通訳と姓のみ記し、名は書いていないが、宮川源一郎のことである。何となれば、戦後英軍のシンガポール法廷で1947年1月7日に有期刑の判決を受け、判決が確定した5人の泰国憲兵隊員の一人に「通訳、本籍神奈川県、宮川源一郎」(全国憲友会連合会『日本憲兵正史付録』の「戦争裁判概見表」, 17頁)が存在するからである。なお、同「戦争裁判概見表」によれば、泰国憲兵隊で判決を受けた者は、上記5名の外に1947年6月18日判決の4名がいる。

外交史料館所蔵旅券下付表には、宮川源一郎（1920年7月25日生、宮川岩二とムメの間の長男）に関して次の二つ下付記録がある。

「旅券番号310654 宮川源一郎、戸主岩二長男、本籍神奈川県中郡金目村 [以下略す]、大正9年7月25日生、渡航先暹羅、目的両親訪問、旅券下付日1936年7月11日」(外交史料館リール旅111)

「旅券番号379416 宮川源一郎、戸主岩二長男、本籍神奈川県中郡金目村 [以下略す]、大正9年7月25日生、渡航先泰国、目的父訪問、旅券下付日1941年6月25日」(外交史料館リール旅115)

在タイ憲兵隊特高課長として、宮川を通訳としてしばしば使い宮川と親しかった岩崎禮三氏によると、宮川は上智大学卒業で英語がうまかったという（前掲岩崎禮三氏インタビュー、1990年12月15日）。但し、2017年1月18日に、村嶋が上智大学に問い合わせたところ、同大の卒業生ならば全て登録されている大学の管理システムには、宮川源一郎の名は存在しないことが判明した。

¹⁷ 宮川岩二（1888-1957）は、現在の平塚市出身で1907年5月15日に来タイ、タイ語を習得した後、大山商店を経営。ムメとの間に三人の男の子をもうけた。源一郎は、その長男である。宮川岩二は、商業のみならず、1922年6月1日～24年3月31日の間、タイ語で日刊新聞『ヤマト』を発行し、自らタイ語で社説等に健筆を揮った。同紙は大臣の人気投票、行政批判なども行い、絶対王政下において大胆かつ異色の紙面を提供した。1983～4年時、村嶋はタイ国立図書館（当時は米国で研修を受けた腕利きのマイクロフィルム技師がいた）

に、『ヤマト』原紙からマイクロフィルムを作成することを注文して入手した。タイ国立図書館は、村嶋の注文で作成した『ヤマト』のマイクロフィルム及びマイクロフィルム作成に用いた原紙を所蔵していたが、マイクロフィルムは温度管理を誤って腐蝕し閲読不能となり、原紙はマイクロ化の際にバラバラにしたことで劣化が一層進行し同様に閲読不能となった。現在、読むことができる『ヤマト』を所蔵しているのは村嶋一人だけであると思われる。宮川岩二については、村嶋英治「タイのプリンセスと結婚した宮川岩二（上）、（中）、（下）」、『クルンテープ』（泰国日本人会月刊誌）、2010年8月～10月号参照。

¹⁸ 正しくはソムアンには4人の妹がおり、一番年長の妹、ゲームチット（หม่อมงามจิตต์）は1940年に結婚して家を出ていた。彼女の結婚相手は、チュラロンコン王の孫の Prince Prem Purachatra（立憲革命前の有力王族カムペンベツト親王の息子。インド、デンマーク大使など歴任、文学者としても知られる）で、留学先のフランスで知り合った。その下の3人の妹が母親のサワデイや兄のソムアンと同居していた。3人中一番年長で、堀井が長女と書いている女性はチットラプ（นางจิตตลาภ สารสาส）で、その下にソーピン（นางไฉน อัครเกียรติ），セーラー（นางเสลา สก๊อท）がいた。サワデイ夫人が死亡した際の葬礼記念本によると、同夫人はプレーヤー・ラーチャーヤサートウクの長女として生まれ、愛情あふれる世話好き、面倒見のよい女性で、父親が実母以外の女性との間につくった異母弟妹の子供達や、離婚した前夫のプラ・サラサスの弟妹たち（プラ・サラサスは長男で1妹、4弟がいた）まで親切に面倒を見たという（『サワデイ・アサワノン葬礼記念本』、1962年）。サワデイ夫人が、14歳年下の堀井に優しかったのも、彼女の性格によるものであろう。1990年6月6日にソムアンの自宅（ソーイ・サラデー1）を訪ねた村嶋に、ソムアンが語ったところによれば、サワデイ夫人に気に入られ、家族の一員同様に遇された日本人に、同盟通信社記者の岩城政治（1912年生）がいる。岩城は在タイ中に見聞したタイ政治を題材に小説『悔いなき同盟』（雪華社、1963年5月）を発表した。その中には、ソムアンの家族も堀井龍司も登場する。岩城は『悔いなき同盟』の前に、『メナムの東』（第二書房、1957年7月）を刊行している。岩城の両著作と、堀井の本手記とは構成も近いものがあるだけでなく、間違いにも同一のものが多数あるので、岩城と堀井との間に情報交換があったか、どちらかが作成した資料をもう一方が利用したものであろう。但し、岩城自身が『悔いなき同盟』のあとがきに「本書の内容は、一応すべて実際にあったことを素材にしているが、文学作品としての構成上少しく劇的粉飾を施した個所がある。」（同書、335頁）と述べているように、同書は事実と創作が混然としており、歴史資料として使用することはできない。但し、ねず・まさし『現代史の断面・死の泰緬鉄道』（校倉書房、1999年）の「第8章、同盟国タイの動揺」では『悔いなき同盟』を史料として用いるという誤りをおかしている。

『悔いなき同盟』に、カンヤー・サムセンとして登場するカニター・サムムセン（1920-2002、アドゥン教授と結婚後ウィチャンチャローン姓）に、村嶋が1999年12月16日に彼女のバンコクの自宅でインタビューした結果、同書のフィクションの一部が次のように判明した。カニターは、同書の書くとおりに、1945年初めにベトナムのダラットのカトリック修道院の学校でフランス語を学んでいた。この学校にはボーウォラデート親王の娘で10才位のポンシー（正しくはボラニー）も学んでいた。そこに岩城（当初彼女は岩城の名を思い出せなかったが、村嶋が岩城というと、確かに岩城と述べ、その後何度か岩城と自ら語った）が

チャルーン・チャーティカサティアン（1893-1974, プラヤー・ナリソン駐日公使の養子となり、1910-13年日本の陸軍中央幼年学校に学び日本語に通曉、1933年のポーウォラデート叛乱に与してサイゴンに亡命中）と共に迎えにきた。日本人男性離れをした長身でハンサムな岩城に、カニターが好意を感じたのは事実である。この限りで『悔いなき同盟』の記述は事実だが、次の点はフィクションである。即ち、カニターは当時24才で、ポンシーは10才だから、大人と子供で、両者間に大人びた会話はあり得ない。カニターはポンシーの侍女としてダラットに行ったのではなく、また、カニターの家とポーウォラデート家は父親が知り合いというだけで、親族でもない。カニターがダラットに行った理由は、当時戦争中で留学先が限られており、サイゴン領事の妻がカニターとタマサート大学の同窓であったので、この領事一家に幹旋してもらって留学したものである。また、戦後カニターが、プラ・サラサス戦犯裁判の弁護士を引き受けた事実はない。岩城は、タイ語はできず、日本の陸軍士官学校卒のチャルーンが通訳して話をした。カニターは、日本語は難しいので日本に留学する考えはなかった。バンコクに帰って、岩城と一緒にアユタヤに行ったかどうかは覚えていない。カニターは留学を考えていたので、岩城とはin loveの程度には至らなかった。また、本書でカニターの家系を貴族としていることも事実と反する。

¹⁹ 外務省記録旅券下付表によると、江畑弥吉（1887-1952）とタイ人妻との間に、1911年1月1日に長男朔弥、1912年11月に二男秀弥、1918年10月に長女やゑ、が誕生した。二男の秀弥は1937年には正子（1917年生）と結婚した。翌1938年に秀弥・正子夫妻に長男武弥が生まれた。

江畑朔弥はタイ名をスリヤと称し、プラ・ミトラカム駐日公使（1934年6月3日着任、1937年10月に後任公使としてプラヤー・シーセーナーが任命された）の私設秘書として来日した（外務省記録、M.2.5.0/3-10「在本邦各国外交官、領事官及館員動静関係雑件 タイ国の部」）。

1945年12月13日付けでタイ軍パック・ケートサムリー中将から 英軍207部隊司令官宛に以下の文書が発遣された。即ち、タイの戦犯法に基づいて設立された戦犯委員会は、江畑朔弥が戦犯法に違反しているという証拠を持っている。江畑は連合国側に逮捕拘束されているという情報があるので、戦犯委員会が尋問するために引き渡して欲しい、と。これに対して、12月31日付けで、英軍は、江畑は第三諜報機関が逮捕している、江畑が違反したという十分な証拠が提示されれば、同諜報機関は江畑を引き渡す、と回答した（NAT นท. ๓๗๓๓ 3.13/1）。

江畑朔弥は、その後釈放され拘束されることなく自由に活動できたようである。戦争直後、陸軍の上司（少佐、その妻は江畑スリヤの妻と姉妹。なお、江畑スリヤの妻は、プラヤーの娘で女医）から頼まれ、その上司の妻の親類である江畑の店（在シーパヤー）が保有する大量のセイ製品の警備に当たったジェート・カンタラック（หลวงดำเจตน์）によれば、江畑スリヤは日本語・タイ語・中国語をよく話すことができた。スリヤはエミコ（タマサート大卒）という妹がいた、テルヤという者もいた、という。ジェート・カンタラックは、1941年12月8日早朝日本軍がパッタニーに上陸した時、伍長（3等陸曹）の軍人でユワチョン・ターハーン（少年義勇兵団）の指導者であった。12月8日午前3時頃、ユワチョンがターハーン・ケーク（印度兵）らしきものが上陸した、と報告してきた。連中は県庁の金庫

を強奪に来たのではないかと考え、ユワチョンを率いて県庁の警備におもむいた。この時は、日本軍が上陸したとは未だ知らなかった。その時、ナンセン商会（茶碗などセトモノを販売していた）の日本人店主が、日本軍を率いてタイ語で「我々は、タイ人は狙撃しない。シンガポールに向かってるのだ。タイ側はどうして撃ってくるのだ」と何回も叫ぶ声が聞こえた。この店主はタイ語がよくでき、停戦後、中尉の服を着て現れ、県知事に面会した。ジェートは、上司の許可を得ないまま、鉄砲弾薬を持ち出し、ユワチョン10名を率いて県庁脇の溝に隠れた。日本兵がユワチョンを刺すために、近づいて来ると狙撃した。日本兵はユワチョン二名を刺し殺した。ユワチョンは17～19才の少年で、震え上がって銃を撃てなかった。ジェートはこの時、9人を撃った。この功績で伍長から曹長（1等陸曹）に昇進した。村嶋がインタビューした当時、ジェートの年齢は74才、ワット・プラシーマハータートで比丘に出家していた（1991年9月7日、ワット・プラシーマハータートでインタビュー）。

英軍がタイ側に江畑の身柄を求めて来たのは、1946年7月になってからである。

江畑の逮捕を要請されたタイ特高警察課長のジャムラット・マントウガノンは、1974年執筆の回想「警察生活44年」で、江畑逮捕を次のように回想している。

戦後日本人の残留希望者の審査は、先ずタイ側内務省の3名の委員（プラ・パノムナカラーヌラックが委員長、ジャムラットも委員の一人）が第一段階の審査をして、英軍が最終判定をした。或る日、タイ海軍の一高官〔当時タイ憲兵司令官の任にあったサンウォンユタキット海軍少将〕からバーンブアトーン日本人抑留所に抑留中の15名の日本人を漁業専門家として徴用したいという申出が内務大臣を通じて提出された。15人の中には、日タイ混血で、かつて憲兵隊で通訳のみならず、タイ人の多数の手下を使って憲兵隊のために情報調査など特高的仕事をしていた者〔江畑朔弥のこと、以下江畑〕、また彼の外に日本の軍司令官〔中村明人中将のこと〕の身近で仕事をしていた者2-3人〔軍司令部で通訳として働いた波多野文之進、波多野三郎など〕の名があった。私は、彼等は英軍が身柄を求める可能性があるので、徴用を許可すべきではないと提言し、委員長もその旨を内務大臣に具申した。しかし、どうした訳か内務大臣は15名の徴用を許可した。丁度同じ頃、英軍のIntelligence Assault Unitの将校が、江畑について調査したところ、江畑は日本の憲兵隊のために情報収集をしていた、これはスパイに該当するのではないか、どうして逮捕しないのだ、と私に高圧的に迫った。私は、スパイは前線で見つかれば、銃殺は間違いない、しかし、江畑は日本人の義務として自国のために銃後で活動したものであり、スパイには該当しない、と答えた。英将校もそれもそうだとしたが、外に容疑があるかどうかは言わなかった。その後二ヶ月位して、漁業に徴用した15名の身柄を英軍が必要としているという英大使館からの申出があった。タイ海軍は江畑一人を送り返そうとしたが、聞いたところでは江畑は護送中の車から逃げ出したという。英軍はシンガポールの戦犯法廷に江畑を送る必要があると言い、英大使館もタイ外務省に江畑の身柄確保を求め、江畑の居場所や誰が匿っているかを連絡して来た。私は部下を逮捕に行かせたが、そこに江畑は居なかった。私は、戦前からの知り合いであった英大使館の担当者に、江畑の居場所が判ったら直接私に言って欲しい、しかし、江畑はタイ人並に色が黒く、タイ人と同じようにタイ語を話すので容易に逃走する

ことができると告げ、江畑の容疑は何だと尋ねた。館員は、英軍が求めているだけで、自分は知らないと答えた。私は、部下に江畑を殺さずに生きてそのまま捕らえるように指示した。それから1ヶ月後、この部下はバーンカピの一家屋に一人で隠れていた江畑を逮捕した。江畑は銃殺されると怯えて、命乞いをしたという。私は知りたいことを江畑に尋問した後、英大使館員に連絡した。英大使館は喜び、私を大使の昼食会に招いた。英大使館はタイ外務省を通じて江畑を逮捕した警官に懸賞金を送ってきたが、私は警察の任務であると考え警察局長に受けとるべきではないと具申し、承認を得た。シンガポールまでの江畑の護送は私一人が同行し、途中手錠もかけなかった。英側は何人で護送するのだ、手錠はかけるのか、などとうるさかったが。後から知ったことだが、江畑は戦犯として起訴されることはなく、日本に送還された。江畑とはそれ切り会ったことがない（『ジャムラット・マントウガーノン警察大將葬礼記念本』（พิมพ์เพื่อเป็นอนุสรณ์ในงานพระราชทานเพลิงศพ พล.ต.อ.จรัส มั่นชุกานนท์ พ.ศ.2521）1978年、90-92頁及び128-129頁）。

在タイ英軍は、江畑朔弥の身柄を求めて、タイ警察に逮捕を要請し、1946年12月には1万バツの懸賞金を懸けた。タイ警察は1947年7月10日になって江畑を逮捕し、シンガポールに移送した（村嶋英治「日タイ関係 1945-1952年：在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に」、『アジア太平洋討究』第1号、2000年1月、152頁）。

1951年に江畑スリヤ（สุริยา เหมาศา）の妻ジャムラット（จรัส เหมาศา）から江畑スリヤとその父江畑弥吉のタイ入国許可申請がタイ政府に提出された。スリヤは戦犯容疑でシンガポールに送られた後、日本に送還されたままだった。1951年5月22日付けでタイ外務省は駐日タイ外交使節団長（サガー・ニンカムヘーン）に連合国軍最高司令官（SCAP）が江畑スリヤをどう扱っているか、戦犯と見なしているかを調査するように訓令した。江畑は日本では戦犯の扱いを受けていないことが判明したが、タイ警察は1951年12月12日付けの文書で兩人に入国許可を与えるのは不相当と判断して外務省に伝えた（タイ外務省第2次大戦記録 ww.2/3:4/6）。なお、村嶋は、1990年頃、大阪で警察のタイ語通訳をしているという江畑朔弥（スリヤ）氏の連絡先を知り合いから聞き、2度ほどインタビューを申し込んだが断られそのままとなった。

²⁰ 江畑弥吉（1887-1952）は、現在の滋賀県彦根市八坂の出身で、17歳の1904年5月に商業見習いの目的で来タイした。彼は1906年に、バンコクのバーンモー地区に江畑洋行を開いた。また、農業にも手を伸ばし、1910年までにはランシットで大規模な水田経営を開始し、さらにターチン河口でも農業を行い、農業で成功した最初の日本人となった（村嶋英治「戦前期タイ国の日本人会および日本人社会：いくつかの謎の解明」、『タイと共に歩んで：泰国日本人会百年史』、バンコク、2013年、34-35頁）。京都新聞2016年5月22日朝刊および、同月25日朝刊に、中部大学青木澄夫教授の調査成果を紹介して、江畑弥吉の写真業および絵葉書出版業に関する記事が掲載されている。

²¹ 堀井は、バンコク初空襲を1942年12月10日としているが、タワット・セーニーウォン中佐「第2次大戦期のバンコク・トンブリー空襲統計」、『砲兵雑誌』（タイ語）第4巻4号、1949年4月-6月、13-17頁によれば、バンコク空襲は、1942年1月8日、24日、27日の3回ののちは、42年11月26日、12月27日、43年4月21日、12月19日、20日、23日の順である。三菱商事バンコク支店長新田義實の日記は、1942年11月26日の空襲を「朝1時

30分-3時空襲警報，二，三機来り，主としてチョンノンシィの精油所に二発あて，十数発を落とす」と記し，同年12月26日の空襲を「廿六日より廿七日に至る夜，即ち廿七日の朝零時20分に空襲（第四回目の落爆弾）三時半迄，Borneo [埠頭]の前の水中，Bombay Burma [会社]にCasualty在りし由」と記している。

²² チャムラス・マンダカナンダの日本留学については，次の二つの読売新聞記事がある。

わが警察精神を会得，教習所を修了したシヤムの三君

わが国最初の警官留学生として世界に誇るわが警察精神を会得するため昨年十月十九日（ママ）来朝，芝愛宕の警視庁警察練習所に入所一般のお巡りさんの卵に混じつて日本警察官のいろはから稽古を受けていたシヤム帝国警察少尉（日本警部補に相当）チャムラス・マンダカナンダ（27）バンチョン・ブンヤプラソップ（23）プラチュオプ・キラテイプットラ（25）の三君はこの十五日目出度く卒業するので十三日警視庁に出頭藤岡警務部長，松原警務課長らに流暢な日本語でお礼の挨拶を述べた。三君は卒業後更に内務省の講習所に入り六ヶ月の教育を受け更に二三年間警視庁で実地に事務の見習をしたうへ帰国と同時に中尉に昇進，将来はシヤム警察界の中堅として活躍することになっている。警視庁では特に三君の入所を記念して藤岡警務部長から日本警察精神を象徴する楠公のブロンズ像を十五日の卒業式に贈呈する。三君は語る。

「日本に来るまでいろいろ想像していたが来て日本人の生活を知り，はじめて真の日本精神が会得出来ました。この日本精神があればこそ日本が僅か七十年間にあらゆる難関を突破することが出来たのです。帰国後は日本をお手本にしてシヤム帝国のために尽くしたいと思ひます」（読売新聞1938年1月14日夕刊）。

シヤムの警官街頭へ 実地見習ひ

世界一といはれる日本警察制度を見習ひに南の友邦シヤム国から「官費在外留学生」として昨年十月来朝，警視庁の警察練習所に入所訓練中だった警察少尉チャムラス・マンダカナンダ（28）同バンチョン・ブンヤプラソップ（26）同プラチュオプ・キラテイプットラ（27）の三君はこの程目出度くお巡りさんに巣立ち今度は実務見習ひとして街頭に立つことになり一日朝チャムラス君は三田署へ，バンチョン君は上野署へ，プラチュオプ君は駒込署へそれぞれ配属された。向ふ三ヶ月の予定で前半は内勤後半はシヤム警官の制服のまま交番に立つて実際に街頭の見付役の見習ひをする。これが済むといよいよ金箔ぶきの警察官となつて帰国直ちに警察中尉（日本の警部相当）に昇進，同国警察の幹部として未来は警視総監が約束されているといふ（読売新聞1938年6月2日夕刊）。

前掲『ジャムラット・マントウガーノン警察大将葬礼記念本』によると，ジャムラットはロップリーで警察中尉を父として誕生，バンコクでアサンプション中学6年を卒業後，1928年12月に警察士官学校に入学し1931年卒。警察少尉として地方勤務の後，1936年4月1日に日本留学のため警察局付となり，日本に渡り1年間日本語を学習した後，警察で研修，1938年12月3日バンコクに帰着，1939年3月21日に警察局人事課付として復帰した。これは同時に留学したプラチュオプ・キラテイプットラ（プラチュアップ・キラテイプット ประจวบ กิติบุตร，1912-1967，1935年警察士官学校卒，1959年バンコク都警視総監・警察中将，1965年警察局長補佐）や，バンチョン・ブンヤプラソップ（บรรจง บุญประเสริฐ，終戦後間もなく

警察少佐で早世)も同様である。ジャムラットは1941年10月から特高警察部の外事部門に異動し、42年11月特高警察第一課(外事課)次長、43年9月11日には特高警察部次長代行、43年12月17日に日泰同盟連絡事務局付兼務、45年1月特高警察部外事課長、46年10月特高警察部副部長、50年8月特高警察部長、タイとカンボジアとの国交が成立した後、1953年7月に初代の駐カンボジア公使に任じられ途中大使館に昇格したので大使に、57年5月ブノンペンの仏暦2500年記念式典の後6月離任、帰国後省付大使、1957年9月16日クーデターののち警察少将として警察局に復帰し、59年1月警察中將に、66年11月警察局長補佐、67年12月副警察局長、71年9月警察大將昇進と同時に定年退職、1959年2月憲法制定議会議員、1968年2月上院議員。

ジャムラットが、1941年末から戦中を通して一貫して、特高警察として機密性が高い外事を担当したことは、警察局長アドゥンから厚い信頼を得ていたためであろう。1974年に書き上げた「警察生活44年」という回想で、ジャムラットはタイの対英米宣戦後、タイ政府は英米にいるタイ人外交官や学生に交換船で帰国するように求め、帰国しない者はタイ国籍を喪失するまで言ったが、在米のセーニー公使や学生、イギリスの一部公使館員や学生は帰国を拒否し、自由タイ運動を起こした。それ故、国外自由タイ運動の存在は知られていた。国内自由タイについては、「最初の頃は、どこからか漏れてくる噂に過ぎなかった。私はアドゥン警察局長がどう動くか、彼一人に注目していた。国内治安情勢は彼の掌中にあったからである。私は昼夜アドゥン局長に呼び出されて使われていた。欧州情勢について、宣伝局(現在広報局と改名)が欧米或はデリーの放送を聴取してアドゥンにも定期的に報告を送ってきていた。アドゥン局長は、[海外放送情報に基づき]私にも欧州やアジアの情勢を話して聞かせた。その後、アドゥン局長は海外放送報告を特高警察の部長や外事課長にも読ませるようになった」(前掲『ジャムラット・マントゥガーノン警察大將葬禮記念本』、77-78頁)。1944年3月に、プアイ・ウンパコーン英軍少佐ら3名の降下隊がチャイナートで逮捕され、特高警察第一課(ジャムラットが次長)に送られてきた。ジャムラットはプアイとはアサンプション校の同窓生として面識があった。取調の結果は、通常の手続を経ずに直接アドゥン局長に報告した。その数週間後サムラーン・ワンナプルック英軍大尉ら3名の降下隊がチャイナート警察に逮捕され、同じく特高警察第一課に送られてきた。後者の取調結果も直接アドゥンに報告した。「それから間もなくアドゥンは私[ジャムラット]に、プリディ摂政と共に秘密活動をしていると洩らすようになった。そして私にいくつかの仕事を命じた。国家民族の生死に関わる重大任務は、極秘であることが最重要であり、他の人の仕事に関心をもたないように努めなければならない。多くを知れば知るほど自分にも、また、国家民族の独立にも、危険が増大する。敵に捕らえられ、その拷問に耐えられず計画を吐いてしまうと、別の仕事をしている人にまで危険が及ぶことになるからである」(同上書、78頁)。終戦近くなると、ジャムラットはバンコクに潜入して来た米英の諜報員とも連絡した。堀井手記には、タイ側パートナーのジャムラットが、自由タイ員であることを疑ったか否かについては触れていない。また、注29で、プリディ夫人プーンスクは村嶋に、自由タイの指導者プリディがアドゥンを自由タイに引き込んだ理由は、降下隊との連絡を必要としたためであると語ったことを紹介しているが、これはジャムラットの回想と時期的に一致している。

²³ ジョサイア・クロスビー (1880-1958)。1934年3月にクロスビーを駐シヤム公使に任命したいと英外務省がアグレマンを求めて来た際に、シヤム外務省が1932年版 Who is Who で調べたクロスビーの経歴は、次の通り。

Sir Josiah Crosby, K.B.E.,C.I.E.,O.B.E.

Born: Falmouth, 25th May,1880. Unmarried.

Education: Royal Grammar School, Newcastle-on-Tyne; Gonville and Caius College, Cambridge (Scholar) B.A. modern languages Tripos, 1902, first class honours; M.A., 1926.

A student interpreter in Siam,1904; Vice-Consul in Siam and Travelling District Judge, 1907; Vice-Consul at Bangkok, 1911; Vice-Consul at Lampang, Siam,1913; Consul at Seggora, Siam, 1916; for French Indo-China at Saigon, 1917-19; Acting Consul-General at Bangkok,1919-20; Consul General at Saigon, 1920; at Batavia, 1921-1931; British Minister in Panama since 1931.

以上からクロスビーの在タイ勤務は、1904-17年、1919-20年、その後は1934-41年の駐タイ公使時代で、合計24年ほどである。なお1934年3月13日の閣議でクロスビーにアグレマンを与えるか否かが審議されたが、閣議は、クロスビーはシヤムの領事時代に移審権を行使して領事裁判に持ち込むなど、行動に問題があったようなので、ワン親王に移審権行使の経緯を調べさせることにした。翌週3月20日の閣議で、プラヤー・アピバーン外相は、ワン親王の調査の結果クロスビーに法律に反する行為はなかったのを、これを理由に断ることはできないが、彼は立憲革命以前のシヤムの王制に慣れ親しんでおり、旧官僚の知り合いも多いので、公使として不適だと考える、ワン親王に現任の英公使と交渉させたいと発言した。しかし、3月23日の閣議はクロスビーにアグレマンを与えることを了承した。クロスビーは34年8月4日に着任し、同月8日に信任状を捧呈した (NAT (2) 0201.87/8)。

²⁴ 根木茂は憲兵として勤務した後、特別志願将校に昇級した。徴集年は1924年、拝命隊は姫路である。1975年9月3日に岡山市で死亡 (全国憲友会連合会『新全国憲友名簿, 昭和60年12月』, 581頁)。なお、終戦時も南方第二憲兵隊の隊附で階級は中尉のままである (松原慶治『終戦時帝国陸軍全現役将校職務名鑑』, 1985年, 1620頁)。

²⁵ 当時の人民代表議会議員中に、この名はない。堀井の記憶違いで、ブンテン・トーンサワット (1911-1999) である可能性が高い。そのように推測する理由は、ソムアンが前出の村嶋インタビュー (1990年6月6日) で、1944年のピブン政権打倒は、プリディとソムアンが中心となって人民代表議会工作を行った成果だが、議会でピブン打倒の中心となった議員は、ブンテン・トーンサワット、パイロート・チャイヤナム、リアン・チャイヤカーンである。そのためリアンは警察に追われて、ソムアンが匿ったこともある、と述べていることである。

ランパーン県出身のブンテンは、1937年11月に最初の選挙に当選して以来、長期に亘って連続当選を続けた。1946年1-3月および1948年2-4月のクアン・アパイウォン内閣に無任所相として入閣、1975年3月-76年1月のククリット内閣では内務大臣 (後に副首相、司法大臣)、1979年5月-1983年3月に人民代表議会議長、1983年プレーム内閣で副首相に就任した。『ブンテン・トーンサワット葬礼記念本』(1999年) の40-43頁は、1944年6-7月のピブン政権打倒におけるブンテン議員の策謀を次のように記している。

ブンテン氏は経験豊富で、政治の諸活動を計画するに当たり、用意周到な策を用いた。例えば、1944年当時ピブンが首相であった内閣の打倒計画では、目先が利き、民主主義体制を尊重する政治家として、知略を尽くした。もし、ピブンに政治を続けさせれば、人民が計り知れない苦難を味わうことになるからであった。とりわけ、ピブンは僻地のジャングルの中にあるペチャブンを遷都する計画を有していたからである。ブンテンは、ピブン政権打倒にはペチャブンを、爆発の導火線として使えると考えた。当時、大東亜戦争は決戦段階で、タイ国内には日本軍が多数駐屯していたので、連合国側は在タイ日本軍打倒のためにタイに進攻する準備をしていた時期であった。この時期には、プリディ摂政を長とする自由タイという抗日地下運動が存在していた。ブンテンは自由タイ運動の活動や目的を熟知していた。ブンテンは自由タイ運動側から熱心に勧誘されたが、参加することはなかった。その理由は、タイは日本とエメラルド仏の前で攻守同盟を誓い合ったのに、自由タイを組織して日本を裏切ることは、正しい政治のやり方とは言えないと考えたからである。

ブンテンは自由タイ運動に参加しつつある民選議員（第1種議員）には、日本との同盟を結んだピブン政権の反日化ではなく同政権を打倒してのち、別の政権が反日政策をとるのが筋だと説得した。ところで、ピブン政府が任じた官選議員（第2種議員）は、ピブン政府を支えており、彼等の力も借りないとピブン政府打倒は成功しない。1944年6月24日に議会が始まり、ペチャブンを遷都法案と仏都法案が通過しなければ、政府は遷都を進めることができず辞任以外に道はなくなる。当時は戦時で政府は議会を解散することはできなかったからである。議会が開会されるや、ブンテンは、ピブン政府は議会を尊重せず、遷都緊急勅令を出して強制労働を強いた結果多数の死者を出したと批判する新聞インタビューを行った。人民代表議員の権利として公然と政府批判を行ったことは、第1、第2種両方の議員を刺戟し法案審議に於いて政府に反対させる力を与えた。また、ブンテンはペチャブんに比類なき価値を有する国有財産を移転した際に、その一部が不正官吏によって着服されたことを知って、この件を文書にして議員たちに配布した。

議会が開会されると、ブンテンが既に票集めをしていた第1種議員には何の問題もなかった。特に住民が強制労働に徴用されたペチャブンを近隣の選出議員には、第2種議員をピブン政権打倒に参加させるために用いる策について、ブンテンは数日考えた末、正直とは言えないが国家の将来のためには已むを得ないとして、次のように自由タイ運動を引き合いに出すことにした。即ち、自由タイ派の第2種議員を訪ね、ペチャブんに軍事基地が完成すれば、タイ軍は日本軍と協力して自由タイを壊滅させるというのが、ピブンの計画だと吹聴したのである。これで第2種議員も反ピブン政府に転じた、と。

²⁶ 1942年-1945年にタマサート大学構内の河沿い部分に設けられ、英米蘭の三国民間人を収容した Civil Internment Camp for Enemy Nationals（敵性国人収容所）のこと。所長はプーム・マハーノン大佐だが、副所長には、チュラロンコン王の実弟グロムブラ・チャカパッティボン（H.R.H. Prince Chaturon Rasmi Krom Phra Chakabhadhibongse）親王の孫に当たるポンプロム・チャクラパン（M.R. Bongsebrahma Chakrabandhu, 1906-1971, 英陸軍のサンドハースト王立陸軍士官学校卒、就任時タイ税関職員）が任じられ、実質の担当者として終戦まで収容者を寛大に扱った（『ポンプロム・チャクラパン中佐生前写真集』, ภาพชีวิตประวัติพันโท ม.ร.ว. พงษ์พรหม จักรพันธ์, 1971年）。1942年2月17日現在の収容人員は、英人244人、

米人75人、蘭人17人（NAT ๒๒.๑๑๒.๒.๑๑/๘）。プリディ摂政はタマサート大学総長でもあり、同じ敷地内の収容所（キャンプ）を訪ねることは容易であった筈である。

²⁷ 陳守明（ต้นซิวเมือง พริ่งหลี, 1904–1945年）、聳利（พริ่งหลี）グループ総帥。終戦の翌日、1945年8月16日午後3時50分、帰宅途中にアングロ埠頭で3名の兇手から12発の銃弾を受け殺害された。詳細は、村嶋英治「日タイ同盟とタイ華僑」（『アジア太平洋研究』成蹊大学、13号、1996年）、村嶋英治「タイ華僑の政治活動：5.30運動から日中戦争まで」（原不二夫編『東南アジア華僑と中国』、アジア経済研究所研究叢書436号、1993年）参照。

²⁸ 江畑朔弥の妻は、ジャムラット・エバタ（จำรัส เอบาทา）。注19参照のこと。

²⁹ 1991年9月7日に、村嶋はバンコクでプリディ夫人、プーンスク・パノムヨン（พูนศุข พนมยงค์, 1912–2007）の自宅を訪問し、インタビューを実施した。村嶋の質問に、プーンスクは次のように答えた。即ち、

プリディ夫妻は、1933年4月にシンガポールから白山丸でフランスに行く時、船上で富豪の薩摩〔治郎八、1901–1976〕に会い、友人になった。薩摩はその後、タイの金鉱山に投資した。プリディは1935年末に訪日の時に日本政府に叙勲され、立憲革命後日本から勲一等旭日章の叙勲を受けた最初のタイ人となった。〔プリディ内務大臣は、1935年8月10日にバンコクを発って欧州に向かい、その後米国、日本を経て36年1月27日にバンコクに帰着するという長期出張を行った、NAT (2) ๑๑.0201.25/20〕。守屋精爾が武官として最初駐タイしたとき（1934–36）、守屋とプリディは極めて親しかった。守屋はフランス語がうまく、プリディと通訳なしで親しく会話した。守屋は駐タイの後、駐スペイン武官として赴任した。1941年12月6日に守屋はプリディ家に電話して来た。プーンスク夫人が受けると重要な用件（ธุระสำคัญ）があると、話す。守屋はプリディに会見した。しかし、この時守屋は戦争のことは話さなかったはずである。守屋に会った後、プリディは息子に気が重い（หนักใจหนักใจ）と語った。日本が侵攻した時、ピブンはどこに行ったのかバンコクにおらず、首相代理のアドゥンが対応した。日本との交渉の責任者はアドゥンでありプリディではなかった。12月8日午前1時に、プリディは自宅に電話してきて、二階に寝かせている子供たちを一階に降ろすようにと言った。日本の通過要求に対して、閣議でプリディは日本と戦うべきだと提案し、ピブンと意見が合わなかった。戦争前から蔵相プリディは、金融問題で日本の怒りを買っていたが、プリディが蔵相を辞めたのはピブンと意見が合わなかったためである。その後、日本がピブンにプリディを閣外に出したらどうかと言ったとも聞いているが、証拠はない。ディレーク外相にも予見できないほど、ピブンは豹変した。当初日本は通過を求めただけなのに、ピブンは同盟、対英米宣戦にまで進んだ。ピブンの対日同盟や対米英宣戦は、率直に言う（พูดตรงตรง) ならば、日本に強制されたのではなく、ピブン自身の自発的（สมัครใจ) 決心によるものであった。1942年1月25日（日）正午の宣戦布告にプリディ摂政はサインをしていない。〔宣戦布告はピブン、ウィット副外相ラインで急遽決定したもののだが〕、プリディはその間バンコクを離れていたのだから、サインすることは物理的に不可能であった。プリディは家族をアユタヤに疎開させており、24日（土）、25日（日）の土日二日間を使ってアユタヤに家族を訪問中であつたのだ。25日正午、アユタヤで昼食中に、ラジオで宣戦布告発表を聞いた。この発表布告では、アユタヤに居て署名できるはずはないのに、プリディの名も署名した摂政の一人として読み上げられた。

プラ・サラサスとプリディは親類ではないが、極めて親密な友人 (เพื่อนสนิท) で、1935年暮れに夫人がプリディを迎えに日本まで行った時、在京中のプラ・サラサスは神戸に夫人を迎えに来た。プラ・サラサスは仏人の妻 (Claude Sarasas) との間に二人の娘があり、プーンスクは今でもこの仏人妻と交流がある。プリディとサラサスは対日態度が異なっても、友情は変わらなかった。サラサスの息子ソムアンは戦争中しばしばプリディ家に入入りした。ピブンはプリディが摂政になっても、いつもいじめた (ข่มเหง รังแก)。ソムアンはピブンのプリディいじめに関して、プリディに恐れることはない (ไม่ได้อะไรกลัว)，自分が日本軍を使って助けてやると言っていた。プリディは日本軍との間に直接の関係はなかった。プリディは日本軍がピブんに不満を持っていることは知っていたが、その情報を、ソムアンから得たものかどうかは知らない。戦後プリディが国外亡命した後、ソムアンとは連絡が無くなった。それまでソムアンはいつも私を叔母さん (คุณยาย) と呼んでいたのに、この前偶然会った時、自分を思い出せなかった。ソムアンは、現在は惚けたようだ。

日本人は天皇を崇敬しているのでタイ国王の摂政の地位にあるプリディに対しても敬意を表した。東條首相が1943年7月に来タイした時は、プリディ摂政官邸を記帳のために訪問した。プリディは日本側から危険な目に遭ったことはない。アドゥンとピブンは士官学校の同期同兵科生で極めて親しい仲なので、プリディは当初アドゥンを信頼していなかった。アドゥンは警察局長として、落下傘降下して捕らえられた在外自由タイ学生を監禁していた。これらの学生と連絡するために、アドゥンを自由タイに誘う必要が生じた。これが、プリディがアドゥンを自由タイに誘った理由である。戦争末期には自由タイのゲリラ戦の条件が十分にあった。タイ人は皆日本軍との戦いを望んでいた。プリディは、日本軍のインドシナの武装解除 (仏印処理) に衝撃をうけ、対日ゲリラ戦の開始を連合国に希望した。しかし、英は時期尚早と止めた。自由タイは正規軍同士の戦闘ではなく、ゲリラ戦をする予定であった。自由タイは陸海軍のなかにも多数の支持者、味方を得たが、自由タイの武器は軍部には渡さなかった。自由タイ独自のゲリラ戦をやるつもりであったからである。

プリディは中国人の4代目である。西洋人がプリディは中国人二世だと書いたことに反発して自分の先祖の歴史を書いた。プリディの弟はシンガポールの中国人姉妹と結婚したので、陳漢初という中国名を使用しているが、プリディには中国名はない。国王死亡事件で、プリディを陥れたのは民主党である。ピブンは駐タイ米国大使に、プリディは国王死亡事件に無関係であると語っている。この事については米国大使の記録がある。

平和委員会事件でプーンスクは84日間獄につながれた。1957年にピブンは中国と国交を結ぼうとした時、ピブンは中国亡命中のプリディに連絡してきた。ピブンは亡命先の日本で死亡する半年前の新年 (1964年の新年) に、プリディに年賀状を送ってきた。そこにはローマ字で、Please AHOSIKAMと書かれていた。ピブンのプリディに対する謝罪といわれるのは、この年賀状のことである。この年 (1964年6月11日) にピブンは死亡したので、プリディは中国からピブンの家族に哀悼の電報を打った。

プリディは既印刷のもの以外には記録を残していない。国王死亡事件について書けば金を出すという西洋人の申し出もなかった。プリディを記念したタマサート大学の記念碑開きやアユタヤのプリディ記念館には、知り合いのM.C. クラス (国王の孫の世代) の王族は来たことはあるが、これ以上のランクの王族が来たことはない。但し、プリディが死亡した時

に、国王から三衣の下賜を受けた。これが最も高い所からのものである。

なお、1936年当時守屋精爾暹羅公使館付武官とプリディ内務大臣が親密であったことは、1936年1月27日に日本からタイに帰国した直後のプリディの行動について、守屋がプリディ自身から聞いたと思われる内部情報を次のように披露していることから推測できる。

今年〔1936年〕一月二十七日内務大臣ルオンプラジツト〔プリディ〕氏が日本から帰つて参られました。氏が帰られると必ず政変が起るだろう——と申しますのは、総理ピヤパホン〔プレーヤー・パホン〕氏は病気で現職に堪え得ない。固き辞意を有つて居る、どうしてもプラジツト氏が帰つて来ると愈々総辞職を執行するであろうと云ふことが確定的に伝はつて居つたのであります。でありますから、プラジツト氏が日本から帰ることが政界一般から注意を有つて眺められて居つたのであります。さうして若し政変があれば、誰が次の政局を担当するのかと云ふことが問題でありました。当時軍部内に於きましては、軍部の独裁を以て一つ乗切つて行かう、斯う云ふ強い要求もあつたやうでございまして、如何なる情勢を招来するかと云ふことに、危懼の念が一般に有たれて居つたのであります。然しプラジツト氏帰国後国防大臣〔ピブン〕と早速会見し又総理と話をされて、兎に角、現在斯様な非常に渾沌たる情勢に於て、どうしても総理が現状で頑張つて、この場合を切抜けることが必要であると云ふことになり、総理亦その説に従はれて、兎に角、まだやると云ふ決心が着き、二十九日の夜から三十日に掛けてさう云ふ話が纏つて、ここに政変がなくなり、内閣内の改造に依つて事が終つたのであります。従つて、その当時一般に非常に懸念されて居りました政変も起きず、軍部の独裁と云ふことも実施を見ないで大体に於て、一部の人間を入替へてピヤパホン内閣は続くことになつたのであります（守屋精爾「新興暹羅と対日感情」、『暹羅協会会報』第6号、1937年2月、62頁）。

³⁰ これ以降、堀井は宮川通訳とすべきところを、すべて宮田と誤記している。憲兵隊の通訳には、資料からも江畑と宮川の二名しかいないことが確認できるし、かつタイに長らく定住した人物に、宮田姓のものは存在しないので、以後本手記中の宮田通訳は宮川通訳と修正する。

³¹ 『南洋時代』第8号（「今日の暹羅特輯号」、1930年10月10日発行）の168頁は、王鏡秋（1900-1945年8月11日）の経歴を次のように紹介している。

台湾出身、日本籍。大正5年慶応大学卒後、王子脳病院で脳神経科脊椎矯正術を研究、大正6年東京小峯病院研究所で精神病科の講習を受ける。更に上海医科大学に学び大正13年卒。卒業後上海医科大学付属病院脳神経科に勤務。大正14年バンコクに博愛病院を開業。「開業以来X光線太陽灯、人工紫光色、レントゲン透射療法については当市の権威者として内外から認められている」、と。

上記経歴には年齢が書かれていない。王鏡秋自身が記者に語ったものをそのまま記事にしたものであろうが、大部分は経歴詐称であると思われる。王は正規の医学教育を受けたことはなく、医師の資格も有していなかったと考えられるからである。

2003年年7月5日に村嶋はバンコクで、王鏡秋の3男 Virachai Vannukul（วีระชัย วอนนุกุล、1934年生、中国名は王建革、当時 Shinawatra 大学で経営学教授。終戦まで日本人として育ち、終戦時はバンコクの日本人学校（国民学校）の5年生）にインタビューを実施した。

ウィラチャイによると、王鏡秋は〔1945年8月11日に〕抗日華僑組織に暗殺された時は、満46歳であった。王鏡秋は、台湾の台南出身で、先祖は鄭成功とともに台湾に渡って来た福建人である。16歳の時に船でバンコクへ出稼ぎに来て、現在シャングリラホテルが建っている場所で下船してアイスクリームを買い、持金が無くなってしまったという。道端で薬を売る仕事に就き、医薬品の知識を蓄えた。西洋医が治療できない病に罹って治療できる者を探していた或る王族の治療に、王鏡秋は運良く成功した。この王族の援助で上海の医学校さらに日本の大学（帝大の一つと聞いている）に学んだ。タイに戻って、プラプラーチャイ五叉路に博愛病院を開設した。1934年にはファランブーンに移転した。王鏡秋の最初の妻は日本人、この妻との間に男子あり。この子は祖母が日本で育て、将校になったがフィリピンで敵前上陸した際、戦死したという〔王鏡秋の年齢から見て早すぎないか？〕。二番目の妻との間に王建国という男子が生まれるが、既に死亡。三番目の妻はラムブーン出身の女性で、ウィラチャイを生んだ直後に死亡した。王鏡秋は母親のいないウィラチャイを不憫に思い、いつも一緒に連れて歩いた。王鏡秋はサムローに乗っている時暗殺されたが、この時も自分も一緒に乗るはずだったが、偶然乗らなかったのを死を免れた。王鏡秋の4人目の妻との間には、バンチョン・ゴースラワット（รศ.บรรจง โกศัลวัฒน์ 元タマサート大学准教授、映画監督、1943年生）や映画スターになって若死にした娘が生まれた。王鏡秋は、戦争中は、日本陸軍の奏任官待遇。王鏡秋の日本名は玉川秋（たまかわ・あき）。福建語のほか、広東、潮州語ができた。タイ語はうまくなかった。戦争中に華僑互助会を設立、そのメンバーのピアム・ブンヤチョート議員〔เปี่ยม บุญชาติ, 外務省に勤務したのち1938年11月12日にナコンシータマラート県から人民代表議會議員に初当選〕がしばしば互助会事務所のあった王鏡秋自宅に来ていたことを、ウィラチャイは、いつも父親の近くにいたのでよく覚えている。ウィラチャイはバーンラック警察署で、父親暗殺に関する調書を見せてもらったことがある。そこには国民党組織が殺したことが書かれていたが、殺した者が誰かは判らなかった。自分は父の墓に復讐を誓っていた。父の墓はノンタブリーの Wat Kren 寺にあり、日本風の形で作った。

ウィラチャイの上述の話では、王鏡秋は死亡時46歳であったので1900年前後に生まれたことになる。それ故、前記『南洋時代』第8号に言う、大正5年（1916年）慶応大学卒業は年齢的に不可能である。

外国史料館の旅券下付表（リール旅96、台南州下付）に、「旅券番号488364 王阿秋、戸主王阿来の弟、本籍地 台南州台南市大宮町1丁目44番地、明治33年3月25日生、渡航地 暹羅、渡航目的 医院に従業の為め、旅券下付日 1923年10月5日」とある王阿秋が、王鏡秋の本名だと思われる。

王鏡秋が、1924年半ばバンコクで、医療行為をしていたことは、1924年5月25日午前、助手（客家、オランダ籍）をつれて前日に頼まれていた家に往診に行ったところ、その家の近くで銃撃され負傷した事件が記録されていることから判明する。これは彼がある華僑の人妻に手を出し、その親族が雇った殺し屋から銃撃されたものであった（NAT n^o33/10）。

その後、王鏡秋は、バンコクに博愛病院を開き、華字紙等に連続広告を出している。タイ華僑社会に通じた、日本籍の王鏡秋は、日本側にとっては、対華僑工作上極めて役に立つ人材であった。

王鏡秋は1942年2月頃、タイ字新聞タイヌム (ไทยหนังสือ, 所有者 ชิด ชาวิท) を、新聞統制を担当していたタイ宣伝局が改名を許可すればという条件付で購入する約束をし、宣伝局にタイワラ (ไทยวาร) に改名したいという申請をした。しかし、手続途中で母死亡のため一時帰国。その間に、パイロット宣伝局長は、1942年3月8日付けで、国軍総参謀長に日本人が所有者となる前に、今のうちにタイヌム紙を廃刊にして、日本の手に渡らないようにしてはどうかと意見具申した (NAT น.สูงฤๅ 1/110)。これを受けて、ピブン国軍最高司令官は、42年3月12日付けの野戦軍命令 43/85 で、既に宣伝局から発行許可を得ている新聞が、所有者もしくは編集者を変更する場合は、国軍最高司令官の許可を得ることを要すると命じた (NAT น.สูงฤๅ 1/194)。

³² 浜田平少将 (当時) は、1943年3月11日に俘虜情報局長官に就任、1944年11月22日にタイ国駐屯軍参謀長に任じられたので日本から初来タイ、同駐屯軍の名称変更に従い、1944年12月20日第39軍参謀長、1945年7月14日 (ママ) 第18方面軍参謀副長に任じられた (福川秀樹『日本陸軍将官辞典』、芙蓉書房、2001年、587頁)。それ故、浜田が1943年1月のタイ国駐屯軍成立時に、同軍参謀副長に就任した事実はない。成立時のタイ国駐屯軍は、軍司令官中村明人中将、参謀長は守屋精爾少将 (守屋は在タイ大使館附武官であった。但し病気のため帰国、代わりに山田国太郎少将 (陸士27期、陸大40期、1894-1984、満州の機甲第1師団第1旅団長から1943年2月12日に着任、1943年10月29日中将に親補) が任じられ、その下に参謀岸並喜代二中佐、参謀富永亀太郎少佐の二参謀がいるだけで、参謀副長のポストは存在しなかった。厚生省援護局『タイ・仏印方面部隊略歴』(1961年) は、第18方面軍司令部の出発点となったタイ国駐屯軍の成立を次のように記している。即ち「昭和18年2月1日、泰国駐屯軍司令部を盤谷に於て編成せらる 陸軍中将中村明人初代軍司令官に任ぜらる 当時、泰国駐屯軍は作戦軍に非ず隷下部隊なし、印度支那駐屯軍より、派遣せられたる歩兵一大隊を指揮して盤谷を警備す、司令部は参謀長以下将校10数名の小編成にして、主として泰国との軍事交渉及び通過軍隊の取締に任じあり、新たに軍参謀長となりし、前大使館附武官守屋少将は依病1月26日盤谷出発、東京に帰還す。後任山田国太郎参謀長は、2月11日着任す」と記し、また浜田の来タイについて「昭和19年11月下旬、山田参謀長は師団長 [第48師団長、チモール島] に転じ、浜田平少将後任に補せらる (12月上旬着任)」と記している。本堀井手記は、浜田平が参謀副長としてタイ国駐屯軍に1943年2月以来在任していたとして、実際に1944年12月に浜田が初来タイする以前の期間に関しても、浜田参謀副長のタイ国駐屯軍における活動を記しているが、これらの部分は完全に堀井の記憶違いであり事実と反した誤りである。

³³ 岸並喜代二 (陸士31期、東京外語で英語を1931年に修了)。岸並中佐はタイ国駐屯軍参謀として1943年1月に中村明人タイ国駐屯軍司令官と共に来タイし、終戦までタイで在勤。1945年6月に大佐に昇進した (「小西日記」)。戦後も英語力によって職を得たことは、岸並の次の回想からも明らかである。

終戦後の動静 岸並喜代二

僕は昭和22年12月2日に南方総軍の最後の帰還船で帰つて来た。当時長男は東京に残っていたが、其の他の三人の子供は妻が引き連れて僕の郷里岩国市に避難していたので、僕は12月4日に引き上げ列車で岩国に帰つた。偶々東京ではフィリッピン戦犯弁

護団が組織せられつつある状況であつたので、僕は23年1月末に上京して復員局に行き、フィリッピン戦犯弁護団の庶務掛を勤めることになった。そこで家族を東京に呼んで始めて一家団欒を楽しむことになった。

昭和26年6月フィリッピン戦犯及び濠州戦犯の仕事が終つたので、戦犯弁護団は解散せられた。

僕は米国空軍の翻訳課の翻訳掛の試験を受けて合格して翻訳掛として同軍に勤務することになった。昭和33年の夏、高血圧のため倒れて翻訳が出来なくなつたので、同年末米国空軍の勤務をやめてしまった。爾後今日まで何もしないでつまらない日々を送っている。然しこの間に子供は夫々その進むべき道を立てているので、今は何も思ひ残すこともない有様である（『31会誌』第21号（任官45周年記念号）、1964年11月15日発行）。

³⁴ 注32のように、浜田平の初来タイは1944年12月上旬なので、堀井が報告した相手は山田参謀長であつたと思われる。

³⁵ 同上。

³⁶ 1943年1月8日にアドゥン警察局長はデリー放送の聴取を禁止する命令を出している（NAT (2) 頁7.1/6）。

³⁷ 1943年2月19日にタウィー無任所大臣（工業大臣ではない）とクアン商務大臣が辞任し、3月3日付でモームルアン・デート・サニットウォンが商務大臣に任じられた。

³⁸ プラ・サラサスは、在仏公使館書記官として勤務していた際、フランスに留学に来たプリディと知り合い、革命について意見を交わしたというが、立憲革命のためのクーデターを敢行した人民党の一員ではない。プリディは人民党文人派のトップであつたが、一方、ピブンは人民党軍人中の若手将校のリーダー格ではあつたが、武人派の総帥ではない。人民党武人派の総帥は、プレイヤー・パホンや、プレイヤー・ソンスラデートである。但し、立憲革命後、1934年にはピブンは陸軍における最有力者となつた。人民党に対する王党派などの抵抗が強かつた1939年まではピブンとプリディの間は協力関係にあつた。詳しくは、村嶋英治『ピブーン』（岩波書店、1996年）参照。

³⁹ 坪上大使は、「タイ国情勢」と題した、1942年7月31日バンコク発東郷外務大臣宛第1631号電（館長符号扱）の最後で、ピブンは「以上何れも独裁への道を驀進しつつあることを物語るものと言ふべく此の外目下進行中の遷都問題の如きも表面の理由は兎に角として（往電一二九〇号）歴代王朝更迭に遷都が付物たる事実を鑑み何とか特別の意図が藏され居るやにも察せらるる説無きにあらず前述の諸事実に關聯し最近倫敦放送及国内謠言等にピブン首相の帝政野心の噂が沸々〔沸々〕現れ居る次第なるが当国の歴史竝に国情に鑑み興味ある問題にして成行注意中なり」（外務省記録A.7.0.0/9-63「館長符号来電綴、第6巻」）とピブンに帝政の野心があるという噂を報告した。坪上大使は、更に「タイ国政情に関する件」と題した1942年9月12日バンコク発外相宛第1967号の2電（館長符号扱）の最後の部分になると、「要するにピブン首相の真意は英国式立憲政体を独逸式全体主義独裁行く行くは帝政に持ち行かんとするに在り 之が順序としては先づ改選問題解決次で内閣改造なるべく、而して内閣を完全に把握したる後他の問題に手を着くるにあらずやと察せらるる処元々革命政権は英国式デモクラシーの摸倣を看板とし右思想が民衆の間に相当浸透し居る為急激転換

は相当困難あり 政府は漸進主義に依り準備工作として宣伝局をして新聞ラジオ等を通じ、一の国家：タイ国、一人の指導者：ピブンソクラム、一の目的：勝利のスローガンを繰り返す等輿論転換に努めしめ居り又ナチズムの研究者たるプラユーン [パモンモントリー] を文相として教育全般を司らしめ思想指導、男女学生軍事訓練に力を注がしめつつあり(外務省記録 A.7.0.0/9-3 「大東亜戦争関係一件 タイ国問題」)と述べ、ピブンには帝政の意図があり、それに向けて現在準備中であるという分析を示した。

一方、田村浩少将(陸士28期、陸大39期、1894年広島生、1942年4月まで在タイ大使館付陸軍武官。守屋精爾の前任者)は、1942年11月14日に当時陸軍省軍務課長であった真田穰一郎大佐に次のように、ピブンには当面帝政の意図がないと語っている。

皇帝はスイス16歳 取巻は英人 皇帝の母は華僑系にて米にて教育を受けし人
田村武官 [が]、「皇帝を日本に移さん」とピブンにはかりしに ピブンは「それは未だ後の問題だ」と答えたり
ワニットは如何なる名目で歸し日本に送るかが問題又安全にシベリア経由で歸り得るか否かも問題と云ひしことあり
スイスに武官室を置くこと肝要
新邸 [ピブンの官邸、パーン・サーマッキーチャイ]に移りたることは既定のこと 従来の家は手狭まに失す(侍従長邸の空家)
ピブンの誕生日に官庁休務 [1942年7月14日を官庁休日にしたこと]も従来とも然りき 泰にては誕生日を極く祝ふ習慣
要之 ピブンが今皇帝になる程目先の利かぬ男に非ず 又今そんなことをやったら必ず失敗である(防衛研究所図書館 中央/作戦指導 日記/95「真田穰一郎少将日記(真田日記No.10)」)。

ジャーナリストのチンダー・パントウムチンダー (จินดา พันธุมจินดา, 1907年生、アサンブション校でフランス語教育を受け、1932年ルソーの『告白』を翻訳してプラチャーチャート紙に連載、1937-1946年には、政府宣伝局勤務、戦争末期にセーリーションの筆名でククリット・プラモートと論争。終戦後サハチープ党の創立メンバーの一人、上院議員に当選)は、1982年4月20日及び4月30日に、トンブリーの自宅で、村嶋のインタビューに、ピブンには王位篡奪の野心があったとして、主旨次のように語った。「ピブンは、ナポレオン、ヒットラー、ムッソリーニが好き。ピブンはソムデットチャオプラヤーの最高位に就き、ナポレオン式に王位に就く野心があった。ピブンの妻は、王室の宝石を身に着けていた。ピブンのスワン・クラブ官邸の応接室には、ムッソリーニの肖像が飾ってあった。ナポレオンは天才だが、ピブンにはその才はなく、それでいてナポレオンを真似たのが失敗の素となった。」と。なお、ピブンは権勢のピークであった1942年には、国民に指導者(ผู้นำ)である自分への服従を求め、また自分の誕生日である7月14日を、国の休日とするなどしており、これらの行為が王位篡奪の噂を生じさせたものと思われる。

⁴⁰ 初代駐タイ大使として、1941年9月4日着任、同9月9日信任状捧呈。

⁴¹ この時贈呈された仏舍利は、英領インドで発見され英政府がチュラロンコン王に寄贈した仏舍利(その一部は、稲垣満次郎公使の仲介で1900年に日本の仏教徒に寄贈され、名古屋の日泰寺に祭られている)ではなく、15世紀後半にトライローカナート王がセイロンか

ら招来し、1933年2月15日にアユタヤのワット・シーサンペット寺院遺跡地下より発掘されたものである。

1943年7月1日の仏舎利寄贈の経緯は次の通りである。

1942年初より、当時親日派であったウィチット副外相（1941年10月31日に副外相に任命され、1942年6月19日に外相に昇格）には日本に仏舎利を寄贈する計画を有していた。例えば、三菱商事バンコク支店長の新田義實は、日記の1942年1月20日の項に「1942年1月20日昼食、外務省、矢田部〔保吉元駐暹羅公使、新田邸に宿泊中〕、坪上〔駐タイ大使〕氏等、Luang Vichitr〔ウィチット副外相〕とmuseumに行き、日本に贈るセロニーズ〔Ceylonese〕パゴダのRelic〔仏舎利〕を見る」（「新田義實日記」）と記している。

1942年7月10日-22日の間に訪泰答礼使節団として在タイした広田弘毅元首相は、7月29日に帰京後次のように語った。

泰外相近く訪日、廣田特使の車中談、泰国民の仏教崇拜はなかなか大したものだ。その後ピブン首相の新国民運動で国民の盲信には一つの限度が与へられたが、今なほ泰國文化の基調は仏教に対する帰依の心だ。最近アユチャ王朝の宮殿跡から釈迦の遺骨が発掘され、今はバンコクの博物館に保存されてゐる。これを兄なる日本国民に贈らうとする泰国民の気持を代表してヴィチット外相が近く遺骨を抱いて日本を訪れることになつてゐる。今を去る三、四百年前山田長政の仕へた由緒のアユチャ王朝の人々に最高の心の糧とされたこの遺骨の由来についてはすでに外務省に報告されてゐる筈だ。わしも見たが、金属と水晶の立派な箱に納められゐる。…大東亜戦に協力する泰の心情は武器をとつて皇軍の勇士とともに戦つてゐるといふ一事で十分だ（朝日新聞1942年7月30日夕刊）。

廣田訪タイ時にウィチット外相が明言した日本への仏舎利贈呈は、一年も遅れた。ピブン首相は、ウィチット外相を訪日させず、日本から奉迎使節（木邊孝慈真宗木辺派管長が代表）が訪タイして1943年7月1日にピブン首相より受領した。

遅まきながら仏舎利贈呈を推進したのは、ウィチット外相である。同外相は、日本が新アジア政策を採用したので、タイも領土回復が実現できると見て、約束の仏舎利贈呈を急いだ可能性がある。

タイ政府宣伝局の月刊誌『宣伝局報』（タイ語）は、仏舎利贈呈の主旨は、日タイ友好と仏教弘布のためであり、タイの功德にもなるとして次のように述べている。

41年12月にワット・プラケオで日泰同盟条約を締結して以後、日本の仏教徒の名前において次のように求められた。即ち、仏教の最も重要な土地であるタイ国にはいくつかの仏舎利があるが、日本にはない、日本人の大部分も仏教徒なので、仏教の興隆と両国の友好のために分けて貰えないだろうか、と。タイ国はセイロン、印度から何度も仏舎利を招来している。チュラロンコン王時代に印度から招来したものは、バンコクのプーカーオトーン上に安置しており、最近タムロン使節が印度訪問で招来したものは、ワット・プラシーマハータートの仏塔の頂に安置している。この他に、アユタヤのトライローカナート王時代にセイロンから招来した仏舎利が発掘され国立博物館に保存されている。博物館に保存中の同仏舎利を日本人の信仰のために贈呈すべきであろう。また古代より、仏舎利を分配することは大きな功德となり、かつ仏教弘布の最重要な方法であ

る。アショカ王は仏典結集後、セイロンやスワナプームの土地に仏舍利を配布した。これによって、これらの土地に仏教が根付き、今日まで栄えることになった。アショカ王の例に倣い、日本人の信仰のために仏舍利を贈呈することは、両国の友好を強化するだけでなく、何千万人も日本仏教徒に信仰の対象を与えることができる。このため政府とサンガ（僧伽）は、7月1日17時30分に、ワット・プラケオにおいて、日本大使に仏舍利を贈呈する式典を挙行了。日本大使はサンガより仏舍利を受け取った（『宣伝局報』1943年7月号、587-588頁）。

1943年7月1日の仏舍利贈呈式で、ピブン首相は次のようなスピーチを行った。即ち、「本日は、タイ民族の名によって日本の仏教徒の信仰の対象として仏舍利を贈呈する、タイ日関係の歴史において重要な日である。」アユタヤ時代に作成された年代記から、アユタヤの何れかの仏塔に仏舍利が奉安されていることは判っていた。年代記によれば、西暦1448-1488年の間に統治したトライローカナート王がセイロンに仏舍利を求め、それに応じて1465年にプラマハー・サワミーという高僧が仏舍利とともにアユタヤに渡来して来た。同王死後、仏舍利は仏塔に安置された。この記録に依り、タイ政府は大きな仏塔を発掘して仏舍利の発見に努めたが、1933年2月15日になって漸くワット・シーサンペットの東側の大ストゥーパから仏舍利を発掘することができた。大ストゥーパ内にプランがあり、その下に1メートルの高さの正方形の箱があった。「大使も御承知のように、今贈呈しつつある聖なる物は、歴史上最高の価値があり、かつタイ人の命である仏教において、最も崇拜されているものである。金銭で売買できるようなものではなく、また何か他のものと交換できるようなものでもない。その精神的な価値は計り知れないものがあるからである。しかし、日本人はタイの真の友であると考え、かつ日本から同情を得られることを信じて、相互の友好と親愛の紐帯としてタイ人は日本の仏教徒にこれを贈呈するのである。もう一つの理由は、アショカ王が仏舍利を分けることによって、仏教を広めようとした故事にならったものである。私は、この計り知れない価値を有する贈り物に日本人が満足されること、また、日本の仏教徒がこの仏舍利を拝してタイ人の友好的心遣いに思いを新たにされることを確信する」（『宣伝局報』1943年7月号、604-607頁）。

1943年の仏舍利寄贈に関するタイ外務省経緯文書（村嶋が1992年1月にタイの古本屋で購入した、元外務省員スパン・サウェートマーン氏旧蔵文書）からは、ピブンの上記スピーチの起草者はウィチット外相であることが判明する。このスピーチには、タイにとって計り知れない価値を有する仏舍利を贈呈するのであるから、日本から代償（領土編入や対タイ要求の譲歩・軽減）を期待するという意図が見え透いている。

読売報知1943年7月16日朝刊は、「仏舍利を恭迎して、日泰つなぐ道義と友情（上）、宮本正尊（東大教授）」と題して次のように報じた。

6月20日泰国に向つて出発した木邊男爵並に随員三名よりなる大日本仏教親善使節は、去る29日盤谷放送局より大東亜に正法国家を建設し世界新秩序を樹立せんが為、両国仏教徒は堅く手を携へて悽愴苛烈なる戦の現段階を勝ち抜かんと放送して泰国朝野に多大の感銘を与へた。次いで7月1日王宮寺院ワット・プラ・ケオのエメラルド仏陀の御前に厳肅なる仏教国儀による仏舍利贈呈式が挙行され、懇篤なるピブン総理の挨拶とわ

が坪上大使の答辞が交された。この度の仏舍利はアユチャ王朝時代の名君パロム・トライロカナート王の懇請によつてセイロン国王が高僧マハー・スワーミンを遣はして贈呈したものであり、爾來300年王室を始め奉り国民が崇敬措かなかつたのであるが今より176年前ビルマ軍の攻略に遭ひ山田長政によつて日本にゆかり深きアユチャの都は廢墟と化してから歴代の政府は王宮年代記によつて多年その所在を探し求めておつたのである。然るに昭和7年(ママ)ワット・ブラ・シーサナペチャヤ旧趾の東傍にある大仏塔の内から發掘された高さ一米余の一宝盒こそ、仏舍利を奉安するものであつた。煉瓦と葺石の外郭にかこまれた石造のパゴダ、鉛の壺のうちに更に金属と黄金と白金と水晶との五重のパゴダを重ね、最も内部なる水晶のパゴダのうちに安置されてあつた。爾來盤谷美術院の奥深く奉安され「泰国民の生命としました魂として尊敬されているものであつて、この贈呈は最高の精神的価値を持つものである。これを日本国民に御贈りする所以は、日本こそ仏教国として泰の眞の友であり、また日本国民こそ確かにこれを受け容れて、これが両国民の親善を益々強化する鍵となると堅く信ずるからである。かく貴国に仏骨を奉納することは8万4000の仏塔に分骨したと伝へられるアソカ大王の御手蹟に倣はんが為である。この仏骨の恵みと大なる力とによつて攘災招福、よく世界の平和を齎らさんことを祈念する」とのピブン首相の言葉は、烈々たる泰国民の熱意と道心とを吐露したものである。

仏舍利は、7月17日東京に到着したが、読売報知1943年7月18日(夕刊)は、「都大路を練歩く、泰からの仏舍利、帝都へ到着増上寺で恭迎式」と題して次のように報じた。

日泰親善の契りも固く盟邦泰国から贈られた仏舍利は仏教信徒の恭仰に迎へられて17日晴れの帝都入りをした。大日本仏教会の泰国派遣仏教親善使節同会顧問木邊孝慈男、中村教信、森大器3氏に捧持された仏舍利は12時13分東京駅着列車で横浜から到着。出迎への大日本仏教会会長池上本門寺貫首酒井日慎師はじめ各宗派代表、学生代表、泰国留学生団らの恭迎のうちに森氏捧持の錦の箱の仏舍利は酒井会長の先導で東京駅婦人待合室に入り、出迎者一同の礼拝のうちに壮麗な舍利塔に奉安された。かくて駒沢大学生8名に捧持され紫紺の恭迎旗、同校生のラッパを先頭に各学派報国会の雲水姿の僧侶挺身隊員、仏教関係学徒隊約2000名が大行列をなして東京駅から二重橋に向ひ、宮城を奉拝したのち日比谷田村町、御成門を経て都民の鑽仰恭迎裡に芝増上寺に入った。同時大殿で引続き午後2時30分から青木大東亜相、岡部文相、大達都長官、ディレック[ディレーク] 泰国大使らをはじめ関係者2000余名が参列莊嚴な仏舍利恭迎式が行はれた。

その後、仏舍利は大日本仏教会に奉安されていた(高楠順次郎「大東亜における仏教文化の全貌」(1944年)、『高楠順次郎全集、第二巻』教育新潮社、1977年所収)が、戦中のタイの駐日大使として本仏舍利寄贈の経緯を熟知していたはずの、ディレーク・チャイヤナムは、戦後1946年7月の外相時代、この仏舍利を連合国の力を借りて取り戻し、日タイ関係史に汚点を残した。仏舍利は、サガー・ニンカムヘーン駐日大使館参事官を長とする46人のタイ大使館員やタイ人留学生(この46名が日本からタイへの最後の引揚者)とともに有馬山丸で1946年7月12日に日本を發ち、22日にバンコクに到着した。仏舍利は直ちに外務次官から芸術局長に手交された。ディレーク外相は、駐タイ英、米両公使に仏舍利の帰還を

報告した（NAT 第43.7/40）。

⁴² 仏舎利の贈呈は43年7月1日であり、人民代表議会開会は43年6月であるから、この記述は時間的に矛盾している。

⁴³ 『ワニット・パーナノン葬礼記念本』（1947年）に依れば彼の経歴は次の通り。

1903年12月1日に、モミ商人である両親の第6子（8人兄弟姉妹の6番目、3男）として、チョンブリー県パーントーン郡に生まれ、郷里のワット・パーントーン小学校卒。ワット・カーオ・バーンサーイ中学1年に在学中、1917年にバンコクのワット・パトムコンカー中学に転校して1921年に5年生卒後、海軍兵学校に進学した。親類・兄弟が商売をしているので商業に関心があり、兵学校の実習訓練船で海外の港に立ち寄った際には商業を観察勉強した。商業への意欲が高まった結果、兵学校での教育には興味を失った。丁度、兄のカチョーンがバンコクで開店したので、これを機会に1924年に4年生で兵学校を退学し、1925年から兄とS.V.Brothers商會を始めた。2年後には商品輸入にも着手し、ワニットは石油製品の商売に特別に深い関心を持ち、海外から石油生産・販売に関する資料を購入し、また海外の関係雑誌の会員となった。その後、自らガソリンを輸入し販売した。海軍の知り合いに誘われ、人民党に加わり、1932年立憲革命に参加した。

タイでは官民ともに外国人の石油販売会社から石油を購入しており、他に購入経路がなかったため販売会社は世界市場より高い価額で売っていた。それ故、タイでは自ら石油を扱おうという機運が生じ、とりわけ立憲革命直後に強くなった。ワニットは政府にこの趣旨の請願をして、政府の賛同を得、1933年4月1日に国防省司令部石油係長に任じられた。これが、ワニットの官歴の始まりである。

タイ官報等より、その後のワニットの経歴を見ると、
37年4月1日、国防省石油局長に（40年10月12日迄）、
39年9月14日には経済省商務局長代行兼務、翌40年10月12日に経済省商務局長就任（のちに組織変更により商務省貿易局長に、43年10月30日解任）、
41年9月8日に外務省付公使（43年10月30日解任）、
41年12月17日に無任所大臣（大蔵大臣代理）として初入閣、
42年3月7日にピブン新内閣の無任所大臣に再任され、3月10日付で蔵相代理、5月11日付で商相代理も兼任、
43年10月30日にワニットは大蔵副大臣（รัฐมนตรีช่วยว่าการการคลัง）に任じられ、ポストはこれのみとなり、蔵相代理、商相代理、貿易局長及び外務省付公使のポストからは全て解任された。
44年2月1日付で、大蔵副大臣を辞任。

ワニットと日本との関係については、別稿で詳述する予定だが、取り敢えず、日本側のワニット評価を示すものとして、1942年1月2日付けで東郷茂徳外務大臣がワニットに勲一等瑞宝章叙勳を上奏した際の理由は、

タイ国無任所大臣、大蔵大臣代理兼商務局長、勲一等瑞宝章、ワニット、パナノン
右〔上〕者燃料〔石油〕局長時代より自他共に許す親日派の有力なる一人にして常にピブン総理大臣と在タイ帝国外交機関との連絡に任じ殊に英タイ関係に関するタイ国政府筋の情報を我方に提供し我対タイ工作上尠からず寄与する所あり

又同人は商務局長として護謨、錫等我必需品を帝国に供給すべき件に関し大に尽力せる外我国の必要とするタイ産米の輸出に関しても多大の斡旋を為す所あり即ち従来タイ国産米の集荷及輸出は反日的色彩強烈なる華僑の独占的支配下にありたるを以て我国は之を同国より輸入すること困難なる情況に在りし処商務局長たる同人の尽力に依り盤谷にタイ、ライス、カムパニーの設立を見同時にタイ米の輸出許可制実施せらるるに至り我国はタイ国より其必要とする米の輸入を確保するを得るに至れり

尚又同人は客年初頭タイ仏印間平和条約締結に当りてはタイ国全権として大に活躍し特に同条約と同時に成立したる保障及政治諒解に関する日タイ議定書の妥結上努力せる所甚大なるものありたるのみならず更に這般帝国軍隊のタイ国領土通過に関する協定及日タイ同盟条約締結に関してはピブン総理大臣の帷幄に参じ之が成立上多大の貢献をなしたるが右成立に際しタイ国政府は同人の功績を認め商務局長より一躍無任所大臣に任じ大蔵大臣代理を命じたり之れ全く異数の拔擢にして同人の日タイ提携に関する過去の功績並に前記同盟条約成立に関する功績の如何に大なりしかを如実に示すものにして我国より之を觀るも同人が多年誠心誠意尽力せる功勞は洵に特筆すべきものあるを思はしむ（国立公文書館 2A/18/ 勲 956 「叙勲昭和 17 年， 外国人」）。

⁴⁴ 1942 年 2 月 23 日第 87 回大本營政府連絡會議は、「南方諸地域に対する通貨金融制度の基本方針竝に泰国及仏印に対する当面の措置に関する件」を次の通り決定した。

第二、目下通貨金融制度の根本的改革に直面せる泰国に対しては左〔下〕記の方針に依ることとし速に之が實現に努むるものとす

- (一) 泰国貨の対外価値の基準を日本円に置かしめ対日本円換算率を 1 対 1 と為すこと（現在の換算率は 100 パート〔パーツ〕 対 155 円 70 銭）
- (二) 成るべく速なる時期に中央銀行を設立せしめ本邦側に於て之を指導し得る如く適當なる処置を採ること
- (三) 米英に依り凍結せられたる同国發券準備を補填し同国通貨の安定を図る為本邦側より金イヤマーク等の方法に依り必要額の借款を供与すること
- (四) 物価統制、為替管理等を強力に実施せしめ通貨価値の安定を図らしむること
- (五) 本年下半年以降の本邦と泰との間の決済は特別円を以て為すこと

備考

- (1) 右〔上〕(三) は同国現在の实情に照し已むを得ざる例外的措置にして今後他の共榮圏諸地域の通貨安定の為には金の供与は之を為さざるものとす
- (2) 泰国の通貨制度は将来円為替本位を採らしむる如く指導し之に必要な法制上の整備を為さしむるものとす
- (3) 特別円とは当該国と本邦との間の決済のみならず当該国と本邦以外の諸地域（共榮圏外の地域を含む）との間の決済にも使用し得べき円にして又必要に応じ金にも換へ得べきものを謂ふ
- (4) 右〔上〕(3) の「必要に応じ」とは当該国に於て金を必要とする已むを得ざる事由ありと認められ且当該国に対する本邦側の政策上必要とする場合の如きを意味す（參謀本部編『杉山メモ、下』、原書房、1989 年、30-34 頁）。

日本側は、1942年4月に来日したワニットを長とする経済使節と上述方針に基づいて交渉し、次のような一連の合意を成立させた。

1942年4月16日には、次のタイ大蔵省令第4号が公布され、円が通貨発行準備金に組込まれた。即ち、「非常時通貨法」(1941年12月12日に公布施行)第3条の権限に基づき、蔵相は、①通貨発行準備金に充てることができるものに、日本国の通貨である円を追加する。②大蔵省は銀行が日本から輸送してきた円を1対1の比率でパーツ貨と交換する(『仏暦2485年、タイ年次法令集(上)』, 242頁)。

1942年4月22日付けでタイ宣伝局は次のように発表した。

日本国とタイ国の貿易の便宜のため、日本政府は円とパーツの交換比率を100円=100パーツと改めることを提案した。

タイ政府は友好的精神により日本の提案を受け入れた。しかし、タイに対する突然の不利益による衝撃を緩和するため、両国政府はタイから日本に輸出する商品の価格を適切な割合に応じて引き上げることに努力することを合意した。例えばタイが輸出するコメは現在の価格に比して適切な値上げが実施されるものと期待できる。また、タイが日本から輸入する商品は交換比率改訂前の売買価格以上には上昇しないと期待できる。

故に4月22日よりバンコクの金購入価格は1パーツ当たり純金0.25974gとする(『仏暦2485年、タイ年次法令集(上)』, 241頁)。

この1942年4月22日協定によるパーツ切り下げの理由は、タイからの輸入超過になっていた日本の支払額を下げるためであった(菱沼勇(商工省貿易局長官)「我国貿易の推移と其の将来(下)」, 横浜貿易協会『交易』1942年11月号, 48-49頁)。

1942年5月5日に、「タイ国銀行法」が公布施行され、同法第5条は「大蔵省から紙幣発行業務を引継、本法もしくは本法に基づく政令に定める中央銀行業務を実施するため、『タイ国銀行』と称する中央銀行を設置する」と規定した(『仏暦2485年、タイ年次法令集(上)』, 346頁)。

1942年7月1日には日タイ間金融協定が成立した。深井英五枢密顧問官は、同協定について政府担当者から次のような説明があったことを記している。

昭和17年7月1日大蔵次官谷口恒二氏及び為替局長原口武夫氏来院〔枢密院〕, 日タイ間金融協定に就きて説明す。此の協定は既成条約の適用実施として合意を見たるものなり。説明中特に注目すべき点左〔下〕の如し。

(谷口, 原口の見解) 日本軍駐屯費等の為め日本側がタイ国側より交付を受くるタイ国通貨パートに対し、円パート等価にて円資金を交付し、之を特別円として日本銀行に保管す。特別円は1グラムに付4円80銭の割合を以て金に振替へ得るの規定あり。然れども其の実行に就きては、タイ側と日本銀行と協議を要する旨の諒解あり。我方にては成るべく金に振替ふることを認めざる方針なり。1グラム4円80銭は大東亜戦直前に於ける日本為替相場と1オンス35米弗とを基礎として算出せるものなり。現在我が政府の金買上値は3円85銭なるも、補助金を加算すれば6円以上となる。円パート等価は我方より希望し、先方は通貨関係大蔵省令に臨時通貨制度の一部たるが如き形を以て織り込みあり。一方的意思にては変更されず。大東亜戦争直前の日タイ為替相場は1パートに付1円55銭7厘なりしに、之を一挙等価に改めたるは頗る苛烈なるやの観なきにあらざるも、タイの米価等が仏印に於けるより

も高かりしに拘らず、我が対仏印為替相場が1ピアストルに付97銭見当なりしに鑑み、従来の日タイ為替相場は著しく不合理にして、之を訂正したるものとも見做すことを得べし。日本よりタイ国へ借款に関し、其の借入金に年3分5厘の利子を課することとなり居るも、借入金が日本銀行への預金として残り居る間は右利子を課せず。預金を引出して使用する場合にのみ利子を課す（深井英五『枢密院重要議事覚書』、岩波書店、1953年、226-227頁）。

⁴⁵ アドゥンは、タイ警察のトップ。当時タイ警察組織は内務省に属しており、彼の役職名は内務省警察局長であった。警視総監という肩書きは正確だとは言えないが、本手記では修正せず、そのままとした。

⁴⁶ 坪上公使が、ピブン首相のワニット異動計画に反対したのは、1943年3月2日の会見においてである。また、堀井は1943年5月初めにピブンの対日非友好的なラジオ放送があったと記しているが、ラジオ放送があったのは、1943年4月5日のことである。

1943年3月2日のピブンとの会談を坪上は次のように報告した。

1943年3月3日バンコク発青木大東亜大臣宛第395号電（極秘）

2日ピブンとの会談の際本使よりタイ国内政の安定は共栄圏建設共同作戦完遂の上より帝国政府として関心を持たざるべからざること竝に同様の理由よりして日本の対タイ政策に関聯あるべき案件は少く共其の公表前に日本側に通知方希望する旨申入れたる処ピブンは之を諒とし過般の辞表提出問題を繞りて各種の流言行はれたる模様なるが実は自分を首班とする内閣も大体明年前後に達すれば各種の事情より閣僚の更迭を有利とする情勢が招来せられたること過去に於て度々之ありたるが自分は其の都度総辞職の形式を採りて政権強化に努め来れるが今回の辞表提出は同様手続を採りたるもの三回目にして初めより辞職の意思は自分にありたる次第にあらざりて只今回は従前と異なり關係一部当局の手違より自分の提出せる辞表が勅裁を得たるや否や自分に全然連絡なくラヂオ放送せられたる為各種の噂を生じたる迄にして自分としては辞表受理ありたる旨の通告を受けざる限り辞職は決定したるものとは諒解出来ざるを以て早速放送を取消しめたる次第なり但し一、二閣僚は自分と見解を異にし辞職は決定したるものと為したるものもありたるを以て例へばコビット〔クアン〕商相の如きは其の見解に耳を藉し二、三月休養あり度き位の意味にて退職せしめたるものなり

尚右に関連して今回二、三閣僚等移動が内定し居れるがサニットウオング商務相代理を同大臣に昇格、無任所相ブンナジュンク（ママ）を商務副大臣に任命の外ワニット無任所相を大蔵大臣代理商務省国際貿易局長の關係より更に専ら外務大臣代理として通商事務上ウィット外相の輔佐たらしむることに内定せる旨内話ありたるを以て本使よりワニットは長く日本との通商經濟問題に関する各種案件に付直接交渉の衝に当り来り日タイ經濟提携の上に多大の功績ありたることは周知の事實なるべきに今遽に同人の地位に激変を生ずるが如きことあらんか日本側に於てはタイの対日經濟政策の上に變化あるべきやの誤解を生ずる虞あるべしと述べたるにピブンはワニットの功績は充分認め居るも同人の経歴其の他他人の追従を許さざる勉強振等に搗てて加えて最近の統制強化の結果タイ民間業者等の同人に対する悪声一層昂まり来れる模様なるを以て是等風当りを一時避けしむる為商務大蔵關係の地位より去らしめ外務關係の地位に専らならしめんとするものにして依然經濟通商のタイ側交渉はワニットが直接の衝に當る筈なり云々と説明

せり（了）。

翌3月4日発第406号電で坪上は、青木大東亜大臣に「ワニット留任の件」と題し、「往電第395号に関し 3日ワニットは現職に留まることに決定せり」と報告した。

また、1943年4月5日のラジオ放送に関して、坪上大使は4月7日発第624号電で青木大東亜大臣に次のように報告した。

5日正午ピブン首相は要旨左〔下〕の如き放送を行ひ同日夜更にコンメンテーターをして同文の放送を為さしめたり

我国は今や軍事政治経済に極めて重大時期に当面せり 余は総ゆる困難に打ち勝ち戦争遂行に当るべく国民の信任を得て首相となれるものにして長期に亘り首相の職務完遂を決意し居れり然れども国家安泰の為の戦に対する余の努力は敵の余に対する憎しみとなれるも余は之れを意とし居らず 加之タイ国内一部官吏及民間に於ても余の努力を快からず之を難詰するものある模様なるが余は茲に余の為せる総ての事柄に付其の原因と理由を説明すること不可能なり何となれば右説明は敵側に対し秘密を知らすことに外ならざるを以てなり 女子軍編成の如きも国家として極めて有要にして且戦勝に至る手段の一たるべき処一部には右を以て余自身の利益の為とか或は女性偏重とかの非難をなす向きあり 国民は決して相互離叛すべきに非ず 余は愛国者として総ゆる不運に堪へ抜くべし 戦時中は敵に乗ぜられざる為国民に対する各種事業の説明不可能なるも之が却て余に対する反感を招くことあり 然れども余は事実首相の地位に恋々たるものに非ず 各大臣は其の主管下の官吏を会同し全国民に敬愛せらるる首相を選び戦争完遂に義務を果たすことを望む（了）。

更に、坪上大使は青木大東亜大臣宛の翌4月8日発第627号電にて、ピブンのラジオ放送による新たな辞意問題に関して次のように追加情報を報告した。

往電第624号に関し

曩の辞表問題〔2月半ばの辞表撤回事件〕は不手際の譏を免れ難く当時一部に後継内閣考量せられたることも事実なるが如き処ピブンの強引措置に依り一応鎮静を見つつありたる次第なるが今般の放送を行ひたるは更に国論を統一し難局を突破する為に企図せるものと察せらるる処右放送後一般に与ふる影響を考量し新聞掲載を禁止せり

本件に関し7日ウィット〔外相〕の石井〔康参事官〕に語る処に依れば「ピブンは公文を以て各省大臣に対し其の管下官吏に信任を問ふこと及政府の政策に対する意見有らば開陳せしむることを要求せる」趣なり 而して右はピブンに対する輿論を打診すると共に特に国防省就中海軍部内の意向を探る為と推測せらる（了）（外務省記録A.6.0.0/1-27「諸外国内政関係雑纂 タイ国の部 第二巻」）。

実際、ピブン首相は4月5日に各省局長に対して次の命令を出すことを指示している。即ち、「本日昼間ラジオで読み上げた文書を添えて、各大臣は中央・地方で集会を開催して首相を選出しその結果を4月末までに報告せよという命令を発遣せよ」と。これに対して各省局長は、5月8日までに、首相としてピブンを支持するという回答を返したが、唯一人民代表議会事務局長のトーンプレーオ・チョーンプーム (ทองเปลว ชลภูมิ) のみは、このような首相選出方法は違憲であるとして、ピブン支持を明言しなかった (NAT (2) 0201.10/63)。彼は43年6月24日に開会された通常議会でも反ピブン派策動を働いたため

か、6月30日に議会事務局長の職を解任され、ピブンのイヤガラセを受けたが、ピブン退陣後1944年8月12日にクアン首相の首相秘書官長に就任した（『1944年タイ官報』、1614頁、1944年8月15日号）。

⁴⁷ 堀井が、何故K少佐とイニシャルで記したのかは不明であるが、タイ国駐屯軍司令部には参謀は岸並（陸士31期）と富永亀太郎（陸士38期）の二名しかおらず、岸並は堀井より7期も上の先輩で、階級も中佐であり、少佐ではない。堀井は本手記の「第53項 ピブン政府本会議において敗北」において、1944年7月、ペチャブン遷都緊急勅令法案化案が国会で否決された際、「大使館に軍よりは山田参謀長（大使館附武官兼任）、岸並渉外参謀、K参謀、堀井憲兵隊警務部長」が集まったと記しており、岸並参謀とK参謀を並列している。従って、Kは岸並ではないことは明白であり、当時タイ国駐屯軍には山田国太郎参謀長の下に参謀は、岸並参謀と富永亀太郎参謀の二名しか存在しなかったから、Kとは富永亀太郎であることは間違いない。Kは亀太郎のイニシャルと思われる。

更に、岸並に関しては、堀井は本手記で「山田武官の補佐官は軍の渉外参謀を兼任する英語の堪能な岸並中佐であった。岸並氏は昭和十五年頃私が上海憲兵隊の外事課員だった当時支那派遣総軍の上海における渉外部員として活躍されて名声を博した有能な渉外係で私とは旧懇の間柄であった」と実名を挙げて記しており、その後の会話を取ってKとする理由もない。それ故、Kは岸並以外の参謀を指すと考えられ、そうすれば、富永亀太郎以外にはないのである。堀井はKとの会話を、Kを「君」と呼び対等者の口調で書いており、この点でも堀井と富永は陸士同期生なので自然である。なお、富永亀太郎は自伝『猪突八十年』（1987年、全405頁）を自費出版しているが、その中には陸士同期生で共に在タイした堀井のことは全く言及していない。同上自伝によれば、富永亀太郎は、1904年生、陸士38期（1926年7月卒）、1940年4月陸大選科入学、1年後に卒業して陸軍省情報部兼大本営報道部員、1942年5月南方軍特情班（在ハノイ、中国軍の暗号電報の傍受解読及びベトナム・中国国境での情報収集を担当）勤務、42年10月頃（但し、富永は1990年2月19日に村嶋とのインタビューでは12月10日頃バンコクに着任と語った）タイに駐屯する日本軍を統轄する司令部設立準備の要員としてバンコクに異動し、タイランドホテルに泊して守屋精爾タイ国大使館付武官の下で任務に就き、43年2月タイ国司令部成立とともに同司令部参謀を命じられた。44年10月第94師団（マレー半島西岸）参謀へ転出した。

⁴⁸ 堀井は白雲荘とオリエンタル・ホテルを同一のものと書いているが、これは記憶違いである。1944年4月13日付けで、泰国駐在帝国大使館付武官山田国太郎が、タイ側の日泰同盟連絡事務局長に宛てた「軍指定営業者に関する件通牒」（泰陸武第180号）文書には、軍利用（但し1944年7月1日から軍専用に区分変更）のオリエンタル・ホテルは、営業別旅館、場所 オリエンタル路と記載されているが、一方、軍専用の白雲荘は、営業別 割烹料理、場所 スリウォン路と記載されており（NAT ๓๓.๑๓๓๓ 2.7/234）、両者は別個のものである。

⁴⁹ アドゥン（1894-1969）は、1933年8月23日に副警察局長に転ずるまで、陸軍砲兵第二大隊長（少佐）であった（『アドゥン・アドゥンデーチャジャラット警察大将葬礼記念本』、1970年）。アドゥンは1943年9月14日には、副首相にも任じられた。

⁵⁰ 7月2日の議長・副議長選挙で、議長にはピブン派のプレイヤー・ソラユットセーニーが

当選し、副議長には再びクアン・アパイウォンが当選した。しかし、ピブンはクアンの副議長任命への副書を拒否。7月15日の議会で選出された、ピブン派のプラ・プラチョンパッチャヌック少将が副議長に任じられた。

⁵¹ 林秀澄（1902年生、陸士35期）氏の略歴によれば、1938年3月1日に「補中支那派遣憲兵隊附（憲兵少佐）」同日に「上海憲兵隊附」となり、41年8月1日憲兵中佐、42年1月12日に「補東京憲兵隊附」となり帰国、44年1月12日に「補印度支那駐屯軍司令部附」となり、1月26日にサイゴン到着し、45年6月10日憲兵大佐、終戦時は第38軍（サイゴン）司令部高級参謀であった（木戸日記研究会・日本近代史料研究会『林秀澄氏談話速記録Ⅰ』、1974年）。以上から林秀澄が仏印にいたのは、1944年1月以降であるから、ベトナム独立運動家の壮烈、壮拳兄弟の来タイは、1943年8月ではなく、1944年以降の筈である。陳荊和訳註「陳仲金著『風塵のさなかに一見聞録』(1)」、『創大アジア研究』創刊号、1980年3月、168頁、において、陳仲金（チャン・チョン・キム、1883-1953）は、シンガポールからバンコクに1945年1月24日に到着し、直ちにバンコク郊外の住宅で壮烈、壮拳と同居したことを次のように書いている。「その先は[日本軍]中尉が一人附添ってくれ、一月二十四日の昼下りバンコックに到着した。トラックは私共をタイ駐在日本司令部まではこんでくれた。私たちは司令部で一休みし、別の日本人が車で私たちを首都郊外の住宅まで案内した。それはゆったりとした、しかも涼しそうな邸宅で、既に疆紙[Cường Đê]侯の令息たる壮烈氏と壮拳氏両氏がベトナムからここに来て、日本軍の士官一人に付添われて住んでいた。」チャン・チョン・キムは、日本軍の仏印処理後1945年3月29日にバンコクを発ち、フエに向かったが、壮烈、壮拳はバンコクに残された（同上、172頁）。

⁵² カマレート・チャンルアン（กมลเศ จันทร์เรือง）はプラ・プロムプリーチャー（พระพรหมปริชา）の息子で、1935年4月発行の旅券を持って日本に私費留学、1940年3月時点では桐生高等工業学校の助手に採用されており、竹から人絹を製造することに成功したという（NAT ๓43.24/54）。タイ海軍の軍事アーカイブ（http://www.navy.mi.th/navedu/submarine_web/401_Sub_navy.htm）によれば、カマレート中尉はタイの第6師団（南タイ）の連絡将校として乗船していたタイ海運会社の船が、敵（英または米）潜水艦の攻撃で沈没し、1945年5月29日に死亡した、という。

⁵³ 1943年8月20日にピブン首相と坪上貞二大使との間に、「馬來及びシャンに於ける泰国の領土に関する日本国泰中間条約」が調印され、これに基づき、日本側は43年9月7日に「馬來四州及びシャン二州の編入に関する日本南方軍代表及泰軍代表間細目協定案」を作成し、9月15日に調印を予定した。同細目協定案の第一条は「国境線を現地に於いて確定する為日泰双方委員より成る国境画定委員会を編成す」と定めている（アジア歴史資料センターレファレンスコードC14060613300）。馬來四州及びシャン二州は、1943年10月18日に日本側からタイ側に引き渡され、タイ領土に編入された（『1943年タイ官報（法令版）』、1527-1528頁、1943年10月18日号）。これから、1943年9月に馬來において国境画定委員の任に従事したという堀井の回想は正確であることが判る。なお、馬來四州の行政について、ピブン国軍最高司令官は1943年9月7日付けの南部四州統治に関する国軍最高司令部命令108/86号を発し、軍政長官の下に各州に州司政官を置いて軍政を行うこととした（『1943年タイ官報』、2866-2868頁、1943年9月14日号）。

⁵⁴ プリディが、バンコクから重慶に自由タイ連絡員としてジャムカット・パラークーンを送り出したのは、1943年2月末である。ジャムカットは4月には重慶に到着した。しかし、重慶側が十分に協力しなかったため、プリディはジャムカットの消息を把握できず、サグアン・トゥラーラック一行を重慶に派遣することにした。1988年6月26日と同様12月24日の二回に亘る村嶋のサグアンへのインタビュー（バンコクのサグアン宅）で、サグアンは重慶行きを次のように語った。タイ煙草会社社長のサグアンが、日本に煙草工場の視察に行くという名目で、7人連れ、即ち妻ブンマー、子供二人（チュラロンコン大学医学部に入学したばかりの長女ラムパイ、長男クライシー）、弟のカチャー・トゥラーラック、外務省職員でクアン・アパイウォンの妻レーカー夫人の実弟デー・クナディロック及びタマサート大学教員ウィブーンウォン・ウィモンプラパーは、ピブンの誕生日である1943年7月14日にバンコク国鉄駅を出発した。途中、アランヤプラテート、サイゴン、ハノイを経て、中国国内を車、船、徒歩等で移動し、重慶に到着した。重慶では、ジャムカットに会ったが、彼は癌のため病床にあり10月7日に死亡した。蒋介石の許可を得て、サグアンとデーの二人は米軍機でインド、エジプト、アフリカ、南米を経てワシントン至り、セーニー駐米公使や米側官吏と連絡し、帰路はカナダからロンドンに渡り、ロンドンで自由タイグループ、英外務省員、元駐タイ公使クロスビー等と面会後アフリカ、エジプト、インドを経てセイロンに到着した。セイロンには米のOSS機関が存在していた。重慶同行者のサグアン、デー、カチャー、ウィブーンウォンの4名及び同行はしなかったサグアン・トンプラサートの合計5名は、「1942年敵性人及び敵性人の財産に関する法律」により、1944年2月4日付け内務省告示（内相代行アドゥン警察大将署名）により、敵性人に指名された（『1944年タイ官報』837-838頁、1944年2月8日号）。

⁵⁵ 駐英公使は、プラ・マヌーウエートウィモンナートで、ピブン政府の帰国命令に従い1942年半ばに帰国した。イギリスにおける自由タイの指導者にラムパイバンニー王妃の兄、モームチャオ・スパサワットがおり、混同した可能性がある。

⁵⁶ ワニットら5名が横領、文書偽造、背任の容疑で逮捕されたのは、1944年1月7日である（タイマイ紙、1944年4月19日）。

⁵⁷ タワット・セーニーウォン中佐「第2次大戦期のバンコク・トンブリー空襲統計」、『砲兵雑誌』第4巻4号、1949年4月-6月、13-17頁によれば、1943年12月のバンコク空襲は、12月19日、20日、23日の3日である。昭和19年2月1日大本営陸軍部『最近に於ける泰事情』（防衛研究所図書室 南西/泰・仏印/3）中の「最近に於ける敵機来襲状況表」は、1943年12月「十九日夜雨期明け来最初の盤谷空襲あり人心動揺相当大」と記している。

⁵⁸ ピブンの遷都構想は、1944年に始まったものではない。下記電報に見るように、1942年から存在し、1943年11月にはペチャブーンへの遷都について具体的計画が立案された。即ち、

石井康代理大使は、東郷外務大臣宛1942年4月24日バンコク発第751号電（タイ国の遷都説に関するワンワイの談話内容）で次のように説明した。

貴電第504号〔1942年4月21日発タイ遷都に関する件〕に関し、

ワンワイ〔ワンワイタヤコーン親王〕の談話に依れば盤谷はタイ国の中央に所在せざるに付遷都説は従来も時折問題となりたることあるが今回は開戦後爆撃の結果首都と商業

都市を同一地域となすこと及大学其の他を休校せざるべからざる等のこともありて北方中央部適當の所に首都を移すことをピブン首相に於て發議し最近新内務大臣ブROOM [プロムヨーティー] をして二、三候補地の現地調査を行はしめたるに依り噂に上りたる次第なるも實際問題として自分の計算にては一億バーツを要し急速には実現の可能性なきものと思料せらるることなり

坪上大使は、青木大東亜大臣宛 1943 年 11 月 18 日バンコク発第 2050 号電（首都移転竝大臣権限に関するタイ字紙記事の件）で次のように報告した。

17 日付タイ字紙スパーサトリイは新首都移転計画及空襲の危険を避くる為の政府機関の分散に伴ふ大臣の権限強化に関し要点左の通の記事を掲載し居れり

- (1) 明年初頭盤谷ペチャブン間の道路完成の暁に政府はペチャブンをタイ国新首都として正式発表を為しタイの戦没将兵合祀の大寺を建立すべし
- (2) 政府は現在工場をペチャブンへ移転しつつあり又（二語不明）輸送用トラックを徴用し同地洞窟へ国有財産を移転すべし右完了せば敵の空襲より生ずべき被害より免れ得べし
- (3) 新首都設計図に依れば南北百キロメートル東西 3、40 キロメートルの盆地の中に建設せらるべく 其の内に政府各省及各部局が分散設置せらるべし
- (4) 政府機関の移転は盤谷に残置せらるるものの外は空襲に備へてペチャブン、ロブリ、ナコンラーチャシーマー及ピマーイ [ピマーイ] 等各地に分散せらるべし
- (5) 分散先の各省大臣は副首相の地位に於て首相代理として政務を統括することとなるべく確報に依ればアドン [アドゥン] 警察大將が盤谷副首相に プレム [プロムヨーティー] 内相がペチャブン、ピシット [ピチット] 国防相がナコンラーチャシーマーの副首相に夫々任命せらるると

外務大臣に転報あり度

更に、坪上大使は青木大東亜大臣宛 1943 年 12 月 25 日バンコク発第 2252 電（ペチャブン移転に関する情報）で

情報に依れば 24 日最高統帥部命令を以て各省局長はペチャブンに移転準備の為同地出張を命ぜられ又陸軍士官学校も同地移転を命ぜられ同日朝以来器具類の運搬を開始せる趣なるが右は今次空襲に刺戟せられたるものと見らる（外務省記録 A.6.0.0/1-27 「諸外国内政関係雑纂 タイ国の部 第二巻」）

と報告した。

⁵⁹ 1944 年 2 月 4 日付け内務省告示のこと、注 54 参照。

⁶⁰ 注 34 参照。

⁶¹ 岩崎禮三（1919 年 10 月 21 日生、陸士 52 期 1939 年 9 月 7 日卒業）、岩崎によれば満州で歩兵中隊長としてソ連軍のトーチカ攻撃の訓練に従事していたところ、命令で憲兵学校に入った。岩崎の一期上から憲兵は志願制ではなくなり命令によってなることに変更された（前出岩崎禮三氏インタビュー、1990 年 12 月 15 日）。

⁶² 林清憲兵隊長がドンムアン空港から飛行機で離任したのは、1944 年 6 月 29 日である。日本側は、司令官中村明人中将、参謀長山田国太郎中将、新任憲兵隊長徳田大佐らが見送り、タイ側もピニット警察大佐、モーラー (มอรา) 警察中佐、ジャムラット警察少佐、プラ

チュアアップ警察大尉， プン・ウォンウィセート少佐らが見送った。翌6月30日徳田新隊長はチャイ日泰同盟連絡事務局長を訪問した（NAT 111.83382.7/258）。林と徳田の交代は，1944年6月のタイ政局緊張時のことであった。

⁶³ イギリスのSOE（Special Operations Executive）が， Appreciation I と名付けた作戦で，1944年3月14日〔正確には3月15日午前1時20分～2時40分〕に在英タイ人留学生で英軍に志願したプアイ・ウンパコーン少佐， プラターン・プレームガモン大尉， プレーム・ブリー大尉がチャイナート県に降下， 4月4日に Appreciation II 作戦で， サムラーン・ワンナブルック大尉， タナー・ポーサーノン大尉， ラチット・ブリー大尉がナコンサワン県に降下した。彼等に与えられた任務は， マウントバッチェンのプリディ宛書簡の伝達， インドと通信可能な通信所の設営， ゲリラ活動の可能性についての調査であった。連合国側に次第に忠誠を移していたアドゥン警察局長兼副首相は， 逮捕した6名を連合国側の真の情報員として受け入れ， 1944年6月6日にはプアイが昆明に文書を出すことを認めた。この文書はカルカッタのSOEに転送された（Charles Cruickshank, *SOE in the Far East*, Oxford UP, 1983, pp.106-107）。

1944年4月19日付で泰国駐在帝国大使館付武官山田国太郎は， 日泰同盟連絡事務局長宛に泰陸武第193号「敵落下傘謀者降下時の連絡に関する件通牒」を送り次のように申し入れた。

過般敵機の泰国空襲に際し泰， 支人を以てする落下傘謀者を降下せしめ我が方に対する謀略を企図せしも此等謀者の大部は貴国官憲に依り逮捕せられ敵の企図を未然に防圧し得たるは同慶に堪へざる所なり然れ共右謀者の逮捕に方り貴国官憲の日本軍に対する連絡は左記の如く緊密を欠き協同作戦遂行上極めて遺憾とする所なり

本件に関しては既に義部隊富永参謀より貴国係官に対し口頭を以て申入れ置きたる所なるも本職は将来一層日泰両国の緊密なる連絡の必要を痛感し茲に文書を以て申入れたる次第なり

戦争の長期化に伴ひ敵の我が方に対する宣伝謀略は益々熾烈化を予想せらるる所にして日泰両国は上下緊密なる連絡の下之が警防の万全を期すべきなり将来本件の如き敵の謀略策動に関する情報は中央に於ては勿論地方官憲も亦機を失せず積極的に日本軍に連絡せられ以て日泰協同の下敵の凡ゆる謀略策動を完全に封殺して協同作戦の遂行に遺憾なきを期せられ度

左記

- 一， 三月十五日チャイナート県に降下せし落下傘謀者の状況を調査すべく三月三十一日ナコンサワン憲兵隊より憲兵下士官一名パクナンポー警察署員の同行を得てウタイタニー県に赴きたるに県知事及警察署長代理プレンス少尉は何れも具体的情報の通報を避け更に同憲兵はチャイナート県に赴き調査せんとせしに副県知事は本件調査に関する日泰同盟連絡事務局の紹介状を持参せられ度と述べ又副警察署長は容疑者一名逮捕せしも責任者不在に付盤谷に於て調査せられ度と述べ日本憲兵の調査に依らず
- 二， ナコンサワン憲兵隊に於て四月五日ナコンサワン県に降下せし落下傘謀者は四月六日ノンマコック駅より盤谷に押送すとの情報に依り憲兵下士官二名同駅に至りたるに謀者三名を貨車に乗車せしめありたるを以て憲兵は泰軍ソン大佐及警察官に就き調査せん

とせしも其の事実なしと否認せり（了）（NAT ๒๒.๑๑๑๑๒.๒.๗.๔/๓๓,なお、この文書には富永の印がある）。

⁶⁴ 注34参照。

⁶⁵ ワニットが死亡したのは、正しくは1944年5月21日である（『ワニット・パーナノン葬礼記念本』、1947年）。ワニットの死因は公式には「泰国銀行株式会社の金塊売買事件の被告であったワニットは、1944年5月21日18時10分、拘禁所の寝台に腰布を巻き付けて首を吊った」（NAT (2) ๑๑.0201.35/24）となっている。ワニットを殺害したのでは、と嫌疑をかけられているアドゥンの伝記は「ワニットを汚職の容疑で逮捕し調べたところ、起訴できるだけの証拠があった。その調書が作成されている時、ワニットは起訴されることを知って、起訴される前に首を吊って死んだ」（458著『正直な將軍』（タイ語、1970年、26-27頁）と書いている。しかし、自殺して起訴を逃げるなどというのは、通常のタイ人の選ぶ行動ではない。

⁶⁶ 注26参照

⁶⁷ 『1944年タイ人民代表議会議事録』（マイクロフィルム）によれば、1944年6月29日の通常国会第1回目に議長・副議長選挙が行われ、議長はプラヤー・マナワラーチャセーウィーが37票で当選、次点はクアン・アパイウォンの26票、3位は前議長のプラヤー・ソラユットセーニー海軍少将20票。続いて副議長（一名のみ）の選挙では、クアン・アパイウォンが55票、次点は前副議長のプラ・プラチョンパッチャヌック中将22票、シナートヨーターラック中将12票であった。

⁶⁸ ピブン首相辞表撤回事件に関し、反ピブンを鮮明にしたパン・ナーワーウィチットが艦隊司令官を罷免されたことを、坪上大使は青木大東亜大臣に宛てた1943年4月15日発第674号電で「当時辞表取戻しに関し海軍内に異論ありたることは事実なるものの如く客月三十日突如ルアンナバ [パン] 少将艦隊司令官より最高司令部付に、ルアンサゴアン [サンウォンユタキット] 大佐軍令部付より最高司令部海軍部総務局長に転任発令あり右兩名は其の後首相官邸に軟禁せられ居る外海軍将校30余名も同様何れかに軟禁せられ居ることを諜知せり」（外務省記録A.6.0.0/1-27「諸外国内政関係雑纂 タイ国の部 第二巻」）。

国防次官室付パン・ナーワーウィチット海軍少将は、病を理由に1943年7月18日付けでピブン首相に退役させられた（『1943年タイ官報』、2634頁、1943年8月24日号）。しかし、1944年8月24日付けで、クアン首相はパンを海軍艦隊司令長官（ผู้บังคับการกองเรือรบ）に任じた（『1944年タイ官報』、1676頁、1944年8月24日号）。また、パンはクアン内閣の工業大臣にも就任した。

⁶⁹ 『1944年タイ人民代表議会議事録』（マイクロフィルム）によれば、7月20日の人民代表議会第4回目、ペッチャブン都行政規則緊急勅令（1944年5月27日摂政団署名、1944年5月30日官報にて公布し即時施行）を法律として承認する政府案が上程され、賛成36票、反対48票で否決された。

富永亀太郎は自伝『猪突八十年』（1987年）215頁で、「賛否白熱の論議の末、採決に入り、賛成三十三票（ママ）、反対四十八票の差をもって、ピブンのペッチャブン遷都法は敗れた」と記している。

⁷⁰ 石川實（いしかわ・みのる）着任日1944年7月1日、バンコク総領事に44年8月31日

に任命 (NAT (2) So.Ro.0201.87/25)。

⁷¹ 施行中の1932年12月憲法では、人民代表議会は、民選議員（第一種議員）と官選議員（第二種議員）で構成され、その数は同数であった。第二種議員は、主に1932年立憲革命に参加した人民党員である。1942年当初の第二種議員に欠員が生じた場合の補充方法は、人民党を構成する文民・軍人の2グループの割当数に応じて、第二種議員全員の投票により候補者を決定していた。しかし、1944年6月7日時点で8ポストの空きが出た第二種議員の人選では、ピブンは第一軍管区司令官プロットポラパック少将、警察局長アドゥン大将、内閣書記官長チャイ少将に補充候補者案を作らせ、ピブンが自ら7名を選んだ。ピブンが独裁的に候補者を決定し、第二種議員には申し訳程度にしか選択の余地を与えなかった (NAT (2) 89.0201.35/24) ことは、第二種議員のピブンからの離反を促進したと思われる。

⁷² 『1944年タイ人民代表議会議事録』(マイクロフィルム)によれば、7月22日の人民代表議会第5回目、先ず9ポスト空きのあった第二種議員の後任者が付議され承認されたのち、仏都設置緊急勅令 (1944年6月3日摂政団署名、1944年6月5日官報にて公布し即時施行) を法律として承認するという政府案が上程され、賛成41票、反対43票で否決された。

また、駐タイ日本大使の1944年7月24日バンコク発東京宛第871号電では、7月22日午後、政府は緊急閣議を開き、対人民代表議会策を協議した。サマーハーン副内相は総辞職を提案した。タムロン法相、ピチット国防相は当初対議会对抗策を考えたが、辞職策に賛同した。政府側はタムロン法相の個人秘書サワイ [姓はイントラプラチャー] 民選議員を使って議員の買収工作を行った (米国国立公文書館, SRDJ Box80 p.66396)。

なお、7月22日の仏都法案の不成立を報じた、1944年7月23日バンコク発東京宛第863号電で、日本大使は次の状況判断を示した。即ち、2政府法案の否決はプリディの指導の有害な結果と判断されること、議会内の反ピブン派連絡者が、日本が直接的明示的に支援する必要はなく、最悪の場合には、日本がピブンを支援することなく厳正中立を保ってくればこの上なく有難いと語ったが、これは反ピブン派が日本の力を借りることなく新政権を樹立し、日本との関係を断つつもりなのかかもしれないと考えられること、そのような場合には対抗措置を考えている (同上, SRDJ Box81 pp.66511-13)、と。この電報には、日本大使館のプリディに対する不信感がよく表れている。

⁷³ 注34参照。

⁷⁴ 当時タイ国駐屯軍参謀であった富永亀太郎は、1990年2月19日の村嶋のインタビューに次のように語った。

駐屯軍は落下傘謀者がタイに降下したという情報が入るようになるとピブンはイギリスと通じているのでは、と疑った。ピブンのペチャブン遷都の意図は、日本と連合軍との戦闘にタイが巻き込まれるのを避け、日本軍と連合軍との間で戦闘をさせたのち、ピブンが出てきて連合軍と手を結ぶためであると見ていた。ピブン引きずり降ろし工作は中村司令官、山田参謀長は絶対しなかったと断言できる。中村司令官も山田参謀長も政治的工作を嫌っていた。当時ピブンは日本側の信用を失っており、中村司令官や山田参謀長の下に反ピブン派人民代表議会議員 (名前は記憶せず) が資金援助などを求めて何度か接触してきたことがあったが、中村も山田もピブン引きずり降ろしまでは考えなかった。両者はタイ国内の政争なので日本はどちらにも加担すべきではないという考えを堅持した。しかし、日本軍はビルマが

重大局面にあったのでタイ国内がゴタゴタすることを欲せず、ピブンの武力行使には絶対的に反対した。山田参謀長はチャイ日泰同盟連絡事務局長に会って武力行使を差し止める強い意思表示を行い、ピブンの武力行使を抑えた。日本軍はクアンに対しては、彼は軍人ではないので適当にあしらっておけという態度であった。接触してきた反ピブン派議員がプリディと関係があるとは考えなかった。プリディは親英米派というわきがあったが、証拠はなかった。馬來守備のために94師団が編成されると、富永は44年10月に同師団作戦参謀に任じられタイ国駐屯軍を離任した。

また、ソムアン・サラサスは村嶋の前出インタビュー（1990年6月6日）で、1944年7月政変について、次のように語った。この政変に関し、日本側が積極的役割を演じたとか、日本側がプリディと事前に合意があったとか、と書いたものがあれば、それは作り話である。当時、日本軍は、政変の情報収集を行いパホンの動向などを調べてはいたが、政変はタイの国内政治であるとして直接は関わらなかつたし、もし仮に日本がピブン政権に代わる親日派政権を作ろうとしても、タイ政治家の中に日本の味方はおらず、日本は傍観するしかなかった筈である。日本には、ピブンに代わる手持はなく、ピブン政権の打倒を必要と考えるほど忌み嫌っていた訳ではない。もし、ピブン政権打倒に日本が反対したら、政変は成功しない。プリディは、ソムアン以外には日本軍との間のパイプはなかつたので、ソムアンに打診させた。中村司令官は、ソムアンに「日本軍と友好的な政府なら日本軍は中立を守る」と語った。クアンは日本軍との間にパイプはなく、日本軍もクアンを好んだのではない。クアンが首相に選ばれたのは、反ピブンの立場がはっきりしていたからである。クアンは手練手管が巧みで本心が判らない人物であるので、ソムアンは好きではない、と。

⁷⁵ 『1944年タイ人民代表議会議事録』（マイクロフィルム）によれば、7月27日、人民代表議会の第6回目に、議長が議員に次の説明をした。即ち、ピブン首相は7月24日付で辞表を撰政府に提出した。二緊急勅令を法律とする政府案が否決されたので、憲法の常道に従ってという理由であった。7月26日付けで撰政府はピブン内閣の総辞職を承認し、撰政府は7月26日付けで人民代表議会議長に通知した。

更に8月1日の第7回目の人民代表議会で、議長が議員に次の説明をした。7月29日（土）に人民代表議会は、次期首相としてクアン・アパイウォンを選出した（村嶋注、首相選出は議事録中がない）のち、7月30日（日）に議長とクアンは撰政に面会した。アーチット撰政は、クアンは首相に相応しいprestigeが不足している、パホンならいいがと言い、クアンを首相に任ずることに反対し、撰政辞任を議長に告げた（撰政の選任は人民代表議会の権限なので議長に辞任を表明した）。7月31日（月）アーチットは戦時の今は、強力な人物が首相であるべきあり、クアンを首相に任命することはできないとして、議長宛に撰政辞任届を提出した。アーチットの辞任により、撰政はプリディー一人だけとなった。プリディ撰政は、8月2日付けでクアン内閣の閣僚を任命した。

なお、上記議事録には7月27日から7月29日にかけての議会の議事で記録されていない部分がある。この部分を日本側の記録で見ると、7月27日人民代表議会では「議会は憲法に基き後継内閣の首班者につき協議の結果81票対29票を以て泰国軍、政界の元老ピヤパホン〔プレイヤー・パホン〕大将を推薦し、28日「撰政府はピヤパホン大将に対し組閣の大命を降したるも、パホン大将は之を辞退」したので、29日に議会は更に新しき首相候補者

の選定につき協議し、投票の結果、クアンは69票、ピブンは22票、シン海軍中將は8票を得たので、クアンを摂政府に推薦した。7月30日アーチット第一摂政はクアンに組閣の大命を降ろすことに反対、7月31日には辞任を表明した。8月1日、議会はアーチット摂政の辞任を賛成68、反対2で承認し、摂政をプリディ摂政一人とすることを賛成70、反対1で承認した。プリディ摂政はクアンに組閣の大命を降ろし、8月2日に組閣が完了し、8月3日にはクアンは議会で施政方針を発表した（外務省記録A.6.0.0/1-27「諸外国内政関係雑纂タイ国の部 第三卷」及び米国国立公文書館, SRDJ Box80 p.66397の1944年8月1日バンコク発東京宛第924号電）。

以上に経緯から、人民代表議会議員が、ピブン内閣総辞職を知らされたのは7月27日のことである。ソムアンは、プリディとの連絡により、ピブンの辞表が7月24日に摂政に提出された時点で、ピブン辞職の情報を得た可能性がある。なお、アドゥンはクアン内閣では入閣せず、45年9月のセーニー内閣に副首相として入閣した。

⁷⁶ 山田は1931年から3年間、フランス陸軍大学に留学した（山田国太郎口述『明治少年の歩み：山田国太郎の一生』、山田国太郎先生「回顧録」を出版する会、1979年、146-176頁）。なお、タイ国における山田の重要な相手側、日泰同盟連絡事務局長チャイ・プラティーパセーン大佐は、山田のフランス陸大の後輩であった（同上書、212頁）。

⁷⁷ ソムアンは生前に刊行したタイ語回想録『黄色の大地』に「特別機密公務—東京、大阪、上海、北京」（55-74頁）という節を設け、1944年11月-12月の訪日の目的は、プリディの指令により日本の敗戦はいつになるかを調査することであったと述べている。ソムアンは、訪日中の1944年11月24日にB29の東京初空襲を経験した。

⁷⁸ 山本熊一大使は、重光大東亜大臣に宛て「サラサス大尉来朝の件」と題して、1944年10月9日に、以下のバンコク発第1215号を発電した。

貴電第六二四号に関し

軍側に確めたる処派遣者はタイ国総軍司令官〔プレイヤー・パホン〕にして往復竝に日満滞在中の飛行機其他諸般の実際上の便宜（但費用はタイ側負担）は我軍に於て取計ふ、筈なるも其他一切のことは大東亜省にて配慮ありたき希望の由なり尚本人の旅程は往復大体一ヶ月の予定なり（外務省記録L.3.3.0/8-12「各国名士の本邦訪問関係雑件 暹羅国人の部 第二卷」）。

1944年11月14日付泰国駐在帝国大使館付武官山田国太郎から日泰同盟連絡事務局長宛「サラサス大尉の旅行日程の件」（泰陸武第605号）では、11月24日に東京羽田発で満州国の新京に向かい、12月1日に満州国から北京に発ち、上海視察後台北西貢経由で12月中旬に盤谷着予定という日程を伝えたが、同年12月8日付「サラサスの日程変更」（泰陸武第664号）では、満州北支の視察は取り止め12月6日に福岡発上海に向かい、上海から福岡に戻った後、12月21日福岡発西貢経由で23日盤谷帰着予定に変更された（NAT UN.๑๓๓๒.2/41）。

ソムアンは1944年11月22日に重光葵大東亜大臣と面会した。重光の手記は1944年「11月22日 Am.12-Pm.1 Chandler Bose 来訪 対蘇問題 蘇大使に手紙発送のこと 顧問会食高森大佐—サラサス大尉」（伊藤隆・武田知己編『重光葵 最高戦争指導会議記録・手記』中央公論新社、2004、205頁）と記している。なお、同書397頁の人名索引では、サラサス

大尉を父のプラ・サラサスと誤解している。

1944年11月23日発、シーセーナー外相は、ウィチット駐日大使宛535/2487電で、「プリディ 摂政は、Miss Chawi Phongphakdee（日本女子大学に私費留学）を Captain Somwang, son of Sarasa と同じ飛行機で帰国させるように強く要請している」（NAT 0043.24/142）と伝えている。プリディと関係がある Miss Chawi の父がプリディに依頼し、プリディはソムアン大尉と同じ飛行機便と指定したものである。ここから、プリディはソムアンの訪日日程を知っており、ソムアンとの間に連絡があったことが判る。このような両者の関係からソムアンが日本側の情報をプリディに知らせていたことは十分にあり得ることである。

⁷⁹ 1945年2月17日に門司港を出発し、2月25日にサイゴンに到着した阿波丸（帰路の4月1日、福建省沖で米潜水艦に撃沈された）に、58名のタイ人（留学生や官吏）が搭乗して帰国した。この内に5名から成るプラ・サラサス一行も含まれていた。バンコクからの迎いのバス・トラックに乗ってタイ人官吏や学生は3月2日にサイゴン発、4日にバタンバンを経て3月7日にバンコクに到着した。プラ・サラサス一行は、官吏・学生グループに加わらず、別個にバンコクに向かった（NAT 0043.7/49）が、バンコク到着は3月初旬のはずである。

⁸⁰ 前出ソムアン・サラサス『黄色の大地』の66-71頁は次のように記している。即ち、プリディ、アドゥンらの自由タイが「日本軍の仏印処理に刺激されて」在タイ日本軍に対して蜂起を計画した際、ソムアンは、日本は何れ負けるだろうが、今日本と戦うことは無用の流血を来すと反対した。プリディは英軍の援助を期待していたので、ソムアンはプリディに先ずキャンディの英軍司令部に問い合わせるように求めた。英軍司令部からは未だ準備ができておらず、自由タイ蜂起の時機ではないという回答が直ちに戻ってきた。しかし、プリディとアドゥンは、ソムアンは日本を助けようとしている、日本派だ、生かして置くことはできないとして、アドゥン指揮下の警察に命じて逮捕殺害しようとした。ソムアンは自宅を警察に包囲されたが、危機一髪で、車で逃げ出し、日本軍が管理するオリエンタル・ホテルに逃げ込んだ、と。

⁸¹ 憲兵隊が連絡者として使っていた台湾人医師王鏡秋は、1945年8月11日に、国民党の藍東海グループによって暗殺されている（村嶋英治「日タイ同盟とタイ華僑」、『アジア太平洋研究』（成蹊大学）、第13号、1996年、70頁）。

⁸² 第18方面軍の参謀で後方主任であった小西健雄（1902年生、陸士36期、陸大第46期、本籍福島県、戦後はポーラ化粧品中部地区責任者）の日記、「小西日記」（小西氏はタイで記した昭和20年年初より同年末までの一年分の日記帳を保存していた。1990年7月30日と12月18日に、村嶋が武蔵境の自宅に小西健雄氏を訪ねて同日記の全項目の筆写を許された）の昭和20年7月9日（月）の項に「12.00より深山部隊〔鉄道連隊〕に於て泰側軍官に対し陣地供覧、14.00より明和荘〔将校集会所〕にて会食」とある。なお、同日記によれば、辻政信大佐は5月24日付けで第39軍の参謀に発令され、6月5日に着任、花谷正中将が着任したのは7月14日である。従って辻政信参謀が、花谷参謀長の許可を得てトーチカを建設することは時間的に有り得ず、辻参謀が許可を得たのは浜田平参謀長であったはずである。

⁸³ 「小西日記」の8月10日（金）の項は「英文同盟に依る日本側ポツダム勧告受諾の用

意ある旨放送あり，世界各地よりの放送あり。ア〔パイウォン〕首相，〔中村明人〕軍司令官，〔山本熊一〕大使の例会あり，23.00官邸にて。之に関する〔南方〕総軍宛決意電報，23.00総軍宛て，大命に従うとの電報」とあり，8月11日の項には「〔辻〕大佐早朝威山〔総軍司令部のあるダラット〕に赴き打合。11.00より在盤部隊長に一般状況説明。昼ラッタナコーシン〔ホテル〕にてセナー〔シナート〕中將招宴」とある。日記の上記載の意味について，小西健雄氏は村嶋に「ポツダム宣言に関し8月10日深夜の中村司令官と山本大使の会合で大命に従うと意見が一致した。しかし，辻政信参謀は，中村司令官及び山本大使の大命に従うという結論に反対し，8月11日早朝ダラットの総軍司令部に行ったが，直ぐに戻ってきた。そして辻は地下に潜る準備を開始した」と説明した。

⁸⁴ 原寿雄は，1911年11月25日和歌山生，陸士46期，陸大58期（昭和19年7月31日卒），妻は柳川平助中將のむすめ，陸大卒業後直ちに1944年8月にタイに着任。この手記は，昭和30年頃執筆したもの。

⁸⁵ 「小西日記」には5月13日の項に浜田「参謀長（原参謀同行）西貢に出発せらる」とある。

⁸⁶ 「小西日記」では辻参謀着任は6月5日。辻政信『十五対一，ビルマの死闘』（1950年），によれば辻は，義部隊転任のため5月19日にビルマからサイゴンの総司令部に呼ばれた。彼は発令があるまではビルマに戻るとしてサイゴンから盤谷を経て，ビルマに帰って来た夜，5月22日の夜に，車で自軍に帰る途中にビルマ軍に銃撃され負傷した。彼の負傷は，退却作戦中ではない。

⁸⁷ 1942年末，バンコクに赴任した富永亀太郎タイ国駐屯軍参謀が造ったもの。富永亀太郎『猪突八十年』，1987年，182頁参照。

⁸⁸ 「小西日記」の1945年5月26日（土）の項に「バーモ国家代表夫人一行を招宴（官邸）」とある。

⁸⁹ 「小西日記」によれば1945年6月30日に「夜アンボン公園にて泰国官軍会合に」。

⁹⁰ 「小西日記」には1945年4月18日の項に「1700旧埠頭地区爆撃（盤谷ドック），三井埠頭 南石部隊（埠頭部隊）壊滅」とある。

⁹¹ 小柳武次郎少佐，陸士45期，陸大は原寿雄と同期で58期。

⁹² 矢野正俊大佐は，1903年熊本生，1991年11月に熊本にて没，陸士37期，18方面軍第2課長（情報）。本稿に引用している「矢野日記」（1945年8月～1946年10月の記録）は，1991年1月3日に熊本市の矢野氏自宅で村嶋がインタビューした際に提供を受けたものである。

⁹³ 「小西日記」によると，同盟による放送は8月10日，この夜18方面軍は総軍宛電報，辻がダラットに行ったのは8月11日。「矢野日記」でも辻が南方軍に行ったのは8月11日，13日にバンコクに帰還した。

⁹⁴ 橋本哲男『辻政信と七人の僧』光人社，1987年，128頁，によれば彼等がシンガポールからバンコクに着いたのは45年7月18日。敵が侵入してきた場合に一般民衆の中に紛れ込んで情報収集や後方攪乱の謀略工作のため訓練を受け始めたばかりだった。

⁹⁵ 辻政信（1902年10月11日生，陸士36期，陸大43期，1968年7月20日死亡宣告）第18方面軍司令部第1課長（作戦担当）のその後は，村嶋の調査によると下記の通りである。

辻大佐は敗戦の日の8月15日に「何とかして坊主になりタイ国に潜ろう」と覚悟を決めた（辻政信『潜行三千里』、毎日新聞社、1950年6月5日発行、26頁）。辻の意図を伝え聞いた7名の若い少尉や見習士官（全員僧侶出身）が、同行を志願した。彼等は、日本の東南アジア作戦の総司令部であった南方総軍（終戦時の司令部はベトナムのダラットに所在）の特攻隊要員であったが、乗るべき飛行機もなくなったためバンコクの18方面軍に割当られて地上の勤務に就いていた。辻を含む8名は、日本人経営のタイランドホテルの一室でタイの僧衣に着替えた（同上書、28頁）。

青年僧の姿になった7名は8月16日に、ワット・リアップ内の日本人納骨堂に入り、辻は翌17日（ママ）早朝同所に入った。辻が、18方面軍がタイでの対英決戦のために備蓄していた大量の食糧や必要物資の一部および高額の資金や金塊を持ち込んだことは言うまでもない。

辻は日本人納骨堂滞在二週間前後の内に、順次青年僧たちをワット・マハータート寺に移した。1945年9月に入って英軍のタイ進駐が始まり、民間日本人がバーンブアトーンに抑留されてしまうと、辻には逮捕されるのではないかという不安が高まった。10月22日には、今まで自由であった日本人僧侶も抑留の対象者とされるという情報がもたらされ、かつ辻は一応遺書を書き自殺したことはなっていたが、英軍は18方面軍司令部に辻を出頭させるように命令してきた。追及が身近に迫ったと考えた辻は、タイ潜入の継続を諦め中国への脱出の道を探るため、10月23日〔辻は日曜日と書いているが、23日は火曜日〕に、スリウォン街に戦後開設された中華民国国民党海外部駐暹辦事処〔正しくは「海外部泰国特派員辦事処」〕に、成〔成烟景〕主任宛ての手紙を届けた。内容は、9月28日〔正しくは9月21日から〕に頂点に達した華僑暴動（ヤワラート事件）の裏面情報を知っているから、成主任に納骨堂に10月26日までに来て欲しいというものであった。しかし、3日間が過ぎ27日になっても成主任は現れなかった（同上書、80－82頁）。

ヤワラート事件（華僑は9.21事件という）とは、日本の敗戦とともにベトナム・ラオスにまで進駐してきた中国国民政府の軍隊を、タイにまで進駐させる口実作りのために在タイ中国国民党（当時の責任者は成主任）が暴動を煽動し、これをタイ軍が武力弾圧して華僑に多数の死者が出たため、華僑の一斉罷市罷工（ストライキ）となったが、在タイ中国国民党の指令で9月30日朝を以て罷市罷工を収拾させた事件である。そうであれば、事件の主導者である成主任が辻の裏面情報なるものに魅力を感じずに放置したのは当然のことであろう。

しびれを切らした辻は、10月28日朝、再び辦事処を訪ねた。

先日の取次ぎの青年が愛想よく迎えてくれ、応接間に通されて暫く待つ内に一癖ありそのような青年が颯爽として乗り込んだ。筆談の結果郭〔郭開又は郭子凱、海南人、1918年サムイ島生、1979年バンコクで死亡、辻は広東人と誤記〕科長であつた。暫くののち成〔烟景、1919年生〕主任秘書が出勤した。年はよもや三十歳にはなるまい。色白の瘦型の美青年だ。この人が邢〔森洲、海南人〕中將の代理として百五十万の華僑の事実上の全責任者であろうとは誰が予想し得よう。服部〔卓四郎、陸士34期（辻は36期）、陸大42期〕大佐の昔の姿そつくりだ。この人こそ服部さんに代つて、この身を助けてきたのではあるまいかとの錯覚さえ起つた。

山法師のような坊主が鉄の手で成青年のきやしやな白い手を固く握つたとき、相手の顔に紅がさすのを見逃さなかつた。約一時間に亘つて筆談した。片言の北京官話は広東出身のものには全く通じないのだ。

本名、経歴、特に東亜聯盟運動、蔣母慰靈祭、戴笠との関係——等々余すところなく書いた。

重慶に赴き戴笠將軍及び蔣主席に会見し、日華合作の第一歩を開きたい。もし不可能ならば直に逮捕し英軍司令部に差出されたい。

「生命を惜しんで逃避するものではない」と力強く最後の結論を書いた。

一々首肯しながら読んでいた両青年の面上は次第に紅潮し、両眼には光がさしてきた。

やがて成青年は「等一候、我們要會議」（暫く待て、會議する）と紙片に書いて次の間に入った。凶か吉か？待つこと約三十分の後ニコニコ笑顔で入つて来た。占めた！と感ずる。成青年は細いきやしやな手先で、

可以（よろしい）

と二字だけ書いた。後は郭科長と相談せよとのこと、郭君は筆談で「今晚九時、自動車で寺の付近に迎えにゆく。」と。捨身の断によつて遂に光明を見出した。

それにしても三十歳にも達しないこれらの青年が、百五十万の華僑の総元締たる邢中將に代つて一切を処理し、九・二八〔正しくは九・二一〕事件の交渉をタイ英兩國を向うに廻し、堂々やつているのかと羨しくなつた。顧みればこの年代はまだ一中尉で、陸大の学生として戦術教官と喧嘩するのが関の山であつた前半生である。

英国から追及されている身を国家の公務員たる彼らがかばうことは、下手すると国際問題を惹起する。日本の官僚、日本の外交官だつたら、この突差の場合に果してどれだけの処置を取れたであろう。恐らく『重慶に問合せるから暫く待て。』というのが関の山であろう。

感激と興奮とを抑えながら再びサムローに乗つて何食わぬ顔をしてお寺に帰つた。（同上書、83-85頁）。

辻はこの夜、僧衣を脱ぎ偽装のため遺書を残して、納骨堂を出た。翌朝辦事処に到着した辻は、郊外の隠れ家に移された。辻に梁、呉の2青年が同行して、11月1日に汽車でバンコクを發ち、ウドン（辻はウボンと誤記）に向かった。ラオス、ベトナムを経て46年3月9日にはハノイを發ち昆明に入った（同上書、179頁）。

村嶋は、辻政信が頼った、当時の在タイ国民党のトップであつた成烟景主任秘書に、同じくスリウォン街にあつた泰国留華同学会黄埔校友会の事務所で、1994年1月6日にインタビューを行った。この校友会は、タイ華僑で日中戦争時に中国に帰国して黄埔軍官学校分校に学び、抗日戦争に参加した人達の団体である。事務所はその後、バーンナー・タラート路のネーション新聞社と道を挟んで反対側辺りに建設された泰華英烈館に移った。

成烟景は偽名で、本名は陳英謹（1919年潮州生、子孫はワタナウイトウクン（วิฑูณวิฑูณกุล）のタイ姓を使用。辻は海南人と誤記）である。偽名と本名は中国語で発音した場合、比較的近い音となる。陳英謹は筆者に次のように語った。

辻政信は、まず手紙を寄越し、ワット・リヤップに会いに来て欲しいと求めた。仕事

が多忙であったので、放置していると、辻は僧衣のまま事務所に現れた。辻は少し中国語ができた。英語、中国語ごちゃまぜで30分ほど話した。蒋介石の妻〔陳英謹の記憶違い、正しくは母堂〕の葬儀を、辻が盛大にやった時の写真も持参しており、英軍には捕まりたくない、どうか重慶に行けるように助けて欲しい、重慶でどうされようとも構わないから、と率直に援助を求めた。辻が会いに来るまで、辻という人物については、彼の経歴も含めて全く知らなかった。辻が葬儀写真を証拠にもってきたので、重慶に送ったのちに重慶で彼が歓迎されるのか、戦犯とされるのかは我々の与り知らぬことであるが、とにかく重慶に送ってやろうと仲間と協議して決めた。この決定に当たっては上部には何ら相談しなかった。

辻は日本に帰国後、手紙を送ってきた。戦後10年くらいした頃に、私（陳英謹）は日本を初めて訪問した。当時製紙工場を経営していたので、製紙関係の機械を買うことが目的であった。国会議事堂の食堂で辻と食事をした。また自宅を訪問した時には、辻の家族は全員土下座して感謝を示した。中国人には土下座をしてお礼をする習慣はなく、しかもいつまで経っても顔を上げないので、全く面喰らった。それから更に10年くらいして2回目の訪日をした。ガムテープ製造の機械を買うためである。辻は既にいなくなっていたが、辻の妻や娘婿が極めて厚遇を与えてくれた、と。

なお、成烟景（陳英謹）及び郭開（郭子凱）の経歴は、泰国黄埔校友会『鉄血雄風：泰国華僑抗日実録』（1991年、バンコク）のそれぞれ、329－330頁、82－86頁に見ることができる。

上記、辻の『潜行三千里』および成烟景（陳英謹）の証言から見て、辻政信は、在タイ中国国民党組織の庇護の下に、1945年11月1日にはバンコクを発ち、46年3月9日には中国に到着したことは疑いないであろう。ところが、1999年になって、イギリス人自称ジャーナリスト William Stevenson 著、The Revolutionary King: The True-Life Sequel to *The King and I*, Constable, London, 1999という書物が出版された。同書は、ラーマ八世王が崩御した、1946年6月9日当時、辻政信は僧形で依然バンコクに潜んでおり、同王暗殺に関わったと繰り返し述べ、最後を、もし辻政信が1945年に英軍に捕らえられていれば、八世王が暗殺されることはなかったであろうと結んでいる。何とも荒唐無稽な話で、故意の捏造偽造の類である。

人名索引 (アイウエオ順)

タイ人

- アーチット親王 (พระองค์เจ้าอาทิตย์ทิพอาภา 1904-1946) 27, 176, 177
- アドウン・アドウンデーチャジャラット警察大将 (หลวงอดุลเดชจรัส 1894-1969) 3, 44, 50, 68, 83, 84, 91, 92, 94-96, 98, 105, 108, 115, 123, 151, 154, 155, 159, 167, 169, 171-175, 177, 178
- ウィットワータカーン (หลวงวิจิตรวาทการ 1898-1962) 154, 161, 162, 167, 168, 178
- カマレス中尉 [カマレート・チャンルアン] (กมลเศษ จันทร์เรือง ?- 1945) 60, 61, 170
- カニター・ウィチヤンチャローン (サームセーン) (กนิษฐา วิเชียรเจริญ 1920-2002) 146, 147
- クアン・アパイ ウォン (ควง อภัยวงศ์ 1902.5.17-1968.3.15) 3, 22, 28, 29, 37, 51, 54, 95, 98, 106-111, 114-117, 121-125, 152, 159, 167, 169, 171, 174, 176, 177, 179
- サグアン・トゥラーラック (สงวน ตุลารักษ์ 1902-1995) 3, 29, 62, 64, 76, 81, 171
- サワデイ夫人 (สวัสดิ์ อัครฉนวนท์ 1890-1962) 14-16, 65, 70-75, 81, 90, 110-113, 119, 121, 126, 127, 143, 146
- サンウォンユタキット海軍少将 (หลวงสังวรยุทธกิจ 1901-1972) 148, 174
- ジャムカット・パラークーン (จำกัด พลงกูร 1914-1943) 170, 171
- ジャムラット・エバタ (จรัส เบบาดา 2, 28, 29, 54, 88, 147-149, 154)
- ジャムラット・マントウガーン警察少佐 (พ.ต.ต. จรัส มั่นทุกานนท์, ชามลาส・แมนดาคานันดา, Chamras Mandukananda 1910-1977) 19-21, 27, 29, 62, 76, 80, 81, 118, 120, 121, 148-151, 172
- シン海軍中将 (หลวงสินธุสงครามชัย 1901-1976) 91, 94, 101, 108, 116, 124, 177
- シナート陸軍中将 (หลวงสินาดโยธารักษ์ 1896-1989) 124, 135, 174, 179
- セーニー・プラモート (เสนีย์ ปราโมช ม.ร.ว. 1905-1997) 62, 151, 171, 177
- ソムアン・サラサス (สมหวัง สารสาส 1913.1.13-1996.4.28) 1, 2, 5-7, 15, 16, 28, 30-32, 37-39, 48, 49, 52, 53, 65-67, 72, 74, 81-87, 91, 93, 95-115, 119-127, 143, 146, 152-155, 176-178
- タウィー・ブンヤケート (ทวี บุญยเกตุ 1904-1971) 37, 51, 108, 124, 159
- チャイ・プラティーパセーン陸軍少将 (ไชย ประทีปะเสน 1906-1961) 175, 177
- チャルーン・チャーティカサティアン (จรรยา โชติกเสถียร 1893-1974) 147
- ダイレーク・チャイヤナム (ดิเรก ชัยนาม 1905-1967) 154, 163
- パイロート・チャイヤナム (ไพโรจน์ ชัยนาม 1911-1994) 152, 158
- パン・ナーワーウィット海軍少将 (ผัน นาวาวิจิต 1901-1953) 100, 101, 108, 174
- ピット陸軍中将 (หลวงเกรียงศักดิ์พิชิต 1896-1964) 94, 172, 175
- ピブン元帥 (หลวงพิบูลสงคราม 1897-1964) 5, 6, 13, 15, 27, 31, 34-50, 52, 53, 56, 62, 63, 65-72, 76-79, 82-85, 91-108, 111, 145, 153-164, 167-177
- プアイ・ウンパーコーン (ปวย ชึ่งภากรณ์ 1916-1999) 151, 173
- プラ・サラサス (พระสารสาสน์พลขันธ์ (ลอง สุนทานนท์) 1891-1981) 2, 6, 13, 14, 29, 37, 84, 103, 106, 114, 119-124, 143-147, 154, 155, 159, 178
- プラチュアツプ・キラティブット (ประจวบ กිරติบุตร 1912-1967) 150, 172
- プラ・ピニット警察大佐 (พระพิณินจนคดี 1891-1970) 70
- プレーヤー・シーセーナー (พระยาศรีเสนา 1889- 1982) 108, 147, 178

プレーヤー・ソラユットセーニー海軍少将 (พระยาสุรยุทธเดณี 1888-1962) 169, 174
プレーヤー・ソンスラデート陸軍大佐 (พระยาทรงสุรเดช 1892-1944.6.1) 62-64, 159
プレーヤー・パホン陸軍大将 (พระยาพลพลพยุหเสนา 1888.3.29-1947.2.14) 2, 13, 27, 28, 43, 54, 88-91, 106, 107, 116, 143, 156, 159, 176, 177
プレーヤー・マーナワラーチャセーウィー (พระยามานวราชเสวี 1890-1984) 95, 98, 174
プリディ (ปรีดี พนมยงค์ 1900-1983) 2, 3, 5, 13, 27, 28, 36-39, 42, 54, 62, 70, 72, 77, 81-84, 95, 96, 106-108, 115, 123, 143, 151-156, 159, 170-178
プロムヨーティー陸軍大将 (หลวงพรหมโยธี 1896-1966) 50, 91, 94, 172
プーンスク・パノムヨン (พูนสุข พนมยงค์ 1912-2007) 151, 154, 155
ブンテン・トーンサワット (บุญเที่ยง ทองสวัสดิ์ 1911-1999) 152, 153
ブンラップ (ม.ร.ว.บุญรับ พิณจจนคดี 1896-1981, เซーニー・プラモートの実姉) 70, 72
モームチャオ・สปาサワット (ม.จ.ศุภสวัสดิ์ดิวังศ์สินทิ 1900-1967) 171
ラーシー・ラタナチャイ女史 (ราศีรัตน์ไชย) 28, 37, 38, 54, 62, 70-76, 90, 127
ラーマ八世 (พระบาทสมเด็จพระปรเมนทรมหาอานันทมหิดล 1925.9.20-1946.6.9) 27, 40, 155, 182
リアン・チャヤカーン (เสียง ไชยกาล 1902-1986) 152
ワニット・パーナノン (วณิช ปานะนนท์ 1903.12.1-1944.5.21) 43, 44, 46, 47, 68, 91, 92, 160, 164-168, 174
ワンワイ (ワン) 殿下 (พระเจ้าวรวงศ์เธอพระองค์เจ้าวรวงศ์ไวยายากร 1891-1976) 63, 64, 66, 152, 171

陳守明 (ตันฉิวเม้ง หวังหลี 1904-1945.8.16) 2, 28, 29, 54, 154

王鏡秋 (1900-1945.8.11) 2, 29, 54, 102, 156, 157, 178

成烟景 (陳英謹, 1919-) 180-182

郭開 (郭子凱, 1918-1979) 180-182

藍東海 178

クロスビー (Sir Josiah Crosby, 1880-1958) 21, 28, 81, 151, 152, 171

チャンドラ・ボース (Subhas Chandra Bose, 1897-1945) 58-60, 80, 133, 177

彊砥 (Cuong De, 1882-1951) 170

陳仲金 (Tran Trong Kim, 1883-1953) 170

壯烈 (Trang Liet) 59, 60, 170

壯拳 (Trang Cu) 59, 60, 170

日本人 (軍人の階級は最終のもの)

青木一男 (大東亜大臣) 48, 163, 167, 172

池田成彬 13, 114

石井康 (大使館参事官) 44, 168, 171

石川實 103, 174

市坡信義 (中佐, 陸士43期) 135

稲垣満次郎 (初代駐タイ公使) 160

岩城政治 146, 147

岩畔豪雄（少将，陸士30期）58
岩崎禮三（少佐，陸士52期）1, 2, 9, 79, 94, 95, 117, 142, 143, 145, 172
岩田冷鉄（I）（大使館情報部長）103, 105, 109
江畑弥吉 2, 17, 38, 147, 149
江畑朔弥（スリヤ）（憲兵隊通訳）2, 17-19, 35, 37, 38, 70, 72, 73, 147-149,
岸並喜代二（大佐，陸士31期）4, 33, 103, 109, 110, 113, 121, 139, 158, 169
木下秀清（憲兵少佐）9, 144
木邊孝慈 161-163
小磯国昭 103, 114
小西健雄（大佐，陸士36期）178, 179
小林茂彦（憲兵少佐）9, 27, 40
小柳武次郎（少佐，陸士45期）179
重光葵 177
清水博（大尉）9, 17, 18
菅谷篤二（中佐，陸士39期）135
武山典正（憲兵中尉）9, 40, 41
田村浩（中将，陸士28期）144, 160
辻政信（大佐，陸士36期）122-126, 128, 130-133, 135, 138-141, 178-182
坪上貞二（特命全權大使）40, 52, 63-65, 159, 161, 162, 167, 170, 172, 174
寺内寿一（元帥，陸士11期）7, 61, 140
東條英機 51-53, 60, 63, 102, 103, 114, 155
徳田豊（大佐，陸士30期）8, 79, 92, 94, 96, 98, 100, 103, 108, 109, 111, 113, 117, 118, 124,
125, 172, 173
富永亀太郎（K）（中佐，陸士38期）1, 4, 44-48, 63, 67, 77, 80, 81, 96, 97, 103, 105, 107, 109,
110, 158, 169, 173-176, 179
中村明人（中将，陸士22期）3, 33, 52, 59, 64, 65, 74-76, 91, 107-109, 116, 119, 120, 121,
124-126, 130, 131, 132, 134, 138, 140, 141, 148, 158, 172, 175, 176, 179
新田義實 144, 149, 161
根木茂（憲兵中尉，特別志願将校）9, 22, 23, 27, 30, 48, 50, 62, 79, 98, 101, 102, 104, 129, 152
野原博起（中佐，陸士42期）128, 129, 131, 132
花谷正（中将，陸士26期）124, 125, 135, 140, 178
浜田平（中将，陸士28期）111, 115, 119-121, 123, 124, 128, 130, 135, 136, 139, 158, 172, 175,
179
原寿雄（少佐，陸士46期）127, 130, 138, 179
林清（大佐，陸士27期）1, 8, 11-13, 18, 21, 23, 33, 34, 39-42, 44, 50, 52, 53, 55, 58, 59, 62, 69,
70, 73, 74, 77, 79, 84, 144, 172, 173
林秀澄（大佐，陸士35期）4, 59, 170
廣田弘毅 161
藤村益蔵（少将，馬來軍政監，陸士30期）60, 61

藤原覚朗（タイランドホテル経営者）7, 144
堀井龍司（中佐，陸士38期）1, 4, 8, 11, 12, 22, 39, 41, 42, 44-49, 51, 52, 54-60, 63-66, 69,
70, 76, 77, 80, 81, 84, 88-92, 94-96, 97, 99, 102, 104, 105, 107, 109-114, 118-120, 123, 127,
142, 143, 146, 156, 169, 170
水野伊太郎（特命全権公使）103, 125
水野〔清栄?〕（憲兵曹長）21, 35, 85, 93, 100, 102, 119
宮川源一郎（憲兵隊通訳）2, 14, 15, 22, 29, 30, 48, 65, 75, 85, 100, 107, 111, 113, 122, 126, 145
宮川岩二 2, 14, 29, 54, 122, 145, 146
毛利要（中尉，少尉候補者試験第23期）143
森勇記（少佐，少尉候補者試験第17期）9, 27, 35, 40-42, 79, 80
守屋精爾（中將，陸士29期）9-11, 14, 24-26, 32, 143, 144, 154, 156, 158, 160, 169
矢田部保吉 161
矢野正俊（大佐，陸士37期）178, 179
山田国太郎（中將，陸士27期）33, 52, 98, 100, 103, 104, 107, 109, 111, 158, 169, 172, 173,
175-177
山田長政 9, 10, 16, 71, 87, 161, 163
山本熊一（特命全権大使）111, 125, 133, 177, 179
脇坂一雄（少佐，陸士48期）140

編集・解説者紹介

村嶋英治 (Murashima Eiji)

1951年5月福岡県篠栗町生。1974年東京大学法学部卒業。直ちに特殊法人アジア経済研究所に研究職として就職し、調査研究部等でタイ地域研究に従事。同研究所研究主任、成蹊大学文学部教授等を経て、1997年より早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授。2000年早稲田大学アジア太平洋研究科博士後期課程新設認可に際し、文部科学省より博士(D)マル合の資格を認定される。

1975年2月から現在まで通算13年余、タイ国立公文書館、大学等図書館及び古本屋における文献調査、或は関係タイ人へのインタビュー調査等のために在タイ研究に従事。

タイ現代政治、タイ近現代史、東南アジア大陸部関係史、タイ華僑史、日タイ関係史などに関して、タイ語、日本語、英語、中国語の研究著作を有する。英文著作の引用・評価に関しては、<http://scholar.google.co.jp/citations?user=C4xfaw0AAAAJ&hl=ja>で、タイ文著作所蔵図書館に関しては、WorldCat identitiesで、また、邦文著作に関しては国立国会図書館サーチで検索可能。

なお、本手記に関連する村嶋のインタビュー調査及び日本語著作は、巻末注に引用している。

e-mail: murashim@waseda.jp

研究資料シリーズ No. 7

『堀井龍司憲兵中佐手記，タイ国駐屯憲兵隊
勤務（1942-45年）の思い出』

付録 18方面軍参謀 原寿雄少佐手記

2017年3月31日発行

編集・解説 村嶋英治

発行 早稲田大学アジア太平洋研究センター

東京都新宿区西早稲田1-21-1

早大西早稲田ビル7階

郵便番号 169-0051

Waseda University Institute of Asia-Pacific Studies

Nishi-Waseda Bldg. 7F

1-21-1 Nishiwaseda

Shinjuku-ku, Tokyo 169-0051, JAPAN

印刷・製本 株式会社 国際文献社

東京都新宿区高田馬場3-8-8

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き著者および発行者の権利の侵害となりますのでその場合には予め当センターあて許諾を求めてください。

ISSN 2185-1301

